

## 第V章 考察

### 第一節 江戸時代の基準尺度について

—本地点の遺構にみられる尺度を中心にして—

藤本 強

#### 1 はじめに

江戸時代の建築、地割などに使用されていた尺度については、喜田貞吉氏(1913a, b, c, d, e)以来種々論じられているが(鈴木 1959, 内藤 1966 など)、これらは主として文献資料に依拠して論議が進められているのに対し、近年公にされた玉井哲雄氏によるものは(1986)、従来のものを十分に消化したしたうえ、各種の江戸図、特に沽券絵図に準拠しながら町割を復元し、それを基にして町割に使用された尺度に言及している。方法論的にも新鮮であり、説得力のあるものである。それによると日本橋界限では、当初京間(六尺五寸間)で地割がなされ、18世紀初めの享保年間頃に田舎間(六尺間)に変わったとされている。この尺度の転換を江戸文化の転換点を示す一つの指標としている。興味深い所説である。玉井氏の著書は主として日本橋から銀座にかけての町屋の地割についての復元による尺度である。また、全国的規模で田舎間、六尺三寸間、京間を中心にして現存する民家に使用されている尺度を基礎にして、一間の問題を扱っている西和夫氏の論文(1986)もその基礎にする資料と方法論においてきわめて新鮮であり、内法制と真々制がこの問題の解決に重要であるとの指摘や基準尺周囲説の提唱もあり、新しい問題提起がなされている。西氏のような立場に立つとしても江戸における尺度の問題は江戸が田舎間の周囲の中心地の一つと目されるだけに、大変に重要な問題をはらんでいると考えられる。

ここでは、この調査地点に於ける地割・建築などに関する尺度を主として考古学的な調査によって出現した遺構によってみていくことにする。あわせてそのもつ意味について若干考えてみることにする。第III章第一節で簡単に触れていることではあるが、最後に地下式土坑に関して若干の言及をしておきたい。既に第I章、第III章で見ているように、本地点は江戸時代および近代以降の度重なる土木工事あるいは建築工事によってそれ以前の遺構は大きく破壊されているものが多い。したがって、完全な形で残っている遺構は全くないといってもよいほどである。断片的なものを繋ぎあわせて復元していくことになる。また玉井・西両氏の研究の基礎資料である絵図・民家とは全く異なった考古学調査による遺構を基にして、復元をしていくことになるので、基礎資料と方法論において全く異質のものになる。また場所は本郷という江戸のなかでありながら、玉井氏のいう「原江戸」(1989:8, 9)の外であり、さらに武家屋敷ということで玉井・西両氏による結論と共通の基盤のうえで論議できるかどうか全く問題がないとは言いきれない多くの点がある。

## 第一節 江戸時代の基準尺度について

考古学資料の性質上、一つはその精度が問題となろう。本地点の場合には、基点となるグリッドの隅の点は回帰トラヴァースによって、1/20000以下の精度(100mで5mm以下の誤差)をもっており、それから派生させたグリッドの各点を使い、簡易遣り方測量によって1/20の図を作っている。こうしたことを総合してみるとたとえ誤差が生じていたとしても、5mにつき1cmほどのものであり、尺度の問題を取り扱うには問題が生じる誤差ではないことを確信している。また第I章で述べているように、本郷構内の各調査地点では、そこで利用したグリッドの基点はどの調査地点においても国土座標系のなかに位置付けてあり、相互の距離・方位を確実に復元できるように配慮してある。必要があれば、別の調査地点間の遺構相互の距離・方位を1/20000の精度で算出することが可能である。このように調査精度の問題は尺度を扱う際に、考慮の外に置くことができよう。

もう一つは遺構のもつ意味の問題がある。特に破壊の著しい遺跡においては、個々の遺構のもつ意味を確定することはきわめて困難な作業である。溝状の遺構はともかく、礎石に関連するのではないかと考えられる遺構の場合、特に困難である。礎石が残っている場合にはかなりの確度でもって対比できる遺構を抽出することができるが、それがなく抜き穴になった場合には難しい。この地点、特に大聖寺藩邸内では、多くの遺構が真東西南北の方位であったことが確認されている。そこでまず相互が真東西もしくは真南北にある遺構を抽出し、層位的な検討を加え、同一の面から切り込まれた可能性のあることを確認し、次いで両者の埋土の性状および状態を確認し、底が同一水準にあるかどうかを検討し、その後両者の間の距離の検討をした。このようにして断片的な遺構を繋ぎその組合わせを抽出した。ここで抽出したほかにもこうした組合わせがある可能性があるが、現在のところ確認できていない。また相互の距離に一定の基準が確認できない場合にはこれを除外してある。個々の遺構そのものが後世の破壊により損傷を受けている場合もある。この場合尺度の算出の基準に遺構のなかのどこをとるかという問題も生じる。測量による誤差よりもこうした誤差のほうが考古学調査による資料の場合にはよほど大きい。このような点で考古学の資料のもつ固有の問題があろう。mmのオーダーで議論をしても遺構のなかのどの部分をとるかによって、その結果は大きく変わることになる。

## 2 個々の遺構内・遺構間の距離

上記のようにして個々の遺構のなかもしくは複数の遺構の間で同時に使用されていたことが推測されるもの相互の距離はV-1-1表に掲げるとおりである。この地点の場合には、この地点の特殊な事情があり、第III章第一節でも見たように天和二年(1682)の火災が大きな転換点になる。これは大聖寺藩邸、富山藩邸を含む前田家の本郷邸全体について言えることであり、この火災をきっかけにして、加賀藩下屋敷から加賀藩上屋敷に変わることをはじめとして、藩邸全体の構造が変わり、大規模な屋敷地の変更がなされている。本郷邸の歴史上の画期といえるものである。この調査地点においても、これは大聖寺藩邸の屋敷地の大幅な変更ということで一大画期となる。このあと大規模な盛土がなされ、屋敷地の造成が実施される。天和二年の前後にわけてみていくことにする。

尺度を復元することに利用することができそうな遺構、1-34の34例を抽出しているが、ほかにも現在気がついていないものがある。このうち8、16、17の3例は尺度を推定することのできない

第V章 考察

ものであり、これらを除外すると、31例になる。このうち天和二年(1682)以前と考えられるものが22例と圧倒的に多い。天和二年以降の例は5例しかない。そのほかは層位的にも、埋土内に入っている遺物からも直接年代を知ることのできなかつたもの4例である。これらはすべて礎石もしくは礎石に関する遺構で占められている。礎石もしくは礎石に関する遺構の場合には、遺構の性質上遺構の埋土のなかに遺物が大量に入っていることはまずない。したがって層位的に年代を確定することができないならば、時期不明の遺構になってしまう。34の場合には、周辺の遺構のなかでもっとも新しく、下にある遺構出土の遺物から18世紀前半以降に位置付けられるものと考えられる。33の場合には礎石のなかにある地下式土坑の形態およびその埋土の出土遺物から、18世紀前半以前に位置付けられるものと推測できる。31、32に関しては、遺構の数が少なく上部が大きく破壊されている場所で発見されているので、間接的にもその年代を物語る資料を得ることができなかった。

このようにしてみると、33は天和二年以前に、34は天和二年以降に比定できよう。23例が天和二

遺構	遺構の種類	方位	距離	推定尺度
1682年以前の遺構				
1 E36-6 — V区1号溝	道の幅	東西	7.2m	4間
2 I区2号溝 — IV区6号旧溝	屋敷の端と屋敷内の地境	東西	47.9m	二五間
3 E30-2・IV区3号溝 — V区1号溝	道の幅	南北	7.6m	四間
4 E28-1 — V区1号溝	道の幅?	南北	5.7m	三間
5 5号組石 — V区1号溝	道の幅	南北	7.6m	四間
6 12号組石下木樋 — 道状遺構	屋敷内の地境?	東西	28.7m	一五間
7 F26-3 — F26-4	礎石? — 礎石?	東西	1.9m	一間
8 F25-2	切石	東西	3.4m	?
9 F26-5 — G26-10	礎石? — 礎石の抜き穴?	南北	3.8m	二間
10 3号杭穴列	杭相互の間	不定	1.85-1.9m	一間?
11 12号組石下木樋 — IV区6号旧溝	道の幅	東西	15.4m	八間
12 12号組石 — IV区6号新溝	道の幅	東西	14.6m	八間
13 6号組石南北部分 — 12号組石	道の幅?	東西	13.7m	7.5間
14 6号組石南北部分(含抜き取り溝)	石垣の長さ	南北	18m	10間
15 1号杭穴列 — 2号杭穴列	道の幅?	南北	11.8m	6.5間
16 1号杭穴列	杭相互の間	南北	1.75m	?
17 2号杭穴列	杭相互の間	南北	1.5-2m	?
18 1号石列	礎石の間		1.8mの倍	1間
19 2号石列	礎石の間		1.8mの倍	1間
20 3号石列	礎石の間		0.95mの倍	1間
21 4号石列	礎石の間		0.95mの倍	1間
22 設備管理棟2号杭穴列	屋敷南端の塀の杭穴の間	東西	1.9m	1間
23 設備管理棟2号杭穴列 — E30-2	屋敷南北幅?	南北	109.0m	60間
24 設備管理棟2号杭穴列 — 設備管理棟1号溝	道路幅?	南北	4.5-4.6m	2.5間?
25 無縁坂への道	道路幅	南北	7.2m?	4間?
1682年以降の遺構				
26 F33-2 — F32-1	礎石用の溝の間	東西	8.1m	4.5間
27 E31-2 — F31-15	礎石用の方形の土坑の間	南北	0.9m	0.5間
28 E30-7 — F30-2	礎石? — 方形の土坑	南北	3.6m	2間
29 道路北端 — 6号組石南端	屋敷の南北幅	南北	107.3m	59間
30 道路北端 — 2号組石南端	屋敷の南北幅	南北	114.5m	63間
時期不明の遺構				
31 K27-1・L27-1	礎石の間		1.35m, 1.8m	3/4, 1間
32 L29-2 — L28-1	礎石の抜き穴の間	東西	3.8m	二間
33 設備管理棟1号礎石列	礎石		4.65m ×7.6m	二間半×四間
34 U31-1 — V32-2 — V31-6	礎石?		0.9mの倍	0.5間

間の前記の漢数字は六尺三寸間の、アラビア数字は江戸間の推定尺度を表わしている。

V-1-1表 本調査地点の遺構内・遺構間の尺度

## 第一節 江戸時代の基準尺度について

年より前のものであり、6例が天和二年以降のものということになろう。天和二年以前の遺構が圧倒的に多いが、これは天和二年以降になされた厚い盛土に保護された結果である。5-21に関係している遺構はすべて厚い盛土の下で発見されているものであり、これらを除くとわずか4例になり、これらはいずれも溝状の遺構で占められている。地表下深く掘られた遺構のみが残っていることになる。これらの尺度の推定が可能かと思われる遺構の種類は様々であり、礎石もしくは礎石に関するかと思われる遺構、道の幅、地境の溝の間、杭列の杭の間の距離、屋敷地の境界間など各種のものがある。建築に直接関係するもの、屋敷地の地割に関係するものに分けて考える必要があろうが両者に見られる尺度にはどうも時期によって共通するものがあるようであり、一括してみてもいいことにする。屋敷の外縁については別に考えることが必要のように思われる。

V-1-1表にあるように天和二年(1682)以降の遺構は34を含め、すべて江戸間(田舎間=六尺間)であると推定される。これらには26-28、34の礎石に関すると思われる遺構間の距離が含まれ、さらに、29、30の無縁坂に至る道路の北端と天和三年の屋敷地の変更以来幕末まで続く大聖寺藩邸の北端になったと考えられる2号組石、6号組石の南端との間の距離も入っている。すなわち建築に関する尺度も、地割に関する尺度も田舎間もしくは江戸間、言換えるなら六尺一間の尺度が使用されていたことを意味しよう。礎石に関するものは1682年以降というだけで、確実に年代が押えられるものはないが、29、30は確実に天和三年の時点での屋敷地の変更に伴うものであり、また第三章第一節でも見ているように、『越登賀三州志』などにみられる間数と考古学的調査によって確認され、それによって推定される江戸間による間数とが一致しているものである。これらから少なくとも地割に関するかぎり、天和三年にはその基準になる尺度に田舎間もしくは江戸間、すなわち六尺一間の尺度が使用されていたことが言えよう。

V-1-1表にもみられるように、天和二年以前には六尺三寸間と江戸間(田舎間)がある。建築においても、地割においても、さらに道路幅においても六尺三寸間と六尺間がある。ところがこれまで江戸時代前葉に使用されていたとされる京間(六尺五寸間)を思わせる例は全くない。きわめて興味深い結果である。江戸間(田舎間)と中京間もしくは越前間などと呼ばれる六尺三寸間との関係はどのようであろうか。同一地点で層位的に新旧関係が確認できている遺構の絡む例がいくつかある。建築に関するものでは、1号石列・2号石列と3号石列・4号石列の組み合わせがそうである。1・2号石列は3・4号石列の上にあり明らかに新しい。1・2号石列は天和二年の火災によって廃棄されたと考えられる證人屋敷の中にあつた建物に関する遺構であり、今回の調査でK面と呼んでいる面に伴う遺構である。3・4号石列はその下にあり、やはり證人屋敷に関する建物の礎石であり、今回の調査でL面としている面に伴う遺構である。

證人屋敷の西端であつたと考えられる12号組石と12号組石下の木樋はやはり層位的な新旧関係がある。12号組石が新しく12号組石の下の木樋が古い。この木樋が関係する6、11は六尺三寸間であり、12号組石が関係する12、13は江戸間である。木樋は證人屋敷のL面と同一時期に構築・使用されていたものと推測できる。さらに東側の下の砂利面と同じ頃に使用されていたものと考えられる。12号組石はやはり天和二年の火災で放棄されている遺構であり、證人屋敷のK面と同一時期に構築・使用されていたものである。

## 第V章 考察

IV区6号旧溝、IV区6号新溝、6号組石南北部分はほぼ同じ地点に作られやはり層位的に新旧関係のある遺構であり、旧溝がもっとも古く、次いで新溝になり、6号組石南北部分がもっとも新しい。これらの遺構は天和二年以前の大聖寺藩邸の東端であったものと考えられる。旧溝はあるいは大聖寺藩邸成立以前かとも思われるがはっきりしない。旧溝が関係する2、11は六尺三寸間である。旧溝は下の砂利面と同時に使用されていたと考えられるものである。構築は下の砂利面の方が古かったのであろうが、ある時期には一緒に使用されていたものと考えられる。当初、下の砂利面は屋敷内の広場的な性格をもっていたのではないかと考えられるが、それが途中で、おそらく旧溝が作られたときに、道になったのではないかとと思われる。旧溝と木樋の間が六尺三寸間で八間の道になったものと考えらる。新溝が関係する12、6号組石が関係する13・14はいずれも江戸間である。新溝の構築は上の砂利面以前であるが、使用は同時にされていた可能性がある。12号組石との間の距離は江戸間で8間である。文献資料による(『加賀藩史料』第四編:703~704)道幅八間が六尺三寸間の八間から江戸間の8間へと変わり、若干狭くなったことが推測できる。6号組石南北部分はその西に大規模な盛土がなされたことに対応して作られたものと考えられるが、それ自体江戸間で10間で構築され、12号組石との間は7.5間とさらに狭くなっている。上の砂利面と同時に使用されていたと考えられる15-17の1・2号杭穴列では杭列相互の間の距離は6.5間とさらに狭くなっている。それぞれが證人屋敷と大聖寺藩邸の木堀用のものであったとすると道幅は6.5間しかないことになる。どのように考えたらいいか迷うところである。杭相互の距離は1号杭穴列ではほぼ齊一的であるが、2号杭穴列は区々である。

以上のように少なくとも3例の建築に関係するもの、地割に関係するもの、道幅に関係するものの各種の距離に共通して六尺三寸間から江戸間への推移が層位的に確認されている。しかもそれらは下の砂利面・L面に関係するものは例外なく六尺三寸間であり、上の砂利面・K面に関係するものはこれまた例外なく江戸間である。天和二年(1682)以前にこの調査地点では、建築、地割、道路幅に関する各種の尺度が六尺三寸間から江戸間に転換していることを確実に言うことができよう。

V区1号溝が関係する1、3、4、5では興味深い事実がある。3、4、5は東西方向に走る道の幅を示していると考えられる。第三章第一節で触れているように「延宝図」にみられる天和二年以前の富山藩邸と大聖寺藩邸、富山藩邸と證人屋敷の間にあった道である。V区1号溝はこの部分では道の北を画し、富山藩邸の南端になっていた溝である。道の反対側にあり、V区1号溝と対になる遺構はE28-1、E30-2・IV区3号溝であり、次いで5号組石と変化し、また道の幅も変化していた可能性もあるが、3、4、5はいずれも六尺三寸間で構築されている。ところが、この「延宝図」にみられる道はその西端で北に曲がり、南北方向の道になるのであるが、この道の南北部分の両側の溝と考えられるV区1号溝とE36-6との間は7.2mになる。1である。これは江戸間4間と考えられる。一つながりの道でありながら東西方向の部分と南北方向の部分の幅が違うことになる。他の要因であった可能性もあるが、六尺三寸間から江戸間への変化とみることができよう。こうした推測にたてば、東西部分と南北部分の構築に時期的な違いがあったとも考えることができよう。八間幅の道の幅が11から12・13へ、六尺三寸間から江戸間へ変化しているのと同様な事例であろう。

7-10の4例はいずれもIV区6号新溝もしくは6号組石南北部分の西に盛られた盛土で発見された

## 第一節 江戸時代の基準尺度について

遺構である。7, 9は六尺三寸間であった可能性が強い。10にもその可能性があるが、これは方位に変異があり、杭の間の距離も一定していない。これを利用してはたして建物を建設することができたかすこぶる疑問のあるものである。しかも掘立柱である。下層にある7が礎石に関連するものであり、また上にあるF25-2は尺度こそはっきりしないが、やはり石を利用した建物の基礎と考えられるものである。同時にあった可能性が高い礎石に関連するものと道に関連するものが別の尺度で作られていた可能性がある。すなわちIV区6号新溝、6号組石南北部分に関連するものは江戸間を基準尺度として構築されているのに、それと同じ時期の遺構であると考えられる盛土にある建物は六尺三寸間で建てられていたと推測されるからである。地割に関する尺度と建物に関する尺度とが違っていた可能性がある。このようなことは後でも述べるが17世紀前半にまで遡る可能性がある。建物に関連する尺度のほうがより遅くまで六尺三寸間を残していたことはあり得ることであろう。畳に関連して考えれば、建物の柱の間が古いものを残す可能性が強いことが理解されよう。

22の設備管理棟地点の2号杭穴列は層位的にも、遺物の面からも時期が確定できているわけではない遺構である。しかしその位置からある時期の前田家関係の屋敷の南端であり、無縁坂に続く道との境界であったことは確実であろう。設備管理棟地点の道路の項でもみているように、種々の状況証拠から25の無縁坂への道が天和二年までには4間幅になっていたことは確実である。この2号杭穴列は道路幅が4間になると道路のなかに入ってしまう、それ以前の遺構であることは確実であろう。この杭穴列には少なくとも7回建てられたことが確認できており、確実に7回とも六尺三寸間である。『加賀藩史料』（編外備考:163）によると最初に屋敷周りに塀を作り、屋敷を囲ったのは寛永二年(1625)のこととされている。杭穴列のどれかがこのときに建てられた塀に利用されたものであろう。少なくともこの時点では六尺三寸間が基準尺度として用いられていたことになろう。時期不明のものうち32は基準尺度が六尺三寸間であることから天和二年以前のものであることが言えよう。31に関しては基準尺度が江戸間であるので、時期の判定をすることはできない。

最後に23-25について述べるのであるが、これらは遺構が破壊されているので、必ずしも確実ではないが、いずれも江戸間であったのではないかと考えられる。25は天和二年以前といってもかなり時期は天和二年に近いものと想像することができるが、23, 24に関しては前田家が本郷の地に屋敷地を拝領して以来のものである可能性もある。つまり元和二年(1616)ないし元和三年(1617)以来のものである可能性がある。しかも必ずしも確実ではないが、江戸間であることが推測される。今回調査しているわけではないので、図の上のことではあるが、現在の竜岡門から東に向かった道が左に曲がり北に向うのであるが、その延長線から講安寺の西端まで、いいかえるならば前田家の本郷邸が東に張り出した部分の無縁坂に続く道に面する間口は江戸間で丁度120間である。もちろんこの時点では大聖寺藩の上屋敷はなく、南北方向の60間は拝領地のなかで他と区別できるものでもないのであるが、この調査でみられる他の地割の連属性からみると一つの可能性を示すものとすることもできよう。このようにみえてくると江戸間で南北60間、東西120間の区画が当初からあったこともあながち無理な推定ではないものと考えられよう。少なくとも大聖寺藩が成立する寛永十六年(1639)にはこのような形で證人屋敷、大聖寺藩邸、富山藩邸が地割りされたことになる。古い場合には元和二年ないし三年、新しくても寛永十六年にこの地点では屋敷の外郭線の地割の基準

## 第V章 考察

尺度に江戸間が使用されていた可能性がある。後でもう一度触れることにする。

道路の幅も必ずしも確実ではない。しかし江戸間によるものが2.5間から4間に拡幅された可能性が強い。もしそうだとすると後でみるように家康の入府した時点で江戸間による地割がこの地点では実施されていた可能性がでてくる。こうした推測があたっているとすると、屋敷の外郭線と道路は江戸間を基準尺度にする地割がなされ、屋敷のなかの地割と建物の建築は六尺三寸間を基準尺度としていた期間がかなり長く続いていたことを示すことになろう。「天保図」では大聖寺藩邸の東側の富山藩の通路の幅を五間一尺五寸としている。この道は天和三年に作られたものである。これが事実だとすると天和三年の時点でも六尺三寸間が屋敷内の地割に使用されたことになる。

天和二年以前にあった基準尺度の六尺三寸間から江戸間への転換はいつ起きたのであろうか。それを直接示すものは何もない。間接的な証拠で類推せざるを得ない。下の砂利面・L面に関係する遺構がすべて六尺三寸間であることはさきに述べた。下の砂利面は寛永六年(1629)の紀年銘のある木札を出土した池の上に構築されている。また六尺三寸おきに杭のある設備管理棟地点2号杭穴列の中の一部は寛永二年に実施されたとする屋敷地を取り囲む最初の堀に関係するものであろう。こうしてみると1620年代には六尺三寸間が基準尺度に使用されていたと考えることができよう。

大聖寺藩と富山藩が加賀藩から分かれて成立するのは寛永十六年(1639)のことである。大聖寺藩邸の第1期の造営はこの頃から1640年代になされ、第III章第一節でも推定しているように遅くとも1650年代初めには完成しているものとできよう。この第1期の建物に関係するものと考えられる地下式土坑相互の間の距離もさきにみているように六尺三寸間で解釈可能なものであり、屋敷地のなかには六尺三寸間十五間で地割されていた可能性もある。このときの建物は、少なくともその大部分は、天和二年の火災まで使用されていたとすることができよう。この間に道幅は六尺三寸間から江戸間に変化している。下の砂利面・L面から上の砂利面・K面への変化である。上の砂利面・K面の下にあり、下の砂利面・L面の上にある遺物により年代を押えようと努力したが、確実なことが言えるものは何もなかった。K面上にある江戸間による建物の礎石である1・2号石列が証人制度の廃止に伴うものであるとするならば、証人制度の廃止は寛文三年(1665)のことであるので、この頃には基準尺度が江戸間に変っていたことになろう。以上に見てきたことから六尺三寸間から江戸間への転換は今後の詰めが必要であるが、確実なところでは1640年代から1670年代の間に起ったことになろう。さらに種々の状況から判断すると1650年から1665年の間であった可能性が強い。今後の本郷構内の調査によりより確実な年代を押えることができよう。たとえば、大聖寺藩邸は罹災していないが加賀藩本郷邸が全焼したとされる慶安三年(1650)の火災のあと再建される建物がどのような尺度を使用していたかなどによりより詳細な年代が明らかになろう。

それでは本郷構内の他の調査地点ではどうなっているのであろうか。これらの地点では上屋敷になる天和三年以降の遺構が主体となっているために、六尺三寸間の基準尺度を確認することはできず、すべて江戸間による基準尺度が用いられている。既に報告のある理学部7号館地点では、天和三年以降の建物に関する遺構が確認されており、基準尺度は江戸間が使用されていたと考えられる(羽生ほか 1989:38, 223, 517)。御殿下記念館地点では、明らかに天和二年以前の時期と考えられるI期とされる時期の堀、天和二年の火災の直前かとされるII期の三棟の建物、元禄元年(1688)から

### 第一節 江戸時代の基準尺度について

元禄十六年(1703)までのIII期における三棟の建物などで尺度が推定できるが、いずれも江戸間を基準にしている。以降のものはすべて江戸間を基準尺度にしている。法学部4号館・文学部3号館地点でも遺構の主体は天和三年以降であり、建物を中心にして道路幅などで尺度が推定できるものがあるが、いずれも江戸間を基準尺度にして構築されている。天和二年以前の六尺三寸間によるものが確認できないのは、この時期の遺構が残されている部分を調査していないことによるものと考えられる。加賀藩本郷邸の中心部分である「御殿空間」の調査はまだなされていない。いずれにせよ大聖寺藩邸の考古学的な調査によって推定されているものと矛盾する結果は出ていない。これらの地点においても六尺三寸間から江戸間への転換が将来の調査で明らかになる。

### 3 派生する諸問題

前項で少なくとも大聖寺藩邸では、1650年から1665年頃にかけて屋敷内の種々の基準尺度が六尺三寸間から六尺間(江戸間)になったであろうこと、屋敷の外郭線および道幅の地割に関しては、本郷邸がここに移った当初から、六尺間(江戸間)が使用されていた可能性があることを推論している。これらから派生するいくつかの問題についてここで簡単に触れておくことにする。

まず外郭線が当初から六尺間で区画されていたのではないかとする問題からみていく。この問題についての古典的な論文である喜田貞吉氏の論文にきわめて興味ある記載がある。小杉楹邨氏による『かきあつめ』<sup>1)</sup>を引用しつつ、江戸のなかにも京間で地割した地域と田舎間で地割した地域があり、また現在の大学用地、旧加州邸(加賀藩本郷邸)取り立てのためにそこに居た住民を他に移したものである(1913a:556-557)。今回の調査地も当初より田舎間(江戸間)によって地割されていた可能性が強い。内藤昌氏も日本橋・京橋周辺の大部分は京間で、神田の職人町は田舎間で地割がなされたとしており、両者が併存していたことを示している(1966:111)。なお、内藤氏は家康入国当初は京間が使われ、江戸で田舎間が使用されるようになるのは明暦大火(1657)後かとされている(1966:199)。

今回の調査地点の周辺はきわめて古く地割がなされた地域と考えられる。家康の江戸入府は天正十八年(1590)八月一日であり、翌月の九月十日には榊原家が今回の調査地点の一部になる土地を拝領している。これには江戸の北方への護りに榊原家をあてるという特別な意味もあったのであろうが、この周辺としては異例の早さである。『天正日記』(『続々群書類従』第五 1909年 国書刊行会刊所収:486)によると本郷の地割は同年の九月中旬になされており、入府以後直ちに地割が進められたことが推定される。あるいは無縁坂に続く道もこのときに設置されたのかもしれない。

加賀藩の本郷邸がこの地に設けられるのは元和二-三年(1616-1617)のこととされ、詳細な日時は不明であるが、東隣にある講安寺が湯島天神下から現在地に移ったのは寺伝によると元和二年八月二二日とされている。これは幕府主導によりなされたものであり、推定されている加賀藩本郷邸がこの地に拝領地として成立した時と年月も近く、両者が同時に進められたものと考えて誤りはなかろう。江戸城の周辺を広く確保し、寺社地や武家屋敷をこの頃の郊外に移すという幕府の政策の一環として行われたものと推測することができよう。もしこの推定が正しいならば、加賀藩本郷邸の無縁坂に続く道に面した間口が江戸間で120間というのはきわめてきりの良い数字であり、さら



## 第V章 考察

にこれと直角に60間の地割がなされていた可能性もある。この幕府主導の移転にさいして江戸間による地割がなされていたことの一つの傍証になろう。この地割の基礎は天正十八年のこの地域の地割の際にできていたものを利用したのであろう。このように少なくとも今回の調査地点の周辺に関するかぎり、江戸時代初頭もしくはそれ以前に若干遡って、地割の基準尺度に江戸間（六尺間・田舎間）が使用されていた可能性の強いことを指摘することができる。江戸ではその成立の当初から土地の地割に京間と田舎間の二種類の基準尺度が使用されていたことになる。またこの屋敷のなかではこれに加えて六尺三寸間が建築などに基準尺度として使用されていた。内藤氏(1966:199)が説くように度制が混乱していることを如実に示している。

このことを示す興味深い例が大聖寺藩の年譜を編纂しようという意図の下に弘化三年(1846)の日付で残されている『聖藩年譜草稿』<sup>2)</sup>(土田治兵衛信綱著, 石川県図書館協会 1937年刊『大聖寺藩史談』所収:3)に掲載されている。寛文五年(1665)の記事であるが、馬場が完成したという記事のなかにその大きさを記載している。「京間百八十間、幅越前間六間之馬場出来。是を辰巳の馬場と云。……」の記事である。同じ馬場を作るのに京間(六尺五寸間)、越前間(六尺三寸間)の二種類の尺度が用いられていることがわかって。さらにこの後の条には、なにも形容のついていない間が三箇所出てくる。単純に省略したのかもしれないが、草稿が記述された19世紀半ばという年代を考えると、形容のない間は田舎間(六尺間)であった可能性もあると思われる。もしこの推定があたっているとすると国許では17世紀のなかば頃に一つの馬場を作るのに三種類の尺度が用いられたことになる。

六尺三寸間は西氏によると(1986:134-142)、東北と近畿以西が中心であり、このうちここで問題にしている真々制のものは東北を中心としている。真々製の六尺三寸間に近い値になるであろう内法制の六尺もしくは六尺一寸間の分布は関東地方の周辺にある。関東甲信越地方の六尺間を取り囲むような形で真々製の六尺三寸間は分布しているようである。大聖寺藩のあった北陸地方もこの六尺間を取り囲む地域の一つになる。

六尺三寸間を越前間と呼ぶことも興味深い。これに関しては著者も執筆された年代も明らかではないが、明らかに加賀藩の領内の人によって書かれた文献がある。『理塵集』(『近世地方経済史料』第七巻 1969年 吉川弘文館刊所収:210)と呼ばれるいわば農政経済書であるが、このなかに「上間 六尺五寸 京間と云 中間 六尺三寸 越前間と云 下間 六尺 田舎間と云 但六尺三寸を越前間と云は御當地にての俗なり、京間と田舎間との間の尺に付越前間と云は京と加州との間成故か。」との記載がある。越前間の呼称が加賀藩内の文献史料に登場する点で興味深いものがある。この書を抄録したものと思われるものを喜田貞吉氏は『理塵集抄』として引用している(1913a:557)。

この越前間の呼称がどのようにして生れたのかは不明であるが、江戸時代以前の福井市の一乗谷にある朝倉館においても主要な基準尺度として使われており(吉岡 1977:76)、この地方に伝統のある尺度であることが理解されよう。また17世紀前半に40年ほどかけて構築された若狭の小浜城でもその建築の基準尺度は六尺三寸間である(小浜城跡発掘調査団編 1984:30)。これらは考古学的な調査によって明らかにされているもので、当然のことながら柱の中心から中心までの距離によるいわ

## 第一節 江戸時代の基準尺度について

ば真々制の尺度である。江戸時代の初頭にあった京間、田舎間と並ぶ尺度である越前間もしくは中京間がどのような地域的な偏りをもってみられるのか、また六尺三寸間が建築だけでなく、地割にも利用されているのかなどの問題についてみていくことが必要であろう。このような作業を地道に積み上げて京間、田舎間、越前間の生み出された背景について迫る必要がある。今日の日本の住宅の重要な要素になっている畳、その大きさの違いの原因はここに発しているのであるから、この究明はきわめて今日的な課題でもある。今後の尺度の問題に考古学の成果が寄与できる部分は大きい。問題意識をもった調査と分析が各方面から求められることになろう。

大聖寺藩邸の第1期の造営に関係すると考えられる地下式土坑はほぼ東西方向、あるいは南北方向に一直線上に並びそれぞれの入口の間の距離も六尺三寸間で考えることのできるものであることは既に触れているところである。また天和二年の火災を機に放棄されるこれらの初期の地下式土坑はその多くが袋状の断面を呈しており、それぞれの隅は丸く、対称性も無いものがあり、一つ一つが個性をもっているということが出来るものである。このような形態であるので、はたして地下式土坑を作る職人の手になるものか疑問もあるところである。こうしたこの地点の古い一群の地下式土坑は1650年頃までに作られたものと考えられるものであり、地下式土坑を作る専門的な職人の手によったものでない可能性が強い。

これに比べると天和二年の火災以降に作られる地下式土坑は多様な種類がみられるようになるがそれぞれをみるとある規格性が認められることも事実である。入口の大きさ、地下室の対称性、天井の高さ、地下室の構造などに規格が認められる。これは玉井哲雄氏の指摘にもあるように(1986:130, 150)、専門的な職人集団の手によるものと考えたほうが理解しやすいように思われる。世に云われている明暦の大火以降に地下式土坑の構築が盛んになるのに対応して地下式土坑構築の専門集団が現われたのであろう。17世紀末から18世紀初めにかけて地下式土坑がもっとも盛んに作られたことはこの地点の考古学的な調査によっても認められる。

さきに階段付の大規模な地下式土坑はそれぞれの時期に一つに限られ、いわゆる「奥」と関係する部分に構築されたのではないかとした。F27-1, F33-3, G33-5である。G33-5を最後に大型の地下式土坑はこの調査地点ではみられなくなる。『大聖寺藩史』所収の文化年間の絵図によると屋敷の種々の場所に土蔵がみられるようになっている。大型の地下式土坑があった場所の近くには屋敷内でもっとも大きな土蔵が複数みられる。これをいきなり結びつけるのは若干問題があろうが、階段付の大型の地下式土坑がもっていた機能が土蔵に移ったと考えることもできるような在り方をみせている。玉井哲雄氏の穴蔵から土蔵への転換(1986:144-148)をこの調査を通じても見てとることができよう。この転換は元文三年(1838)の火災を契機に起っているように考えられる。町家にみられることが武家屋敷でも確認されたことになる。尺度の問題にしる、地下式土坑の問題にしる問題点の提出に終わってしまった。今後色々な地点で行われるであろう考古学の調査によって推定される尺度を巡って、各方面で議論がなされることを期待したい。

### 註

- 1) この文献をもとめて手を尽くしたが、まだ発見できないでいる。
- 2) 宮崎勝美氏のご教示による。このほか多くの文献探索をお願いした。感謝している。

## 第二節 消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析

— 東京大学構内遺跡病院地点出土資料を例に —

成瀬 晃司・堀内 秀樹

### 1 分析の方法

本地点より出土した遺物を整理するにあたって分類可能な陶磁器類全点を分析の対象とし、とくに遺構中より出土したものについては、遺構中別把握を行ない、以後の考察の基礎資料とする。

遺物は、調査期間や膨大な出土量のため極めて特殊な出土状況を示すもの以外は遺構内出土として取り上げを行なった関係上、遺構中出土のものを一括として扱わざるを得なかった事を付記しておく。しかし、近世の遺構では自然堆積を想定させるような土層のありかたはほとんど認められず大部分は同時期とは限定されないにせよ短期間の内に埋土が形成された様子を示しているのに加えて、上層出土の遺物と下層出土の遺物の接合例が少ない事からも層位が時期的な大きい幅を有していない事がいえるのではあるまいか。各遺構より出土の遺物の時期的な様相を分析するにあたっては、次のような手順で行なう。

- 1 陶磁器全般にわたり胎土、釉調、文様の特徴で産地の、器形的諸特徴で器種の分類を行ない、その分類基準と器形的、技術的、釉、文様等の特徴を示す。
- 2 同一遺構内出土遺物中における各器種の数量を推定個体数での提示を行ない、組成、共伴関係を考える上での基礎資料とする。
- 3 主な遺構からの出土遺物群の年代的な集中を知る手掛りとして分布状況を示す。これは遺物群の伝世等の問題を含めた年代幅の把握の際には有効な作業であると思われる。なお、消費遺跡としての性格上個々の遺物として捉えた際には、その年代的上限は比較的容易に把握する事が可能であるが、下限を正確に押さえる事は極めて困難である。生産地で生産年代が不確定な器種の場合には本地点での調査結果を主に器種の不在といった消極的理由での年代推定を行なわざるを得ないものもあった。
- 4 時間的把握を行なう。磁器の碗・皿においてほぼ同様の器種構成をするものについて同年代の廃棄として捉え、その器種構成を明らかにし、時期の古い順ごとに各期の様相を捉えていく。ここでは、伝世を充分に考慮にいれ、生産年代の上限に対しては、前段階の組成に含まれている器種を消去していく方法で捉え、下限に関しては量的な比較での推定を行なう。
- 5 近年大橋康二氏の一連の研究によって著しい成果を上げており、また近世の遺跡において普遍のかつ多量の出土を見る磁器のうち、もっとも数量および器種変化が認められる碗・皿を年代比定のメルクマールとして取り扱い、生産地での窯の発掘調査の結果や消費地での紀年銘資料との伴出例などを判断材料とし、各時期の年代比定を行なう。ここでは出土した碗、皿類について器形的特徴を主に、技術的特徴、文様の変化、銘などを分類の基準とした細分を行ない、それら基準と生産地の窯の発掘調査の成果、消費地における紀年銘資料との伴出例などを客観

## 第二節 消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析

的根拠として出した推定年代をあらかじめ明示する。

6 各時期における器種構成を大器種ごとの消長、産地別の構成、陶器、磁器の構成を明らかにする。

7 個体別の小器種ごとの消長、技法、文様、図案、器形の変化などを明らかにする。

以上の手順で分析を行なうにあたり、本来ならすべての遺構について対象にすべきであろうと考えられるが、各時期の様相の特徴を示している遺構に限り数量提示を行なわざるを得なかった。なお、必要と考えられる事項はその都度補筆する事にする。

## 2 陶磁器類の分類

本地点中より出土した陶磁器類は膨大な量にのぼり、その分類に関しては種々の方法が考えられるが、分析の対象になり易い産地と器種からの検索を容易にできるように双方とも独立した項目として設定を行なった。表記は胎質・産地—器種—小器種の順で行なった。本節で取り扱う陶磁器は別項目が設定されている灯火具及び爛徳利を除く徳利類は含まれていない。

### 胎質・産地

第一項目は胎質と産地を組合せて表記した。胎質は磁器（J）、陶器（T）に分類した。産地は胎土、釉調、器形の特徴等より分類し、A群を舶載品、B群以降を国産とし、産地についてが論争の対象になる古九谷様式のものについてはY群、不明もしくは複数の生産地を有するため産地同定が困難なものについてはZ群とした。国産品はB群（肥前系）、C群（瀬戸・美濃系）、D群（京都・信楽系）、E群（備前系）、F群（志戸呂系）、G群（常滑系）、H群（萩系）、I群（萬古系）、J群（相馬系）に分類した。産地同定に問題を有する器種にはその都度説明を加える事とする。

### 器種

第二項目は器種を表記するがこれは第一項目の下分類ではない。器形的特徴より、39項目に分類される。概略はIV章の冒頭で呈示した通りである。参照されたい。

### 小器種

第三項目は小器種を表記するが、これは第二項目まででは充分でないと判断された器種のみに限定した。

以下順を追って各項目の説明を行なう。

### J A群

輸入磁器を本群とする。本地点は輸入磁器が多量に認められているが、いずれも中国の製品である。大半が明末の青花で他に青磁、色絵等がある。生産地は青花、色絵の大半が景德鎮窯、青磁が龍泉窯で、福建・広東付近のものとして推定される呉須赤絵も認められる。年代的には明末の製品の他に清朝の青花小坏、明初や砧手の青磁なども認められている。本群の9割以上を占める景德鎮窯の製品の特徴は高台裏の削りだしの際の放射状のカンナ痕が明瞭な物が多い事、素地が肥前の製品に比して硬質な感じを受ける事、生掛けであるため高台と共に釉が削り出され直線的に揃えられている事、雑器には畳付に茶褐色の粗砂粒が多く付着している事、口唇部には釉と素地の収縮率の違いによってなる虫食いと呼ばれる欠損が認められる事、底径の大きい皿においても肥前の製品に見ら

## 第V章 考察

れるハリ支えが認められない事などの特徴を有し、呉須の発色も上製品に付いてはやや青みが強く  
なっている。器種については1類(碗), 2類(皿), 5類(鉢), 6類(小坏), 14類(蓋), 15類(壺),  
26類(甕), 28類(水注), 36類(盤)が認められているが皿類が最も多い。

### J B群

肥前系の磁器を本群とする。肥前が磁器焼成開始以降19世紀に瀬戸・美濃が磁器焼成に成功する  
までほぼ独占的に国内に供給していたのは周知の事であるが、本地点においてもVII期(18世紀末~19  
世紀初頭)までは一部の輸入磁器が認められるもののその大半をしめている。VIII期(19世紀前半~幕  
末)以降では瀬戸・美濃の製品が多量に認められるようになるが、近世では出土品を見る限りにお  
いては両方の製品には競合する製品は少ない様であり、肥前磁器の江戸への流入量には大きな低下  
はなかったと思われる。

#### ○1類一碗

・JB-1-a(1600-1650) 所謂初期伊万里の碗で、高台は削りが粗雑で幅広のU字状を呈するものを  
本類とする。磁器焼成初期の原明A, B窯(有田町史編纂委員会編 1988), 天神森 3, 4, 7号窯(有  
田町教育委員会編 1975など)等から百間窯(大橋 1985など)での製品を指標とする。口径9-12  
cm, 底径4.5-5.5cm, 器高6-7cm程度でやや深めの器形である。釉は生掛けでやや厚く施され、  
暈付には砂が付着している例が多い。染付の文様は簡略なものが多く植物, 風景, 網目文等が多い。  
寛永14年に佐賀藩によって窯場の整理・統合が行なわれており、その前後では製品の様子が変化し  
ているが本地点では本類の出土例が少ないため一括しておく。本地点では染付と青磁が出土して  
いるが、I期に比定される遺物を出土する遺構数が少ないため、全体の量はそれ程多くはない。本類  
の年代は磁器の焼成が開始された1600年代より、百間窯廃窯までの1650年としておく。

・JB-1-b(1640-1650) 底部無釉の碗を本類とする。明末に量産された雑器のひとつに底部無釉の  
製品があり、本類はそれを模したものであろうと推定される。肥前では山辺田4号窯(有田町教育  
委員会編 1980 など), 猿川窯(佐賀県教育委員会編 1970・1971など), 小樽2号窯(旧)(有田町教  
育委員会編 1986 など), 百間窯, 天狗谷A, D窯(有田町教育委員会編 1972など)等で多量に認  
められ当時の主力製品であったと思われる。また寛永14年の窯場の整理・統合によって廃窯になっ  
たと推定される小溝上窯(大橋 1987a), 天神森 3, 4, 7号窯には本類は認められない事、1650年代  
開窯と推定されるグンバギリ窯(大橋 1984b など)では碗には認められず、小坏に限られる事から  
1640年代の短い期間に生産されていたものであると考えて大異ないであろう。本地点では染付が十  
数点しか認められていないので詳細は不明である。

・JB-1-c(1650-1680) 高台の断面形が三角に削られているものを本類とする。法量は口径 10-12  
cm, 底径4-5cm, 器高5-6cm程度である。碗形は体部の立ち上がりが緩やかで、薄づくりなものに  
変化しており、二度焼するためJB-1-a, bに比較して、シャープな感じを受ける。主文様は丁寧に  
描かれ、植物, 風景, 人物など多岐にわたり、高台裏には二重圏線が施されるものが多い。高台釉  
際の処理はまだ不十分で揃えられていない。高台三角を呈する碗は長吉谷窯(有田町教育委員会編  
1981など)出土の製品に見られ、年代は長吉谷窯操業年代の1650年代から1680年ごろと推定される。  
本地点では量的には多く見られないが、II期の遺物群に含まれる。

## 第二節 消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析

・ JB-1-d(1680-1700) 高台の断面がU字状を呈し、高台高の高い碗を本類とする。法量は口径10-12cm, 底径4-5cm, 器高5-6.5cm, 高台高0.7cm程度である。高台がU字状に調整がされる碗は高台高の高低によって銘、文様の施文法、釉際の処理法が違い、かつ時期差を有すると考えられる。本類は高台高が高いタイプで、高台が同様の調整がされる JB-1-e と比較すると、本類が0.7cm 未満のものは無いのに対し、JB-1-e では0.5cm が最も高い高台である。文様は植物、風景、唐草など多彩でまた本類よりコンニャク判、摺絵の技法で絵付けされるものが現われる。釉は暈付やや上方までしか施釉されておらず、釉飛び等が認められ、釉際の処理は不十分である。本地点ではⅢ期からⅣ期に主体的に出土している碗でⅣ期になると高台径が小さくなる傾向がある。中央診療棟地点のⅢ期に比定される F34-11では本類が推定 194個体出土しており、小型の碗を除いた底部数 116点中の高台高は0.8cmの30点を中心に0.6-1cmの間にすべて収まっている。また、文様はコンニャク判と摺絵を絵付けされているものは全体のうち25%を占める。年代は付されている銘が角福は無く、渦福のみである事、コンニャク判、摺絵を伴う事、また、F34-11の廃絶が元禄16年の大地震の可能性があるためJB-1-cの下限の1680年から17世紀末か遅くとも1700年代を推定すれば良いと考えている。

・ JB-1-e(1700-近代) 高台の断面がU字状を呈し高台高の低い碗を本類とする。法量は口径10-12cm, 底径4-5cm, 器高5-6.5cm程度である。JB-1-d と比して高台高が低く、本類が最も出土した中央診療棟地点の F33-3では0.4cm を中心に0.3-0.5cmの中におさまる。成形、絵付け共に丁寧に作られており、釉際の処理も技術的に完成されたと思われる、暈付際まで釉が施されて直線的に揃えられている。暈付は白濁色を呈し砂の付着はまったく認められない。文様は精緻に施され、新たに手描き五弁花、二重角枠内渦福銘が認められる。この手描き五弁花、二重角枠内渦福銘は肥前では1690年代開窯と推定される南川原窯ノ辻窯(大橋 1986aなど)出土の皿類に多く認められる。本地点ではF34-11の出土212点中五弁花が1点、渦福は認められず、Ⅴ期のF33-3で増加しており、それ自体の上限は1690年代に求められるものの、碗に多く付される様になったのはやや年代が下がり、18世紀に入ってからと思われる。本類の生産時期の上限は18世紀に入ってからと推定されるが、Ⅴ期以降連続して認められ、後代に主力が広東碗、端反碗に移行しても生産されていたと考えられる。

・ JB-1-f(1700-1820) 京焼を模したと考えられる薄作りの碗を本類とする。法量は口径10cm, 底径3.5-4.5cm, 器高4.5-5.5cm程度である。高台は低く、三角に尖る。器高は口径に比して低く浅い碗形である。文様は初期には植物、網目、氷裂文等多様であるが、終末期には割菊、松文などに限定されていく。銘は通常付されないが初期の製品には二重角枠内渦福等が描かれている例がある。年代的には窯からの本類の報告例が少ないので、消費地よりの類推を行なうと郵政省飯倉分館構内遺跡において宝永4年の富士山噴火に伴うスコリアが認められる南区の1号土坑出土遺物に本類が出土している事や本地点ではⅤ期より認められる事から上限は1700年代として大異ないであろう。下限については文化8年開窯の小樽2号新窯の物原3層中より割菊文の碗が出土しており、1810年代を推定できよう。

・ JB-1-g(1700-1780?) 胎土、呉須の発色が悪く、有田内山系以外の製品と推定される碗を本類とする。法量は口径9-11cm, 底径4-5cm, 器高5-6cm程度である。同時期の製品においても内山系の上手物と内山以外の製品とでは胎土、絵付け、呉須の発色、文様、銘等に明瞭な差異が認められる。

## 第V章 考 察

胎土は灰褐色を呈し、呉須の発色は灰がかり不良である。釉は生掛けで、畳付には白色の砂粒が付着している。文様は簡略に描かれ、雪輪梅花文、網目文、植物文などが多く、植物文にはコンニャク判が多用される。銘は渦福や大明成化年製の略文が描かれている例が多い。本類の多くは大村藩領内の波佐見諸窯で焼成されているらしく、永尾本登窯、皿山本登窯（長崎県窯業試験場 1982）などの18世紀に操業している窯からは本類が多量に認められ所謂くらわんか碗として全国の市場に送り出していたのであろう。本地点でも多く認められるが、農村部の下宿内山遺跡や中村遺跡等の出土遺物を見ても JB-1-e は出土しておらず、磁器碗のほとんどは本類で構成されている。郵政省飯倉分館構内遺跡において宝永4年の富士山噴火に伴うスコリアが認められる南区の1号土坑出土遺物に本類が出土している事や本地点では元禄16年の大地震による廃絶の可能性が考えられる F34-11 では1点しか認められず、出現はほぼ1700年代と見て良いであろう。下限は波佐見諸窯の調査が行われていないため詳細は不明であるが、1780年代以降、碗の主力が広東碗(JB-1-m)やその後の端反碗(JB-1-n)に移行し、本類は減少すると考えられる。

・ JB-1-h(1760-1820) 高台径が小さく、やや厚手の腰が張っている碗を本類とする。法量は口径8.5-9.5cm、底径3-3.5cm、器高5-6cm程度で、器形的に類似する JB-1-j と比してやや大きめで、器高が高い。文様は風景、草花文などが一般的で、見込み中央には簡略な手描き五弁花、口縁部には四方禰の帯文、高台脇は櫛歯状の連続文様が描かれる例が多い。本地点では出土例はそれ程多くないが、量的に集中するVI期以外にはVII期にわずかに認められるのみで、生産された年代も短期間で、主力的な碗形ではなかったと推定される。年代的にはVI期の1760年代が上限と見られるが、下限についてはここでは1810年代としておく。

・ JB-1-i(1760-1820) 所謂小広東碗を本類とする。口径10cm、底径3.5-4cm、器高5cm程度の広東碗の底径だけを小型にしたような器形である。文様はこれまでの碗には見られなかった新しい描法で施され、見込みに小文とそれを囲むような圏線、口縁部内面には1-2本の染付線が描かれる。初期には人物、動物、草花文等が多いが広東碗(JB-1-m)出現以降はそれと同様の文様が描かれ、壽字文、曆文、連鎖文等が一般的である。出現期は壽字文、曆文、連鎖文の碗が天明3年の浅間山の噴火によって埋没した鎌原遺跡に出土している事、広瀬向2号窯（大橋 1986a）の6層中より含まれている事から1780年代初頭かそれより遡る時期と考えられるが、中央診療棟地点の E22-1 から青磁染付の筒形碗と相伴している事から1760年代ごろと見て大異なからう。また、広瀬向2号窯では3層中まで出土している事、1811年開窯の小樽2号新窯の物原3層中にも認められ、1810年代かそれよりやや降る年代を推定して良いであろう。

・ JB-1-j(1780-1870) 所謂小丸碗を本類とする。口径7-8cm、底径3cm、器高4.5cm程度の大橋氏の小丸碗A-1類としたものである。雑器のため作りは雑で、器厚はやや厚手く、腰が張っている。高台高は低く、径も小さい。JB-1-hと比較すると小型な事、口径に比して器高が低い事などが異なる。年代は広瀬向2号窯の6-2層より出土しており、6層が1780年代頃と推定されている事、また、1811年開窯の小樽2号新窯にも見られる事から1810年代までは生産されていた事がわかる。本地点ではVIII期に多く認められる事から下限は幕末まで見れば間違いないであろう。

・ JB-1-k(1600-1650) 口径10cm、底径5-6cm、器高7cm程度の筒形を呈する大型の碗を本類と

## 第二節 消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析

する。やや厚手で、高台はJB-1-aと同様の作りである。呉須は濃青色に発色しており、文様も精緻で幾何学文、山水文、草花文などが丁寧に描かれている。肥前では磁器焼成初期の天神森4,7号窯、猿川B窯、原明A・B窯などで一般的に見られ、寛永14年の窯場が整理・統合された後も百間窯などで生産されており、年代は磁器焼成開始の1600年代より、百間窯廃窯の1640年代を推定して良いであろう。本地点では出土点数は少ないがI期に若干見られる。

・JB-1-l(1760-1820) 口径8cm, 底径4cm, 器高5.5-6.5cm程度の小型の筒形の碗を本類とする。染付の他に青磁染付, 色絵等があり, 量的にも多く, 安定した生産がされていたと考えられる。器厚はやや厚く, ラフな作りのものが多い。主文様は割菊, 矢羽根, タコ唐草などが多く, 見込みには五弁花が認められるものもある。基本的には裏の銘はない。肥前の広瀬向2号窯では青磁染付は焼成室覆土内, 染付は6層中より出土しており, 2層以降では出土数が激減する。また1811年開窯の小樽2号新窯では筒形碗は見られず, 生産の下限は1810年代くらいに押さえられると考えられる。この事は『守貞漫稿』(室松岩雄編『類聚近世風俗志完』1908所収)の「筒形碗は文化ごろ以降に廃す」の記述と矛盾しない。本地点ではV期のうち新しい様相を呈する遺物群に認められ, VI期には増加している。

・JB-1-m(1780-1870) 所謂広東碗を本類とする。口径10-12cm, 底径5.5-6.5cm, 器高6cm程度の碗で蓋付きの例が多い。本類の最大の特徴はその高台にある。碗は径の大きい高高台から直線的に体部が開き, 蓋も碗同様高台風の径の広いつまみを有する。文様は壽字, 草花, 幾何学, 風景等種々認められるが, 初期のものには高台外面に圈線が施される事, 見込みの小文が精緻に描かれる事, 銘が施される事などの特徴を有する。描法はJB-1-iからの系統を引き, 碗蓋共に見込みに圈線や小文が施され, 特に蓋は本類独特の高台内外を区画せず, 器面全体を利用している例が多い。肥前では1820年代に廃窯したと推定される大山新窯(前山1984-1985), 広瀬向2号窯, 1811年開窯の小樽2号新窯などで認められ, 大山新窯では本類と共に端反碗(JB-1-n)が出土しており, 1820年代以前に端反碗が生産を開始した事が推定される。また広瀬向2号窯では物原の4から2層に認められ, 4層では端反碗は認められていないことから, 1820年代以前であろうと考えられ, 報告でも4層の年代を1810年以前と位置付けている。小樽2号新窯では物原3層では多量に認められるが, 1層になると少なくなり, 大橋氏は1820年代以降碗の主力が端反碗に移行したと推定している。消費遺跡では1782年に埋められた旧芝離宮庭園内の掘割りに認められ, 生産の上限は1780年代と思われる。本地点ではVII期以降に認められるが瀬戸・美濃の磁器が多量に含まれるVIII期においても本類が多量に検出され, 下限は幕末と見た方が良いであろう。また, 御殿下記念館地点では1802年建設の梅之御殿整地層の下より検出された寛政7年銘の碗を伴う245, 233号遺構にはJB-1-iは認められるものの本類は認められず, 製品の普及は生産開始よりやや遅れる可能性も推定できる。

・JB-1-n(1820-近代) 端反碗を本類とする。法量は口径10-11.5cm, 底径4-5cm, 器高6cm程度である。本類は波佐見諸窯で生産されていると思われる粗雑な製品以外は蓋付きで, 蓋の径は8-10cmである。蓋も碗同様口縁部が端反り, つまみは高台状を呈している。文様は草花, 唐草, 風景など多様で, 見込み中央には小文, 口縁部には四方禪, 紗綾形文等の帯文が描かれる。肥前では1820年代まで操業したと推定される大山新窯で認められる事, 1811年開窯の小樽2号新窯では下層の3



## 第V章 考察

層には広東碗(JB-1-m)が主体的で端反碗がほとんど見られず、文政7年銘の染付皿を含む2-1層になって量的に増加する事から1820年代が初現であろうと推定される。本地点では広東碗に比して量的に少ないがⅧ期以降に見られ、Ⅸ期にはコバルトを顔料にする染付碗も出土している事から下限は近代以降であろう。

・JB-1-o(1820-近代) 湯呑形の深い碗を本類とする。口径8-9cm, 底径4-5cm, 器高7cm程度で大橋氏の小丸碗B類に相当する(1986a)。文様は唐草, 幾何学, 草花等多岐にわたり, 見込み口縁部には雷文, 波濤文などの帯文が認められる。高台には櫛歯状の染付がされている例が多い。肥前では小樽2号新窯の物原1層中より出土しており, 文政7年銘の皿が同層中より出土している事から初現は1820年代と見て良いであろう。本地点ではⅧ期から見られ, Ⅸ期にはコバルトを顔料にした製品も出土している事から下限は近代以降であろう。

・JB-1-p(1820-近代) 体部がハの字状に直線的に開く飯碗形の碗を本類とする。法量は口径10cm 底径4cm, 器高4.5cm程度である。全体に薄手で, 高台はやや外側に外傾する。主文様は草花, 動物文等が細線描きで描かれており, 見込みには中央の小印と口縁部帯文が施される。本地点ではⅧ期以降に認められるが, Ⅸ期には瀬戸・美濃製の飯碗形の碗(JC-1-f)に取って代られているものと思われ, 肥前製は量的には少ない。

・JB-1-q(1820-1870?) 高台がハの字状に開き腰が張る蓋付きの碗を本類とする。碗の法量は口径10-12cm, 底径4.5-5cm, 器高6cm程度である。全体的にやや薄手で口縁は大きく開いており, 蓋も高台状のつまみはハの字状に外傾している。主文様は草花, 文字, 山水, 幾何学文等多岐にわたり, 見込みには中央の小文と, 四方禪, 波濤文等の帯文が描かれている例が多い。肥前では吉田2号窯(大橋1989a)に多いほか, 窯の谷窯では福壽文, 広瀬向2号窯の2層から青磁染付が出土している。広瀬向2号窯の3-2層は明治の製品が混入しており, 良好な物原の堆積層ではないと報告されているもののJB-1-n, JB-1-o等と併伴しており, 本地点でもⅧ期にのみ出土している。また, 御殿下記念館地点では1802年建設の梅之御殿整地層の下より検出された寛政7年銘の碗を伴う245, 233号遺構には本類は認められず, 上限は肥前例と考え合わせて1820年代と推定できる。

### ○2類一皿

本類に分類された皿は所謂手塩皿と称される小皿(肥前では小皿が器種として認識されていた様であり, 中皿と識別するのは容易であると考え)と型作りの皿(ここでは轆轤成形でないものゝ意で, 轆轤成形後型押しのもものは含まない)を除外したものである。

・JB-2-a(1600-1650) 所謂初期伊万里の皿で, 高台径が小さく, 生掛けのものを本類とする。磁器創始期の窯と考えられる原明窯, 天神森窯から百間窯までの製品を一括した。この時期の皿は時期が降るにつれて次第に大きくなるが口径に比して底径の割合が小さく, 1/2以上のものはない。染付の文様は簡略なものが多く, 風景, 丸文, 植物等が描かれ, 吹墨も多用される手法である。高台は削りが粗雑で大きなU字状を呈しており, 生掛けである。畳付には砂が多量に付着するものが多い。したがって本類の生産年代は内山以外は若干後まで生産されていると思われるが, 1600年代より百間窯廃窯までの1640年代とする。本地点ではⅠ期にあたる遺物群を出土した遺構が少なく, 従って本類も数量的には少ない。

## 第二節 消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析

・ JB-2-b(1650-1670) 高台の断面は三角で、径は小さいものを本類とする。本類はダンバギリ窯出土の製品が指標である。やや小型の皿が多く、特徴は高台がシャープに断面三角に削られる事。口径に対する底径の比率がほぼ1/2程度に広がっているが、長吉谷窯以降の窯で使用されるハリ支えはまだ見られない事である。生産時期はダンバギリ窯の操業時期が1650年代より、降っても1660年代と推定されているので、本類も該期と見て良いであろう。本地点では本類の出土例は少なくⅡ期の遺構中より少量検出されたのみである。

・ JB-2-c(1650-1680) 高台の断面は三角で、径が大きいものを本類とする。長吉谷窯出土の製品を指標とする。大皿から小型の皿まであり、いずれも口径に比して器高が低い浅皿風である。特徴はJB-2-bと同様に高台が削られているが、口径に対し底径が大きくなり、高台中央にはハリ支えが認められるものも出現する。上手物は絵付け、成形、釉調は極めて良好で、JB-2-aからの成形や絵付けの技術が完成されたと考えられる。銘は多種確認されるが、角枠内に角福銘が多い。本地点ではL32-1から本類が多量に検出され、絵付、銘の状況から、長吉谷窯、柿右衛門B窯等で焼成された製品であろうと推定される。

・ JB-2-d(1690-1730) 高台の断面がU字状で、畳付際まで施釉されているものを本類とする。南川原窯ノ辻窯の製品が指標である。大きい意味でJB-2-eととらえられるが同窯の製品は特徴が際立ち識別が容易で、年代的に限定できる事で本類を設けた。前代のJB-2-cと大きく異なる所は、高台の削り、釉際の処理であろう。高台は丸くU字状に削られ、畳付は白色を呈する。上釉は畳付際まで施され、まっすぐに揃えられている。銘は二重角枠内渦福が多く施され、外側面の文様はハート唐草文が主流になる。本地点よりはまとまって出土した遺構はないが、数量的には多く見られる。

・ JB-2-e(1690-近代) 高台の断面がU字状で、畳付際まで施釉されているものを本類とする。通常の輪高台の皿は17世紀末以降文様や銘が変化する事はあっても高台の削りや釉際の調整は変化は無く、近代以降も続いている。年代的には南川原窯ノ辻窯以降で、1690年代が上限と考えられる。有田内山系とそれ以外では胎土、釉調、呉須の発色、成形などに違いが見られるが、中間的なものもかなりあり、厳密な区別は困難である。ここでは内山系と考えられるもの物を本類とした。製品は高台を丸くU字状に削り、上釉は畳付際まで施されまっすぐに揃えられる。年代的には長期間になり、呉須の発色、文様、銘等で細分は個々の記述に譲る事にする。

・ JB-2-g(1700-1820?) 厚手の皿で、胎土、呉須の発色が悪いものを本類とする。口径13-15cm、底径7-8cm、器高3-4cm程度の内山系以外の厚手の皿をさす。胎土、呉須の発色は悪い。畳付には砂が付着しているものが多く、削りもラフである。銘は「大明年製」や、渦福の略銘がおおい。内山にこの時期付されていた二重角枠を有する渦福は認められない。調査が有田周辺に限られているため不明確であるが、波佐見諸窯ではこの手の皿を大量に生産しており、本類のかなりの割合が波佐見諸窯で生産されたものであろう。文様は植物文、扇面文、その他意匠不明な簡略文様等がある。本地点ではⅢ期より認められる様になるがⅤ期に急激に増加を見せており、Ⅶ期以降JB-2-i, j類(蛇ノ目凹形高台を有する皿)に生産の中心が移行すると考えられる。安定した生産は18世紀代であるとされる。

・ JB-2-h(1640-1660) 蛇ノ目高台の皿を本類とする。蛇ノ目高台のある皿は窯ノ辻窯(大橋 1984

## 第V章 考察

bなど)、百間窯、ダンバグリ窯等で見られるが、長吉谷窯では見られない。大橋氏の研究では窯ノ辻窯では物原下層第2 廃棄層中より確認され、物原上層の段階になってから盛行する。さらにダンバグリ窯の段階になると手塩皿には残るが普通の皿にはほとんど見られなくなるとしており、生産年代は窯ノ辻窯開窯の推定年代である1640年代頃から長吉谷開窯以前と考えられる。しかしダンバグリ窯から出土している事から1650年代を下限として考えれば良いと思われる。

・ JB-2-i(1820-近代) 蛇ノ目凹形の高台を有する皿で高台高が高いタイプを本類とする。大きさは口径13-16cm, 底径7-10cm, 器高2.5-4.5cm程度である。有田では樋口3号窯(大橋 1985など)、谷窯(有田町史編纂委員会編 1988)等の窯から出土している。JB-2-jが丸皿が多いのに対し、ほとんどが深めの形打ち輪花皿である。主文様は見込み中央と周辺とが意識されなくなり、見込み全体に文様が描かれるのが一般的で、唐草、風景、植物、鳥等多種にわたる。裏文様は描かれていないものが多い。口鏽が施されている例が多く、銘は無い。本地点ではⅧ~Ⅸ期に見られ、コバルトを顔料にした染付も認められる。

・ JB-2-j(1760-1820) 蛇ノ目凹形高台を有する皿で高台高の低いタイプを本類とする。染付の他に青磁染付が認められる。口径13-15cm, 底径8-9cm, 器高3.5-4cm程度の法量を有する。主文様は見込み全体を利用したものは少なく、全体に文様を描く場合も中央と周辺とが意識され圈線が入る。銘は略した渦福銘が多いが、稀に焼成した窯を記したと思われる「筒江」銘が見られる。本地点ではⅤ期の新しい時期と考えられる遺構群より出土しており、出現の年代は18世紀中葉と見て良いであろう。また、Ⅷ期になると高台の高いタイプに変化しており、ここではJB-2-iの上限の1820年ごろを消滅時期としておく。

・ JB-2-k(1650-1700?) 蛇ノ目釉剥ぎの皿で底部無釉のものを本類とする。定形化したJB-2-l, mはいずれも底部は施釉している。定形化したもの以外にも底部施釉しているものもあるが本地点では確認されていない。染付と白磁、青磁がある。やや小型で口径11-14cm, 底径3-5cm, 器高3-4cm程度である。染付の文様は雑な花文様など簡略なものが多く、銘は認められない。本地点ではⅡ期より見られるが量は少ない。Ⅴ期には定形化したJB-2-l, mが見られる事から18世紀に入るとそれらに変化すると思われ、遅くとも18世紀初頭には安定した量は供給されなくなっていたと考えられる。

・ JB-2-l(1700-1780) 蛇ノ目釉剥ぎの皿のうち底部が施釉され、高台径が小さいものを本類とする。やや小型の染付で、口径13cm, 底径4-5cm, 器高4cm程度である。文様は二重線の斜格子文様が描かれており、見込み中央には五弁花の名残と考えられる小印が付されるものも少量認められる。銘は無く、胎土、呉須の発色は悪い。永尾本登窯、中尾大新窯、皿山高尾窯等の波佐見諸窯で大量に生産された皿の一部と考えられるが、その他の蛇ノ目釉剥ぎの皿類は認められていない。西有田町の広瀬向2号窯では文様は異なるが7層中より同手の皿が確認されており、同層には広東碗が含まれていない事から1780年以前と考えられる。また、本地点ではⅤ期より認められ、Ⅵ期では文様がかなり簡略化している。Ⅶ期以降は蛇ノ目凹形高台の皿が多く、生産の中心がそれに移ると考えられ、安定した供給はⅤ~Ⅵ期であろうと推定される。これらの事から生産年代は18世紀前半から広東碗出現以前の1770年代と推定される。

・ JB-2-m(1700-1780) 蛇ノ目釉剥ぎの皿のうち底部が施釉され、高台径が大きいものを本類とす

## 第二節 消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析

る。口径13-15cm, 底径6-8cm, 器高 3cm 程度のやや厚手の皿で、胎土、呉須の発色は悪い。文様は花を伴う二重線の斜格子文、唐草崩し文等で、中央にはコンニャク判五弁花が配される。波佐見の永尾本登窯は蛇ノ目釉割ぎの皿類が大量に出土しており、本類もその中に認める事ができる。本類も本地点ではV期からVI期にかけてまとまった量が認められる。VII期以降は量的には減少し、安定した供給はV～VI期であろうと推定される。これらの事から生産年代は18世紀前半から広東碗出現以前の1770年代と推定される。

・ JB-2-n(17世紀中葉-1871) 鍋島を本類とする。鍋島の研究は古来美術史などの分野でかなり進められており、ここでは概略に触れるにとどめる。鍋島藩窯である御道具山は当初岩谷川内に置かれ、寛文年間に南川原に移転する。南川原からは延宝年間に大川内に移転し、廃藩置県で廃止されるまで操業している。大川内の鍋島藩窯は昭和27年から52年の間に 6回にわたって調査され、その内容を窺う事ができる。大橋氏の研究によると、大川内の藩窯で焼成された鍋島は七宝結文、櫛高台の木盃形の皿に代表的される盛期鍋島と称される定形的なもの他に、初期鍋島が含まれ、延宝から元禄初めごろにかけては、種々の裏文様、高台文様の皿が主に焼成されたとしている(神奈川県立博物館 1987など)。また一般的に寛政年間以降の鍋島は後期鍋島と称され、文様の表出や裏文様等がラフになり、盛期の精緻さが失われている。本地点では 6点出土しており、色絵が1, 染付が2, 青磁染付が1, 薄瑠璃が 2点である。献上用の品として生産された性格上伝世している可能性が高いので年代比定には使用できないが、盛期が 2点, 後期が 2点で、2点は細片のため不明である。

### ○3類-小皿

所謂手塩皿と称される小型の皿を本類とする。肥前では口径10cm 前後の小皿を一つの器種として生産していたようで、特に18世紀以降は器形的にも安定するようである。高台の作りより以下の様に細分した。

- ・ JB-3-a 高台の断面U字状を呈し、高台高が低いもの。
- ・ JB-3-b 高台の断面U字状を呈し、高台高が高いもの。輪花皿が多い。
- ・ JB-3-c 高台の断面三角を呈するもの。
- ・ JB-3-d 蛇ノ目凹形高台のもの。

### ○4類-型皿

型づくりされた皿を本類とする。轆轤成形の後に型打ちされた皿は2類(皿)に分類する。糸切り細工の型皿は肥前においてはグンバギリ窯で見られ1650年代以前の窯では轆轤成形後に型押ししたものがあるが糸切り細工したものは認められない。高台の作りによって以下の様に細分される。

- ・ JB-4-a 糸切り細工によって高台を貼り付けているもの。
- ・ JB-4-b 高台ごと型で作り出しているもの。

### ○5類-鉢

鉢は量産品が少なく、類型別に分類するのが困難であるため鉢類として一括した。

### ○6類-小坏

碗に含まれない高台を有する小型のものを小坏として本類とする。器形によって以下の様に分類される。

- ・ JB-6-a 丸碗形を呈するもの。
- ・ JB-6-b 端反形を呈するもの。

## 第V章 考察

- ・ JB-6-c 極めて薄型の端反小坏。白玉で色絵付けされているものが多い。
- ・ JB-6-d 口縁部まで体部が直立しているもの。      ・ JB-6-e 型打ちされているもの。

### ○7類—猪口

高台が無く、底部よりやや直線的に開くものを本類とする。高台を有するものはすべて6類に分類した。底部の作りによって以下の様に分類される。

- ・ JB-7-a 蛇ノ目凹形高台状のもの。      ・ JB-7-b 輪高台状のもの。

### ○8類—仏飯器

### ○9類—香炉

### ○10類—瓶

瓶類を一括した。

- ・ JB-10-a 大型の長頸瓶。口唇部は折り返しを有する。      ・ JB-10-b 小型の瓶子形の瓶。
- ・ JB-10-c 神酒徳利。小型の長頸瓶で、口唇部の折り返しは無い。
- ・ JB-10-d 爛徳利。薄手の円筒形を呈する。なで肩である。

### ○11類—仏花器

### ○12類—油壺

### ○13類—蓋物

蓋付きのうち口唇部が施釉されてないものを本類とする。身の形態で以下の様に分類される。

- ・ JB-13-a 丸碗形を呈する。      ・ JB-13-b 筒形を呈する。
- ・ JB-13-c 重箱状に重ねられるもの。体部下端に無釉の段がある。      ・ JB-13-d 胴締形を呈する。

### ○14類—蓋

蓋は1類(碗)、13類(蓋物)、15類(壺)、16類(急須)、18類(合子)などに付随しており、単独では器種にならない。ここでは基本的に端部が無釉のもの(蓋物の蓋であろうと考えられる)を本類としたが、蓋単体では器種同定の困難な場合も多く、それらをも含めた。つまみの形態によって以下の様に分類される。

- ・ JB-14-a つまみが高台状を呈するもの。      ・ JB-14-b つまみが算盤玉状を呈するもの。
- ・ JB-14-c つまみが橋状を呈するもの。      ・ JB-14-d 蓋の中央が凹むもの。
- ・ JB-14-e つまみが団子状を呈するもの。      ・ JB-14-f つまみがボタン状を呈するもの。
- ・ JB-14-g つまみが円筒状を呈するもの。      ・ JB-14-h 装飾つまみが付けられているもの。
- ・ JB-14-i つまみが付けられていないもの。

### ○15類—壺

### ○16類—急須

胴部より把手が張り出したものを本類とする。

### ○17類—紅皿    ○18類—合子    ○19類—水滴    ○20類—蓮華    ○21類—植木鉢    ○22類—花生け

### ○34類—土瓶

ここでは口縁部横に對の橋状把手が付き、釣り下げる形態の物を本類とする。

### ○35類—小物

ミニチュアを含めた器種同定が困難な小物を一括した。

### ○36類—盤

## 第二節 消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析

大型で、脚を伴い、内面が施釉されているものを本類とする。

### J C群

瀬戸・美濃地方で、磁器の生産を開始したのは瀬戸の陶工加藤民吉が1801年に熱田新田に築窯したのが最初であるとされ、同人が肥前で磁器焼成の法を会得して戻った1807年から1820年の間に本業から新製に転じた者は90余戸に及び、急速に周囲に伝播したらしい(加藤編 1972:534)。商業ベースとして新製物が全国に流通する年代はこれ以降であると思われる、また、瀬戸では藤澤氏の研究によって新製物が現われるかみた2号窯中層の遺物群(かみた9の遺物群)を19世紀の第2四半期に位置付けている(1989)。これらのことから本地点の瀬戸、美濃の磁器が含まれる遺物群の年代も1820年代以降としておく。初期の新製物は技術的に未熟で、改良をくわえ磁器の本来のレベルに到達するまでに年月を要したと考えられる。この年代については19世紀の第3四半期を推定しているが、給水設備棟地点のAJ35-1等では、大量の肥前の広東碗と新製物が共伴しており、肥前の広東碗の年代観と時期差が生じている。また中央診療棟地点のH21-1等では新製物に肥前の端反碗が伴っており、新製物は広東碗、端反碗両者と共伴している。AJ35-1の広東碗は古い様相を呈すものも含まれ、日常雑器に半世紀の大量の伝世は考えにくく、年代がやや上る可能性を考えている。

#### ○1類一碗

・JC-1-a(1820-近代) 丸碗を本類とした。口径10cm、底径4cm、器高5-6cm程度の碗である。瀬戸・美濃の碗は広東形、端反形等肥前の碗を模したものが生産されるが、本類も器形的にJB-1-fあたりの影響を受けていると思われる一群とJB-1-eの影響を受けていると思われるものがある。瀬戸のかみた第1・2号窯でもJB-1-f写しの割菊文様の染付碗と通常の丸碗が出土しており、それが裏付けられている。本地点では量的に少なく細分はしなかったがやや後者の方が多い様である。呉須は地呉須を用いた例が少ない。

・JC-1-b(1820-1870) 筒形碗を本類とする。法量は口径7cm、底径3-3.5cm器高6cm程度である。瀬戸・美濃では18世紀後半より肥前磁器を模した太白と称される陶器が盛んに生産された事は周知の事実であるが、筒形碗は消費遺跡においても各地で認められ、太白手の有力な器種の一つであったと推測される。19世紀に磁器生産開始以降も筒形碗が磁器の1器種として継続して生産されたのであろう。しかし量的には少なく、完全に磁器質になっている製品も少ない事から、初期の段階で生産されなくなったと推定され、コバルトを顔料としたものが見られない事からも少なくとも幕末までには生産されなくなったであろうと考えられる。文様は地呉須を用いて割菊文様を描いた例が大部分を占める。

・JC-1-c(1820-1870) 広東碗を本類とする。法量は口径10-11cm、底径5-6cm、器高6cm程度で、JC-1-b同様太白手の広東碗は有力な器種の一つであり、19世紀に磁器生産開始以降も磁胎に変化して引き続き生産されている。かみた第1・2号窯からはJC-1-d類と共に最も多くの量が出土しており以上の事実を裏付けているが、本地点ではJC-1-dに比して量的には少ない。肥前で広東碗から端反碗に碗の生産の主力が推移するのに伴い、瀬戸・美濃地方においても広東碗が漸減したであろう事は容易に想像される。文様は地呉須を用いて割菊、蓮弁文様を描いた例が多い。本類もコバルトを顔料としたものが見られない事からも少なくとも幕末までには生産されなくなったであろうと考

## 第V章 考察

えられる。

・ JC-1-d(1820-近代) 端反碗を本類とする。口径8-12cm, 底径4-5cm, 器高4-6cm程度である。JC-1-b, cは器種自体は太白手の製品にあるが, 本類は太白手には認められず, 磁器生産開始以降に出現した碗形である。本地点ではVIII期に激増するが, 口径9cm程度でやや小型の碗が多く, 大きいものは量的には少ない。機能的に飯茶碗として使用するには小型であるし, 液体を入れるのであれば煎茶の流行や瀬戸・美濃の灰釉徳利の激増と無関係ではないであろう。IX期にはコバルトを顔料としたものが出現するが, 蓋付きの大型の製品が多い。文様は多岐にわたり, 毛彫り, 墨弾き等が多用される。

・ JC-1-e(1820-近代) やや厚手の作りで, 湯呑形の碗を本類とする。染付の他に稀に色絵が認められる。本類もJC-1-d同様太白手には認められず, 磁器生産開始以降に出現した碗形である。やや小振りで口径7-9cm, 底径4cm, 器高6-8cm程度である。文様は多岐にわたり, 毛彫り等が多用されるが, 通常に使用される地呉須の他に輸入呉須で細線描きされている例も認められる。本地点ではVIII期以降に認められ, IX期になると量的に減少し, やや小型になる傾向が認められる。生産の主体が端反で開く形態のもの(JC-6-b)に移行したためであろう。

・ JC-1-f(1820-近代) 体部が「ハ」の字状に開くタイプの碗を本類とする。本類も太白手には認められず, 磁器生産開始以降に出現した碗形である。法量は口径9.5-12cm, 底径3-4.5cm, 器高4-5cm程度である。本地点では出土量が少量であるが, VIII期のものは薄手で, 輸入呉須を使用した細線描きで文様が施され, IX期のものはやや厚手で, コバルトで絵付けされている。量的にはIX期には増加している。

### ○2類—皿

・ JC-2-a(1820-近代) 底部が蛇ノ目凹形高台を呈する皿を本類とした。瀬戸のかみた第1・2号窯の出土の皿には本類が多量に認められる。文様や底部の作りは肥前の模倣と考えられる。本地点では瀬戸・美濃産の皿が肥前産に比して極端に少なく, 皿類は肥前のものを用いていた様である。本類も同窯の様な蛇ノ目が大きいタイプの製品は少なく, 底径が小さいタイプのものが多い。近代に入っても大型で, やや浅い型紙摺りや銅版摺りの製品が認められ, 継続して生産されている。

・ JC-2-b(1820-近代) 底部が輪高台を呈する皿を本類とした。本類は瀬戸・美濃地方で管見に触れた限りでは窯の報告例はなく, 本地点においても僅かしか認められていないので文様や大きさ等の様相は不明であるが, コバルトを顔料とした染付が認められている事から近代になっても生産されていたと考えられる。

・ JC-2-c(1870-) やや幅広の蛇ノ目風の高台を有するものを本類とした。高台は畳付の外側が接地するように削られている。口径11-13cm, 底径6-7cm, 器高2cm程度の小振りの皿である。本地点ではIX期のみ認められるが呉須で絵付けされている例もあるので, 生産の上限は幕末まで含めて考えた方が良いかも知れない。

### ○3類—小皿

瀬戸・美濃においては小皿を1器種と意識して生産された様子は肥前の様に明瞭ではないため小皿という器種はやや曖昧さを伴うが, ここでは小型の皿(大型のものが認められない器種)として

## 第二節 消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析

分類した。器形によって以下の様に分類した。

- ・ JC-3-a 口縁部が強く外反するもの。見込み文様は型押しされている。
- ・ JC-3-b 通常に内湾しながら立ち上がるもの。

### ○4類一型皿

瀬戸・美濃の貼付高台の皿が認められず、高台ごと型で作り出しているものを本類とした。小振りのものが多い。

### ○5類一鉢

### ○6類一小坏

18世紀後半より流行する煎茶、または出土量が激増する徳利は当然それを入れる容器としてのものの生産を促したと考えられ、VI、VII期にはJB-1-1(筒形碗)やTD-1-d(小杉茶碗)、VIII期にはJC-1-d(端反碗)がそれに該当するであろう。本類はIX期に激増し、JC-1-dに変わって主流を占めると考えられる。口縁部の形態によって以下の様に分類される。

- ・ JC-6-a 丸碗形を呈するもの。
- ・ JC-6-b 端反形を呈するもの。
- ・ JC-6-c 筒形を呈するもの。

### ○7類一猪口

### ○8類一仏飯器

### ○9類一香炉

### ○10類一瓶

- ・ JC-10-a 大型の長頸瓶。口縁は折り返されている。
- ・ JC-10-b 小型の瓶子形。
- ・ JC-10-c 神酒徳利。小型の長頸瓶で、口縁は折り返されていない。
- ・ JC-10-d 爛徳利。薄手でなで肩である。

### ○11類一仏花器

### ○12類一油壺

### ○13類一蓋物

### ○14類一蓋

### ○15類一壺

### ○16類一急須

### ○18類一合子

### ○19類一水滴

### ○20類一蓮華

### ○21類一植木鉢

### ○24類一喫煙具

### ○34類一土瓶

### ○35類一小物

## JY群

古九谷様式のをJY群とした。本地点では古九谷様式の遺物が数十点出土しているが、本地点が九谷古窯を領内に有する大聖寺藩の上屋敷跡であることを考えると注目される。古九谷の生産地問題は過去に様々な分野の研究者によって議論されてきたが、様式論や可視的な素地等の比較は議論され尽くされた感があり、科学的な分析による産地同定が進められている。本地点出土の遺物も化学的に分析を依頼して成果を併載させて頂いた。詳細は本章第九節に譲るとして、考古学的成果として近年肥前における17世紀代の窯の発掘が九州陶磁文化館や有田町教育委員会の手で進められており、新たな出土品との比較では古九谷様式は肥前である可能性が高いと推定されている(大橋1987b, 村上1988)。いずれにしても「素地移入説」が提唱されるにおよんで実効的ではなくなっているのが現状であろう。

## TA群

輸入陶器を本群とする。

### ○1類一碗

### ○2類一皿

### ○5類一鉢

## TB群





## 第二節 消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析

- ・ TC-1-n 京焼を模した平碗。見込みは呉須，鉄絵を施すものが多い。 ・ TC-1-o 尾呂茶碗。
- ・ TC-1-p 拳骨茶碗で，漆黒釉に白釉を飛ばし，体部に凹みを有する碗。
- ・ TC-1-q 摺り消しの斑状の釉剥げがある柿釉碗。体部には沈線が巡る。
- ・ TC-1-r 鎧手碗。体部に螺旋状の連続文様が施される。 ・ TC-1-s 刷毛目碗。平碗風の器形。
- ・ TC-1-t 鉄釉と灰釉の掛け分けで，櫛引の横線と数条の縦沈線を施す。 ・ TC-1-u 腰鍔碗。
- ・ TC-1-v 器形は TC-1-l と同様であるが，柿釉と灰釉を掛け分けている。
- ・ TC-1-w 信楽の小杉茶碗を模したのもの。体部に鉄絵で若杉文が描かれる。
- ・ TC-1-x 緑釉の丸碗。 ・ TC-1-y 奈良茶碗。

### ○2類—皿

- ・ TC-2-a 丸皿で，ピン痕が認められるもの。
- ・ TC-2-b 丸皿で，直重ねの輪状の溶着痕が認められるもの。
- ・ TC-2-c 長石釉が施された丸皿。 ・ TC-2-d 見込み中央に印花の施された皿。
- ・ TC-2-e 御深井釉の皿で，摺絵によって文様が施される。 ・ TC-2-f 石皿。
- ・ TC-2-g 馬ノ目皿。 ・ TC-2-h 太白の皿。 ・ TC-2-i 型打ちの皿。
- ・ TC-2-j 灰釉鉄絵皿。笹文が描かれるものが多い。
- ・ TC-2-k 菊皿。外側面にしのぎが認められるもの。
- ・ TC-2-l 菊皿。外側面にしのぎが認められないもの。 ・ TC-2-m 輪髡皿。 ・ TC-2-n ヒダ皿。

### ○4類—型皿

### ○5類—鉢

- ・ TC-5-a 黄瀬戸釉の緑釉流しの鉢。見込みに波状の櫛引きが施される。
- ・ TC-5-b 御深井釉の鉢で，見込み中央に文様が摺絵される。
- ・ TC-5-c 灰釉の輪剝鉢。体部は直線的に開く。
- ・ TC-5-d 型物の龍等が貼付される緑釉の鉢。瀬戸で瓶掛と分類したもの。
- ・ TC-5-e 黄瀬戸釉の緑釉流しの大鉢。波状の櫛引きや刺突が施される。
- ・ TC-5-f 灰釉の鉢。口縁の一部が凹み，底部には高台がない。
- ・ TC-5-g 型物の龍等が貼付される緑釉の大鉢。TC-5-e と器形は同様。
- ・ TC-5-h 手鉢。脚が貼付される。

### ○6類—小坏

### ○8類—仏飯器

### ○9類—香炉

- ・ TC-9-a 灰釉香炉。 ・ TC-9-b 鉄釉香炉。
- ・ TC-9-c 御深井釉の香炉。摺絵で文様が描かれる。
- ・ TC-9-d 鉛釉香炉。体部に菊花状のしのぎが彫られる。
- ・ TC-9-e 鉄釉と灰釉の掛け分けで，櫛引の横線と数条の縦沈線を施す。

### ○10類—瓶

### ○11類—仏花器

### ○12類—油壺

### ○14類—蓋

- ・ TC-14-a 落とし蓋。 ・ TC-14-b 橋状のつまみを有するもの。

## 第V章 考察

- ・ TC-14-c 団子状のつまみを有するもの。 ・ TC-14-d つまみを有さないもの。
- ・ TC-14-e ぼたん状のつまみを有するもの。  
○15類一壺 ○18類一合子 ○19類一水滴 ○21類一植木鉢 ○22類一花生け ○23類一片口鉢  
○24類一喫煙具
- ・ TC-24-a 火入れ。 ・ TC-24-b 灰落とし。火入れより口径が小さく円筒形を呈している。  
○25類一鬢盥  
○26類一甕
- ・ TC-26-a 半胴甕。 ・ TC-26-b 柿釉の灰釉流しの甕。  
○27類一水注
- ・ TC-27-a 胴部がらつきょう形を呈する水注。 ・ TC-27-b 胴部が円筒形を呈する水注。  
○28類一搜瓶 ○29類一播鉢 ○30類一餌入 ○31類一火鉢 ○35類一小物 ○38類一手焙り  
○39類一おろし皿

### TD群

京都・信楽系陶器を本群とする。

- 1類一碗
- ・ TD-1-a 高台の断面がU字状に調整されている。
- ・ TD-1-b 高台径が小さく、体部は球形を呈している。
- ・ TD-1-c 高台径が大きく、やや腰の張るもの。
- ・ TD-1-d 小杉茶碗。 ・ TD-1-e 端反碗。口縁部緑釉、体部灰釉に掛け分けている。
- ・ TD-1-f 端反碗。内面白土に灰釉、白土と鉄絵の具で梅文が描かれる。
- ・ TD-1-g 灰釉の端反碗。細かい貫入が全体に黒く認められる。
- ・ TD-1-h 平碗。 ・ TD-1-i 半筒碗。 ・ TD-1-j 灰釉鉄絵の筒形碗。  
○2類一皿 ○5類一鉢 ○6類一小坏  
○9類一香炉
- ・ TD-9-a 型作りの香炉。 ・ TD-9-b 蛇ノ目高台の灰釉香炉。  
○10類一瓶 ○11類一仏花器 ○12類一油壺  
○13類一蓋物
- ・ TD-13-a 身が丸碗形を呈するもの。
- ・ TD-13-b 重箱様に重ねられるもの。底部外周に段が作られる。
- ・ TD-13-c 身が半筒形を呈するもの。  
○14類一蓋 ○15類一壺 ○18類一合子 ○19類一水滴 ○22類一花生け ○24類一喫煙具
- ・ TD-24-a 灰落とし。灰釉鉄絵で、円筒形を呈する。  
○25類一鬢盥 ○26類一甕 ○27類一水注 ○29類一播鉢  
○32類一柄杓 ○34類一土瓶 ○35類一小物

### TE群

備前系陶器を本群とする。

## 第二節 消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析

- 10類一 瓶      ○12類一 油壺      ○13類一 蓋物      ○14類一 蓋      ○15類一 壺  
○26類一 甕      ○29類一 播鉢      ○35類一 小物      ○37類一 薬研

### TF群

志戸呂系陶器を本群とする。

- 9類一 香炉      ○14類一 蓋      ○15類一 壺

### TG群

常滑系陶器を本群とする。

- 26類一 甕

### TH群

萩系陶器を本群とする。

- 1類一 碗

### TI群

萬古系陶器を本群とする。

- 16類一 急須      ○34類一 土瓶

### TJ群

相馬系陶器を本群とする。

- 34類一 土瓶

### TZ群

陶器のうち産地が不明なもの、または産地が限定できないものを本群とする。幕末になると各藩の産業振興の一貫のため地方窯が各地で生まれ、大窯業地との技術的な交流、工人の異動が行われたため窯業地ごとの製品の特徴が近似し、出土遺物からの産地同定が困難になる。調査によって各地の窯の様相が明らかになれば解決できる問題もあろうが、現段階においては不明として一括せざるを得なかった。

- 16類一 急須      ○20類一 蓮華

- 33類一 鍋

- ・ TZ-33-a 手付きの鍋。      ・ TZ-33-b 灰釉の行平鍋。      ・ TZ-33-c 鉄釉の行平鍋。
- ・ TZ-33-d 行平鍋。飛びカンナの縦方向の連続した刻みが入るもの。
- ・ TZ-33-e 行平鍋。内面に光沢のある透明釉が施される。

- 34類一 土瓶

- ・ TZ-34-a 銅緑釉土瓶。      ・ TZ-34-b 器面に白土の上より染付される土瓶。
- ・ TZ-34-c 山水土瓶。白土の上より鉄絵の具、緑釉で描く。      ・ TZ-34-d 糸目土瓶。
- ・ TZ-34-e 鉄釉土瓶。

## 3 遺構内出土遺物群の年代幅

遺構内出土の遺物群には年代的に集中するものと分散するものがあり、2号組石を例にするとJB-1-aや明末の舶載磁器等と共に幕末の製品が出土しており、その遺物群は2世紀もの年代幅を有し

## 第V章 考察

ている。遺物群の時期的な集中度の把握はその組成を考慮する際などに必要な手続きであると考えられる。ここでは底部点数が100点以上出土した遺構に限りV-2-02表を作成した。次項の時間的様相の把握において対象とした遺構は本分析で時期的に集中し、かつ量的に多いものを抽出した。

### 4 遺構内出土陶磁器の時間的様相

本地点から出土した遺物はそのほとんどが遺構内出土のものである。その廃棄形態は時間的には埋土全体に混入しているもの、特定の層に集中しているものに大別され、質的には碎片が主体を占めるもの、完形、半完形品が主体を占めるものに大別される。前者と後者各々の間において調査時の所見から大きな相関関係があることが認められている。即ち、完形、半完形品が主体を占める廃棄は日々の日常的な不要物の廃棄としては捉え難く、なんらかの要因（例えば火事、地震などの自然的要因。引越し、取り替え、使い捨て等の人為的要因が掲げられる）によって一時的に生じる行為として理解できるものである。さらにそれらの行動は遺跡のなかで無作為的に検出されるものではなく、それらが廃棄された遺構の性格に左右されるところが大きい。先述した通り出土遺物のほとんどが遺構内より出土しているが、それらの遺構は共通して地面を掘り凹めて構築したという特徴を持ち、不要物を廃棄するための格好の場所提供者といえる。これら芥溜として扱われた遺構は、元来その目的のために掘られた一義的なもの。全く別の用途のために構築された遺構が廃絶後に芥溜として扱われた二義的なものに大別される。前者の場合その廃棄形態には日常的なもの、一時的なものなど様々なケースが考えられるが、後者では出土量の多い場合に限っていえばその大半が一時的な廃棄として捉えることができると考えられる。

『大聖寺藩史』（大聖寺藩史編纂会 1938）によれば当藩邸において天和二年(1682)十二月二八日、元禄十六年(1703)十一月二九日、享保十五年(1730)一月十二日、元文三年(1738)一月二九日の4回に及ぶ火災の記事がみられる。検出された遺構中にはこれを裏付ける埋土に焼土を多量に含有する遺構が幾つかある。この焼土層は明らかに人為的な堆積を呈しており、その中に火災後の瓦礫等の一括廃棄を窺わせる二次火熱を受けた陶磁器を多量に含むものもある。こうした遺構は文献資料からおおよそその廃絶年代を割り出せ、また遺物面からも肥前製品等の編年観を兼ね合わせることによってその廃絶年代を絞り込むことが可能である。本地点ではL32-1がその典型的な例である。火災以外にも遺物の一括廃棄が様々な要因によって行なわれていることは先にも触れたが、その要因の規模が大きいほど個々の遺構内での遺物の器形的、または組成的まとまりの有効性が高くなると考えられる。

以上のことを踏まえながら、遺物の器形的、組成的変化を、可能なものに関しては遺構の推定廃絶年代を加味しつつ区分を試みた。その際、まとまりとしての有効性を高めるために、遺物総数に対して底部片数が100点以上出土している遺構のみを対象とした。100点とした判断基準は漠然としたものであり、客観的な有為性という点では問題があらうが、対象としたほとんどの遺構で遺物群の時間的な集中傾向が認められ、曖昧ながらも下限としての役割を果たしているといえよう(V-2-02表)。その結果、I期～IX期に区分することができた。以下、各期の様相について述べていくことにするが、それにあたって各々のなかでも量的、質的に良好な資料を用い、それを基に捉えて



第V章 考察

胎質・産地 種	JC								JY					TA					TB										
	2	3	4	5	6	8	10	14	16	18	19	20	24	34	35	2	4	2	5	1	1	2	2	3	4	5	9	10	14
II H32-5																													
L32-1																													
III F34-11																													
IV F30-1																													
V F33-3																													
L34-1																													
VI E22-1																													
Y34-4																													
AE34-3																													
AE35-3																													
AE39-1																													
VII H21-1																													
AI35-1																													
IX AL37-1																													

胎質・産地 種	TC															TC													
	15	23	28	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	3	3	3	4	4	5				
II H32-5																													
L32-1																													
III F34-11																													
IV K30-1																													
V F33-3																													
L34-1																													
VI E22-1																													
Y34-4																													
AE34-3																													
AE35-3																													
AE39-1																													
VII H21-1																													
AI35-1																													
IX AL37-1																													

V-2-01表 主要遺構出土遺物組成表(2)







## 第二節 消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析

いきたい (V-2-01 表)。

### I 期の様相

本期に位置付けられる遺構数は少なく、また出土遺物数も底部片数が 100 点以上の遺構は存在しないが、本期への位置付けが確実な遺構、遺物について若干触れておく。遺構としては「池」が位置付けられる。本編でも述べられているように多量のカワラケ、木製品を出土した遺構で、寛永六年(1629)銘の木簡が検出されている。それに対し、陶磁器は少量検出されたにすぎず、また小片がほとんどで明確に本期の特徴を捉えることができる遺物は TB-2-c とした唐津系の鉄絵皿を掲げるにとどまる。本製品は見込みに砂目痕が認められ、大橋氏によれば 1600~1630 年代の製品として位置付けられている (大橋 1984c)。また、播鉢の小片が若干のまとまりを見せて出土しているが、そのほとんどが信楽系のもので占められており瀬戸・美濃系のもは少量にすぎない。

その他に本期を反映する遺物は肥前系の磁器製品では JB-1-a, JB-1-b の初期伊万里といわれる生掛けの碗。JB-2-a の高台径の小さい皿がある。陶器皿では肥前系の溝縁皿で TB-2-b, 瀬戸・美濃系の TC-2-a 等が少量ながら出土している。

本期は遺構の検出状況、肥前製品の年代より 1650 年代頃を下限とする一群であるといえよう。

### II 期の様相

本期に位置付けられる遺構には、F27-1, G32-1, H29-1, H32-5, K23-1, L32-1, AE36-8, W46-1 などがある。L32-1 は先にも触れたようにほとんどの遺物が二次火熱を受け、焼土とともに地下式土坑に廃棄された例で、後に触れる遺物の年代からそれを天和二年(1682)の火災に結びつけることができる。その他の遺構でもやはり火災による二次火熱を受けた遺物が出土しており本期に属する遺構内一括資料は火災後の後始末によって廃棄されたものと考えられる。組成表では L32-1 と H32-5 を取り上げた。L32-1 は本編でも述べているように明の青花や肥前製の上手の磁器のセットなど遺物自体がかなり趣味的要素をもって収集されたもので雑器はほとんど含まれていない。それ故遺物群の様相を分析するためには不十分な面を含むと思われる、それを補正するために H32-5 を加えた。

磁器製品では碗、皿ともに長吉谷窯平行と考えられる JB-1-c, JB-2-c が圧倒的に多い。また碗に対し皿の量が非常に多いことも注目される。皿のなかでは少量だが JB-2-a も I 期に引き続き存在しているが、生産年代を考えれば本来 I 期を下限とする遺物であろう。型皿の JB-4-a は全期出土の 89% を占め、そのほとんどが本期に属している。小坏では口縁部が外反する JB-6-b が主体を占め、その他にはダンバギリ窯の製品と思われる多角形の JB-6-e も本期のみの特徴である。

陶器では肥前系と瀬戸・美濃系の製品が主体を占め、これに信楽系の播鉢、備前系の甕等が加わる。碗は肥前系の京焼風陶器 TB-1-a, TB-1-b, TB-1-c が主体を占める。皿は肥前系の TB-2-b, TB-2-c が姿を消し、TB-2-a が出現してくる。瀬戸・美濃系では TC-2-k, TC-2-l の菊皿が主体を占めているが、前期の TC-2-a も本期まではみられる。鉢は肥前系では TB-5-a, TB-5-b, TB-5-c, TB-5-d が出土しているが TB-5-a は本期にピークを持つものと思われる。瀬戸・美濃系では少量ではあるが TC-5-a がみられる。香炉は瀬戸・美濃系の鉄釉香炉 TC-9-b が多く、それについて肥前系の京焼風香炉 TB-9-b があるが、これは本期でしか見られない製品である。また少量ながらも瀬戸・美濃系の TC-9-d がみられる。播鉢では瀬戸・美濃系 TC-29 と信楽系 TD-29 が多く、

## 第V章 考察

全体の8割を占める。その他京焼系の壺 TD-15や、備前系の甕 TE-26が見られるが、TE-26はIII期に移ると急激に減少し本期に特徴付けることができる。

以上より本期は、主体を占める肥前磁器皿のほとんどがJB-2-cであること、ほとんどの遺物が火災によると思われる二次火熱を受けていることよりその下限を天和二年(1682)に位置付けたい。

### III期の様相

本期に位置付けられる遺構にはC28-1・2, F34-11, G30-2, 3号組石, 6号組石, AD37-1がある。組成表では遺物量の最も多いF34-11を取り上げた。

磁器碗では前期から引き続いてJB-1-cが見られるものの極少量で、大半はJB-1-dとなり磁器碗の87.4%を占める。皿もII期の特徴であったJB-2-cがみられ、それにJB-2-d, JB-2-eが加わる。碗と異なり三つの割合はほぼ同じであるが、JB-2-dは本期のみの特徴である。

陶器では肥前系の製品の増加が注目される。それらは陶器全体のなかで約半分を占めるに至っている。碗は肥前系の京焼風や刷毛目が大きく伸びている。数字だけを見ればTB-1-a, TB-1-bが著しく増加しているかに見えるが、組成率はほとんどII期から変化がなく京焼風の製品が主体を占めている傾向は続く。ただし本期に入り新たに陶胎染付が出現したことは、全体的には小さな数字であるが大きな特徴といえよう。京焼系の碗では前期から引き続きTD-1-hがあるが、本期に入り新しくTD-1-b, TD-1-cが出現してくる。TD-1-bがわずかしか含まれていないのに対し、TD-1-cは京焼系統の主体を占めているが、本類は生産体制の弱さゆえに肥前製品に模倣され(TB-1-b)市場を独占されていたもので、ここにきて突然本類が主体を占めても不思議ではない。むしろ京焼系の陶器生産量が本期より増加した結果として位置付けたい。皿では肥前系のTB-2-aが本期に入り大きく増加している。またIV期以降ではほとんど見られず、本期の特徴といってもさしつかえないだろう。瀬戸・美濃系の皿では小量ではあるがTC-2-eが本期より出現する。またTC-2-k, TC-2-l, TC-2-mは本期をもって下限と位置付けることができるだろう。鉢は碗と同様に肥前製品が主体を占める。内訳はII期においてほぼ同率を占めていたTB-5-aとTB-5-bが本期に入り組成変化が表れ、TB-5-bが約7割を占めるに至る増加をしている。逆にTB-5-aは1割に満たず、残りはこれもII期から大幅に増加したTB-5-cが占めている。またTB-5-bとTB-5-cはそのピークを本期に持ちIV期に入ると極端に減少する。特にTB-5-cに関しては皆無になり本期が下限と考えられる。その他の器種では瀬戸・美濃系の鬘盥 TC-25 が本期より出現する。これは製品の出現といった位置付けとともにTC-2-eなどと同様摺絵、御深井釉といった技法上の出現時期としても位置付けられる。播鉢はII期に比べ信楽系、備前系がやや減少し、瀬戸・美濃系が54%を占めている。

以上が個々に見た本期の様相であるがその特徴として8割強を占める肥前製品のなかで刷毛目、京焼風、三島手などの陶器の伸びが大きかったことがあげられる。陶器のみを例にとると、II期に40%であったものが本期に入ると54%まで伸びている。この伸びは碗、皿、鉢の飲食器によるものでその中でも碗の伸びは著しいものがある。それが本期におけるもう一つの特徴となっている。飲食器のなかで肥前製品の占める割合は95%と大きなものである。この数字自体はII期と変わらないものであるが、内容的には主体が皿から碗に移行しており、磁器全体のなかでII期では5%しか占めなかった碗がIII期に入って実に42%にも達している。これは口を付けるものとしての陶磁器が一

## 第二節 消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析

一般的に普及してきたことを物語っているものと考えられる。

本期の時期であるが碗のなかで JB-1-d を主体を占めること、この大量の一括廃棄は災害による可能性が強いが二次火熱を受けていないことより、元禄十六年(1703)十一月二三日に起こった地震による可能性が第一に考えられ、下限を元禄十六年に位置付けたい。

### IV期の様相

本期はIII期からV期への移行過程の1段階として位置付けられ期間的にも短く属する遺構も明確なものでは K30-1 のみである。組成表で取り上げた K30-1 も個体数が 232 と前後の時期と比較して少ないものであることを断っておかなければならない。そのような不安定な状況のなかでも確実にIII期からの変化として認識できるものを取り上げていく。

肥前製の磁器碗の主流はIII期と同じく JB-1-d であるが、JB-1-c が検出されなかったことにIII期との組成変化が窺える。一方磁器皿においてもIII期の特徴として位置付けられた JB-2-d や JB-2-c は姿を消し、JB-2-e のみの組成を呈している。

陶器碗は肥前系の主流だった京焼風碗 TB-1-a、TB-1-b が大きく減少し、刷毛目碗 TB-1-d、陶胎染付碗 TB-1-f が主体となる。この傾向は鉢にもみられ三島手の TB-5-b が主体となる。瀬戸・美濃系の碗は前期までほとんど見られなかったが、本期に入り TC-1-c の灰釉碗、TC-1-u の腰鍔碗が出現し、陶器碗のなかで30%を占めるに至っている。特に TC-1-c に関しては偶然性を考慮しながらも TB-1-a と器形が類似していることは、機能上の連関性として注目される。京焼系の碗はIII期の主流だった TD-1-c が減少を示している。これが異産地同器形である TB-1-b の減少につながったものと考えられる。播鉢はIII期よりもさらに瀬戸・美濃系の製品が増え60%に達した。

以上全体的には数少ない特徴ではあるが、肥前系の京焼風陶器、特に TB-1-b の大幅な減少と、その要因と考えられる京焼系 TD-1-c の減少、また呉器手 TB-1-a の大幅な減少と、瀬戸・美濃系の TC-1-c の出現があげられた。これらの現象は総じて食器に関しての瀬戸・美濃系、京焼系の二大生産地の生産体制確立が芽生え始めたことを物語っているものと考えられる。

### V期の様相

本期に位置付けられる遺構には D32-1、D33-1、E24-1、E28-1、E31-1、E34-1、E35-4、F33-3、G20-2、G22-1、G22-3、G26-1、I20-3、K34-1、L34-1、L34-2、1号組石、Z35-5、AD34-2、AD35-2、AE36-4 がある。組成表では遺物量の最も多い F33-3、それとはやや様相の異なる L34-1 を取り上げた。

磁器碗では JB-1-e、JB-1-f、JB-1-g が主体を占めているが、中でも JB-1-f が最も多い。JB-1-g は前段階よりわずかながら存在し、ここにきて増加するが次段階ではすでに減少し、磁器碗の中で占める率も 3%に満たない。こういった状況にも大名屋敷としての本地点の特徴を垣間見ることができる。皿は前期と同様 JB-2-e が主体を成しているが、新たに JB-2-g、JB-2-l、JB-2-m が加わる。これらは製品としては粗雑なものでやはり碗と同様に全体量は少ない。その他の製品では JB-10-c の御神酒徳利や JB-17 の紅皿が本期より出現した JB-11 の仏花器は18世紀代では本期以降見られない。陶器では、肥前系の碗はIV期の組成をそのまま引き継いでいるものの量的には大きく減少している。これらに変わり瀬戸・美濃系では TC-1-c、TC-1-u が引き続き増加、それに量的には多くはないが TC-1-f、TC-1-q が加わってくる。京焼系では TD-1-b、TD-1-h が一気に増加

## 第V章 考察

し、TD-1-i, TD-1-jが出現する。但し、全体的な増加傾向の中であってTD-1-cのみが前期に引き続いて減少している。前述したようにこれがTB-1-bの減少に影響を与えていると考えられるが、本期では両者の減少と対照的にTD-1-bの増加がある。即ち京焼系丸碗の形態が高台径が大きいものから小さいものへと変化した時期として捉えられるだろう。皿は全体の割合としては極少量である。瀬戸・美濃系ではIV期に引き続きTC-2-eがみられる。肥前系ではTB-2-aが見られるがIV期に比べ減少しており、また本期以降ではほとんど見られない。やはり本期をもってその下限としているのだろう。鉢では肥前系がIV期の組成を引き継ぐもののやはり減少傾向がみられる。資料にややばらつきがあるので断言はできないが本期か次のVI期を下限とするものと思われる。瀬戸・美濃系ではTC-5-cが出現する。その他の瀬戸・美濃系製品ではII期より継続して存在したTC-9-b, TC-9-dが、III期より継続して存在したTC-25が本期を下限とするものと思われる。逆に本期より出現したものにTC-23, TC-26-aがある。播鉢では信楽系が一気に減少し、本期以降わずかに見られるものの本期を一つの下限として捉えることができる。それに変わり備前系が激増し、瀬戸・美濃系と播鉢市場を二分する勢いを持つようになる。この傾向は本期以降も続き市場のシェア一位の座を獲得するにまで伸びていく。

以上器種別の本期の様相を述べてきたが磁器ではJB-1-fを主体とする磁器碗の器形変化、陶器では瀬戸・美濃系、京焼系の台頭と器形分化にみられる碗の多様化が大きな特徴としてあげられる。特に陶器に関してはIV期に芽生え始めた陶磁碗の定着、日常雑器に対する東海道圏二大生産地の大量生産体制の確立を裏付けるものであろう。またそれは量の変化とした碗以外についてもみられ、器種の変化、即ち多様化という形で顕れるものである。特に京焼系の製品に顕著で、本期に入り香炉、花生け、鬘盤、合子、火入れ、土瓶などを伴うようになる。尚、本期の時期はJB-1-e, JB-1-gの出現期としての位置付けより18世紀前半に位置付けられる。

### VI期の様相

本期に位置付けられる遺構はE22-1, Y34-4, Y36-2とV期と比べると格段に少ない。組成表ではE22-1, Y34-4と資料数の多い2遺構を対象にした。

磁器碗ではJB-1-fが主体を占める状況はV期より引き継がれているが、それに加えJB-1-h, JB-1-i, JB-1-j, JB-1-lが新たに伴うようになる。皿もほとんどV期の傾向を引き継いでいるがそれに加えJB-2-jが伴うようになる。一方JB-2-lは本期に下限を持つものと思われる。

陶器では肥前製品がほとんど姿を消し、TB-5-a, TB-23などの刷毛目のものが若干残っているにすぎない。碗は瀬戸・美濃系の製品でTC-1-g, TC-1-m, TC-1-p, TC-1-sを伴うようになるが、量的には少ないものである。そのうちTC-1-sは肥前系の刷毛目碗と相前後して出現しており興味深いものがある。また本期を下限とすると思われる製品にはTC-1-c, TC-1-f, TC-1-m, TC-1-p, TC-1-uがあるが、TC-1-c以外は量的に少なくVII期まで下がる可能性もある。京焼系の碗は本期でそのピークを迎え、陶器碗の約5割を占めるに至る。また本期は陶磁器碗全体に占める陶器の割合が6割と最も大きくなる時期でもある。京焼系のうちTD-1-b, TD-1-c, TD-1-h, TD-1-iは本期を下限とし、ピークに至ると同時に激しい減少を迎えることになる。しかしこれで京焼系が衰退するというのではなく、本期からTD-1-dが伴うようになり、今までとは全く異なった製品生

## 第二節 消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析

産を開始する一つの転換期として新たな様相を示すものと推定される。瀬戸・美濃系の製品でも本期を下限とすると考えられるものが多く皿では TC-2-e, 鉢では TC-5-c, 仏花器などがある。播鉢は瀬戸・美濃系の製品が本期をもってほとんど見られなくなるのに変わり、備前系の製品が主力となり特に本期では7割を越すに至っている。また本期ではその他の生産地の製品も見られるようになり、志戸呂系の香炉、蓋、常滑系の甕の他、産地不明の柿釉鍋 TZ-33-a, 鉄釉土瓶 TZ-34-e などがそれである。土瓶については鉄釉が施された本類が他の施釉土瓶よりも先出すると言われており(加藤編 1972:715)、それを追認するものである。

本期はこのように爛熟気味だった瀬戸・美濃系、京焼系の製品、特に碗であるが、それらが新しい流れを伴いながら淘汰されつつ、一方では今までは極限られた製品で、しかもわずかしか見られなかった地方窯の製品が増加する兆しを見せ、特に鍋、土瓶などの生産では既存の生産地に加え、各藩の殖産工業の一貫としての新たな生産地の参入が特徴付けられるものと考え。本期の時期は18世紀後半に位置付けることができるが、JB-1-mの出現前期ということより、その下限は70年代に置くことができよう。

### VII期の様相

本地区では18世紀後半以降幕末まで災害による大規模な遺物廃棄は見られない。そのため比較的長期間にわたる遺物の使用、もしくは廃棄が多くなり短期間の遺物組成を捉えようと試みると対象となる遺構数は激減する。その影響は本期に顕著にみられ底部片数100点以上の遺構はAE39-1のみである。組成表ではそれを補うためAE34-3, AE35-3の資料も取り上げた。

磁器碗は前期より引き続きJB-1-f, JB-1-g, JB-1-h, JB-1-i, JB-1-lが存在するが、それらに加えJB-1-mが出現する。これが本期の最も大きな特徴となっている。皿ではJB-2-e, JB-2-g, JB-2-jがありほとんど前期に見られた組成を踏襲している。

陶器では碗は瀬戸・美濃系のTC-1-g, TC-1-sが前期から引き続き存在し、新たに少量ではあるがTC-1-rが加わる。京焼系の碗は前期の動向が明確に定着し、ほとんどTD-1-dのみの組成になる。鉢では瀬戸・美濃系のTC-5-eが本期より出現する。その他の製品では瀬戸・美濃系では植木鉢TC-21, 灰落しTC-24-aが出現する。以上が本期の数少ない特徴であるが、本期の位置付けはJB-1-mの出現期とし、上限をそこに結びつけることができる。また下限に関しては次期に入って多量に出現するJB-1-nや瀬戸・美濃系の磁器製品が見られないことより、それらの出現前夜をもってそれとすることができる。

### VIII期の様相

本期に位置付けられる遺構はC26-1, F23-2, H21-1, H21-3, H21-8, I20-1, 2号組石, 7号組石, Z37-1, AJ33-1, AJ34-1, AJ34-2, AJ35-1, AJ37-2と多い。その中から量的にも時期的にもまとまったH21-1, AJ35-1を取り上げた。

磁器碗では前期より引き続きJB-1-f, JB-1-i, JB-1-j, JB-1-l, JB-1-mが存在する。さらに本期に入りJB-1-nが新たに出現する。皿では前期より引き続きJB-2-e, JB-2-g, JB-2-jが存在し、本期に入ってJB-2-iが新たに出現する。そのうちJB-2-jはIX期に入るとほとんど姿を消し、本期を下限とするものと考えられる。小皿ではJB-3-bが本期に入り出現する。量的には少ないがVII期より出現

## 第V章 考察

していた可能性が強い。その他本期を出現期とする製品にはJB-6-c, JB-7-a, JB-10-b がある。その反面Ⅶ期で消滅もしくは衰退し本期に存在しないものはJB-1-hしか見られず、器種組成の増加傾向が窺える。さらに磁器製品に関して大きな変化があげられる。それは瀬戸・美濃系の製品の市場加入である。この加入によって今まで本地区においては国産品の過半数を占めていた肥前製品の割合が大きく落ち込むことになる。個々の製品には碗のJC-1-c, JC-1-d, JC-1-eをはじめ、皿、小皿、小坏、御神酒徳利などがあるが、そのほとんどを肥前系の端反碗、広東碗と同器形の碗が占めている。

陶器碗は瀬戸・美濃系ではTC-1-q, TC-1-r などが見られるがその数は極わずかである。京焼系ではⅦ期に引き続きTD-1-dが存在し、本期に入りTD-1-gが出現する。また量的には少ないがTD-1-e, TD-1-f もみられる。皿では瀬戸・美濃系のTC-2-f, TC-2-g, TC-2-hが新たに出現するがTC-2-fはⅦ期から伴う可能性もある。またTC-2-f, TC-2-gはいずれも大皿で個人の膳にのるものとは性格が異なる。即ち、太白の製品を除くと陶器製の皿（個々の膳にのるもの）は遅くともⅦ期を下限としており、肥前磁器の普及や本期における瀬戸・美濃系磁器製品の生産開始の影響を強く受けた結果と考えられる。その他の製品としては陶器においても磁器と同様に器種の多様化が進み、瀬戸・美濃系のTC-5-d, TC-5-g, TC-26-bなどが新たに出現する。しかしいずれも生活用具、調理用具、貯蔵具などで飲食具は見られないことより、京焼系などの一部の製品を除きここに至りて磁器製品との競合から共存への立場を選択したうえでの陶器製品のテリトリーが確立してきたのかもしれない。またもう一つの流れとして地方窯の勃興がある。TJ-34といった生産地の特徴を有しているものもあるが、そのほとんどが組成表のなかでTZと一括して扱ったものである。それらのほとんどは鍋、土瓶などの調理用具で中にはⅥ期より存在したものもあるが、ここに至りてTZ-33-b, TZ-33-c, TZ-33-d, TZ-33-eの行平鍋、TZ-34-a, TZ-34-b, TZ-34-c, TZ-34-dの土瓶が器種、量ともに一気に増加するに至った。土瓶に至っては煎茶の流行が大きく影響している。行平鍋は元来塩を焼いたものといわれているが（加藤編 1972:980）それに従えば食卓塩の一般生活への普及ということが考えられるのだろうか。

以上をまとめると本期では生産地において1820年代を上限としているJB-1-nの出現。瀬戸・美濃における磁器生産の開始と普及。陶器の器種の多様化。地方窯の勃興が特徴付けられ、また消費地側として、本期出土遺物より寛政年間(1789-1800)頃から流行したとされる焼継ぎ（喜多村守貞 1853）がみられるという特徴がある。それらの遺物側からの要素と、廃藩に至るまで機能していた2号組石の下限年代という遺構側の要素から、前者を上限に後者を下限として本期を1820年代から幕末までに位置付けたい。

### IX期の様相

本期にはAL37-1が位置付けられる。

磁器碗は肥前系では前期から引き続きJB-1-e, JB-1-f, JB-1-g, JB-1-i, JB-1-m, JB-1-nなどがみられ、新たにJB-1-oが出現する。瀬戸・美濃系ではJC-1-d, JC-1-eが前期から引き続きみられ、新たにJC-1-a, JC-1-fが出現する。またJC-1-cはほとんど見られなくなる。肥前系の皿は前期から引き続きJB-2-e, JB-2-g, JB-2-iがみられる。瀬戸・美濃系では碗に見られた増加現象と相反して皿はほとんど見られない。その他の製品では肥前系のJB-16, JB-20, JB-21, 瀬戸・美

## 第二節 消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析

濃系のJC-3-a, JC-4, JC-5, JC-14, JC-16, JC-20などが新たにみられるようになる。この組成変化とともに本期の大きな特徴として量比的な変化がある。陶磁器碗のなかで常にその約5割を占めていた肥前系磁器製品が本期では35%まで減少し逆に瀬戸・美濃系磁器製品が31.5%とほぼ同率を占めるに至ったことである。これにはⅧ期より出現してきた瀬戸・美濃系磁器製品の生産体制の確立と、江戸（東京）市場に対する輸送の至便性といった理由によるものと考えられる。また本期の製品には技法的な特徴として絵付けに明治3年(1870)にドイツ人ワグネルによってもたらされた酸化コバルトを使用していることと、明治10年代から盛んになる型紙、銅版による絵付けが見られないことがあげられ、本期の時期を位置付けるための大きな要素となっている。

陶器ではTA-2, TA-5といったヨーロッパ諸窯の製品がみられる。国産品では瀬戸・美濃系のTC-2-g, TC-2-hといった皿, TC-5-d, TC-5-e, TC-21, TC-23, TC-26-a, TC-26-bといった生活用品。京焼系のTD-1-d, TD-1-gの小坏が前期から引き続いてみられる。また、地方窯(産地不明)の鍋や土瓶も前期と同様にみられるが、新たに萬古系の急須や土瓶がみられるようになった。以上のことより本期の上限は早く見積もっても廃藩期にあり、下限は明治10年代にあるものと考えられる。

### 5 産地組成における量的変化

本地点出土遺物の時期別の概要を述べてきたが、その際代表資料として扱ったV-2-01表を生産地別にグラフ化したものがV-2-03表である。

Ⅱ期ではL32-1を資料として含むこともあって肥前系磁器製品が80.2%と圧倒的に多い。それに続き肥前系陶器が7.9%、瀬戸・美濃系陶器が6.8%を占める。京焼系陶器、備前系陶器は各々2.4%、2.6%とわずかしら認められない。さらに肥前系製品全体をもってすれば88.1%にも達し、ほとんどを占めている様相が浮かび上がる。確かに先程より触れているようにこの値にはL32-1が影響を及ぼしていることは曲げようのない事実であるが、H32-5においても79.5%と肥前系製品が大きな割合を占めていることが窺え、本地点においてはこの傾向がほぼ一般的なものとして理解される。

Ⅲ期では肥前系磁器の組成率が63%と低下、Ⅱ期と比較して約2割の減少を示している。それに反し、肥前系陶器は19.7%と2倍以上の伸びを見せているが、全体としては82.7%とやや減少している。但しH32-5と比較した場合はほぼ同様の組成比として捉えられることより、肥前系製品全体の組成比としては本期において際立った変化が見られないものと位置付けて差支えないと考える。また本期では瀬戸・美濃系陶器が9.3%、京焼系陶器が5.7%と僅かながらではあるが伸びている。産地組成とは別の観点ではあるが、それに肥前系陶器などを加えると全体の37%を陶器が占めることになりⅡ期の2倍弱の伸び率を示している。この陶器の中心となるのは碗類の増加によるところが大きい。詳細は次節に譲ることにする。この増加傾向はⅧ期に入って瀬戸・美濃系磁器製品の出現を見るまで続く。

Ⅳ期では肥前系磁器は55.5%になる。肥前系陶器も17%とⅢ期の組成よりもわずかに減少している。数字上は-2.7%と小さくも見えるがⅡ期からⅢ期にかけて約10%の増加があったことを考えれば、組成率減少への大きな転換期として位置付けも可能である。それに対し瀬戸・美濃系陶器、京焼系陶器は各々16.6%、9.6%と確実に前代からの組成率の増加を示している。



## 第V章 考察

V期では磁器出土量の多かった F33-3を反映してか肥前系磁器は62.9%と戻している。肥前系陶器はここにきて急激に減少し僅か5.9%の組成となる。これは他の二大生産地、即ち瀬戸・美濃系、京焼系の増加によるもので各々20.6%、8.3%を示している。京焼系はIV期に対し-1.3%を示しているが、これは先に触れた F33-3の影響が強いため、L34-1においては14.4%の値を示しIV期に対して増加する傾向がつかめる。これは本期の他の遺構(D33-1, AD35-2など)にもみられ、本期の本来的な様相を強く映し出している可能性が高い。

VI期では、肥前系磁器はさらに減少を続け45.3%と5割を割るまでに至った。肥前系陶器も2.2%にまで落ち込み両者をあわせても5割に満たない。これに対し、瀬戸・美濃系、京焼系は増加を続け各々28.2%、15.4%と双方で5割に迫る勢いを示している。これに加え播磨を中心とした備前系陶器が4.3%に増加したこと、前代までは皆無に近かったその他の生産地(地方窯)の製品が4.5%を占めたことも肥前系製品の組成率減少の原因として取り上げられる。

VII期ではVI期の様相をほぼそのまま受け継ぎ大きな変化は見られないが、地方窯の製品は着実に伸び7.3%に達している。

VIII期に入り肥前系磁器の組成は46.1%とほとんど変化は見られないが、本期に入り瀬戸・美濃系の磁器生産が開始され一気に17.5%を占めるに至った。この影響を受けて瀬戸・美濃系陶器は15.9%にまで減少した。さらには京焼系陶器も8.8%に減少しVI, VII期と続いた陶器主体傾向にピリオドを打つことになり、III~V期における両者のバランスに結果的に戻る形になった。また数字にこそ変化は見られないが、今まで磁器市場を独占していた肥前系がその27.5%を瀬戸・美濃系に譲ったことは今後の江戸(東京)市場における肥前系製品のシェアに変化をもたらす発端になった。

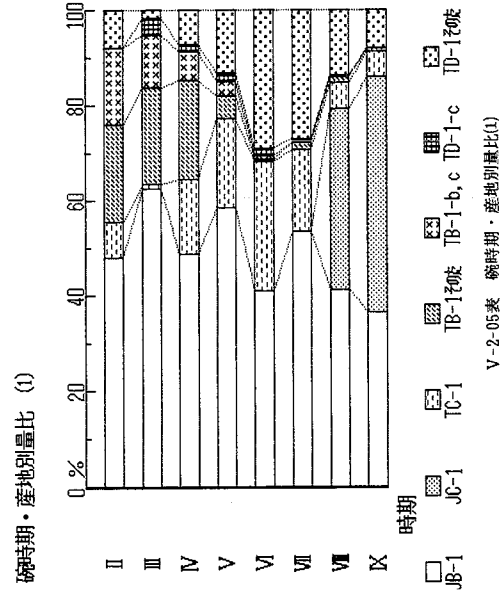
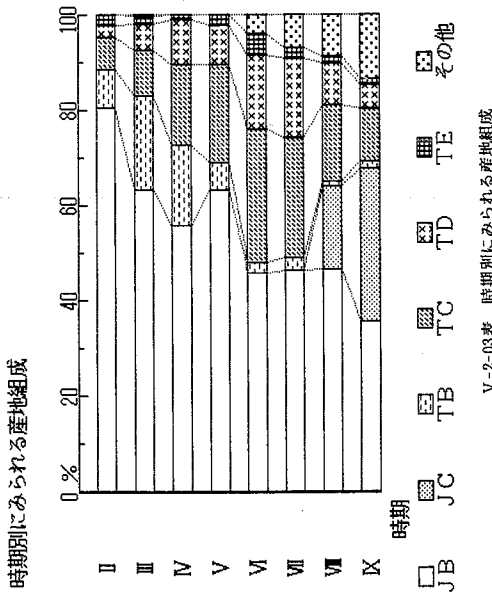
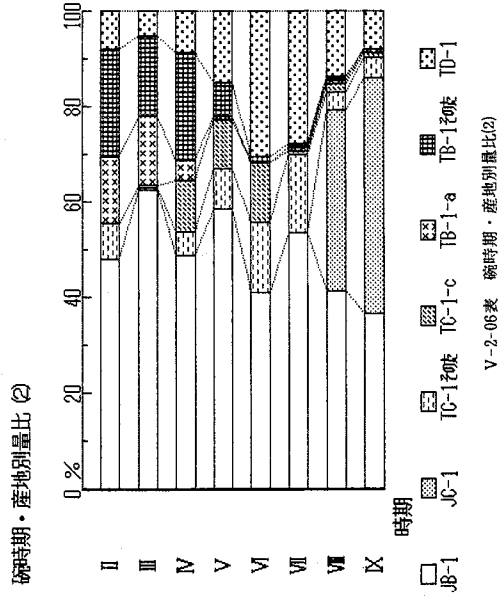
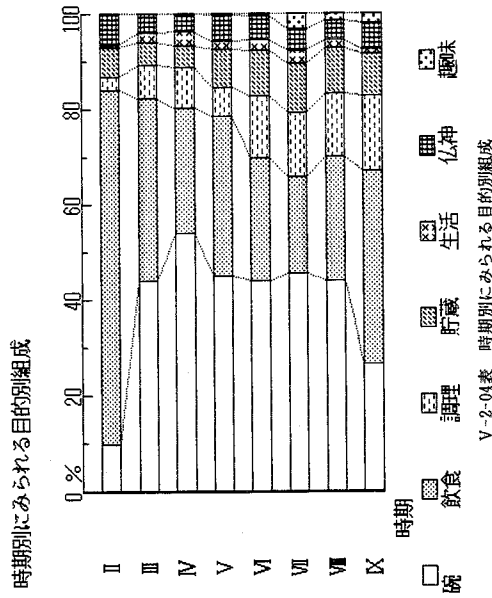
IX期では磁器製品全体では67.4%と若干の伸びを見せるものの、肥前系磁器はさらに35.1%にまで減少し、瀬戸・美濃系磁器とほとんど市場を二分するに至るまで落ち込んだ。陶器では瀬戸・美濃系が11.0%と辛うじて1割をこえる値を示したが、京焼系は5.2%とほぼ半減している。こうした主要陶器生産地の動向を横目に地方窯の製品が実に13.8%と瀬戸・美濃系を抜き陶器市場の一位の座を獲得するに至った。

以上本地点における産地組成の変遷について述べてきたが、その中でIII~VI期における瀬戸・美濃系、京焼系陶器の増加、VIII, IX期における瀬戸・美濃系磁器の出現と瀬戸・美濃、京焼系陶器の減少といった大きな流れが認められた。次に碗を例にとってこれらの要因を掘り下げてみたい。

### 6 碗にみる生産地の動向

V-2-04表は本地点から検出された陶磁器を目的別に分類したものである。当然ながら現時点でその用途について不明なもの、曖昧なものは除外した。圧倒的に食に関する製品が多いことが認められ、飲食、調理を合わせると常に8割以上を占めていることがわかる。飲食具の割合が時期を追うに従って減少しているが、これは当然ながら相対的な数字であり、それだけ陶磁器が多器種になってきたことを裏付けるものである。碗はその飲食具のなかで中心的な存在を占めている。II, IX期こそ低い値を有するもののそれ以外の時期においては飲食具の過半数を、陶磁器全体に対しても4割強を占めており、生産地の動向を探るための良好なサンプルの一つとして位置付けることができ

第二節 消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析



## 第V章 考察

る。生産地の中には備前系、志戸呂系、常滑系などといった特定の器種のみを生産する地域もあり偏差性が憂慮されるが、V-2-03 表に顕れた通り少数資料にすぎず、肥前系、瀬戸・美濃系、京焼系の三大生産地の資料のみでも本地点における陶磁器の動向を分析するのに十分なものであると考える。

先述した様にII期とIX期では碗の割合が少ない。II期では飲食具の割合はIII期とほぼ同様だが碗のみが少ない。実はこの飲食具のほとんどは皿が占めている。L32-1の様な極端に皿の多い遺構が数字を上げてはいるものの、他の遺構においても皿の数が碗を上回っているのは事実である。碗と皿の量的な関係は各々の機能に要因があると思われる。皿が食物を置くための道具であるのに対し、碗は食物を入れるための道具であり、さらにはそれを口まで運ぶための道具でもある。本期の数少ない碗の産地別組成をみると肥前系の製品が8割を超えている(陶磁器合わせて)。さらにここに属する肥前系陶器の主体となっている製品が京焼風陶器である。即ち、京焼系陶器を模倣したものであり、器形、機能的に一致するという視点からそれを含めると9割を超える値を示す。結果的に瀬戸・美濃系を除いた生産地となったが、それらの製品に共通していえることは薄手で且つ器面が滑らかであることである。これは持ち上げる機会や、口を付ける機会の多い碗の機能面にとってたいへん重要な要素であることは言うまでもない。ところが磁器や、京焼風の碗が出現するまではそれを充たす陶器はなく、木碗が利用されていたと考えられる。そのため本期は木碗から陶磁器碗へと移行しつつある時期にあたり、III期以降の各期よりも極端に碗の割合が少なくなっていると考えられる。IX期についてはV-2-04 表より飲食具全体としては前代と同様の割合を示していることより飲食具内での組成変化、即ち碗以外の製品の量的増加によるものである。それには様々な要因が考えられる。1遺構のみの資料によるもので組成的に偏りがある可能性、近代における食生活の変化、住人の変化などであるが断定はできない。このようにその時々状況によって陶磁器全体の中で占める割合に変化があることを念頭に起きつつ、碗の動向についてその生産地における推移を中心に論を進めたい。

肥前系磁器碗の全時期を通しての平均組成率は48.5%にありII期からVII期までは増減を繰り返しながらも平均値を中心としたものであるが、VIII、IX期は平均を下回り、且つ緩やかな減少傾向を示している。これは何度も繰り返すようであるが瀬戸・美濃系磁器の出現によるところが大きい。瀬戸・美濃系磁器碗は出現期であるVIII期においてすでに38.0%を占めている。同期の肥前系磁器碗の組成比が40.9%であることを考えても、市場のなかで圧倒的な強さを持っていたことがうなづけよう。この根底には磁器そのものの一般への普及(これは器種の増加という点からも理解できる)といった時代背景のもと、江戸市場に対しては肥前系の生産地よりも圧倒的に有利といえる地理的条件(輸送日数の差、市場価格にもつながる輸送費の差)が重なったことがこのような大きな躍進につながったものと考えられる。そしてさらにIX期に入るとこの差は顕著になり肥前系磁器碗の組成比が36.1%と減少を続けているのに対し、瀬戸・美濃系磁器碗は49.6%と大きくシェアをのばし、碗類のほぼ半分を担うまでになっている。また磁器全体の様相としては肥前系が35.1%、瀬戸・美濃系が32.3%と僅かながらも肥前系が多かったことから瀬戸・美濃系磁器製品のなかで碗がその主要を占めている様相を窺い知ることができる。

一方陶器碗にはふたつの流れがみられる。17~18世紀にかけて隆盛した肥前系陶器碗がV期を境

## 第二節 消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析

に急激に衰退することが一つ、それに対しIV、V期から増加傾向を示す瀬戸・美濃系、京焼系の陶磁器の動きがもう一つである。これらの流れが持つ意味を理解するために視点を生産地から個別の器種のレベルにまで掘り下げてみた（V-2-05, 06表）。V-2-05表は肥前系陶磁器と京焼系陶磁器との関連に視点を合わせたものである。II期からIV期にかけての肥前系陶磁器を構成している器種にはTB-1-a, TB-1-b, TB-1-c, TB-1-d, TB-1-fが認められるが、呉器手を含む京焼風陶磁器がその主体をなしている。その中で13.1%を占めるTB-1-bの高台裏には「清水」などの刻印が押されたものも多く、明らかにその原点には京焼系の碗がありそれを模倣したものといえる。言うなれば「偽物」の製品が、しかも肥前と京という地理的にも不利な条件のなかでII, III期の陶磁器のなかで大きな割合を占めていることは、京焼系製品の生産、供給体制が確立していなかったことにその第一の原因を求めることができる。また、京焼系陶磁器がII期では8.4%とほとんど認められないことがそれを裏付けている。特に肥前の代表的京焼風陶磁器として取り上げたTB-1-bに対応する京焼系のTD-1-cは皆無である。このTD-1-cはIII期に入ると3.4%と僅かながら存在するようになり、京焼系の生産、供給量の増加を窺わせるものである。それに対応するかのよう肥前系の京焼風陶磁器TB-1-b, TB-1-cは本期に入り10.9%と減少している。そしてIV期、V期と時期が下るに従って5.8%、3.0%と着実に減少している様子が認められる。ところがIII期に見られた様相から肥前系の減少に対応して増加すると見られたTD-1-cが、肥前系同様減少傾向を示しIV、V期で1.7%と極端に低い値を示す結果となった。但し、この減少傾向はTD-1-cにのみ見られるもので京焼系全体の流れはIII期で5.6%、IV期で9.2%、V期で15.4%と増加しており、肥前系京焼風陶磁器の減少原因が京焼系陶磁器の生産、供給量の増加に起因していることがわかる。京焼系陶磁器の増加の第一原因としてTD-1-bの激増によるところが大きいと考えられる。即ち、生産、供給量の増加といった大きな波のなかで、高台径の大きい碗(TD-1-c)から小さい碗(TD-1-b)への器形変化といううねりが同時に生じていたものと考えられ、そのうねりに従った結果がTD-1-cの減少という形として顕れたものである。この京焼における二つの動向が肥前系京焼風陶磁器に大きな影響を与え、それを減少に導いていったものである。

肥前系陶磁器の減少に対応して増加傾向を示したのものにもう一つ瀬戸・美濃系陶磁器がある（V-2-06表）。18世紀に入り、実に多種にわたる碗生産を開始するが、本地点においてその増加傾向が著しく量的にもまとまっているものにTC-1-Cがある。これも肥前系陶磁器が減少するIV期に10.8%といったまとまった量をもって出現しているといった特徴を有す。他の陶磁器よりも確実に一回り以上大振の碗でその器形には独自の機能を大きく反映していると思われる。一般に機能は器形に優先するものであり、試行錯誤を繰り返すことによって最も理想的な器形へと移っていくものである（木村 1971）。それに従えば突如として出現したこの碗もその源流をたどることができる。その一つと考えられるものにTB-1-aがある。京焼系陶磁器のように酷似した製品でもなく、また釉調も器面の質感も程遠いものがある。しかし器形、法量といった視点から見ればこれほど似た製品は他にない。そこでこれらの碗に視点を置いたグラフがV-2-06表である。TB-1-aはII期で14.0%、III期で14.6%と碗のなかでしめる率はほぼ一定している。それがTC-1-cの激増期であるIV期に入ると4.2%と急激に落ち込み、V期に至っては0.8%と皆無に近い状態を示す。これに対し、TC-1-cはIII

## 第V章 考察

期では0.3%であったのがIV期で10.8%、V期では10.4%、VI期では12.5%とIV期以降は安定した需要を見せている。これは先に取り上げた京焼系製品との間で見せた傾向と同じであり相関関係にあるものと考えられる。京焼風陶器碗と京焼系陶器碗、TB-1-aとTC-1-cこれらの増加、減少のなかに共に共通するもう一つの要素がある。

一つの例として京焼系のTD-1-cを模倣したTB-1-bはその出土点数が物語っているように市場を捉え、消費者のニーズにうまく適応した成功商品として位置付けることができる。その商戦術に従えば、京焼系においてTD-1-bが出現したことに対応して、再度模倣品を生産することも考えられたはずである。ところがそれが見られなかった理由として肥前での陶器生産事情、京焼系の供給量の増加、地理的優位性による低価格販売など様々要因が想像される。このような生産地側の要因に対し消費地側の要因を見逃してはならない。

II期における京焼風陶器碗の組成率は15.9%であった。III期に入り10.9%と減少するが、これに京焼系陶器碗の組成率5.6%を加えると16.5%とII期の組成率に対しほとんど変化がないといつてよい。この傾向は肥前系京焼風陶器の下限として押さえられるV期まで続き、IV期では肥前系5.8%、京焼系9.2%の合わせて15.0%、V期では肥前系3.0%、京焼系15.4%の合わせて18.4%となり、これらの平均値は16.5%を示す。この数字は消費者側からみた京焼系（風）陶器碗の需要を表わしており、想像の域をでないが碗類の組合せの中で6点に1点は京焼（風）陶器碗を有していたことを示すものである。これと同様のことがTB-1-aとTC-1-cの間にもいえる。II期におけるTB-1-aの組成率は14.0%であった。III期に入っても14.6%とほとんど変化は見られない。TC-1-cは0.3%のみでこれを加えても14.9%と安定している。IV期に入ると4.2%と激減する。それに対しTC-1-cは10.8%と激増するが、両者の合計は15.0%とやはり安定している。同様にV期ではTB-1-a0.7%、TC-1-c10.4%の合わせて11.1%、VI期ではTB-1-a0%、TC-1-c12.5%の合わせて12.5%となり、平均値は13.5%を示し、やはり京焼系（風）陶器碗と同様に消費者側の需要値にはほとんど変化がないことが読み取れる。

使用する側としては生産地にこだわりを見せる傾向はなく、安定した供給のもと低価格の商品を選択し、そのために乱立する製品の中から自然淘汰されていく傾向が把握された。そこには消費側の需要値が大きく作用し、低価格などの優位性を持った製品の供給体制が需要値を充たしていればその製品の独占的市場となるであろうし、逆に充たしていなければ複数の生産地の進出を見ることになるであろう。これは産地同定が困難で数量的な資料を提示することが不可能な19世紀の土瓶、鍋などにその例を見ることができる。

消費地遺跡における遺物の扱い方として、胎質による組成変化、産地による組成変化など比較的生産者側の要素が消費地においてどのように反映されているかといったテーマに視点が置かれていることが多かった。消費地において資料が増加した現在、そこに居住した人間の側に立ち何をどれだけ必要としたかという視点からの遺物研究も生活様式を考えるうえで必要なことである。

### 7 器種別における年代的変遷

器種個々の年代観は窯業地での調査によって今後解明されると考えられるが、窯業地ごとの性格

第二節 消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX
TD-1-a				?					
b									
c									
d									
e									
f									
g									
h									
i									
j									

V-2-09表 京焼系陶磁器種変遷

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX
TC-1-a									
b									
c									
d									
e									
f									
g									
h									
i									
j									
k									
l									
m									
n									
o									
p									
q									
r									
s									
t									
u									
v									
w									
x									
y									

V-2-10表 瀬戸・美濃系陶磁器種変遷

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX
JB-1-a									
b									
c									
d									
e									
f									
g									
h									
i									
j									
k									
l									
m									
n									
o									
p									
q									

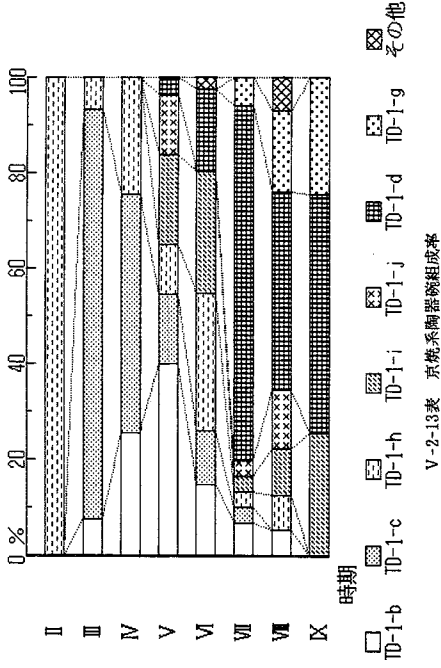
V-2-07表 肥前系磁器種変遷

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX
JB-2-a									
b									
c									
d									
e									
g									
h									
i									
j									
k									
l									
m									
n									

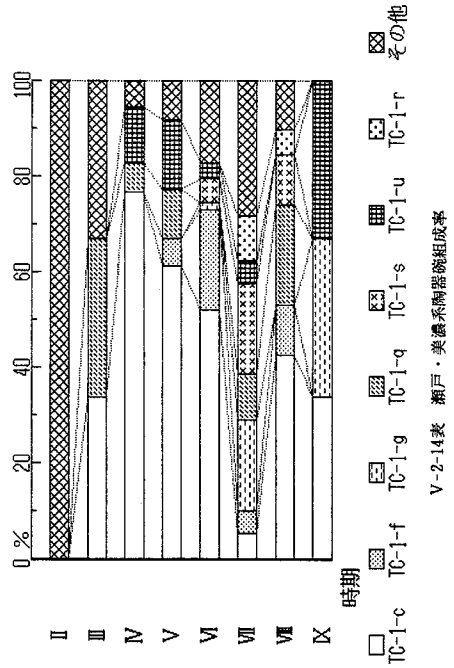
V-2-08表 肥前系磁器皿器種変遷

第V章 考察

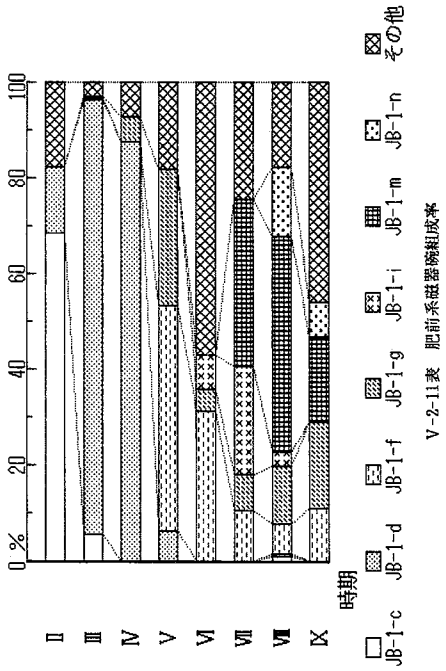
京焼系陶器碗組成率



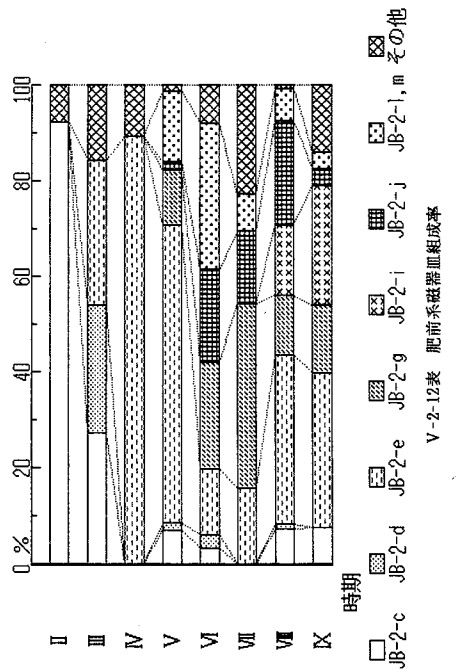
瀬戸・美濃系陶器碗組成率



肥前系磁器皿組成率



肥前系磁器皿組成率



## 第二節 消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析

や同時期における製品の割合は消費遺跡の成果より明らかにしなくてはならない問題であろう。ここでは器種別様相として、遺跡出土の陶磁器のうち大きく変化が認められる器種について取り上げその小器種の消長、技法、文様などの変遷を明らかにしようとするものである。本地点中からは各期ごとに異なる器種組成が認められ、江戸の大名屋敷の好事例としてとらえられよう。

### JB-1類 (V-2-07, 11表)

肥前系磁器は窯元における大橋康二氏の一連の調査、研究によって次第に明らかにされつつあり特に17世紀、18世紀末から19世紀にかけてはかなり詳細な部分まで解明されている。窯からも、また消費遺跡からも碗は最も出土量が多く、比較的諸変遷がつかみ易い器種であるという点で皿と共に年代比定のメルクマールとなろう。I期は所謂初期伊万里の碗(JB-1-a)と高台無釉の碗(JB-1-b)とで構成され、量的にはJB-1-aが多く認められる。II期になると高台断面三角の碗(JB-1-c)になり前代見られたJB-1-a, bはほとんど見られなくなる。III期には碗が激増し器種もJB-1-dに変化する。絵付けにコンニャク判、型紙摺りが現われるのもこの時期である。このIII期から肥前系磁器碗の占める比率が大きくなり、大聖寺藩において供膳具の中心となると考えられる。IV期にはいと新たに内山系の二度焼きの碗や所謂くらわんか碗(JB-1-e, g)が現われるが量的には少なく、引き続きJB-1-dが碗の主力である。V期にはJB-1-e, f, gがJB-1-dが変わって認められるが、同じV期でもやや古い時期にはJB-1-gが多いのに対し、新しい時期には薄手碗(JB-1-f)が過半を占める。これらは江戸においても大名屋敷という性格が大きく反映していると考えられ、町屋、商家などは異なる様相を示すと推定される。V期から五弁花、二重角枠内渦福等が一般化してくる。VI期は前代からの器種は残るが、新たに腰張り碗、小広東碗、小丸碗、筒形碗(JB-1-h, i, j, l)が出現する。VII期にはV期の主力的な碗がほとんど見られなくなり、前代に現れたJB-1-h, i, j, lの他に広東碗(JB-1-m)が認められる。そういう意味でVI期はV期とVII期の過渡的な時期として捉えられる。VIII期になると端反碗、湯呑碗(JB-1-n, o)などが現われるが、瀬戸・美濃が磁器生産を開始し、肥前磁器の相対的比率は低下する。VIII期は前代からの広東碗(JB-1-m)が多い遺構と端反碗(JB-1-n)が多い遺構とがあり、若干の時期差が考えられる。V期からの五弁花は姿を消す。IX期ではAL37-1の遺物群に年代幅があり良好な資料とは言えないが、コバルトを顔料とした染付はJB-1-n, oに多い事から、それらが主体的であったと考えられる。

### JB-2類 (V-2-08, 12表)

肥前系磁器皿はI期には所謂初期伊万里の皿(JB-2-a)のみで構成され、量的には碗より多い。II期は他の器種に比べ皿が占める割合が多く、いずれも上質なもので、本地点の特殊性が窺える。前代のJB-2-aは若干残るものの長吉谷窯、柿右衛門窯等で認められる断面三角を呈する皿(JB-2-c)が大部分を占める。これらの皿は前代に比して高台径が広がり、高台裏にはハリ支えがされている。銘は角福が多いが、○に「誉」、「宣徳年製」など多種認められる。JB-2-cの他には蛇ノ目釉剥ぎのうち底部無釉の皿(JB-2-k)もII期からIII期にかけて若干認められる。III期になるとJB-2-cの他にJB-2-d, eが現われ、ほぼ同じ比率を示している。この南川原窯ノ辻窯などで生産されていた高級磁器(JB-2-d)はIII期～V期に出土している。銘は角福が無くなり、二重角枠内渦福が現われる。IV期からV期の前半には内山系のJB-2-eが主体的であるが、V期の後半からVI期にかけて磁器の高



## 第V章 考 察

級品の減少、京焼の増加が高級品の指向が変化した事を窺わせる。V期に出現するものとして、前半では厚手の皿(JB-2-g)と蛇ノ目釉剥ぎの皿(JB-2-l, m)、後半では蛇ノ目凹形高台のうち高台が低い皿(JB-2-j)などがあげられるが、これらはいずれも雑器である。VI期はV期の後半とほぼ同様の器種組成であるが、VII期になると前代までのJB-2-l, mは少なくなり、JB-2-g, jが主体的になる。VIII期には蛇ノ目凹形高台のうち高台が高い皿(JB-2-i)が現われ、JB-2-jから生産の中心が移行すると考えられる。VIII期でも新しい様相を示す中央診療棟地点のH21-1, 2等ではほぼJB-2-iのみで構成される。絵付けは清朝磁器の影響と考えられる細線描きがこの時期に認められる。IX期では混入物が多く不明瞭であるが、コバルトを顔料とした染付にはJB-2-e, JB-2-iがありその中心となっている。型紙摺り、銅版絵付は認められない。

### TC-1類 (V-2-10, 14表)

瀬戸・美濃の陶器碗は全体的な量は少なく、量的な変化が追えるのはやや腰の張った灰釉碗(TC-1-c)のみであるが、全時期にわたり出土しており出現の時期などの推定を行なう事が出来る。I期からIII期までは肥前系の製品が圧倒的に多く、瀬戸・美濃の製品は遺物量が少ないため明確な様相の把握には至らなかったが、天目茶碗(TC-1-a)が認められる他に底部無釉の灰釉碗が散見される程度である。II期においてもI期とほぼ同様の様相を示す。III期に入っても量的な増加は認められないが、新たにTC-1-c, qが出現する。このTC-1-c(大振りの灰釉碗)はIII期に出現し、安定した生産に入るのはIV期以降、VI期までと見られるが、年代の推移によって施釉法に違いが認められる。III期のF34-11からは1点しか出土していないが底部は施釉後に拭き取られている。IV期のK30-1では施釉、もしくは施釉後拭き取られているものが9点、無釉のものが2点認められている。V期になるとF33-3とL34-1で施釉、もしくは施釉後拭き取られているものが8点、無釉のものが31点認められており、関係が逆転している。VI期にはE22-1とY34-4とで施釉、もしくは施釉後拭き取られているものが3点、無釉のものが21点認められている。このことからIV期を境に底部施釉から底部無釉に変換されると考えられる。また、高台径もV, VI期には小さくなる傾向が認められる。IV期にはTC-1-cの他に腰鑄碗(TC-1-u)が出現し、瀬戸で腰鑄碗が出現する第5小期の年代観と矛盾していない。V期に入ると瀬戸・美濃産の製品が比較的多く認められる様になり、器種も新たに御室碗(TC-1-d)、せんじ(TC-1-l)、拳骨茶碗(TC-1-p)などが増える。VI期には柳茶碗(TC-1-g)、京焼を模した丸碗(TC-1-m)、刷毛目碗(TC-1-s)等が認められるようになる。VII期には今まで認められたTC-1-aが本期を境に認められなくなり、TC-1-cも激減する。新たに認められる器種は鎧茶碗(TC-1-r)である。VIII期以降遺物数が減少するため様相は捉え難い。

本地点での様相と瀬戸での編年観とを比較すると以下の様になる。天目茶碗は第1小期から18世紀末と推定される第8小期まで認められるが本地点ではVII期まで出土している。御室碗は瀬戸では第5～7小期(18世紀初頭から後半)に認められるが本地点ではV, VI期に見られる。腰鑄碗は瀬戸では第5～11小期(18世紀初頭から19世紀)にかけて見られるが、本地点では下限は掴めなかったもののIV期以降に認められる。鎧茶碗は瀬戸では第8～10小期(18世紀末-19世紀第II四半期)に見られ、本地点ではVII期とVIII期に認められる。せんじは瀬戸で第7小期以降認められるが本地点ではV期が初現である。簡単に主要器種を一瞥したが天目茶碗、御室碗、腰鑄碗、鎧茶碗に関して

## 第二節 消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析

は本地点のでかたとほぼ矛盾はない。せんじは本地点が早く認められ、若干の時期差を有する。

### TD-1類 (V-2-09, 13表)

京都・信楽系の碗は比較的出土量が多く、器種の消長などは追いやすい。本地点ではI期からII期にはほとんど認められず、僅かに呉器茶碗風のもの、平碗(TD-1-h)等が散見される程度である。III期になると高台径が大きいタイプの丸碗(TD-1-c)が多く認められる。器面には呉須、鉄絵の具で文様が施されているものが多く、「清水」、楕円内に「清閑寺」や「粟田口」の刻印を有する碗も認められる。IV期は量が少なく判然としないが、V期になると高台径が小さい半球形を呈する丸碗(TD-1-b)の増加が著しい。これは色絵で上絵付けされている例が多く、銘はほとんど認められない。またV期は新たに小杉茶碗(TD-1-d)、半筒碗(TD-1-i)が認められる様になる。これで小杉茶碗の上限は18世紀前半代に遡る事が成果としてあげられる。V期はF33-3とL34-1とでは出土遺物群の様相が若干異なり、より新しい様相と考えられるL34-1では全器種を含めた京焼の比率が飛躍的にあがる。V期後半からVI期にかけて肥前磁器の雑器が増加すると反して本群の出土量が最も多く、高級品の指向が変化した事を窺わせる。VI期もV期の新しい時期とほぼ同じ様相を示すが、VII期になると本群全体の量が少なくなり、碗でもTD-1-a, b, h, iなどは減少する。TD-1-dが多く認められ、新たに認められる端反碗(TD-1-g)と共にVIII期以降を構成すると考えられる。

## 8 成果と展望

以上分析資料を基に出土陶磁器類の時間的様相、組成、器種別の変遷について本地点のあり方及びそれについて断片的ではあるが若干の考察を加えてみた。近世の消費遺跡からは陶磁器に限らず膨大な量の遺物が検出され、報告の際の資料提示においてはとても全点を図化することは不可能である。陶磁器類を例に取れば近世特に18世紀以降は需要の増大とともに製品の大量生産化が計られており、各地に同様の器種が認められる。報告では多く図化することも必要であろうが、それら器種としての共通の認識を確立させた上での数量提示が、器種の流通、初現、器種組成、産地組成についての議論を行う際にはより重要であろうと考えられる。

従来の消費遺跡における陶磁器の分類は産地、器種にたいして大別的傾向のもとに行われてきたものが多いようである。これには生産地における器種細分が反映されていない場合がほとんどで、約100年を一つの周期とした大きな流れのなかで産地組成をもとにした陶磁器の流通について分析するにとどまっていた。近年の近世遺跡調査の増加によって資料がある程度整ってきた今日、今までの大別的な分析に細別的な分析を加える段階に達してきていると思われる。本稿では生産地の細分を基にした独自の細分を設定し、集計、分析した結果、時間的にも組成的にも大きな特徴が表われたことはすでに述べた。こうした細分、分析を行うことによって生産地との活発な情報交換が可能になるとともに、調査した遺跡の性格(身分差はもとより各々の貧富の差に至るまで)、そこで生活を営んだ人々の生活様式など遺跡を再構成するための不可欠な資料として日常生活のなかで中心的な位置を占める陶磁器の持つ意味は大きなものとなる。

### 第三節 医学部附属病院地点出土の徳利について

松下 理恵

#### 1 はじめに

江戸遺跡の発掘調査が本格的に着手された当初から、瀬戸美濃産の灰釉系徳利はしばしばその圧倒的な出土量によってまず第一に注目された。事実墓地等の特殊な条件下にある場合を除き、瀬戸美濃産の灰釉系徳利は大方の江戸遺跡において主要な出土遺物のひとつであったのである。更に幕末に至るおそらくは 150年以上の年月にわたり、これが漸移的な形態的变化を示すらしいことが気付かれるに及んで、瀬戸美濃産の灰釉系徳利は遺構の年代決定のための有効な指標のひとつとなり得るのではないかと期待されることになった。本稿では医学部附属病院地点出土の瀬戸美濃産灰釉系徳利についてその形態上の変遷を追い、江戸遺跡の時間軸を考える上で果たしてそれがどの程度役立ち得るのかを考察してみるつもりである。またその量的な変遷についても志戸呂産徳利やその他の徳利の出土状況と関連させながらまとめてみたい。最後に徳利に認められる釘書、墨書、刻印等についても可能な範囲で集成してみることにする。

#### 2 瀬戸美濃産灰釉系徳利の形態の変遷について

瀬戸美濃産灰釉系徳利は容量的には2合半、5合、1升到に分けることができ、稀には2升と思われるものも見受けられる。製作技法の上からは、2合半のものと5合・1升(2升)のものの2系統に分類することができる(長佐古 1988:9)。それぞれの系統ごとに口唇部、胴部(頸部+肩部+胴部)、底部(高台)の3ヵ所に着目することで形態上の変遷を追い、その結果本地点出土の瀬戸美濃産灰釉系徳利の各部位に認められた幾種類かの形状を以下のように分類する。分類の基準を設けるにあたってはできるだけ技法上の画期を取り上げ、客観的な判断が可能であるようにと心掛けたが、感覚的な表現に頼らざるを得なかった部分もある。実際切れ目なく変化していくかに思われる個体のどこに線を引くかは難しい問題であり、中間的な形態を示すものも決して稀ではない。徳利は多くの職人によって大量生産されたものであるために、同じ技法を用いたものであっても個体ごとのばらつきが認められる。これら多少の程度差を直接時期差に結び付けることは避けるべきだと思われる。ある程度大掴みに形態差をまとめる必要があると考える所以である。

##### 2合半徳利

- |     |   |   |
|-----|---|---|
| 口唇部 | { | 鏢状張り出し：水平に張り出させ、上面と外縁部を軽く撫でて鏢状に整形する。          |
|     |   | 鏢状折り返し：水平に張り出させ、小さく折り返して鏢状に整形する。              |
|     |   | 釣り針状張り出し：外縁部が大きく撫でられて張り出し部は小さくなり、断面は釣り針状を呈する。 |
|     |   | 薄い折り返し：外縁部は薄く小さめに折り返されて頸部に接する。                |
|     |   | 厚い折り返し：外縁部はほぼ垂直に厚く折り返されて頸部に密着する。              |

第三節 医学部附属病院地点出土の徳利について

胴部底	}	紡錘型：頸部は長く撫で肩で，最大径は胴部中程にある。
		丸型：頸部はやや短くなって肩が張りはじめ，最大径は胴部中程～上半にくる。
		寸胴型：頸部は短く肩が張り，寸胴状となる。
部	}	丁寧な拭き取り：高台の削り込みは深く，胴部下端の釉は丁寧に拭き取られる。
		雑な拭き取り：削り込みは浅く，胴部下端の釉の拭き取りも雑になる。
		つけ掛け：削り込みは浅くつけ掛けで，胴部下端は無釉となる。
5 合・1 升 (2 升) 徳利		
口唇部	}	鐔状張り出し：水平に張り出させ，上面と外縁部を軽く撫でて鐔状に整形する。
		鐔状折り返し：水平に張り出させ，小さく折り返して鐔状に整形する。
		带状折り返し：带状に小さく折り返され，頸部に薄く張り付くかたちとなる。
		算盤玉状折り返し：厚く折り返した後上面と内面を斜に摘んで整形し，算盤玉状とする。
胴部底	}	涙滴型：頸部は長く撫で肩で，最大径は胴部下半にある。
		丸型：頸部はやや短くなって肩が張りはじめ，最大径は胴部中程にくる。
		寸胴型：頸部は短く肩が張り，寸胴状となる <sup>1)</sup> 。
部	}	垂直削り出し：高台はほぼ垂直に深くしっかりと削り出され，胴部下端の釉は丁寧に拭き取られる。
		内傾削り出し：高台の削りは深いがやや内傾する。胴部下端の釉は丁寧に拭き取られる。
		浅い削り出し：高台の削りは浅く雑で，胴部下端の釉の拭き取りも雑である。

2 合半徳利にせよ5 合・1 升徳利にせよ，上記のような特徴を持つ各部位ごとの組合せによって1本の完形徳利ができるわけだが，しかしその結び付きはランダムなものではない。例えば5 合・1 升徳利において，寸胴型の胴部に鐔状張り出しの口唇部と垂直削り出しの底部がつくような個体は事実上見られないのである。病院地区出土の瀬戸美濃産灰釉系徳利に関して言えば，その代表的な組合せは概ね以下のようなものになる。

2 合半徳利			5 合・1 升徳利		
	口唇部	胴部 底部 (高台)		口唇部	胴部 底部 (高台)
1	鐔状張出	紡錘型 丁寧な拭取	1	鐔状張出	涙滴型 垂直削り出し
2	鐔状折返	紡錘型 丁寧な拭取	2	鐔状折返	涙滴型 垂直削り出し
3	釣り針状	紡錘型 丁寧な拭取	3	鐔状折返	丸型 垂直削り出し
4	釣り針状	丸型 丁寧な拭取	4	鐔状折返	丸型 内傾削り出し
5	薄い折返	丸型 丁寧な拭取	5	带状折返	丸型 内傾削り出し
6	薄い折返	寸胴型 雑な拭取	6	带状折返	寸胴型 浅い削り出し
7	厚い折返	寸胴型 つけ掛け	7	算盤玉状	寸胴型 浅い削り出し

場合によっては勿論上記以外の組合せの徳利が見られることもある。一例として真砂遺跡からは釣り針状の口唇部に寸胴型の胴部，雑な拭き取りの底部を持つ2 合半徳利が報告されている（真砂遺跡 1988:第177 図(20)）。ただこうした個体であっても各部位ごとの形態が全く異なる技法によって作りだされているのでない限りは，例えばこれは4 よりも新しい要素を持つと同時に6よりは古い

第V章 考察

磁器による 時期区分	遺構名	瀬戸美濃産灰釉系2合半徳利							瀬戸美濃産灰釉系5合・1升徳利							志戸産徳利			
		No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	A	B		
III	C28-1・2	1																	
	F34-11	1*							1								1		
	G30-2	1																	
	3号組石																1		
IV	K30-1																1		
V	E31-1	1*																	
	E35-4																1		
	F33-3	1								1	1		2					1	
	G20-2	1*								1*								1	
	G26-1									1		1*							
	K34-1	1*															1		
	Z35-5											1						1	
	AD34-2											1							
V後半	D33-1			2										1*				1	
	E34-1					2													
	L34-1											1							
	AD35-2												2					2	
VI	E22-1													4*				2	
	Y34-4				1*									5*				2	
	Y36-2				1									3*				5	
VII	AE39-1					1	1						1*	1*					
VIII	F23-2							6*										9*	
	H21-1							18										7	
	H21-2							3										6*	
	H21-3							3										2*	
	Z37-1							1										1*	
	AJ33-1							2*	7*									5*	
	AJ34-1								10					1*	1				
	AJ34-2								6									1	
	AJ35-1				2		2	9					1		3				
	AJ37-3							1*	6*					1*	2*				
IX	AL37-1							1*							1*				

V-3-1表 完形もしくはそれに近い徳利の遺構別出土数

### 第三節 医学部附属病院地点出土の徳利について

要素を持っているというだいたいの位置付けが可能である。これら「例外的な」個体は、製作現場における各部位ごとの形態の変遷は必ずしも同時進行したものではなく、むしろ時にはかなりの時間差を伴い得るものであったことを示しているようである。現在の江戸遺跡の発掘状況を見る限り、出土している瀬戸美濃産灰釉系徳利の大多数は上記の組合せのいずれかに分類可能なものであるように思われるが、しかし今後報告例が増すにつれ、「特異例」と考えられていたものがある程度普遍的な組合せとして認識されることもあり得るだろう。また本地点では全く見られなかったにもかかわらず、他の遺跡ではごく普通であるような形態の組合せも可能性としては十分に予想される。上記の組合せ例はその意味で適宜補訂されていくべき性質のものである<sup>2)</sup>。

さて、本遺跡の主要遺構において上記のような組合せの徳利がどのような出土状況にあるのか、それを示しているのがV-3-1表である<sup>3)</sup>。残念ながら遺構数、個体数ともに十分なものとは言えないが、それでも状況を大掴みに把握することはできそうに思われる。まず2合半徳利について見ると、III期及びV期までは1が引き続いて出土しており、V期後半になって3～5が現れることが分かる。後者のタイプはVI期でも見られるが、VII期になると6、7が現れ、ほぼ最終型に近いものとなってくる。VIII期の大勢は7で占められており、若干の例外についてはその遺構自体にVII期以前の遺物も含まれていることで説明されそうである。特にAJ35-1についてはVIII期に分類されているとはいえ、例えばH21-1・2・3などに比べると明らかに一時代前の遺物をも含む遺構であることが分かっている。7以外の2合半徳利がVIII期になお引き続いて見られるという可能性までも否定するものではないが、少なくともこの場合にはVII期以前に属する徳利であると考えた方が妥当だろうと思われる。また表中には2を出土する遺構が含まれていないが、これの認められるC28-4・5とD28-1は他の遺物から見てそれぞれ17世紀後半～18世紀前半、18世紀前半頃に位置付けされ得るものではIII期～V期に相当すると考えて良いだろう。つまり1及び2はIII期からV期の間に支配的であり、7はVIII期以降に圧倒的な出土量を誇ることになる。この両者をつなぐ形態である3～6までの徳利は、結局のところV期後半からVII期までの比較的短い期間に集中して現れ、しかもその順序は必ずしも配列通りであるとは限らないようである。2合半徳利にとってこの時期は過渡期であったと考えられる。その分磁器による以上に細かい時間軸の設定が将来的に可能となる余地は残されているわけだが、しかしこの時期にはおそらく生産地でも幾タイプかの組合せの徳利が同時に作られていた可能性があり、また実際に消費地で廃棄にいたるまでの時間差なども考えあわせると、むしろいくつかの形態が、混在して見られることは自然であるようにも思われる。余り一般的ではない組合せの徳利、すなわち「特異例」が現れるのもやはりこの過渡期に多いのではないかという印象を筆者は持っており、例えばV-3-1表には該当欄がないため割愛されているが、AD35-2とAJ35-1からは(鏝状張出・丸型・つけ掛け)の2合半徳利が出土している。

5合・1升徳利ではV期全体を通じて2～5が見られ、少なくとも消費地においてこれらの各タイプの間で明確な時期差を見出すことは難しいように思われる。2～5に共通しているのは頸部が長く撫で肩で高台が深くしっかりと削り出されていることであり、またナンバーが下るにつれて徐々に薄くなっていく傾向にあるとはいえ、そのほとんどには飴釉に化粧掛けが施されている。言わば所謂尾呂徳利の流れを汲むものと考えて良いかもしれない。VI期になるとほぼ6が主流となる

## 第V章 考察

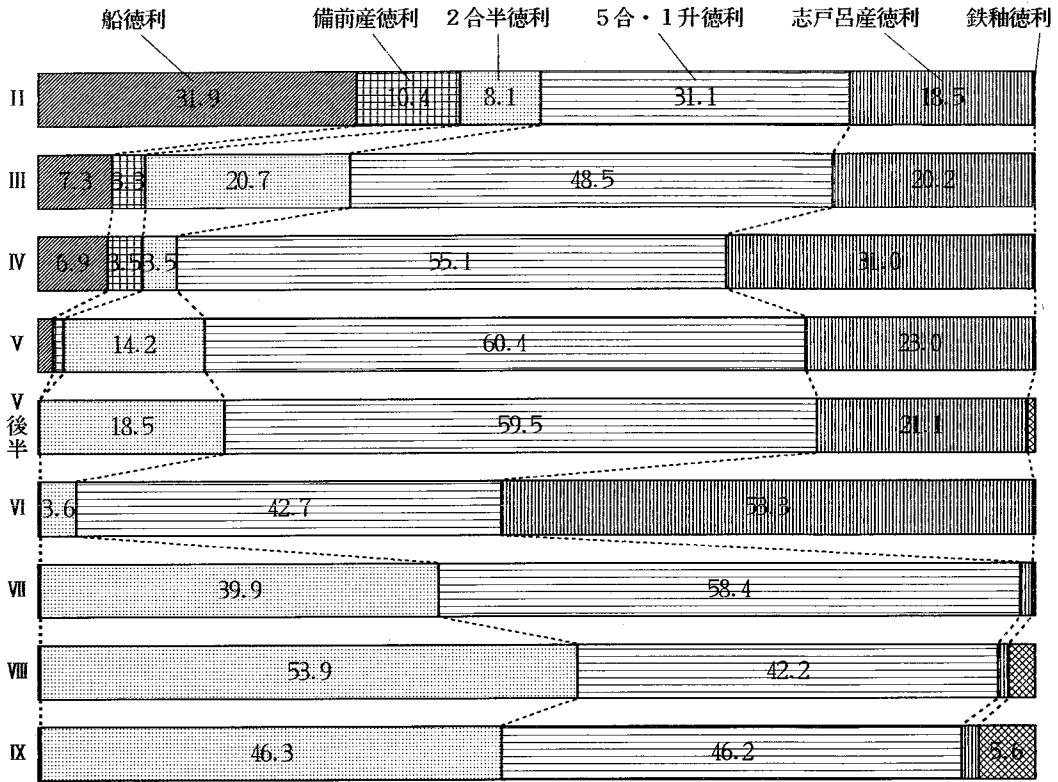
と見てよいうだが、しかしこの場合には中間的なタイプも決して稀ではなく、やや深めに削り出される高台がある一方、算盤玉状に近いような口唇部も認められる。その意味でこの時期は2～5までの徳利と、最終型である7との橋渡的な役割を担っているかのようである。化粧掛けはもはや見られず、釉も黄褐色を呈するものがほとんどである。これがさらに7よりになり、口唇部が算盤玉状に撫でられることも普通になってくるのがVII期であるようで、続くVIII期はほぼ7で占められている。5合・1升徳利では従ってVI期～VII期を過渡期と考えることができそうであり、その分6の形態には若干の幅を見込んだ方が良いと思われる。また1については本遺跡では、例数に乏しいため、2～5と明確な時期差があるのか否か、はっきりしたことは言えそうにないのが現状である。とはいえ勿論、1がVI期以降に現れるようなことはほとんど考えられない。

V-3-1表には併せて志戸呂産徳利の半完形以上のものの出土状況も示してある。表中Aとは底部外周にヘラ削りの施されていないもの、Bとはヘラ削りの施されているものである。AはIII期からV期にかけて、BはV期からVI期にかけてそれぞれ出土していることが分かる。両者はV期において混在しているわけだが、ただこの時期Aの認められるE35-4とK34-1はともにII期～V期までの遺物を含む遺構であり、このAもやはりIV期以前に属するものである可能性も考えられる。少なくともV期後半以降はAはほとんど見られなくなり良いだろう。逆にBはV期後半～VI期にかけて急増するが、VII期以降は瀬戸美濃産灰釉系徳利の盛行とはうらはらに、半完形以上のまとまった個体が認められることはほとんどなくなるようである。志戸呂産徳利は半完形以上の出土例に乏しく、とりわけ胴部上半を欠いている場合が多かったために、今回の分類では底部外周のヘラ削りの有無に限って統計を示したが、口唇部、胴部にもやはり若干の形態的変化が見られないわけではない。確認できただけでも口唇部の形態には鋸状張り出し、鋸状折り返し、外反型、胴部には涙滴型と寸胴型が認められ、さらにこの中間的な形態として丸型を考えることもできそうである。本地点で認められた限りでは、鋸状張り出し・折り返しの口唇部にはヘラ削りの施されていない底部が、外反型の口唇部にはヘラ削りの施されている底部が伴われており、例外は認められなかった。とはいえその背景となっている完形品の例数はそれぞれ数点に過ぎないのであるから、他の遺跡でもそうであるかについては予断を許さない。

### 3 徳利の量比の変遷について

本地点において、ある程度まとまった出土量の認められる徳利、すなわち瀬戸美濃産灰釉系徳利(2合半及び5合・1升)、志戸呂産徳利、備前産徳利、瀬戸美濃産の船徳利、瀬戸美濃産鉄釉系徳利<sup>9)</sup>について、磁器による時期区分ごとの量比を示したのがV-3-2表である<sup>9)</sup>。II期については徳利の個体数自体が乏しく、中には後代の混入と思われるものも含まれているが、参考までにあげておいた。他期に比べ船徳利と備前産徳利のパーセンテージが高いことは注目されて良いだろう。III期になるとこの両者の占める割合は減り、代わりに2合半徳利と5合・1升徳利がシェアを広げるようになる。IV期については遺構数、徳利の個体数ともに僅かであるからやはり参考程度に見られるべきで、2合半徳利の割合が減少し、志戸呂産徳利がやや増加することについてもなんらかの意味を見出すことは難しいと言えよう。V期にかけて船徳利と備前産徳利のパーセンテージは小さくな

第三節 医学部附属病院地点出土の徳利について



V-3-2表 徳利の産地別・容量別出土比率

ベタ刻

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
釘書	ㇿ	△	い	△	ㇿ	ㇿ	久上	(ㇿ)	(ㇿ)	(ㇿ)	内	イ	万	正	仁	剛	太	小
2合	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0
5合・1升	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1
計	3	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

線刻

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
釘書	ㇿ	内	ㇿ	ㇿ	久	ㇿ	△	い	ㇿ	因
2合	2	2	1	2	1	1	1	0	0	0
5合・1升	3	1	1	0	0	0	0	1	1	1
計	5	3	2	2	1	1	1	1	1	1

点刻

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
釘書	(ㇿ)	久	ㇿ	内	(甲)	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	(ㇿ)	大	(ㇿ)	ㇿ	(ㇿ)	ㇿ	(ㇿ)	(ㇿ)	(ㇿ)	ㇿ	
2合	19	9	6	3	4	2	3	3	2	2	1	1	1	7	4	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	
5合・1升	6	8	6	3	1	3	2	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	
計	25	17	12	6	5	5	5	4	3	3	2	2	2	7	4	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	

V-3-3表 釘書の種類



## 第V章 考察

る一方で、V期後半になるとこれらは出土量自体ほとんど認められなくなる。この両期では5合・1升徳利がほぼ6割を占め、残りを2合半徳利と志戸呂産徳利が折半していると見ることができる。このようにII期からV期後半にかけては船徳利と備前産徳利が徐々にシェアを減らしていく以外、特に際立った量比の変化を指摘することはできないように思われる。V期後半の1遺構あたりの徳利の出土量はV期に比べ2倍強に増えており、注目されるが、しかしこれも遺構ごとのばらつきがかなり大きいことに留意すべきである。

大きな画期がやってくるのはV期後半からVI期にかけて、及びVI期からVII期にかけてであり、変化の主演となるのは志戸呂産徳利と2合半徳利である。VI期になると志戸呂産徳利の出土量は飛躍的に増え、そのシェアをほぼ2.5倍に伸ばして徳利全体の出土量の半ば以上を占めるようになる。一方5合・1升徳利の方も出土量自体はV期後半に比べ1遺構あたり4倍近くにもなっているのだが、志戸呂産徳利の増加量には追いつかず、結果的にはシェアを減らすこととなっている。1遺構あたりの出土量がV期後半とほとんど変わらなかった2合半徳利の場合、比率としての減少の割合は一層顕著である。VI期として分類されているのは僅かに3遺構のみであるが、これらはいずれもほぼ同様の量比を示しており、しかも他期においてこうした特徴的な比率が認められる遺構は1例も確認されていない。VI期における量比の変化は信頼性の高いものと考えて良いだろう。

激増の認められた志戸呂産徳利は、しかしVII期になるとそれを上回る劇的な減少を示すことになる。VII期としてあげられているのはAE39-1であるが、志戸呂産徳利はもはや小片として微々たる量を出土するのみという状況は、続くVIII期、IX期の各遺構にも共通していることである。急増した後ふつり消えてしまうというこの注目すべき現象はいずれにしても動かしがたいものと言えよう。代わってシェアを伸ばしてくるのが2合半徳利であり、VIII期には5合・1升徳利をかなり凌ぐまでになっている。2合半徳利のこの台頭は、VII期以降これが所謂貧乏徳利(7)として形を整え、小口売りの消費形態に適合することで盛行したことと結び付いていよう。1遺構あたりの出土量で見ると、2合半徳利の場合VI期とVIII期の間には実に10倍程の差があるのであるが、5合・1升徳利ではむしろ減り気味になっているのである。

IX期としては1遺構があげられているのみで、II期やIV期同様参考までに示しておいた。VII期、VIII期と基本的に同様の量比が見られるとして良いだろう。また瀬戸美濃産鉄釉系徳利に関してまとめると、ちょうどこれは船徳利及び備前産徳利と入れ替わるようにして、V期後半から若干の出土量が認められるようになる。V期後半からVII期にかけては、まだ後代の混入かどうか判断しかねる程度の量であるが、VIII期になると明らかに一定の割合で出土してくると見ることができる。ただこの時期には徳利全体の出土量が余りに膨大であるため、比率的には微量に止まらざるを得ない。IX期にやや増えているかのように見えるのも、むしろこの遺構では瀬戸美濃産灰釉系徳利の出土量が若干少なめであったからと考えた方が当を得ていよう。

### 4 釘書、墨書、刻印について

瀬戸美濃産灰釉系徳利のほとんどの個体にはなんらかの形で釘書が認められる。その種類は概ね縁取り、ベタ刻、線刻、点刻の4つに分けることができよう(長佐古 1988:10-11)。これらの多くは

### 第三節 医学部附属病院地点出土の徳利について

酒屋の屋号等を刻んでいるものと考えられるが、中には消費者自身の符号と思われるものが見られることもあるようである（小林 1989:68）。本地点では縁取り状の釘書はごく稀にしか認められなかったが、ベタ刻、線刻、点刻については比較的豊富な出土例があり、これらが徳利の形態の変化同様漸移的に移り変わっていく状況が観察された。半完形以上の個体についてその変遷の様子を見てみると、まずIII期からV期にかけてはベタ刻が中心であり、釘書がまだ全く施されていない個体がしばしば認められる一方、すでに線刻に移りつつあるものも出現している。VI期ではもはやベタ刻はほとんど見られなくなり、線刻と線刻から点刻に移行しつつある状態の個体が現れてくる。VII期～IX期にかけてはほぼ完全に点刻が主流となるが、同じ点刻とは言っても後期のものになるほど刻み方は薄く雑になっており、中には全く刻まれていないように見える個体も僅かながら見かけられるようになる。

では本地点出土の瀬戸美濃産灰釉系徳利にはどのような内容の釘書が見られるのか、それを半完形以上の個体に認められたものに限って可能な限り集成したのがV-3-3表である<sup>6)</sup>。ベタ刻の1は破片でも数点が確認されており、この刻み方としては比較的多いものと言えようが、一方線刻や点刻の状態で見られることはなく、おそらく時期的に限定されるマークなのではないかと思われる。逆にベタ刻の2は線刻でも点刻でも認められるものであって、長期に渡って存続しているらしいことがうかがわれる。ベタ刻の7や11も同様に息の長いマークであると言えよう。線刻の1（以下ヒサマルと記す）は線刻～点刻の状態にあるものが多く、3や8、9がしばしばベタ刻～線刻として現れているのは対照的である。ヒサマルは次代、点刻の状態では他を圧倒して支配的なマークであり、破片としても無数に出土している。本地点における代表的な釘書と言え、これをおいて他にはない。またこれは点刻になると、胴部の表裏にひとつづつ刻まれることが多いのも特徴的である。これに続いて多出しているのは点刻の3で、ヒサマルと比べると量的にだいぶ開きがあるものの、やはり破片として出土している徳利からも多量に見つけることができる。ヒサマルが線刻から点刻にまたがって広がっているのに対し、こちらは点刻の状態でのみ確認されており、時期的に遅くなってから急に増えてくるマークと言えようである。同様のものとして点刻の5～8がある。

墨書は瀬戸美濃産灰釉系徳利と志戸呂産徳利に認められた。瀬戸美濃産灰釉系徳利に墨書が施される位置は底部であることが多く、特に2合半徳利ではつけ掛けされて無釉になった底部、それに胴部下端にも見られることがある<sup>7)</sup>。また稀には釘書が施された上をなぞるようにして墨痕が認められることもある<sup>8)</sup>。しかしいずれにしても瀬戸美濃産灰釉系徳利に墨書が施されていることが確認された例数は、全体的な出土量からするとごくごく僅かなものである。墨書の内容としては釘書と同じマークが記されている場合、異なったマークである場合の双方があるが、その役割は補助的なものであったと思われる。墨書でヒサマル以外に複数の出土例が認められたものとしては2合半徳利の「平」があり、これには胴部下端に「近江や」の文字が組み合わせられていた。また点刻の6や15に相当するマークも数点が認められた。

志戸呂産徳利においても墨書は底部に施されている場合が多い。胴部にその痕跡が見られることもしばしばあるが、多くはすでにかなり薄れるなどして判読不能であることが少なくない。底部墨書の最も古い例としてはK30-1(IV期)出土のものをあげることができる。ヘラ削りのされていない

## 第V章 考察

底部片にベタ刻の4に相当するマークが記されており、少なくとも一部ではかなり初期から墨書を施すこともあったらしいことが分かる。とはいえ志戸呂産徳利に墨書が多く見られるようになるのはVI期になってからのことであるようで、ここに含まれる3遺構全体から出土している約160ほどの底部片のうち、現在確認されるだけでも90片ほどにはヒサマルの墨書が記されている。またこれ以外に墨書が確認されている遺構も、そのほとんどは18世紀後半から19世紀初頭頃に位置すると思われるものである。前述したようにVI期は志戸呂産徳利の出土量そのものが激増する時期であり、これと併せて墨書の認められる比率が著しく高まるという現象はおそらく無関係ではないだろう。ある程度通り徳利としての機能を持つようになっていたと考えることもできるかもしれない。

備前産徳利の本地点における出土量はごく僅かで、しかもそのほとんどは小片としてのみ確認されている。稀に見られる底部片の中には刻印の押されているものがあり、例えばH29-1(15)には丸に十の字、丸に一引きの二つの刻印が認められた。これは上記してきた釘書や墨書とは異なり、酒屋の屋号等というよりは、むしろ生産者側のマークであるように思われる。この他には菱形の枠組の中に丸に一引きを押ししたもの、長方形の中に扇形を組合せたもの、「上|」と見えるものなど数種類が認められた。ただこれらはいずれも単独であり、複数の出土例が見られたようなものはなかった。

### 5 おわりに

本地点における出土状況を見る限り、瀬戸美濃産灰釉系徳利は遺構の年代決定のための補助的手段としてある程度有効であると思われる。ただ2合半徳利の3～6や5合・1升徳利の2～5など少なくとも消費地においては形態的な差異が必ずしも時期差と直接には結び付かないように思われたものもあり、こうした点慎重な取り扱いが必要であろう。量比ではVI期を中心とした時期が大きな変革期であったことが明らかで、V期後半から徐々に増えつつあった徳利全体の出土量自体、この時期になって激増する。志戸呂産徳利と2合半徳利の入れ替わり方も鮮やかであり、注目に値しよう。また釘書では時期的に限定されるものがある一方、長期に渡って存続しているらしいものもあることが分かった。本遺跡の最多マークとしてはヒサマルをあげることができる。

本稿では徳利の統計的分析のために磁器から見た遺構の年代配列を利用している。現時点で生産地、消費地双方の研究が最も深化しており、かつ全時代に渡って比較的豊富な出土量の認められるのは磁器であるからという判断に基づいてのことである。すでに見てきたように徳利の形態的、量的変化は磁器による時期区分と一致している点が多く、その信頼性はかなり高いものと思われる。とはいえ分析のありかたとして、多くを磁器の研究成果に頼っていることは否定できないだろう。最近になって瀬戸美濃地方の江戸期の窯跡の調査も徐々に報告されるようになってきており(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』VIIIなど)、今後は徳利の分析の自立性を高めるためにも、生産地における研究成果との比較検討が必要とされると思われる。また徳利の場合、遺跡ごとの性格の相違や地域差により、その出土状況が大きく左右されるであろうことが予想される。本地点で得られたいくつかの知見が、そのままの形で他の江戸遺跡における常識になるとは思われない。現在徳利の出土状況がまとめられている遺跡の例は少ないが、今後は遺跡間相互の比較検討をも行なうことで消費

### 第三節 医学部附属病院地点出土の徳利について

地内における研究をも深化させていくことが求められよう。

#### 註

- 1) ただし1升徳利の場合、実質的な最大径がしばしば胴部下半にあることがある。これは5合徳利に比べ底径が大きいため形状であって、涙滴型とは区別して考えられなければならない。
- 2) 以下に各組合せのサンプルを1例ずつあげておく。2合半徳利 1 {C28-1・2(18)}, 2 {C28-4・5(4)}, 3 {D33-1(43)}, 4 {Y36-2(11)}, 5 {E34-1(23)}, 6 {G20-3(4)}, 7 {C31-1(3)}。
- 5合・1升徳利 1 {F34-11(145)}, 2 {F33-3(95)}, 3 {F33-3(96)}, 4 {X34-2(14)}, 5 {F33-3(94)}, 6 {Y34-4(53)}, 7 {F23-2(18)}。
- 3) I期及びII期の各遺構、及び以下の遺構については、半完形以上の瀬戸美濃産灰釉系徳利もしくは志戸呂産徳利をほとんど、あるいは全く出土していないため表には載せていない。AD37-1(III期), D32-1, E24-1, E28-1, G22-1, G22-3, I20-3, L34-2, 1号組石, AE36-4(V期), C26-1, H21-8, I20-1, 7号組石(VIII期)。また6号組石(III期), 2号組石(VIII期)については、それぞれI~V期, I~VIII期までの遺物を含む遺構であるため、ここでは扱わなかった。表中の数字は個体数を示しているが半完形品であって必ずしも全容が把握できなかったような個体を含む場合には、右肩に\*を付してある。
- 4) しばしば錆釉徳利とも呼ばれる。
- 5) 基礎データとしているのは各期に含まれる遺構ごとの各種徳利の推定個体数の合計である。ただ本遺跡の徳利は小片の状態で出土するものがほとんどであり、単一の種類で100個体を越えるようなものについては、どうしても算定の誤差は大きくなる。これらについては一応の目安としての概数を計上せざるを得なかった。また半完形以上の瀬戸美濃産灰釉系徳利、志戸呂産徳利を出土しないためV-3-1表には載せなかった各遺構についても、2号組石と6号組石を除いて統計に組み入れてある。
- 6) 表中釘書の内容として縦の( )でくくられているのは、胴部の表裏にひとつづつのマークが刻まれていることを示している。また釘書は稀には瀬戸美濃産鉄釉系徳利にも施されることがあったようで、2号組石からその痕跡の認められる破片が数点出土している。
- 7) F23-2(16)を参照のこと。
- 8) 2号組石(161)を参照のこと。

## 第四節 江戸時代のカワラケの動態と推移

—大聖寺藩上屋敷跡出土の資料を中心に—

佐々木彰

第IV章ですでに明らかのように、藩邸跡からは陶磁器とともに多量のカワラケが出土している。量的に多いばかりでなく、陶磁器と同様に中央診療棟地点では17～19世紀の、設備管理棟・給水設備棟地点では18世紀後半～19世紀にかけてのものが集中的に出土し、一地点内ではほぼ江戸期全般を通じたカワラケの消長が辿れることになった。ここではこのような膨大な資料の検討から、カワラケの技法および形態の推移を中心に、いくつか明らかになった点を述べることにしたい。これに出土比率の変化、および灯芯油痕の付着したカワラケについてなど、いくつか気のついた点も付け加えている。

### 1 技法および形態上の推移について

第二節にあるように、陶磁器の豊富に出土した代表的遺構を年代順に並べると次のようになる。「池」→L32-1→F34-11→K30-1→F33-3→E22-1・Y34-4<sup>1)</sup>→AE39-1→H21-1→AL37-1である。このうち「池」・L32-1は17世紀代に、F34-11～Y34-4まで18世紀代に、AE39-1～AL37-1は19世紀代に比定されている。「池」～Y34-4、H21-1が大聖寺藩邸跡に、AE39-1、AL37-1が榊原家邸跡に、それぞれ位置する遺構である。そしてこれらのほとんどの遺構にはカワラケも伴っている。この節では最初にこれら陶磁器から与えられた年代をもとにして、主にカワラケ形態上の変遷を辿ってみたい。ただし個々のカワラケについてはすでに第IV章で述べてあるので、ここではその基本的な事柄の概略をもう一度指摘するに止めておく。

#### (1) 17世紀代のカワラケ

17世紀で最も重要な資料は「池」およびL32-1出土のカワラケである。「池」出土のカワラケはすでに第IV章で検討しているので繰り返す必要もないが、ここでは基本的な事項をもう一度確認しL32-1との対比を試みる(V-1図)。

「池」出土のカワラケは寛永六年(1629)の将軍「家光」および前将軍「秀忠」の御成に際しての儀礼的宴会に使用されたとされるカワラケである。出土状況および性格は他の遺構出土のカワラケと大きな違いがあり、これらは“一回限りの使用”に供されたカワラケであるとされている。本地点内では最も初期の17世紀前半に位置づけられる資料である。基本的には圧倒的な手捏ね(IV章では型作りとしているが、ここではロクロを使用していないカワラケを便宜的にこう呼ぶ)と少数の右回転糸切り底のカワラケ(以下単に“右回転”とのみ記す、“左”も同じ)からなっている。特に手捏ねはセットになり膳に並べられたためかいくつかの同一器種のもが多量に出土しており、それぞれ口径(器種?)ごとに色調・胎土の違いも認められる。しかし他の遺構出土の手捏ねを基準として見ると全体的には“まとまり”のあるものであり、色調は白を基調とした褐色であり、胎土も悪く調整も非常に粗い傾向をもっている。ある特定の技術者集団の製作によると考えられる手捏ね

#### 第四節 江戸時代のカワラケの動態と推移

の一群である。「池」出土と同類の手捏ねは H20-11 および H28-2・3 で出土している。小片であり図示はしていないが、V47-6 などでも確認されている。

ところで「池」出土のものとは、明らかに異なる手捏ねも出土している。H20-4, J29-3, K22-2 から、わずかに3点のみの確認ではあるが明らかにまとまりをもつ一群である。これらのカワラケは器壁が厚く、丁寧なナデ調整が施されるのが「池」出土のカワラケと異なる最大の特徴である。丁寧な調整のため、内側口唇はあたかも沈線がめぐる形状となる。H20-4の3にはなかったが、底部には凹みも認められている。また「池」では4寸（以下口径は寸・分で記述する、寸・分で記述した例は長瀬(1985)がある）以下のものが主体となるが、これらの3点はいずれも4寸以上であり、色調も黒褐色である。このように形態的には大きな隔りがあり、手捏ねとしても同じ系統に属するとはいいがたく、生産地(?)が異なるなど、別系統の手捏ねのように思われる。点数も少なくあまり確かではないが、このようにこの地点から出土した手捏ねは、大きく二つのタイプに分けられそうである。

手捏ね以外に、H20-4, J29-3, K22-2では「池」と同様、右回転のカワラケも確認されている。出土点数も手捏ねを上回りむしろロクロ使用のカワラケが主体となる。「池」では口径3寸4分(39・40)から4寸3分(43・45)までのものが出土しているが、特に4寸以上のカワラケを取り出して J29-3, K22-2 出土のそれと比較してみると、J29-3, K22-2では底径が大きく、そして器高が低くなる傾向が明らかである。これと類似したカワラケが H20-5 にも認められており、「池」と J29-3 以下では右回転のカワラケも手捏ね同様、それぞれにまとまりをもちそうである。他の4寸以下の例えば「池」の41と K22-2 の6 を比較しても、ほぼこの傾向を認めることができる。

H28-2・3 のカワラケは類似したものがなく不明であるものの、H20-11の右回転のカワラケは口径こそ異なるが、器高が高く「池」の出土の一群と明らかに類似性が認められる。したがって先の手捏ねの検討と同じく、H20-11はほぼ「池」と併行する年代が考えられる。

この時期まで出土点数も少なく不明瞭ながらも、右回転のカワラケも手捏ねと対応し、藩邸内ではほぼ二形態に区分できそうである。陶磁器あるいは手捏ねから判断しても、時期差によるものと考えるのが妥当であろう。すなわち、同種類の手捏ねと右回転の糸切り底のカワラケからなる一群のカワラケも、細かく見れば二時期に区分されそうである。この変化はほぼ17世紀の前葉から中葉にかけてと推定している。ただしこのように二分されるものの、手捏ねと異なり、右回転のカワラケは口縁が外反し、口縁下部の器壁が厚いなど器形上の、あるいは色調や胎土などにも強い類似性があり、ほぼ同じ系統に属すると考えている<sup>2)</sup>。

中葉までと異なり17世紀も後葉に入るとカワラケの様相はかなりの変化を示すようである。「池」に後続し、ほぼ17世紀後葉に位置づけられる基本的遺構に L32-1 の一群がある。L32-1の出土遺物は天和二年(1682)の火災による後始末の際の投棄された一括遺物からなり、陶磁器の年代によればほぼ17世紀後半、さらに言えば第3四半期に限定されるという。L32-1出土のカワラケは「池」とは大きく異なり、左・右両回転のカワラケからなっている。破片で1点のみ確認されたが、手捏ねはほとんど見当たらず、代わって底径が大きく、いくぶん内湾気味の左回転のカワラケが主体となる。手捏ねはこの時期以降の遺構でも散見されるが、明確な出土状況を示さず、明らかに主体となるカ

## 第V章 考察

ワラケではない。消え去ったか、少なくともこの周辺ではあまり使用されなくなった器種であることに疑いはない。

カワラケは二次焼成を受け、小破片が多く、しかもわずかながら流れ込みもあるようである。出土点数も少なくはっきりしないが、2寸8分から8寸1分まで、さまざま大きさのものがあるようである。口径約8寸のカワラケはこの遺構以外に認められていないが、大小さまざまな器種構成の出現は、この時期以降に位置づけられるF34-11の出土遺物に通ずるものがある。特にこの傾向は左回転のカワラケに著しい。右回転のカワラケにはこのような傾向は認められず、ほぼ3寸から4寸にかけて分布していたが、形態的にはさまざまのものが認められている。119のようにK22-2の一群と共通するカワラケがある一方で、以前には認められなかったような形態のもの(118, 120-122)が出現する。118, 120, 121など、K22-2より後出的な印象も受けるカワラケも出土している。これらのカワラケの特徴として、色調・胎土ともにほとんど差はないが、底径が小さいものとなり、全体的には口縁の傾斜がゆるやかになる傾向が看取れる。器壁も薄くなるようである。122のみ明らかに器壁が厚く器高も高いが、あるいは“江戸系”(鈴木 1989)とされる在地産の一種かもしれない。

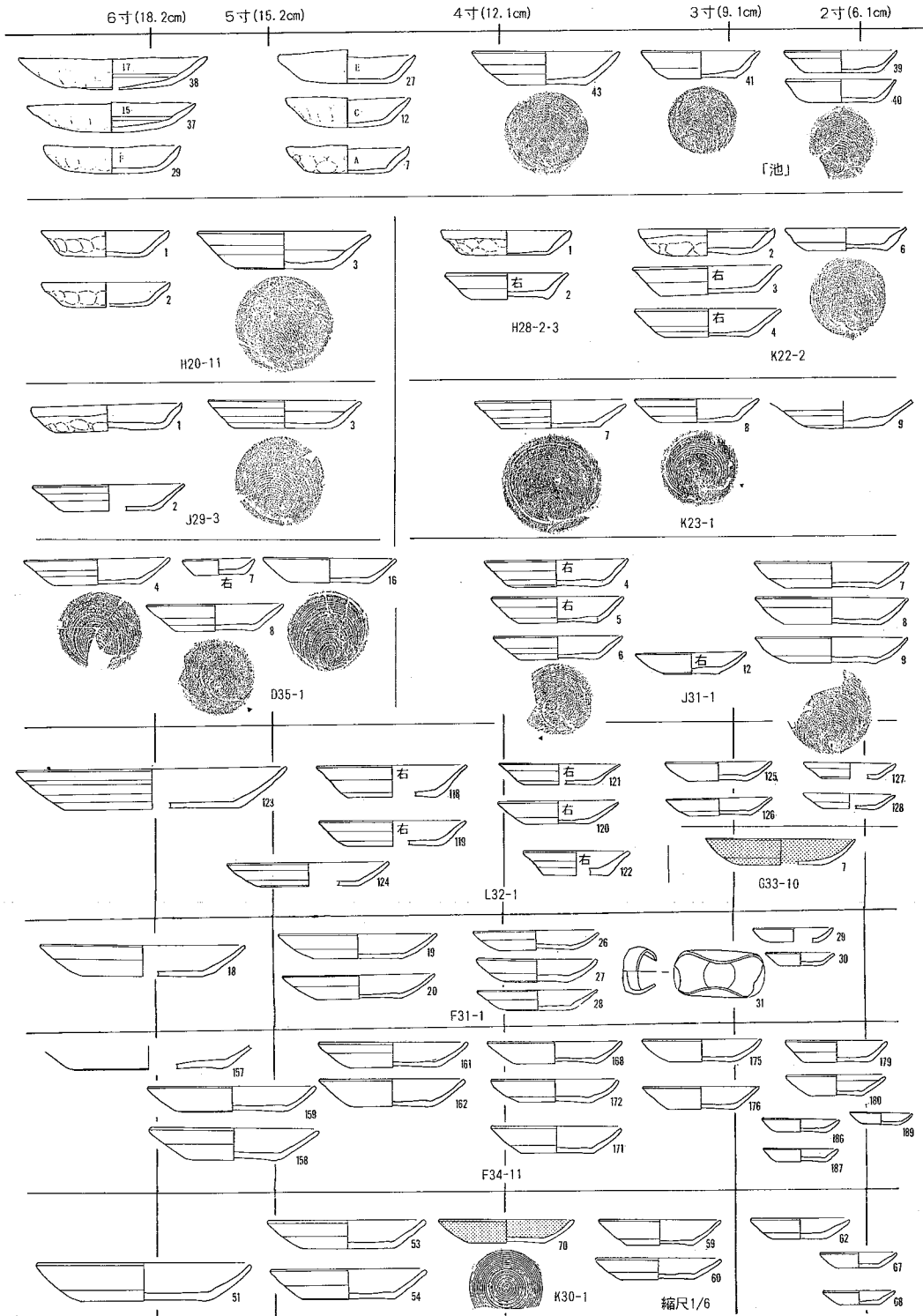
両回転によるカワラケの相伴関係は、D35-1, J31-1あるいはK23-1の一括遺物で、それぞれ確かめられている。ただしこれらの遺構の右回転のカワラケには、L32-1にはない特徴がある。小川(1979)による「まわし糸切り」によるカワラケがある一方で、「離し糸切り」による調整のものがあり、しかもこれらにはそれ以前に「まわし糸切り」を施したような底部の端にひねり止めを残すものが認められた。このようなカワラケのひねり止めは、「離し糸切り」による中心から外へ延びる糸の抜き取り跡の端部にあり、筆者の観察によれば一つの例外もない。あるいは第四章第一節でも指摘したように2段階の切り離しというよりまったく別の方法の切り離し技法による可能性もある。

ともあれ、このような「まわし糸切り」後の「離し糸切り」を施したと考えられるカワラケは、右回転のカワラケと形態的にも強い類似性を示し、右回転糸切り底の仲間であることにまちがいはない。実際底部の切り離し以外違いがわからず、資料の少ないいまの時点では、右回転の仲間の変異としてとらえておくのが妥当であろう。先にも指摘したように、この時期の右回転のカワラケは底径が小さく、口縁の傾斜がゆるやかになる傾向にあり、この2段階の切り離しによるカワラケもこの傾向を踏襲するようである。したがって右回転のカワラケの中でも新しい一群としてとらえておく。またこの時期の右回転のカワラケの例に漏れず、口径が4寸前後に集中する傾向がある。

これらの右回転のカワラケと伴う左回転のカワラケはL32-1と同様、底径が大きく口縁の内湾するものが多い。特にこの傾向はJ31-1の7-9のように大型のカワラケで明らかである。また右回転のそれに比べ胎土・焼成が劣っており、つくりの雑な印象も受ける。大きさからいうと、口径が4寸以上5寸以下のものが多く、L32-1と器種構成が異なるらしい。時期が下るにつれさまざまなバラエティーをもつとしたならば、D35-1, J31-1, K23-1はいくぶん古く位置づけられるのかもしれない。また完形でないので明らかでないが、K23-1の9はその中でも古形態に属すると考えられる<sup>3)</sup>。ただしいまのところははっきりせず、ここでは同時期ととらえておく。

L32-1を境として、手捏ねばかりでなく、右回転のカワラケも出土しなくなるようである。ここでは手捏ねより右回転のカワラケが、いくぶん遅れて姿を消すようである。陶磁器からL32-1とほ

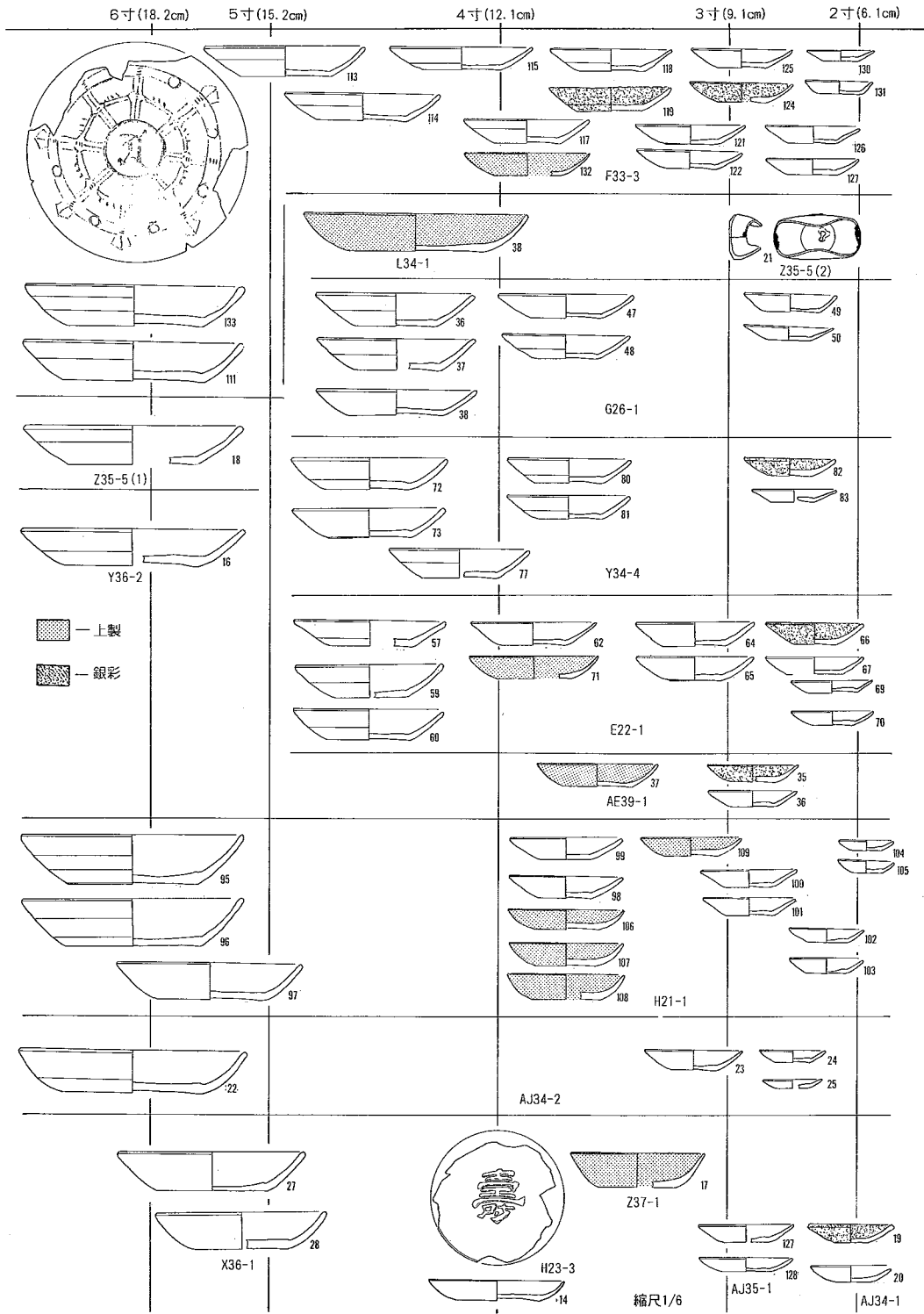
第四節 江戸時代のカワラケの動態と推移



V-1図 各遺構出土のカワラケ (1)



第V章 考察



V-2図 各遺構出土のカワラケ(2)

#### 第四節 江戸時代のカワラケの動態と推移

は同年代に位置づけられる H29-1, G33-10, G27-1, F31-1 などには出土点数が少ないせいもあるが、右回転のカワラケは出土していない。すなわち、ほぼこの頃より形態差のあまりない左回転のカワラケが支配的となる。F31-1では3寸前後のカワラケは耳皿以外見あたらないが、2寸5分以下のカワラケと3寸7分～4寸8分が中心となって確認されており、分布はこのあとの時期の F34-11 とほぼ重なり合う。特に F31-1 の18は L32-1 の123 に類似した形態であり、この段階の形態的特徴をよく現わしている。

以上17世紀代のカワラケを概観したが、この時期に最も大きな変化が認められるようである。この間に手捏ねおよび右回転のカワラケが姿を消し、それを補完するかたちで左回転のカワラケが藩邸内に登場する。先に指摘しているように、「池」は1630年前後の資料であり、L32-1は1682年までの資料とされる。とすると、ほぼ50年という短期間にこれらの変化が起こったのであり、交替は急激に進行したものと考えられる。その過程の資料として確実に H20-4, J29-3, K22-2 が、不確実には D35-1, J31-1, K23-1 などが位置づけられる。これらのカワラケも大きく見れば、それぞれ「池」、L32-1 と類似しているのであり、ほぼ同じ一群としてとらえられる。陶磁器では「池」をⅠ期に、L32-1をⅡ期に比定しているが、ほぼこれに対応する変化としてよいようである。

##### (2) 18世紀代のカワラケ

この時期の資料は、最も出土量が多くさまざまな遺構から確認されている。ただしすべてが左回転のカワラケからなっており、あまり形態差などもっておらず、変化も17世紀と異なりきわめて漸移的である。あたかも同一の生産集団が長期間製品を供給したか、あるいは特定の業者から購入し続けた状況を想像させる。したがって単体のみの比較で時期差を推定するのは困難であり、場合によっては流れ込みによるものかさえ判断できないのが現状である。このような問題もあるため、ここでは各遺構出土の“群”として見た場合のおおまかな変化を追っていき、このようなまとまりの中から、いくつか気づいた点のみを述べることにする。陶磁器によると、18世紀前半の重要な遺構として、F34-11, K30-1, F33-3 が、後半代として E22-1, Y34-4 が示される。なお AE39-1 の資料は一部19世紀初頭にかかっている可能性がある。

F34-11はその中でも、18世紀初頭に位置づけられ、最も初期の遺構の一つとされる。「池」とともに藩邸内の代表的な遺構であり、陶磁器の年代および種々の理由から、1703年に投棄されたとされる遺物が出土している。第IV章でも指摘しておいたが、F34-11の出土カワラケを口径ごとにみるといくつかのまとまりをもちそうである。出土量のわりには口径のわかるものは少なく、漠然としたものであったが、1寸9分～2寸5分、3寸～3寸2分、3寸5分から4寸6分前後に集中する傾向がある。3寸5分から4寸6分前後ではいくぶん範囲が広いが、ほぼ隙間なく分布しており、区切ることはできそうにもない。逆にこの間に分布するカワラケはなく、第IV章では『貞丈雑記』のいう、大きさの単位である“度”に関連した現象であることを指摘している。しかし、時期を通してみると、バラツキも多く、また文献などでも、さまざまな記述がされているようである<sup>9)</sup>。“度”に関しては後に稿を改めて述べることにし、ここではこのような口径の分布からみたカワラケの変化について概観することにする。

F34-11では以上のほかに5寸1分、およびおそらく7寸以上と考えられるカワラケも出土してい

## 第V章 考察

るが、量的には多いものではなくほぼ3寸5分から4寸6分前後を中心として、2寸そして3寸1分前後の分布となる。特に底部片の検討では4寸以上4寸5分以下のカワラケが最も多いようである。形態は必ずしも一定していないのだが、傾向としてはほぼ二つに分けることができようである。一つはD35-1, J31-1以来の底径が大きく口縁がやや内湾するものであり(159, 168, 179, 187など)、他は底径がやや小さく、口縁が直線的かいくぶん外反する形態のものである(158, 162, 171, 176)。両者の中間のカワラケもあり必ずしも明確な基準とはならないが、前者の形態のものがいくぶん多いようである。特に2寸、3寸1分前後のカワラケで、この傾向がつよい。F34-11と併行すると考えられる他の遺構、例えばC28-1・2, G27-2, X37-2からもこの形態に類似したものが出土しており、さらにF34-11で認められた範囲内にカワラケが集中する傾向が認められた。

これに対し、18世紀の前半でもより半ばに近い年代を与えられているF33-3では、いくぶん様相が異なるようである(V-2図)。例えば、3寸前後のカワラケの場合、F34-11ではこの付近のカワラケはすべて3寸から3寸2分の間にあったが、F33-3ではこれに加えて2寸7分前後のカワラケが認められるようになる。17世紀後半に左・右両回転のカワラケにいくつかこの口径のカワラケが認められており、F34-11のみに限った現象の可能性もあるが、他の遺構を検討しても量的にそれほど多いものではない。F33-3で明確化する形態である。また4寸前後のカワラケの場合、F34-11では3寸5分から4寸6分までほぼ間断なく分布していたが、F33-3では4寸以上は4寸3分、4寸7分前後および不明ながら3寸6分から4寸までに限った分布となるようである。F34-11と異なり、この間の個体数も決して多いものではない。底部片の検討からもF33-3のカワラケは2寸8分～3寸6分前後に集中するらしく、すでに第IV章でも指摘したが、F34-11に比べ全体的に小型化する傾向が窺える。すなわちF33-3の場合、カワラケの集中する範囲は2寸1～2分、2寸7分～3寸3分、3寸6分～4寸となる。またF34-11と同じくこの範囲以外には分布しない傾向にある。

ただし4寸以上のカワラケのあまりない点はF33-3特有の現象であるらしく、これ以降に位置づけられるY34-4, E22-1では出土しており、18世紀後葉まで明らかに存続している。またF33-3では6寸以上の大型のカワラケも出土している。F34-11, C28-1でも数的には少ないとはいえ、7寸以上のカワラケが出土しており、おそらくこれらの系統に連なると考えられるカワラケである。しかしこれまでに述べた6寸以下のカワラケは大きさの点で明らかな間隙があり、器形こそ類似しているが他の目的で作られていたらしい。133は明らかに地鎮具(猪狩 1988:96-100)として用いられた例である。またこのカワラケは18世紀以降、すべて「離し糸切り」によっている。なおこの大型のカワラケは形態こそ変容を遂げるが、以後19世紀まで継続して確認できる。もう一つ形態に関して言えば、4寸前後のカワラケの場合、F34-11で指摘した後者の形態である底径がやや小さく、口縁が直線的かいくぶん外反するカワラケがほとんどであり、17世紀末葉以来の底径の異常に大きいカワラケは認められなくなる傾向にある。また113は器高の高いカワラケであり、続くY34-4, E22-1の一群のカワラケに類似した形態である。さらに3寸前後のカワラケに最もよく示されるが、底部がやや小さいものとなり口縁が直線的かいくぶん外反するものが多くなるようである。すなわち羽生氏の指摘(1989:364)の通り口縁の角度が緩やかになる。F34-11の3寸以下のカワラケと比べた場合、この点が明瞭である。陶磁器からF33-3 併行とされるZ35-5, Y37-3, AD37-1などでも同じ傾

#### 第四節 江戸時代のカワラケの動態と推移

向を認めることができる。

陶磁器の判断によると、K30-1はF33-3 およびF34-11の中間の年代が与えられ、IV期と区分されている。この年代観からいうと、カワラケも18世紀前半で3期に区分されることになったが、期間が短いと考えられるため、変化に乏しいカワラケのみで変遷を辿ることはできず、すなわちここに明確な画期をおくことはできない。K30-1は2寸5分以下のカワラケと3寸7分～4寸8分のカワラケが中心であり、F34-11と類似している。また6寸2分の大型のカワラケも出土しているが、6寸以上のカワラケはF33-3のそれに比べ、明らかに器壁が薄く器高も低いようである。K30-1のカワラケは、形態・分布ともにF34-11に類似するようである。ただしF34-11では明らかでなかった2寸5分以上3寸以下のカワラケが、K30-1で認められている。形態こそF34-11の一群に類似するものの、おそらくF33-3の同じ口径のカワラケに連なるものと考えており、底径の異常に大きいカワラケが見当たらない点とともに、両者の中間的様相も窺える。

以上ほぼ18世紀前半までを概観したが、17世紀とは異なり、図のみではあまりはっきりできない変化しか認められなかった。しかし次の段階、陶磁器によるVI期ではこの様相はいくぶん変化を示すようである。遺構でいうとE22-1、Y34-4、Y36-2、AD35-2がほぼこの時期に相当する。AD35-2では4寸以下のカワラケしか出土してないが、E22-1、Y34-4では4寸以上のカワラケも出土しており、ほぼこの時期の様相が辿れそうである。

最も出土点数の多いY34-4では2寸3～7分、3寸7～8分、4寸4～6分のカワラケが確認されている。破片の検討からも、ほぼこの大きさにカワラケが集中する傾向が認められた。他に3寸内外の耳皿、4寸2分のカワラケも出土しているものの、ともに例外的な存在である。3寸～4寸のカワラケは以前に比べ、バラツキも少なくなるようである。形態もそれぞれの口径ごとに類似性のつよいものであり、ほぼこの時期の一群としてとらえられる。F33-3と異なり、大型のカワラケが多いが、時期差によるものではなく、おそらくF33-3の場合と廃棄した状況が異なるからであろう。この時期のカワラケはほぼこのような構成になると考えられる。5寸内外のカワラケが見られず、形態的にわずかな違いがある以外、器種構成にはF34-11以来ほとんど変化がないようである。ただし小型のものに比べ、F33-3ほどではないにしろ3寸7分以上の大型のカワラケは量的に少なくなる傾向は指摘できるようである。

その中でF33-3と漠然とながら示せる違いは、3寸前後(2寸7分～3寸3分)のカワラケがなくなり、2寸5分前後のものが豊富に確認できる点である。この大きさのカワラケはいくぶんバラツキもあるものの、器形的にはほぼ同じである。F33-3の3寸前後のカワラケと比較すると、胎土など共通する点もあるが、当然のことながら一回り小さくなり、器壁も薄くなる。これに伴っての現象であるのか明らかではないが、F34-11で認められた底径の大きい2寸内外のカワラケもあまり見られないようである。19世紀のH21-1などで、この2寸内外のカワラケが出土しており、全くなくなるとは考えられないが、この時期のほとんどの遺構では確認できず、器種構成の重要な要素とはならないようである。少なくとも主体となるカワラケではない。AD35-2では逆に3寸前後のカワラケが主体となり、やや古相を示すかのようである。実際、陶磁器の年代ではF33-3 併行に位置づけられている。ともあれこれ以降、小型のカワラケはバラツキをもちながらも、ほぼ2寸5分～3

## 第V章 考察

寸以内におさまる傾向にある。

またこれ以外の口径の大きい他のカワラケから判断すると、底径が小さく器高の高いカワラケが一般的となるようである。特に4寸5分前後のカワラケにこの傾向が明らかである。F33-3では17世紀の系統を引く、F34-11で認められた底径が異常に大きく器高の低いカワラケが認められなくなったが、それでも器高の低いカワラケが一般的であった。ところがY34-4では、もはやこのような形態のカワラケは認められず、E22-1でも器高の高いカワラケが一般的となる。この時期のカワラケは変化に乏しく漸移的な変化しか示さないが、F34-11で代表される18世紀初頭とY34-4、E22-1で代表される後葉とでは、ようやくその違いも明確になりそうである。

Y34-4、E22-1以降カワラケは出土点数も少なくなり、様相が分からなくなる。Y34-4、E22-1では点数も多く、ここまで変遷も追うことができたが、実はこの時期、遺構ごとの出土のありかたにバラツキがあり、Y34-4、E22-1の出土状況がこの時期の特徴として括れない面をもっている。すなわちこの頃からカワラケの極端な減少化が示されるのであり、これ以降の時期ではさらにこの傾向は明白となる。一部19世紀に入る可能性もあるAE39-1ではカワラケはもはや客体的な存在でしかありえず上製を除き3寸以下のものからなっている。

ところでF33-3からE22-1の移行段階に、焙烙では明らかに一段階を画する資料が確認されている。詳しくは稿を改めて述べるが<sup>5)</sup>、陶磁器の年代からもV期の“新しい様相”とされているようである。一部で重ならない遺構もあったが、G26-1で代表される段階である。G26-1のカワラケの分布は2寸7～8分、3寸8分～4寸、4寸5～8分となり、ほぼY34-4、E22-1と重なりそうである。点数が少なく明らかではないが、ほぼ同時期と考えられるカワラケがD33-1、L34-1からも出土しており、同じ範囲内におさまりそうである。Y34-4で認められている器高が高く底径の小さいカワラケ(36、37)が、ほぼこの時期で明らかになるようである。ただしF34-11で認められている底径が大きく口縁が内湾するカワラケも(38、49)ともに出土しておりいくらか古い様相も帯びるようである。焙烙と異なり、明確に区切れるはずもなく、その過程の変化はこのようにきわめて漸移的である。

### (3) 19世紀代のカワラケ

19世紀になると、カワラケは極端な減少を示す。このような減少の傾向のため、遺構出土のカワラケは流れ込みによるものかはっきりしないものが多くなる。このような問題もあるものの、18世紀とは明確に一線を画する明らかな変化が認められた。明確ではないが、このような動きはAE39-1を始めとする18世紀末～19世紀初頭に求められるようである。

AE39-1以降、陶磁器によるVIII期に位置づけされる遺構にH21-1がある。ほぼ19世紀前半に相当する遺構である。この遺構からは比較的多くのカワラケが出土している。AE39-1でもすでにその傾向は認められたが、カワラケは口径3寸6分以下となる。ほぼ3寸以下のカワラケが主体となり、小型の製品が多くなる傾向にある。またこれらの小型の製品に混じり、5寸5分、6寸5分前後のカワラケも出土している。Y34-4、E22-1まで認められた4寸前後のカワラケがなくなり、この欠落の結果、器種はあたかも大型と小型に分化するかのようである。次に述べるカワラケの減少傾向とともに大きさの点でも、明らかに一線を画する変化であることがいえそうである。カワラケの胎土も18世紀を通じて徐々に精練される傾向にあったが、色調はほぼ黄褐色にまとめられた。ところが、

#### 第四節 江戸時代のカワラケの動態と推移

H21-1のカワラケの大半は赤褐色であり、胎土はより精練され、つくりなども丁寧なものが多くなる。器形的には大きな変化は認められないものの、器壁もさらに薄くなるようである。図で明確に示せない違いではあるが、形態的にも大きな変化がこの時期に認められそうである。

H21-1 に併行する遺物を出土した遺構に Z37-1, AJ34-2, AJ35-1 などがあり、確かではないがほぼ H21-1 で認められた傾向がこれらの遺構でも確認されている。出土点数が豊富なところで、2号組石, AJ33-1なども19世紀前半の遺構とされているが、陶磁器からの検討でも出土遺物はかなりの点数、流れ込みによるものと思われ、カワラケも大半が18世紀代に位置づけられそうである。出土点数も少なく、このように流れ込みの問題もあるので明らかではないものの、これらのカワラケの比較の中でいくつか気づいた点もある。

例えば AJ34-2は 6寸8分, 2寸9分, 2寸前後のカワラケが出土しており、ほぼ H21-1 に対応した分布となるが、特に 6寸8分のカワラケの口縁と底部にこの時期の特徴が見出だせそうである。口縁が底部からなだらかに立ち上がりやや内湾気味であり、さらに内側底部周縁の凹線が以前に比べ明確になるのが特徴的である。凹線は底部が上げ底気味であるかのように、口縁側に丁寧なナデによって段差がつけられている。この底部と口縁を画する調整は H21-1・2 あるいは同時期におさえられる X36-1 の大型のカワラケでも認められており、この時期の、少なくとも藩邸内における大型のカワラケの特徴といってよい。このような底部周縁の凹線が明確なものは、大型ばかりでなく、小型のカワラケでもいくつか認められている。例えば AJ35-1の128 がその明らかな例であるが、この傾向に加え、小型のカワラケも以前に比べ、より底径が小さくなるようである。H21-1の98, 99 がその明確な例である。類例は必ずしも多くはないが、この形態のカワラケは AJ34-1, X36-1などで出土している。この時期、この形態のカワラケばかりが認められるわけではないが、このようなこの時期を特徴づけるカワラケも出土している。

ところでもう一つこの時期の大きな特徴として、上製のカワラケが頻繁に目につく点があげられる。上製のカワラケそのものは17世紀から出土しているが、以前は圧倒的な糸切り底のカワラケの中で客体的な存在であった。しかしこの19世紀前半には出土する割合も増し、ほぼ全部の遺構で認められるようになる。上製のカワラケについてはすでに上田氏(1987)の指摘もあるが、上田氏の調査した地点からこのような19世紀のカワラケが得られなかったためかこの点に対する記述はない。19世紀の上製のカワラケも上田氏の指摘のように器面が“平滑で胎土も精良な精製品”であるが、もう一つ他の糸切り底のカワラケと異なる点は、内側底部に巡る凹線が認められない点である。これらの特徴はそれ以前の他の上製のカワラケと同様であり、ほぼ同じ系統に属するカワラケと考えている。ここでは19世紀の上製のカワラケの特徴を抽出するためにも、それ以前の上製のカワラケについて少し触れておきたい。

上製のカワラケは破片ではあったがすでに17世紀の遺構である L32-1, G33-10で認められている。特に L32-1 のカワラケは他の糸切り底の破片と同様、二次焼成を受けており、確実にこの時期にとまなうことは明らかである。ただしこれ以前の例えば「池」などからは1点の出土もない。おそらく17世紀でもその後半の段階で次第に明らかになっていくものと思われる<sup>6)</sup>。18世紀に至るとやや出土点数も増す傾向にあるが、17世紀と同様、出土する割合は高いものではない。確認できた

## 第V章 考察

としてもいくつかの遺構から、1・2点程度得たにすぎない。例えばカワラケが多量に確認できたF34-11でも、わずかに小片を1点確認できたにすぎない。大ききの点からいえばなかにはL34-1の38のように口径が7寸近いカワラケもあるが、ほとんどの破片は3寸5分～4寸5分のものである。3寸前後の小型の製品はいまのところ得ていない<sup>7)</sup>。上田氏はこのようなタイプのカワラケをI aとして18世紀中葉の年代を与えていたが、この地点のカワラケを検討するかぎり、17世紀から18世紀にかけて継続して用いられていたようである。

形態的にはそれほどの違いはないが、17世紀と18世紀では特に器壁の厚さに違いがあるようである。例えばL32-1のほとんどの破片は1-2mmの厚さしかなく非常に薄いつくりであったが、ほぼ同じ大きさのカワラケを比べた場合、18世紀では3-4mmの厚さのものがほとんどである。特に底部の厚さでこの違いが明らかとなる。また17世紀のカワラケは器壁が非常に薄いため、口唇の尖ったものであり、18世紀になるとわずかに厚くなったためか口唇の先端が円くなるものも見掛けられるようになる。特にこの傾向は5寸以上のカワラケに顕著である。19世紀になると器壁の厚さはさらに厚くなり、18世紀でも認められたように底部でその差が明瞭となる。ただし口唇は特に皿型の場合、先端の尖ったものであり、17世紀以来の伝統をそのまま引き継ぐかのようなものである。H21-1のカワラケはこの点に関する好例となる。Z37-1では皿型以外に碗型(17)が、H21-2では耳皿も確認されている。伴っている陶磁器は19世紀とされており、これらのカワラケも内側底部周縁に凹線がなく、口唇形も類似していることから、ほぼこの時期に位置づけられると考えられる。皿以外に様々な器種があり、さらに耳皿の存在から飲食器としての機能が想像される。おそらく特殊な用方をされた儀礼用のカワラケであろう。

以上このような器壁の薄い系統のカワラケ以外に、K30-1では上田氏がI dとして位置づけた厚い系統のカワラケも出土している。底部に「渦糸切り」に似た同心円状のヘラ(?)による調整痕<sup>8)</sup>をもつのが最大の特徴である。糸切り底のカワラケと同様に見込み周縁に凹線が認められるのも特徴となる。また胎土もいくぶん荒いようである。2号組石では“小壺”“手壺”としたカワラケ(221, 243)も出土しているが、特に221には底部に「渦糸切り」に似た調整痕が認められ、また底部周縁に凹線があることから、ほぼこの時期の皿型と対応する碗型のカワラケと思われる。243はこのような特徴は認められず、上述の器壁の薄い系統のカワラケに類似している。他に出土例もなくよくわからないがあるいは221とは時期的に異なる可能性もある。2号組石からは多くのこのような「渦糸切り」に似た調整痕をもつ上製のカワラケを得ているが、時期的には以上のように不確かであり時期が抑えられるのは、K30-1の2点とC28-4・5の1点のみである。確かに上田氏の言うように、3点とも18世紀前半の遺構から出土している。ただし上田氏はI aとした上述のカワラケとの時期的な差異を強調しており、上述のカワラケより一段階古い位置づけを行っている。すでに述べてきたように少なくとも器壁の薄いカワラケは、17世紀後半から19世紀にかけて継続的に出土しているのであり、18世紀前半では共存していた可能性が強い。すなわち、いまのところ筆者はそれぞれのカワラケは別系統の上製のカワラケと解している。

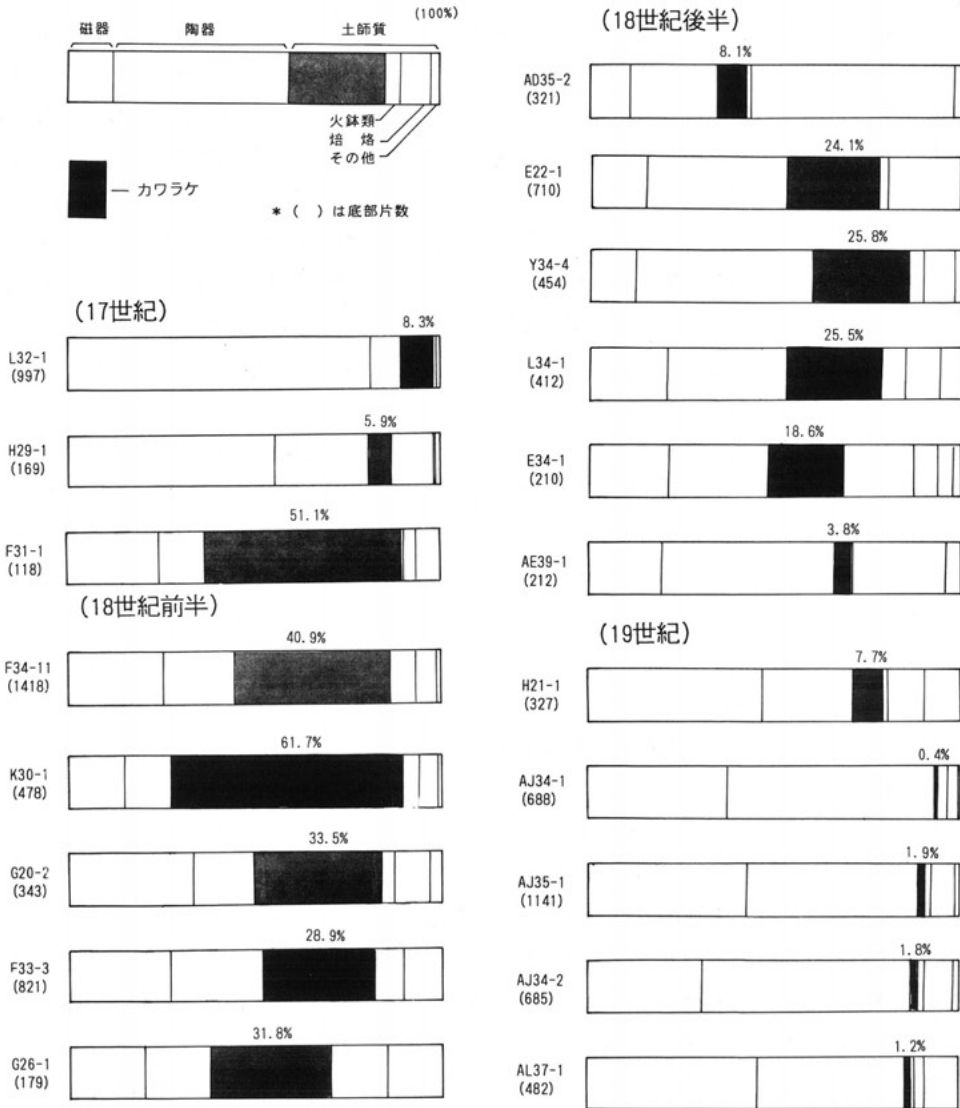
19世紀前葉はこのように上製のカワラケで特徴づけられたが、19世紀中葉を中心とした藩邸跡のカワラケは遺構が極端に少なくことも重なり、ほとんど認められなくなる。上述した流れ込みの間

#### 第四節 江戸時代のカワラケの動態と推移

題もあり明確ではないが、上製のカワラケおよび5寸以上の大型のカワラケもはっきりしなくなるようである。確認されたところでは、19世紀前半のものとよく似た3寸前後の小型のカワラケばかりが確認されている。形態的には前葉のものとほとんど差はないようである。

### 2 時期別出土比率について

遺構別の出土比率はすでに第IV章でもその都度述べているが、ここではその点を要約して述べ、1と別の角度からカワラケの時期別の出土の傾向を抽出してみたい(V-4-1表)。ただしこのような出土比率は流れ込みなどさまざまな問題もあり、第IV章でも指摘しているように、大略を示してい



V-4-1表 カワラケの出土比率



## 第V章 考察

るにすぎない。算定方法については第IV章で述べている。筆者は陶磁器、土器類を含めて100点以上確認された遺構についてこの算定を試みたが、ここで示しているのは、その中でも各時期を代表すると考えられる遺構のみである。ほとんどが地下式坑など、土坑出土のカワラケであり、他の遺物とともに一括投棄されたと考えられるカワラケである。遺構ごとに比率のバラツキも考えられたが、予想に反して、時期ごとの比率の割合が一定する傾向が認められた。ここではこのような各時期に認められた傾向性について述べることにする。ただし「池」出土のカワラケはこのような様相を示さず、ほとんどの遺物がカワラケである。すでに指摘しているように、廃棄の仕方があまりにも特殊であり、この算定では「池」は除外してある。少なくとも他の17世紀の遺構ではこのような出土傾向を示していない。17世紀の遺構は出土点数が100点に満たないものが多く、様相が分かるのは17世紀でもその後半代からである。

17世紀のカワラケは形態的に大きな変化が認められたが、陶磁器、土器ともに出土点数はそれほど多いものではない。わずかにL32-1, H29-1, F31-1でこの時期の様相が辿れるだけである。ともに17世紀第4四半期に位置づけられる遺構である。L32-1は右・左両回転の、H29-1, F31-1は左回転の糸切り底のカワラケで構成されている。右回転のカワラケが伴っていることから、L32-1が古く位置づけられる可能性もあるが、この時期、右回転のカワラケは少なくなる傾向にあり、あるいは同時期でも出土しないことも考えられる。出土した左回転のカワラケの形態はH29-1, L32-1, F31-1ともに同形態であり、ほぼ同時期にとらえられそうである。H29-1, L32-1ともカワラケは10%に満たない出土比率であり、「池」がおそらく90%以上の比率と考えられているのと対称的である。一方、F31-1は若干異なり50%を越える比率であり、18世紀前半的な様相をしている。例外的な遺構である。17世紀は確認された遺構も少なく明らかではないが、他の遺構の出土資料を検討しても出土点数は少なく、一般的にみて17世紀後半の出土比率は高いものではない。「池」の場合、時期的な差異も関係するかもしれないが、これらの結果からみても、やはり特異な出土状況であることが理解される。

このような様相から脱却し、カワラケの出土比率が高まるのは、F34-11を始めとする18世紀前半である。F34-11~G26-2がこの時期に相当する。特にF34-11, K30-1など18世紀でも初頭に近い年代の遺構では、40%を越える高い比率を示している。17世紀後半にさまざまな口径のカワラケが出現する傾向が認められたが、この時期F34-11で分かる通り、カワラケは2寸から4寸5分までの範囲にほぼ間断なく分布している。器種的にはほぼ出揃ったことが考えられ、この点と高い出土比率が互いに関連し合うと考えている。基本的にこの出土比率の高い傾向は18世紀前半を通して認められる現象である。17世紀に位置づけられるF31-1は器種構成とともに、出土比率もほぼ18世紀前半の傾向を示したが、あるいはこのような動きに関連したものとも考えられる。18世紀前半を通して、細かな形態上の変化もあるものの、質・量ともにさまざまなカワラケがほぼ同じような状況下で生産され、そして用いられたことが考えられる。すなわち最もカワラケの需要の高まる時期としてとらえられる。G20-2, G26-1, F33-3など、それまでの比率の高い傾向を保っている。

この傾向に大きな変化が認められるのは18世紀後半である。ほぼAD35-2~AE39-1がこの時期に相当する。AD35-2は第IV章でも指摘しているが、特に焙烙の出土比率が高く、反対にカワラケの比

#### 第四節 江戸時代のカワラケの動態と推移

率が低い。このように遺構別の変異も当然考えなくてはならないが、それにしても前段階に比べ極端な減少が示される。カワラケのみ取り出せば、陶磁器から18世紀末～19世紀初頭に位置づけられる AE39-1とほぼ同じ10%以下の出土比率となる。これとは反対に E22-1, Y34-4 では前代から引き続き高い出土比率が示される。これらの違いは廃棄されたカワラケの違いにも関係するようである。3でもう一度述べるが、口径別にこれらのカワラケを検討すると、出土比率の高い E22-1, Y34-4 では3寸から4寸までのカワラケが比較的多く出土しているのに対し、比率の低い AD35-2, AE39-1 では3寸5分以下のカワラケがほとんどである。すなわち出土比率の少ない遺構では、3寸5分以下の小型のカワラケが主に廃棄され、比較的大型のカワラケは出土しない傾向にある。この現象は個々の状況に応じて当時のカワラケの利用の仕方に変化のあったことを推測させる。

大まかな理解ではあるが、18世紀前半に認められたカワラケの廃棄の在り方を継承するパターンと、小型の製品を少数廃棄するというパターンの二通りがあったことが、この18世紀後半に推定される。さらに18世紀前半のパターンを継承すると考えている遺構でも、わずかながらも出土比率が低くなっている点が注目される。E22-1, Y34-4の比率は30%以下となる。点数が少なく図示していないが、前者の遺構として E34-1, Y36-2 が、後者の遺構として Z37-1, AE35-3(?), AE35-11 がこれに相当すると考えている。

19世紀にはいと、カワラケの高い出土比率は示されず、18世紀後半の後者のパターンである AD35-2, AE39-1 の傾向をそのまま引き継ぐかのようなものである。H21-1, 2ではともに10%に満たず、カワラケの確実な減少が認められる。18世紀の後葉以降、瀬戸美濃系の徳利が異常とも言える増加を示し19世紀に入るとこの傾向は決定的なものとなる。したがって相対的に土師質全体の比率が低くなることも考慮しなければならないが、それにしてもカワラケ自体減少しているのは明らかである。この時期遺構別の出土点数が多くなり、さまざまの遺構の算定でもこの点が確かめられている。特に AJ34-1・2, AJ35-1 の出土比率は2%以下となる。この時期、18世紀前半の主たる構成要素であった4寸前後の比較的大型のカワラケが認められなくなり、小型のカワラケを主に、大型のカワラケがわずかに伴う点を指摘できる。AD35-2, AE39-1でも4寸前後のカワラケが確認されなかったが、この点を考え合わせると、このような器種構成の変化と出土比率の変化には密接な関連のあることが推測される。すなわち4寸前後のカワラケの減少が、出土比率に重大な影響を及ぼしたことが推測されたのである。またこの時期、カワラケの胎土・焼成などが良好なものとなり、完成度が高まる点を指摘している。その中であって上製のカワラケの増加を指摘したが、おそらくこの点とも関連する現象であろう。カワラケ自体非日常的な飲食器としての機能が考えられているが(藤原 1988)、この点からするとより一層非日常的なものへと変化することも想像されるのである。また逆に言えば、非日常的な活動の減少の一つにはカワラケの減少につながったとも考えられる。

19世紀もその中葉になると、遺構が極端に少ないことも重なり、カワラケはほとんど認められなくなる。AF35-1, AL37-1でわずかに出土しているが1%前後であり出土比率が極端に低いものとなる。19世紀前半に比べても出土比率はさらに低くなるようであり、18世紀後半からの出土点数の減少化の行き着いた姿であるようにも思われる。さらに流れ込みの問題もあり明確ではないが、上製のカワラケもはっきりしなくなる。この時期、カワラケは完全に他の陶磁器の客体的な存在となり、

## 第V章 考察

少なくとも藩邸では非日常的な使用に関しても、もはや用をなさなくなった器物であったことが推測される。以上のように、17世紀代の手捏ね、右・左両回転のカワラケの変化については、遺構数および出土点数が少ないせいもあり、必ずしも出土比率と対応した関係を示すことはできなかったが17世紀末?-18世紀初頭および19世紀に形態上の、主に器種構成の変化にほぼ対応した出土比率の変化が示せるように思われた。

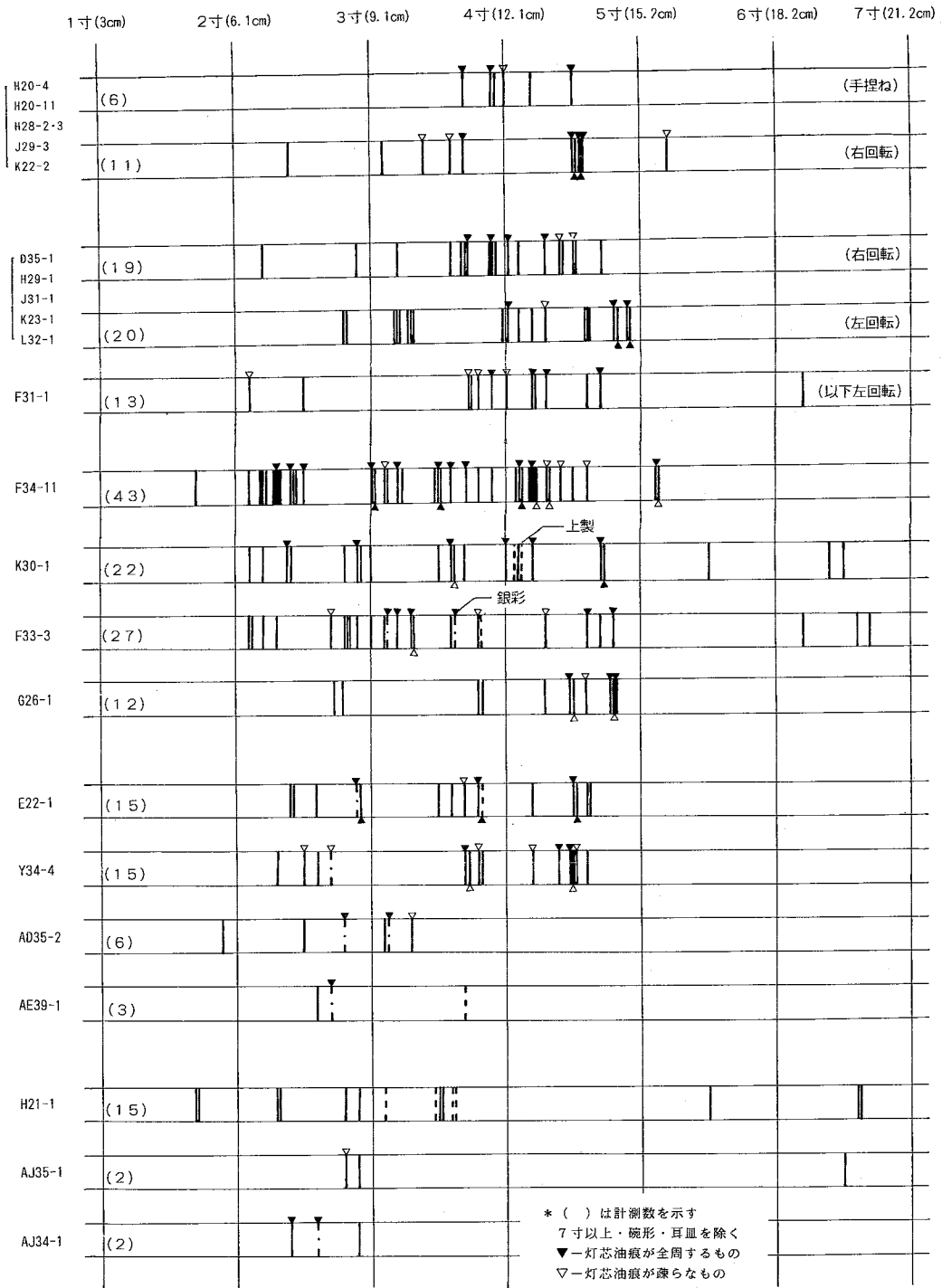
### 3 口径と灯芯油痕について

18世紀後半に4寸前後のカワラケの減少が示されたが、この点を灯火具の増加の現象と密接な関連のある点が指摘できる。この点をもう少し明らかにするため、遺構出土の完形品による口径比および灯芯油痕との付着の割合からもう一度検討してみたい。V-4-2表はそれぞれの遺構出土の完形もしくはそれに近いカワラケの口径を表したものである。それぞれの時期を代表する遺構出土のカワラケを示しているが、17世紀は個体数も少なくいくつかの遺構出土のカワラケを合計して示している。カワラケは多数出土しているにもかかわらず、完形でしかも口縁の灯芯油痕の状態が分かるものは少く、V-4-1表と同様、大略を示しているに過ぎない。しかし破片を検討する限りにおいても、それぞれの遺構の概要はほぼ掴めているものと考えている。なお三角形の白抜き、黒塗りはそれぞれ灯芯油痕の疎らなもの、全周するものを示している。また上製と銀彩を施されたカワラケもそれぞれ一点鎖線、破線で示している。

17世紀の前半の「池」出土のカワラケはほとんど“食器”に関連したものとされ、事実灯芯油痕の付着するものは、確実には右回転糸切り底のカワラケの1点しか認められていない。「池」出土のカワラケを除くと、この時期のカワラケは数的に非常に限られており、表では陶磁器によるI期のH20-4-11, H28-2-3, J29-3, K22-2を合計し、II期としてD35-1, H29-1, J31-1, K23-1, L32-1をそれぞれ合計して示している。この時期では1で述べたようにカワラケに最も変化が認められるのであり、I期では手捏ねと右回転糸切り底が、II期では左・右両回転糸切り底から構成されている。両時期ともバラツキはあるものの、ほぼ4寸から5寸のところに分布する傾向にあるようである。当然のことながら、灯芯油痕の付着するカワラケもこの範囲内に入る。ただしII期に併行するカワラケは左・右両回転によるカワラケともバラツキの程度がやや激しくなるようであり、さまざまな器種が現れ、続くF34-11を代表とする18世紀初頭にスムーズに連なるものと思われる。

「池」以外で最も出土量の多い18世紀初頭のF34-11のカワラケは、ほぼ2寸5分から4寸5分付近まで間断なく分布している。ただしそれ以上である5寸以上のカワラケは、6寸以上に至るまで疎らな分布である。灯芯油痕は2寸5分前後のカワラケにも認められるが、出土量に比べそれほど多くはない。3寸以下のカワラケを見た場合、15点中3点のみしか付着していない。大多数は3寸以上、5寸5分以下のカワラケに限られるようである。油痕の付着するカワラケは28点中18点である。灯芯油痕の付着するカワラケのみを取り出せば、17世紀後半の傾向をそのまま引き継ぐようである。3寸以上の口径のカワラケに油痕の付着する傾向はK30-1を経て、E22-1, Y34-4まで追認することができる。したがって灯火具として用いられたカワラケは、3寸から5寸にかけてのカワラケを意識的に抜き出して用いたことが考えられる。ただし表でわかるように、灯芯油痕の付着するカワ

第四節 江戸時代のカワラケの動態と推移



V-4-2表 カワラケの口径と灯芯油痕の付着例

## 第V章 考 察

ラケは、19世紀に近づくにつれ、徐々に姿を消す傾向にあるようである。そして2の出土比率の項でも述べたが、この時期、4寸前後のカワラケも姿を消す傾向にある。すなわち出土比率の減少とともに、この口径のカワラケの減少が灯火具として用いられたカワラケの減少に結び付くようである。

この18世紀後半には4寸前後のカワラケの出土がなく、小型のカワラケのみを出土し、出土点数の多くないAD35-2, AE39-1がある。灯芯油痕の付着したカワラケはAD35-2, AE39-1で、それぞれ3点、1点の確認である。3寸以下のカワラケにも油痕の付着したカワラケが分布し、上述の点とやや矛盾するようにも思えるが、実はAD35-2の場合、3点中2点までは銀彩の施されたカワラケである。ここではこの銀彩の施されたカワラケについて気づいた点をいくつか触れておくことにする。

銀彩の施されたカワラケはF34-11では明らかでなく、藩邸内で確実にするのは、F33-3に併行する18世紀前半でも、陶磁器によるV期からである。F33-3では3寸および3寸5分のカワラケが1点ずつ出土しており、F33-3とほぼ併行するY37-3, G20-2でも出土している。これ以降は目に止まる機会も増し、問題もあるものの19世紀までほぼ追認することができる。この形態のカワラケは上製と同様、出土量は決して多いものではないが、いくつかの特徴によって他のカワラケと明確に区別することができる。銀彩が施されるのはもちろんであるが、同じ口径のカワラケに比べ器壁が厚く、内側底部周縁の凹線がないか、ほとんど認められていない。18世紀前半では3寸以上のものもあるが後半にいくにしたがってそれ以下がほとんどである。また器形としては第四章で“透明釉油皿”とした灯火具によく似ている。器形ばかりでなく、最も大きな特徴としてすべてのこの形態のカワラケには灯芯油痕が巡っていた。別稿を準備する予定でいるが<sup>9)</sup>、18世紀から素焼系灯火具の受付・有脚受付などが、志戸呂系灯火具とともに、出土する割合が高まる傾向にある。そしてこれら素焼の受付・有脚受付ともに銀彩の施されたものも多い。すなわちカワラケの項で扱ってはいるもののこれらとセットになる“油皿”として機能した灯火具と考えている。これら銀彩の施されるカワラケは他と異なり、明らかに当初から灯火具の目的で作られたことを示している。

銀彩の施されていないカワラケとは少なくとも18世紀を通じ共存していたことになり、カワラケの大多数を構成するこのような糸切り底のカワラケが、当初から“灯火具”だけを目的で作られたかが、疑問に思えてくるのである。近年、無造作に灯芯油痕の付着したカワラケをそのまま“灯火具”とし、あたかもその目的でつくられたかのような考えを度々目にする。確かに白戸氏(1988)の言うように、油痕の付着しないカワラケが油皿に対する受け皿の役割を果たし油痕の付着しない可能性もあり、また『類聚雑要抄』(埴保己一編『群書類従雑部』1865所収)の記載には「油坏三寸五分」とあり、明らかに灯火具として用いられたカワラケの存在を示している。出土したカワラケを検討しても、灯芯油痕の付着したカワラケは4寸前後に多く、ほぼこの記載を裏付けている。

ただし4寸前後とはいうものの、この時期にはさまざまな口径のカワラケが現れるのであり、表でわかるように、3寸以下のカワラケにも灯芯油痕が付着している。また1点のみであったが、Z35-5では耳皿に灯芯油痕の付着した例もあった。耳皿は“箸置”を目的に作られたのであり、明らかに飲食器からの二次利用の例となる。このようなカワラケの存在は、当初から灯火具を目的としてこのようなカワラケを使用したというより、他の目的で用いられたカワラケの中からいくつか選びだし、灯火具として再利用したことが考えられる。他の目的とはおそらく、「池」出土のカワラケ

#### 第四節 江戸時代のカワラケの動態と推移

と同様、ほとんどが非日常的な飲食器にあると考えている。4寸前後に多いものの、油痕の付着するカワラケの口径が一定せず、バラツキが多いのもそのためかもしれない。例えば H20-11では「池」と全く同じ形態の手捏ねが出土しているが、うち2点は灯芯油痕が口唇を全周していた。意識的に使い分けていたか、あるいは“飲食器”として使用され、その後“灯火具”として二次利用された可能性が考えられる。ほとんどが飲食器に用いたと考えているが、いまのところカワラケは用途に応じ、さまざまに用いられたと解すべきであろう。

18世紀を通じ4寸前後のカワラケも姿を消す傾向にあることはすでに述べたが、19世紀になるといままで概観してきたように、3～5寸のカワラケは確認できず、あたかもカワラケは小型と大型に分化する傾向にあった。そしてこれらのカワラケに灯芯油痕は付着しない。H21-1がその好例である。AJ34-1で3寸以下のカワラケ2点に油痕が付着しているが、1点は明らかに銀彩の施されたカワラケである。このようにこの時期ではカワラケの減少が示されるばかりでなく、それに加え灯芯油痕の付着するカワラケも少なくなる傾向にある。この点についても述べる予定でいるが、カワラケの減少傾向とは逆に、18世紀末頃より透明釉系を中心に灯火具の爆発的增加がこの藩邸内で示される。特に19世紀に入ると個々の遺構からかなりの点数がまとまって出土する事例が増加する。なお鉄釉系および少し遅れて灰釉系がその増加に加わるようである。このような18世紀末からの灯火具の量的増加は、以上のようなカワラケの減少傾向と相補的な関係にあると考えられ、19世紀に入ると、少なくとも藩邸内ではカワラケがもはや灯火具としても用いられなくなる傾向が窺われるのである。灯火具の出現がその目的に用いられたカワラケの減少を招くのか、カワラケの減少が灯火具の出現を促すのかは不明とせねばならないが、19世紀前半では、先ほど述べた灯芯油痕が最も付着する4寸前後のカワラケとの関連が注目される。

ところでこの19世紀にまで確認できる3寸以下のカワラケ以外に6寸（5寸5分?）以上のカワラケがある。そしてこの大きさのカワラケには全期間を通じ灯芯油痕の付着はない。この点は破片の検討からも明白であった。この大型のカワラケの用途としてF33-3出土の133では明らかに“地鎮具”としての用途が考えられたが、北原・谷川両氏(1989:93-100)がいうように、“胞衣納め”として用いられたカワラケもあったことが考えられる。H23-3ではこのような大型のカワラケこそ出土しなかったが、明らかにその用途に用いたカワラケが出土しており、この藩邸でもこのような習俗が続いていたことが確認されている。19世紀に入ると、カワラケは極端な減少を示す点を指摘したが18世紀代とは異なり、このような大型のカワラケで示されるような何か別の機能を負おわされたカワラケのみが細々といきながらえたのではないだろうか。この時期、減少の中であって上製のカワラケの増加の傾向を指摘したが、このような特別の儀礼用と考えられるカワラケが目立つ点は、そのことを暗示させている。

#### 4 まとめ

陶磁器に比べ、等閑視されがちであるカワラケなどの土器類は、近年ようやく注目されつつある(小林 1988など)。その理由として、これら土器類は使用期間が短く近くでしかも大量に生産されたため、詳細な時期決定を行いやすいと考えられていることにあるらしい。しかし実際は焙

## 第V章 考察

烙はともかくとして、カワラケは考えられているよりはるかに変化に乏しいようである。その中でも大聖寺藩邸跡の17世紀代のカワラケは注目に値する変化であるように思われた。手捏ね・右回転糸切り底の一群から、左・右両回転による糸切り底を経て、左回転糸切り底のみへの変化は、ただか半世紀の変化であり、筆者が知る限りにおいても急激な変革である。陶磁器から判断して、1650年を中心とした時期に起こった現象と考えられる。右回転のカワラケとともに出土する左回転のカワラケのつくりの雑な点、以後さまざまな口径の出現することを指摘したが、これらの点と考え合わせると、たんに切り離し技法のみの変革に止まらず、生産技術その他のさまざまな問題を孕むものと考えられる。中世からつづく生産工程の、さらにいえばロクロ技術の一大改革がこの時期に起こったことも想像される。生産・消費・流通など、当時“元禄”という繁栄期に向かいつつあった近世社会の一断面を見るような気がしてならない。

残念ながら、この時期の資料は少なく、わずかに大聖寺藩邸跡に近い理学部7号館地点の報告例(羽生 1989:364)があるにすぎない。理学部の2, 85号土坑では17世紀中葉のカワラケが得られているが、これらのカワラケは左・右両回転の糸切り底である。続く17世紀後葉の1, 9号土坑出土のカワラケは、すべて左回転糸切り底であり、大聖寺藩邸跡出土のカワラケと同じ変化が辿れそうである。ただし理学部・御殿下記念館地点とも、手捏ね・右回転糸切り底のみで構成される一群は確認できていない。大聖寺藩邸の「池」から大量にこの時期の遺物を得ており、他の遺構でもおぼろげながら確認できたが、「池」は特殊な事例でもあり、はたしてこのまとまりが妥当なものであるのかは今後の課題である。御殿下記念館地点では1087遺構で、右回転のカワラケから構成される一群が確認されているが、残念ながら手捏ねは伴っていない(鈴木 1989)。しかし大聖寺藩跡とは異なりこの地点には17世紀後半まで手捏ねが残存しており、1087遺構の廃棄される段階に手捏ねがなかったとは考えられず、なんらかの事情により、ともには廃棄されなかったものと考えている。ともあれこのような手捏ね、両回転による糸切り底で示される変革が藩邸周辺の地域でも、確認できるかどうかという点も、今後の課題としなければならないようである<sup>10)</sup>。18世紀以降の資料は近隣遺跡の報告例も増し、比較の様相が明らかである。藩邸内では、左回転糸切り底のカワラケに圧倒された時期である。ただし切り離し技法まで指摘している報告は少なく、新宿区三栄町遺跡(渡辺志 1988)、理学部7号館地点などわずかな報告例があるにすぎない。これらの報告を検討してみても、この時期以降では左回転糸切り底のカワラケが圧倒的になるようである。またこの時期、底径が小さいものとなり口縁が緩やかになる傾向を指摘したが、この点についてはすでに上田氏<sup>11)</sup>、小林・菅沼・両角氏(1986)、羽生氏(1989)などの角度を変えた指摘もある。

藩邸内の他の特徴としてこの時期さまざまな口径のカワラケが確認されている。細かには述べないが、港区郵政省飯倉分館構内遺跡(港区麻布台一丁目遺跡調査団編 1986)のS区、文京区真砂遺跡(真砂遺跡調査団編 1987)の116, 141号土坑、19号地下室などでこの点を追認できそうである。19世紀前半の小型化の現象に関しては、千代田区平河町遺跡(千代田区教育委員会・四番町歴史民俗資料館編 1986)の9号土坑に好例がある。本来ならば、これら周辺遺跡とも十分な比較検討を行わなくてはならないが、近世、江戸研究はまだその緒についたばかりであり、資料的にも十分ではなく、比較が困難なのが現状である。また陶磁器に比べ、あまり重要に扱われていないのも事実で

#### 第四節 江戸時代のカワラケの動態と推移

ある。このような問題以外にも紙数上の都合もあり、ここでは大聖寺藩邸出土のカワラケの変遷の概略を指摘するに留めている。この点に対する比較検討は、註に述べている問題も含め、いずれ別稿を準備するつもりである。

#### 註

1) Y34-4 と AD35-2ではほぼ同類の焙烙が確認されている。焙烙から判断すると、E22-1よりわずかに古い可能性があるものの、ほぼ同時期と考えている。ただし陶磁器の判断によると Y34-4 と AD35-2とでは年代差があり AD35-2を一段階古く位置づけている。ただし焙烙・カワラケとも Y34-4, AD35-2, E22-1では類似性の強いものであり、ここではこの点を重視し、焙烙の年代に従っている。IV章を参照されたい。

2) なお「池」の39, 40については、これと類似したものは他の遺構では確かめられていない。もちろん右回転のカワラケであるが、以上述べたカワラケの色調が赤褐色であるのに対し、灰白色であり胎土も非常にわるい。器面の調整も粗く、明らかに他の右回転のカワラケとは異なっていた。IV章で“へそカワラケ”とした 47, 48などに胎土・焼成等が似ており、糸切り底である以外は手捏ねと共通する部分が多い。しかも「池」ではある程度まとまりをもった確認である。通常の右回転のカワラケとは別系統のカワラケと考えられ、いまのところどのように位置づけてよいのか、筆者には理解できていない。

3) 御殿下記念館地点の 532号遺構はほぼ K23-1に対応する遺構であり、17世紀の中葉の遺物が確認されている。カワラケも相当数見られるが、手捏ねが数点あるほかは左・右両回転の糸切り底のカワラケである。本地点の左・右両回転のカワラケは器形・胎土などが異なり、すぐに見分けがつかないが、532号遺構のカワラケはともに近似した形態であり、見分けのつかないものが多い。K23-1の9に類似した左回転糸切り底のカワラケも出土している。詳しくは鈴木裕子氏の分析に譲るが、おそらく左回転の仲間でも最も古く位置づけられ、少なくとも周辺では左回転糸切りによるカワラケはほぼこの頃に出現したと考えている。なお両回転の糸切り底のカワラケの存在は最初に上田氏、羽生氏が注目し、鈴木氏は左・右両回転のカワラケの共伴について触れている(1989)。

4) “度”に関してはさまざまに論じられているが未だに決めかねているのが現状のようである。文献資料の中で、よく用いられている資料に『山城幡枝の土器』(島田 1930)と『貞丈雑記』があるが『雑記』で“三度入”とあるカワラケは『幡枝の土器』では径4寸5分のカワラケとなっている。長瀬氏(1985)、上田氏(1988)も、ほぼこの4寸ほどのカワラケをさして“三度入”と解しているようである。F34-11でいうなら3寸5分から4寸6分前後のカワラケがこれに相当しよう。また1寸9分～2寸5分は、両氏いうところの“大重”“小重”(あるいは島田氏いうところの雛?)となり、3寸～3寸2分は長瀬氏のいう“あいの物”となろうか。ただし『雑記』には“三度入”のカワラケをさして、“盃に用ゆるかわらけなり”とあり、島田氏のいう4寸5分ではいかにも大きい。幡枝のカワラケは手捏ねによるもので、底の浅いものであり、“盃”としては適当な大きさかもしれないが藩邸出土のカワラケはすべて糸切り底によるものであり底が深い。このようにカワラケにも時期的・地域的に大きな相違があり、なんらかの規格性があつたことは疑う余地はないが、一概には決められないのが現状のようである。他遺跡との比較を含め、もう一度検討するつもりである。



## 第V章 考察

- 5) 藩邸からは17世紀末より、19世紀にかけての焙烙の良好な資料が得られており、ほぼその形態的な変遷が辿れることになった。時期をおって口縁が短小化し、ケズリの位置が底部側に移行することに変化がみられる。陶磁器によるⅢ～Ⅸ期に相当する焙烙である。これらの変遷については遺物の項でもわずかに触れているが、他遺跡の比較等を含めて、早急に論考を作製する予定でいる。
- 6) 御殿下記念館地点の17世紀中葉とされる532号遺構から完形に近い上製のカワラケが得られている。L32-1のそれに比べ器壁が厚い点などいくぶん異なるが確実にこの系統に属するものである。御殿下記念館地点では同じ17世紀後半の、ほぼL32-1に併行する678, 391号遺構でも認められている。鈴木氏の教示による。
- 7) 表採ではあるが、藩邸周辺から径3寸前後の、おそらく19世紀代の上製のカワラケを得ており小形のカワラケも存在した可能性もある。調査地点からは破片を含めて、確実な出土はない。
- 8) 上田氏はこれら「渦糸切り」に似た調整痕に対し、櫛状の工具を想定しているが、筆者の観察によれば明確にこのような工具によると思われるものはなかった。したがってここでは先端の尖ったヘラ状の工具を想定している。
- 9) 藩邸内では18世紀に至って、ようやく灯火具がはっきりする。ただし18世紀前半では素焼、志戸呂系のみを確認であり、点数もそれほど多くはない。18世紀も後半に至って透明釉を中心として灯火具の爆発的増加が示される。このような出土傾向とともに、変遷についてもいくつか明らかになった点があり、この点についても稿を改めて述べることにしたい。
- 10) 青戸・葛西城址(長瀬 1975)でもおそらく「池」とそれほど時期的に隔たらないと考えられるのⅣ区濠址のMf層を中心に、カワラケが多量に確認されている。構成は手握ねとそれを用いた「耳かわらけ」、および「出土量の1%にも満たない」「左回転」と「99%以上を占める」「右回転」糸切り底のカワラケからなっている。左回転の糸切り底のカワラケが混じり、形態的にも大きく異なるがほぼこのような傾向が追認できそうである。なお葛西城址出土の左回転のカワラケはA-6類、B-7類とされ、ともに「K-15かわらけだまり」からの出土である。藩邸内からこれに類似したカワラケの明確な出土はない。ただし「池」から、特にB-7類に類似するらしい左回転糸切り底(?)の底部の小破片を1点得ている。当初流れ込みとも考えたが、胎土・焼成等が大きく異なり、砂粒質であり、つくりが粗く目の粗い糸切り痕を残す。いわゆる「江戸系」のカワラケであるらしい。1点のみの出土でありはっきりしないが、17世紀前葉でもある特定の器種にのみ「左回転」を施した可能性もある。ただし葛西城址、「池」ともに例外的な存在であり、「江戸系」自体がこれ以降、消滅する傾向にある。また16世紀中葉の江戸城竹橋門内出土のカワラケは確認された限り、すべて右回転の糸切り底のカワラケとされる(森 1989, また森氏の教示による)。したがって全体としては、本文に即した流れとなる。なお客体的な存在にしろ、このような「江戸系」のカワラケは中世から近世の変遷を考える上で、今後極めて重要な視点を与える可能性が強い。ところで19世紀まで左回転のカワラケが主流であったが、確認できた限り近年までこの傾向が続いていたらしい(宮沢・小林 1988, 小川 1989b)
- 11) 上田氏の教示による。氏はこの点を「東京大学法4号館・文3号館建設予定地のカワラケ」として、86年の東京大学考古学研究室談話会のレジュメに記している。

## 第五節 刻印からみた焼塩壺の系統性について

—東京大学構内遺跡病院地点出土資料を例に—

小川 望

### 1 はじめに

東京大学構内遺跡中央診療棟地点、設備管理棟地点、給水設備棟地点他の医学部附属病院地区内の各調査地点（以下本地点と総称する）から出土した焼塩壺は、最小個体数にして蓋が約 340点、身が約630点という膨大な量に上る。またその種類も豊富で、これまでに報告されたものの大半は本地点から出土したもののなかに見ることができる。

焼塩壺は近世の土器のなかでは比較的古くから注目されてきたものであるが（高橋 1928, 前田 1931）、それは主にその刻印の存在に負うところが大きい。つまり、その刻印（押印）の印文によってこれが文献史料上に現れる焼塩壺製造業者（壺塩屋）の製品であるということが知られるからであり、またこうした文献史料と刻印の印文という文字資料とを対比検討することによって特定の刻印が捺された製品の製造された時期を推定することができるのである。こういうことから、この焼塩壺が近世の遺跡の調査において一つの年代の物差しとして扱われるようになってきている（佐々木 1977b, 渡辺 1983, 小川 1987）。しかし、焼塩壺に関しては未だに解決されなくてはならない多くの問題が残されているのが現状である。本地点の調査の結果、こうした問題の一端、特に系統性にまつわる諸相を明らかにしていくに足る資料が得られたと考えられる。以下不十分ながらも考察を試みる所以である。

### 2 刻印を中心とした概観

16世紀に創始されたと伝えられる精製塩である“壺焼塩”の壺＝焼塩壺は、17世紀に入ると考古遺物としてその姿をうかがうことができるようになるが、本地点でも近世の遺構の中ではもっとも古い時期に属する「池」遺構にその出土を見ることができる。この遺構からは17世紀前半、寛永六年(1629)の紀年銘をはじめ様々な内容の記された木簡、きわめて多くの木製品、カワラケなどが出土している。これらについては他でも述べてあるように、木簡の内容や文献史料の検討から將軍御成の祝宴に関わる一括遺物である可能性が指摘されている（藤本ほか 1987）。したがってこれらに混じって焼塩壺がまとも出土していることは、焼塩壺の性格を考えるうえでも重要である。

ここから出土した焼塩壺の蓋はそのすべてがア類に分類されるが、胎土、法量、器形に多くの差異が見られる。一方、身にも多様なものが見られ、全体の器形のわかるものだけでも I類 1, 2, 3の三種類が知られる(V-3図)。この遺構の遺物がほとんど時間差なく廃棄されたと考えられること、また焼塩壺というもの自身に考えられる伝世の可能性の低いことから、これら複数の種類の焼塩壺が併存していたと見られ、考古学的に知られる焼塩壺の比較的古い段階から壺塩屋に複数の系統が存在していたことをうかがわせる。

## 第V章 考 察

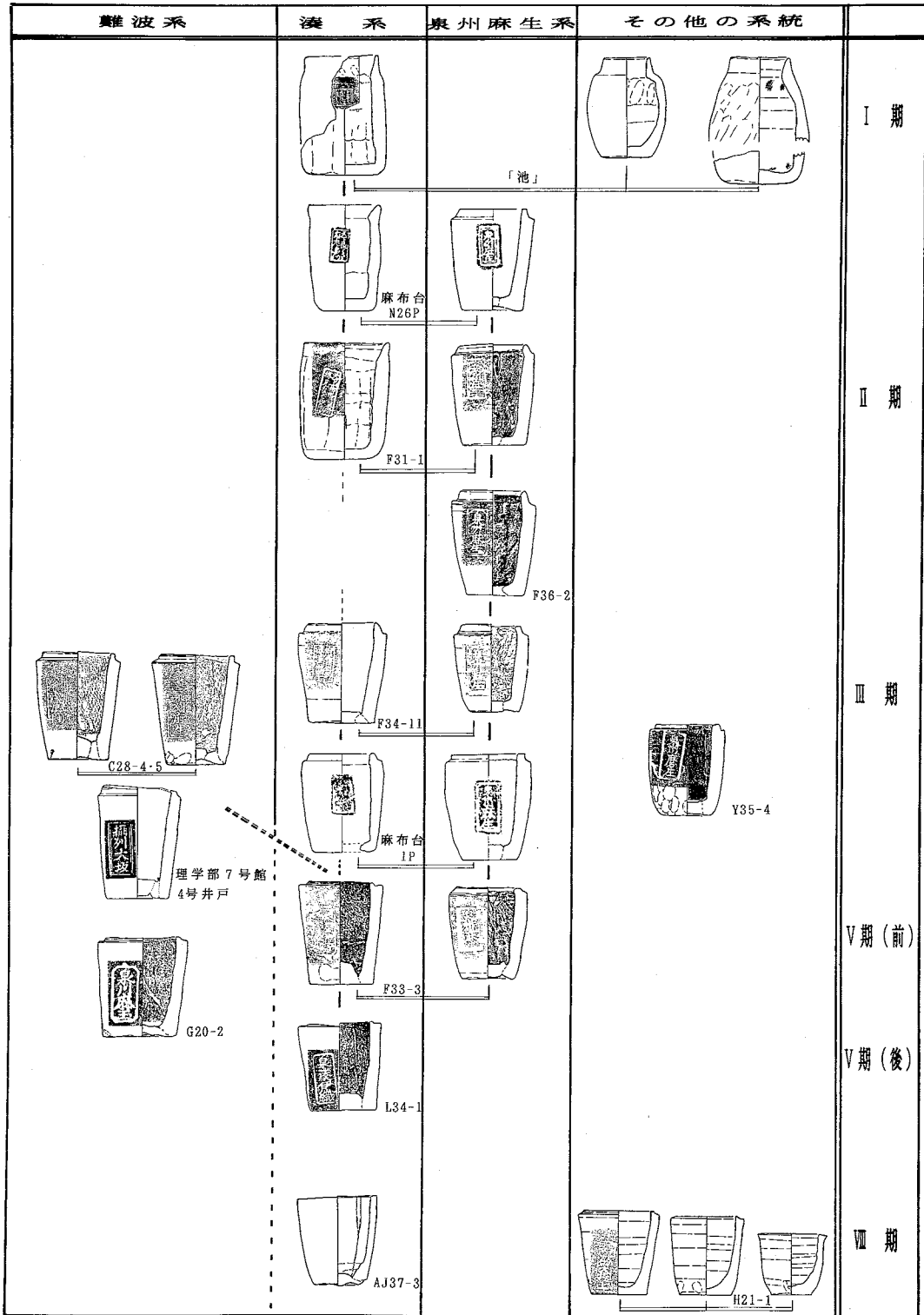
この三種のうちI類3の器形の身に「ミなと 藤左衛門」(2類1)の刻印を持つものが見られることは、刻印を持つ焼塩壺の年代を考えるうえで重要である。この器形を持ちながら刻印を持たない例が大阪府大坂城三の丸跡で出土しており、その年代は元和元年(1615)から元和六年(1620)の間に求められるという(大手前女子大学史学研究所 1982)。この両者が一つの系譜に属するものと思われるところから、少なくとも元和元年から寛永六年の間に刻印が捺されはじめたと考えられるのである。そしてまたこの時期に複数の系統の壺塩屋が競合するようになり、その結果商品の差異化のための刻印が捺されるようになったものとも思われる。

この「ミなと 藤左衛門」の刻印をもつ焼塩壺が、藤左衛門の系統といわれる壺塩屋(以下湊系と呼ぶ)の製品の一つであることは高橋艸葉氏から渡辺誠氏に至る研究史において明らかにされている(渡辺 1983ほか)。これらによれば、この刻印は天文年中(1532-54)に藤大夫によって始められた壺焼塩の系譜に連なる製品に捺されたもので、その刻印自体の始期は明らかでないものの、その後承応三年(1654)に天下一の号を許されて「天下一堺ミなと 藤左衛門」(2類2)に、延宝七年(1679)に伊織の名を拝領して「天下一御壺塩師 堺見なと伊織」(2類3)に、さらに天和二年(1682)幕府により天下一の号が禁じられるにおよび「御壺塩師 堺湊伊織」(2類4)に、その後「泉湊伊織」(2類5)と変遷したという。また途中大坂に支店が出され、難波屋の系統(以下難波系と呼ぶ)として「御壺塩師 難波浄因」(5類1, 6類1)を産み、のち「難波浄因」と変遷するといわれる(V-4図左)。

本地点からはこうした一連の焼塩壺の、「難波浄因」を除く全ての印文の刻印を持つ例が出土している。これらのうち文献史料により、刻印の暦年代が明確に知られるのは、「ミなと 藤左衛門」から「御壺塩師 堺湊伊織」までであるが、前者の始期と後者の終期は知られていない。しかもすでに指摘されているように(渡辺 1983)、刻印の印文からその連続性の追えるこれら一連の焼塩壺もその成形技法の面から見ると必ずしも連続しているとはいえない。第三番目の刻印である「天下一御壺塩師 堺見なと伊織」とこれに続くとされる「御壺塩師 堺湊伊織」との間にきわめて大きな成形技法上の断絶とも言える変化が認められるのである。すなわち、第一番目の「ミなと 藤左衛門」から前者までがI類の輪積み成形による筒状(ずん胴)のものであるのに対し、後者はII類の板作り成形の蓋掛り(蓋受け)のあるものであり、これ以後の「泉湊伊織」もこの成形技法、器形を持つものである。

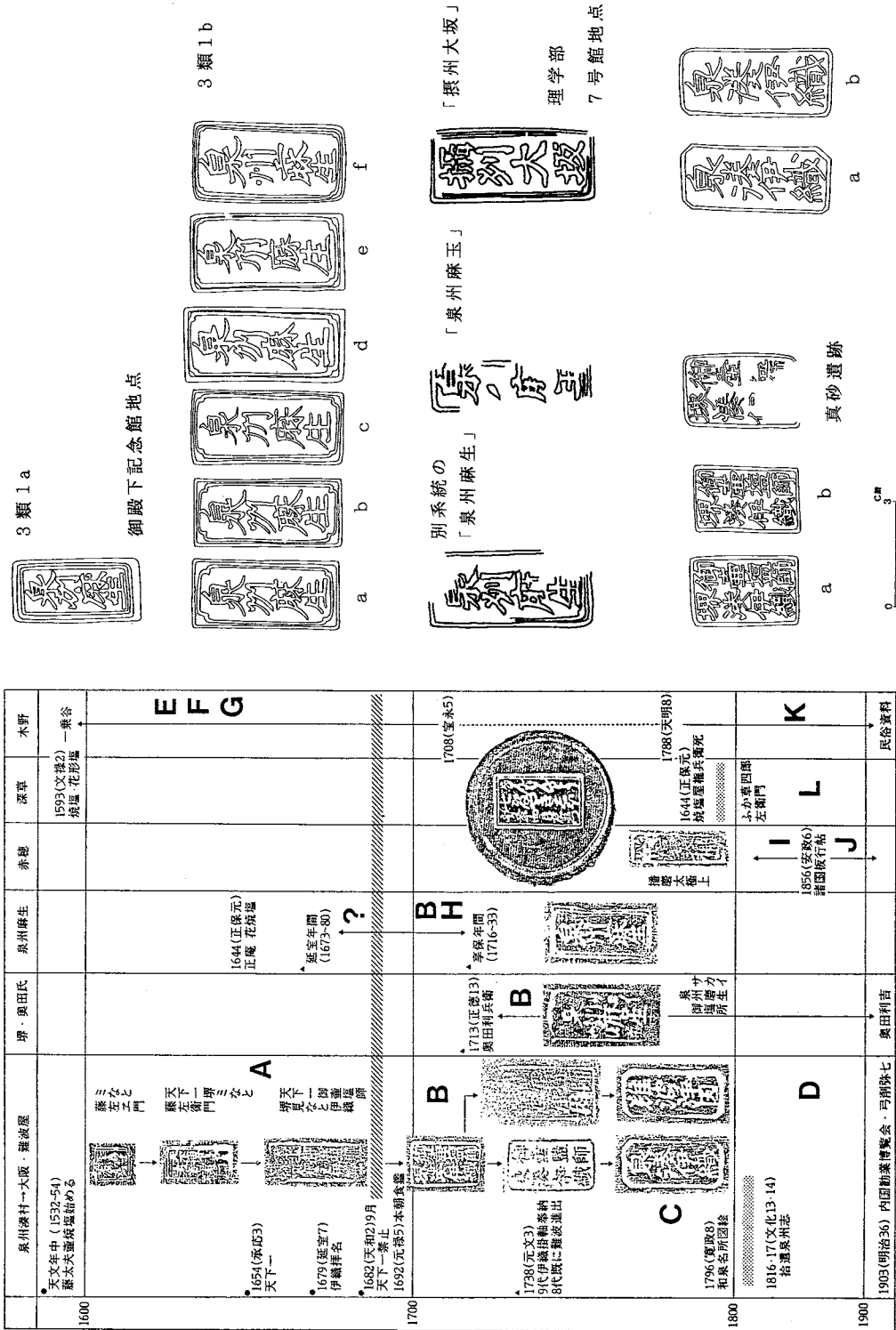
ここで時期を劃すとされる文献史料に目を向けると、「ミなと 藤左衛門」と「天下一堺ミなと 藤左衛門」、「天下一堺ミなと 藤左衛門」と「天下一御壺塩師 堺見なと伊織」のそれぞれの間を劃すのは「天下一」および「伊織」という称号の拝領であり、これはそのそれぞれを拝領する以前の刻印の廃止を意味しはしないものの、新たな刻印の始期を示すものと言える。またこうした拝名はおそらく壺塩屋にとっては一つの格付けとなるものであって歓迎すべきことであつたであろうし、あるいはこうした拝名がそれを目的とした工作の結果であつたとも思われる。したがってこの両劃期においてはそれまで継続していた刻印が廃されて新たな刻印へと連続的に移行したものと考えられる。ところがこの次の劃期、すなわち上で問題とした二者の間を劃すとされる史料は「天下一」の号の禁令である。これは天和二年七月に発布されたものであるが、その条文<sup>1)</sup>によると天下一の文字

第五節 刻印からみた焼塩壺の系統性について



V-3 図 焼塩壺の系統

第V章 考察

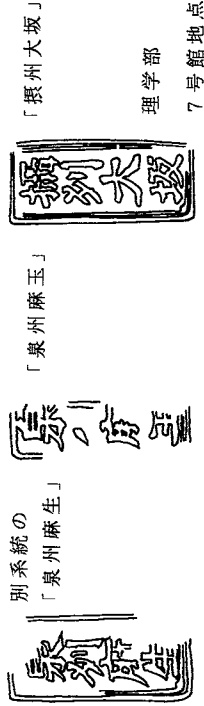
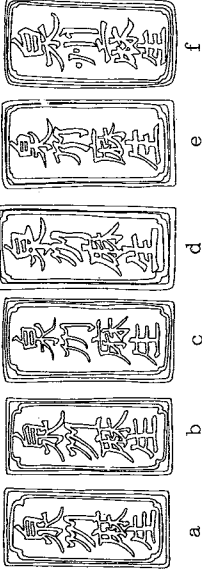


3類 1a



御殿下記念館地点

3類 1b



理学部 7号館地点



真砂遺跡



V-4図 焼塩童の刻印 (左: 渡辺 1988、右: 小川 1988 に加筆)

## 第五節 刻印からみた焼塩壺の系統性について

を書き付け、彫り付け、鑄付けることはもちろんこれまで使っていた鑑判、鑄型、板木、書付けなども削り取るようにという徹底したものである。そしてこの禁令が実効力のあるものであったことはこの年の八月に記されたという戸田茂睡の『御当代記』<sup>2)</sup>からも知られ(桑田 1956, 米原 1971), この禁令は「天下一御壺塩師 堺見なと伊織」の終期を示すとしても、「御壺塩師 堺湊伊織」の始期を示すものとは言えないのである。そしてそれぞれの刻印をもつ焼塩壺の間に見られる器形、成形技法上の断絶は前者の終期すなわち天和二年と後者の始期との間に時間の経過があったことを窺わせるものである。本地点の「天下一堺ミなと 藤左衛門」「天下一御壺塩師 堺見なと伊織」の出土する遺構や、その共伴する陶磁器から見るかぎりでは、こうした時間的ギャップを検証し得なかったものの、こうしたことから文献史料の利用による刻印の年代の推定が可能な範囲はほぼ17世紀代のうちに終始すると考えている。ちなみに大塚達朗氏は遺構内出土資料の検討から、この第二の成形技法であるII類の創出がこの湊系によってなされたとする従前の見方を覆す指摘を行ない、また刻印の型式学的検討から「天下一堺ミなと 藤左衛門」銘の枠線に見られる二重(2類2a)、一重(2類2b)の差異に時期差を認めている(大塚 1988)。なお、これらのほかにも東京大学構内遺跡御殿下記念館地点から17世紀代に属する焼塩壺が数多く出土しているが、中にはこれまでに類例の報告されていない器形、刻印を持つものも含まれており、17世紀代の焼塩壺に関して今後一層の検討が必要となろう。

18世紀の前半になると湊系の製品に加え「泉州麻生」(3類1)の刻印をもったものが多く見られるようになってくる。この「泉州麻生」を産み出した壺塩屋の系統(泉州麻生系と呼ぶ)の製品としての「泉州麻生」銘の焼塩壺は17世紀代にはすでに存在し一重枠「天下一堺ミなと 藤左衛門」との共伴が現在知られる湊系製品としては最も古い例である(菅沼 1986)。ところがこの系統の製品の年代については、文献史料から知られるところが少ないだけでなく、刻印の印文自身の年代の変異がなく、ただ器形や刻印の字体に変異が認められるのみである。そういう意味では17世紀代の湊系の製品に関して行なわれるのは異なった検討の方法が求められる。またこの製品には模倣と思われる類似の刻印を持つものが数多く存在し、18世紀代の焼塩壺の系統を巡る検討においても一つの鍵を握るものと思われる。この刻印を持つ製品およびこれと時期を同じくする湊系の製品である「御壺塩師 堺湊伊織」, 「泉湊伊織」の三者については次項以降で詳論する。

18世紀前葉から中葉に展開する湊系および泉州麻生系の製品ないしはその模倣と思われるII類、板作り成形による製品に対し、18世紀の後葉からはIII類、ロクロ成形の製品が次第に見られるようになり、19世紀にはいると焼塩壺のほとんどをこれが占めるようになる。このIII類の最も古い段階に位置すると思われる製品には刻印が見られるが、その後次第に刻印は見られなくなる。そしてこれと期を一にするように板作りの製品にも刻印が見られなくなる。このロクロ成形の製品に見られる「播磨大極上」(4類1)といった刻印の印文からすると、これまでの大坂周辺とは異なった地域の業者の参入がうかがわれる。ロクロ成形で刻印をもつ製品は量的に少なく、刻印の種類も少ないが、刻印を持たないロクロ成形の製品は量的にきわめて多く、その形態も多様である。また江戸の在地系の製品の存在も考えられるところから(宮沢・小林 1988)、やはり複数の系統の壺塩屋の存在が考えられるのである。このロクロ成形の製品に関しても様々な問題点が指摘されるが、これに

## 第V章 考 察

については別稿にて論じる予定である。

このように焼塩壺に関しては、特に18世紀以降における時期的な細分の問題とともに壺塩屋の系統の異同を明らかにするという問題がある。この問題を一層複雑にしているのが先に触れた、系統間で見られる模倣である。これは単に刻印の印文の整理によって知られるのではなく、刻印の表現や刻印そのもの、さらに器形の変化や異同も含めた検討が必要になってくる。

### 3 「泉州麻生」銘の焼塩壺

上で述べたように、「泉州麻生」の刻印を持つ泉州麻生系の製品はほぼ18世紀の前半から中葉を中心に比較的多量に見られ、この間湊系や難波系のような形での印文の変遷が見られないと考えられている。一方本地点においてもいくつか見ることができ、**「泉川麻玉」「泉州麻玉」「泉州磨生」と**いった「泉州麻生」に類する印文の刻印を持ったものも知られており、これは他の系統により泉州麻生系の製品が模倣されたものと考えられている。これら「泉州麻生」およびこれに類する刻印を持つ製品について整理することは、18世紀代の焼塩壺だけでなく壺塩屋の系統に関する検討を行なっていくうえでも重要であると思われる。

まず「泉州麻生」が和泉国の麻生郷（現在の大阪府貝塚市津田（渡辺 1985a））を意味しているのに対し、これに類似する他の印文を持った刻印、すなわち**「泉川麻玉」「泉州麻玉」「泉州磨生」**はこうした具体的な対象を指示しておらず、また渡辺氏も指摘するように商標を誤るとは考えにくいこと（渡辺 1985a）、器形や胎土などに通常の「泉州麻生」の刻印を持った焼塩壺と共通のものが見られないことなどから、明らかに模倣であると思われる。そうだとすれば、その出現は少なくとも泉州麻生系の製品のそれより後ということになり、さらに言えば「泉州麻生」銘の製品を模倣することに意味があったわけであろうから、これが模倣されはじめた時点においてすでに「泉州麻生」の刻印を持つ製品は市場において一つのブランドとして確立していたであろう。

ここで泉州麻生系の製品をいうのに“通常の「泉州麻生」の刻印を持った焼塩壺”と表現したがこれは印文自体が「泉州麻生」と全く同一でありながら、これ以外の「泉州麻生」銘の製品とは全く異質の器形や胎土を持つ製品（以下（偽）を付して示す）が、本地点Ⅲ期（17世紀末～18世紀初頭）の遺構である C28-4・5からわずかに 2点ながら見い出されているからである（IV-006図11, 12, V-3・4図）。管見の及ぶかぎりでは、刻印の印文が完全に模倣されたと思われる例は他には見られずそういう意味でこの製品の存在は重要である。この 2点はほっそりしたタンブラー形の器形や雲母を含む胎土から見るとむしろ**「泉州麻玉」「御壺塩師 難波浄因」「泉湊伊織」「泉川麻玉」**などに類似している。さらにこれが出土した遺構から本地点では唯一の出土である**「御壺塩師 難波浄因」**が出土しており、また出土する陶磁器から見て同じくⅢ期に属し、空間的にもともに富山藩邸内に位置し、近接する遺構である C28-1・2から**「泉州麻玉」**が出土しており、これらがなんらかの意味で一群をなすものであることを示しているようである。この一群に関しては後の「泉湊伊織」の項で再び論ずることとする。

これらを除く本地点出土の「泉州麻生」の模倣と思われる製品は、「泉州磨生」の刻印を持ったものである。この刻印を持った製品については、前田長三郎氏が弓削氏に伝わる記録なるものを示し

## 第五節 刻印からみた焼塩壺の系統性について

ている(1934)<sup>3)</sup>。これによると正徳三年(1713)に、堺の奥田利兵衛なるものが湊系ないしは難波系の技術を盗んで始められたものであるという。この弓削氏は難波系の壺塩屋の子孫であるということで文書としての内容の信頼性には疑問はあるが、真砂遺跡の18世紀の遺構などから出土の見られる「サカイ 泉州磨生 御塩所」の刻印の製品とともに堺で作られたものと考えられる。

泉州麻生系の製品の模倣と思われるものについてまとめたが、これらのすべてにおいては泉の字のみは変えられずに残されているという共通点が見られる。少なくとも「□州麻生」のような、泉の字の部分を変えられたと思われる製品は現在の所見られない。模倣の効果を狙ったものとするればそれまでであるが、上記の堺を含め、これらがいずれも和泉の国に産したものであることを意味しているとも思われ、これら模倣刻印の製品の印文と産地との関係は、今後検討されねばならない点のひとつである。

ここでひとまずこうした模倣の製品に関する議論を離れ、本来の泉州麻生系の製品について検討する。麻布台一丁目遺跡の出土資料から、「泉州麻生」の印文の刻印に二種類あることを最初に指摘したのは菅沼圭介氏であった(1986)。氏は「泉州麻生」銘にも大小2種類存在する」とし、小型で「二重の方格」のものとして「天下一堺ミなど 藤左衛門」が、大型で「外側が長方形、内側が二段角になったもの」と「御壺塩師 堺湊伊織」が伴って出土していることから、この二者に前後関係を見いだしている。大塚氏はこの資料からさらに一歩進め、前項に記したような湊系の製品に見られるⅡ類の板作りという新たな成形技法の導入が、この泉州麻生系の壺塩屋によって創出されたものを採用した結果であると結論づけているのである。さらに「天下一御壺塩師 堺見など伊織」との共伴から前者の絶対年代の一端を明らかにしている(大塚 1988)。

これらの議論を通じて、菅沼氏も大塚氏も二重の方格の刻印(以下長方形二重枠と呼ぶ)と外側長方形、内側二段角の刻印(以下内側二段角と呼ぶ)とを同一の系統に属するものとしている。しかし、先に述べたように同一の印文が、系統の同一性を保証しない以上、この両者についてもその系統の同一性が検討されねばなるまい。

本地点からは1点のみであるが、長方形二重枠の「泉州麻生」銘の製品が出土している(IV-037 図)。これが出土した F31-1と呼ばれる遺構は天和二年(1682)の火災で放棄されている。またこの遺構からはこれ以外に一重枠「天下一堺ミなど 藤左衛門」(-1679)と「天下一御壺塩師 堺見など伊織」(1679-1682)の湊系の刻印を持った焼塩壺がそれぞれ1点見られる。これは陶磁器の年代ともまた先の麻布台一丁目遺跡の焼塩壺の共伴事例とも矛盾しない。極めて重要な共伴関係として注目しうる。長方形二重枠の「泉州麻生」銘の焼塩壺には内面に布目が見られず、ただ縫い目が胴部では縦に、底部ではこれを巡るように走っているのが見られる。この内面に縫い目を持つという点は、麻布台一丁目遺跡をはじめ御殿下記念館地点における長方形二重枠の「泉州麻生」銘の製品のいずれにも見られ、この刻印を持つ焼塩壺の大きな特徴のひとつと考えられる。そして、この F31-1からはこのほか1点の小破片が見られたのみであったが、これはⅡ類の板作り成形の製品であり、その内面にはやはり縫い目が見られ、刻印部分は失われているものの、長方形二重枠の「泉州麻生」銘のものと考えられる。

一方、先に模倣と考えたものを除く内側二段角の「泉州麻生」銘の焼塩壺の内面には、刺し子が



## 第V章 考察

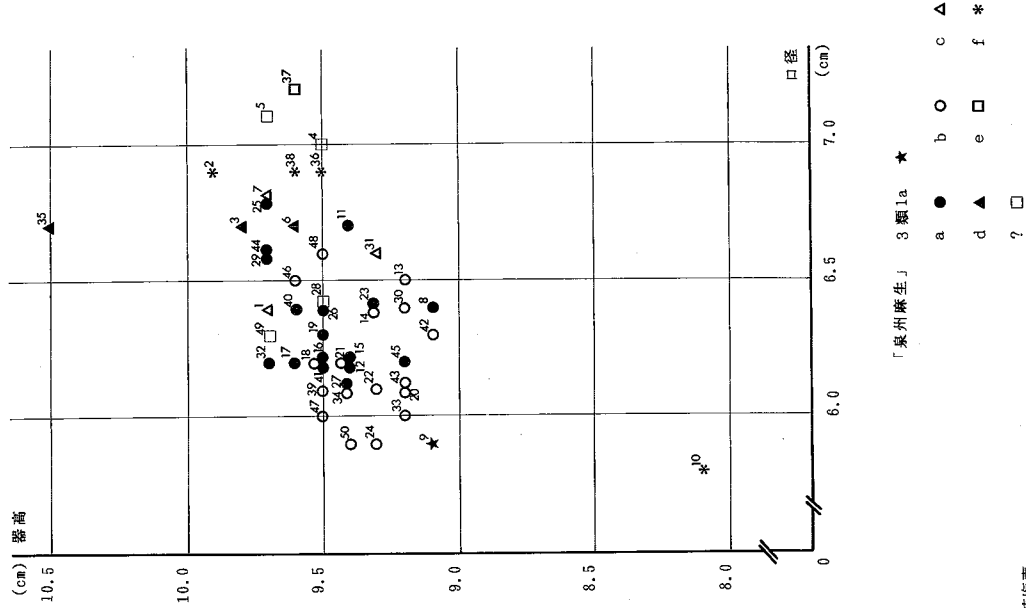
見られたり、絞ったようなよじれが見られたりする相違はあるものの、大半は粗い布目を持つ。しかし本地点から出土したこの刻印を持つものなかに、わずか5点ではあるが内面に縫い目を持つものを見出すことができた。これらのうち遺構より出土したのはF36-2からの1点(IV-059図)のみである。このF36-2から出土した陶磁器はI期を主体にしたものであるが、II期に属するものもあり、天和二年の火災で放棄されたものと推定される。この遺構出土の焼塩壺は問題となる二者すなわち内面縫い目の長方形二重椀「泉州麻生」銘の製品と内面布目の内側二段角「泉州麻生」銘の製品との間をつなぐ資料として、さらに長方形二重椀「泉州麻生」銘の製品の終期と内側二段角「泉州麻生」銘の製品の始期が1682年以前にあったことを示すものとしてきわめて重要な意味をもっている。

長方形二重椀「泉州麻生」銘の製品は「天下一御壺塩師 堺見なと伊織」(1679-1682)と相伴しているのであるから1679年以降も作られていたものであろう。ということになれば長方形二重椀「泉州麻生」銘の製品から内側二段角の「泉州麻生」銘の製品への転換は1679年から1682年の間に起ったことになる。さらにいうと、前者と「天下一御壺塩師 堺見なと伊織」(1679-1682)の相伴はあるが、後者との相伴は確認されていないのであるから、その転換は1682年に近い時点で起きたことが推定される。火災は1682年12月28日であるので、その年もしくは前年に起きた可能性が高い。

次に内側二段角「泉州麻生」銘の製品に関して最も重要と思われる、F34-11における一群の資料(IV-058図)の検討を行なう。IV章でも述べたように(492-493)、この遺構から出土した焼塩壺の身は最小個体数にして52点にのぼり、器形から見るとそのうちII類1 b1(内面布目)に分類されるものが19点、II類1 aが33点であり、前者のうちの15点に3類1 b、すなわち内側二段角「泉州麻生」の刻印が、後者のうち18点に2類4、すなわち「御壺塩師 堺湊伊織」の刻印が見られ、他の器形、刻印は認められない。この遺構は層位的な所見からは天和三年以降、元禄十六年(1703)以前に放棄されたこと、それも1703年に近い時期と推定される。比較的短い期間に廃棄がなされたと思われる遺物群を構成している。この遺構からは湊系と泉州麻生系の両系統のそれぞれ一種類ずつのみ(「御壺塩師 堺湊伊織」銘および内側二段角で内面布目の「泉州麻生」)が、つまり単純にしかも多量に出土していることから、この両者が時期的に併行していたことはほぼ間違いのないところであろう。また、内側二段角「泉州麻生」銘の製品の内面が1682年の縫い目から遅くとも1703年には布目に変わっていたことを意味している。

この資料が短い期間に廃棄されたことが想定しうるところから、これを両系統における一つの観測点として位置付けるべく分析を試みた。以下まず「泉州麻生」銘の製品について述べ、「御壺塩師 堺湊伊織」銘の製品については次項で論じることとする。IV章で指摘したように、この遺構出土例は他の遺構出土の「泉州麻生」銘の製品全体に対して、器高および口径において高い規格性が認められるようであるが、これをより客観的に示すために、まずこの遺構出土例を含めた本地点出土の「泉州麻生」の全例のうち、器高、口径、最大径、底径が計測可能で、かつ刻印の観察しうるものを抽出し、それぞれについて最大値、最小値、平均、標準偏差を求めた(V-5-1表)。これを見ると底径、最大径、器高、口径の順に標準偏差の値が小さくなっている。このことは底径、最大径の方が、器高、口径に比べ本来バラツキが少ないことを意味する。次にF34-11出土例についてのみ

第五節 刻印からみた焼塩壺の系統性について



No.	遺跡名	時	期	形	内面	器高	口径	最大径	底径
1	C28-1	血期	c1	C	C	9.7	6.4	7.8	5.2
2	C28-2	血期	f1	D	D	9.9	6.9	7.8	5.1
3	D54-2	17末~18初	(G)	D	D	9.8	6.7	7.9	4.6
4	E22-1	V前期	?	D	D	9.5	7.0	8.1	5.0
5	E22-1	V前期	?	D	D	9.7	7.1	8.0	4.9
6	E22-1	V前期	(G)	D	D	9.6	6.7	8.1	4.8
7	E35-4	V期	c1	C	C	9.7	6.8	8.1	5.3
8	E35-2,3	17後~18初	a1	B	B	9.1	6.4	7.9	5.6
9	F31-1	II期	3-a	A	A	9.1	5.9	7.4	5.6
10	F33-3	V期	f2	D	D	8.1	5.8	7.1	4.6
11	F34-11	血期	a1	C	C	9.4	6.7	8.2	5.4
12	F34-11	血期	a1	C	C	9.4	6.2	7.4	5.2
13	F34-11	血期	b1	C	C	9.2	6.5	8.0	5.4
14	F34-11	血期	b2	C	C	9.3	6.4	7.9	5.3
15	F34-11	血期	a3	C	C	9.4	6.2	8.0	5.2
16	F34-11	血期	a2	C	C	9.3	6.2	7.8	5.4
17	F34-11	血期	a1	C	C	9.6	6.2	8.0	5.4
18	F34-11	血期	b5	C	C	9.5	6.2	7.8	5.5
19	F34-11	血期	a1	C	C	9.5	6.3	7.9	5.4
20	F34-11	血期	b5	C	C	9.2	6.2	7.4	5.2
21	F34-11	血期	b6	C	C	9.4	6.2	8.0	5.3
22	F34-11	血期	b6	C	C	9.3	6.1	7.8	5.0
23	F34-11	血期	a2	C	C	9.3	6.4	8.0	5.6
24	F36-2	I期	b2	A	A	9.3	5.9	7.8	5.3
25	G26-2	幕末~明治	a1	B	B	9.7	6.8	8.2	5.4
26	G26-2	17後~18初	a1	B	B	9.5	6.4	8.1	5.4
27	K29-1	18世紀前半	a1	C	C	9.4	6.1	7.7	4.9
28	K34-1	V期	?	D	D	9.5	6.4	8.0	5.0
29	K30-1	V期	a1	C	C	9.7	6.6	7.6	5.0
30	L30-1	17末~18初	b2	C	C	9.2	6.4	7.5	5.1
31	名譽組石	血期	c2	D	D	9.3	6.6	7.9	5.4
32	名譽組石	17後~18後	c2	B	B	9.7	6.2	8.1	5.2
33	M38-1	17末~18初	b5	C	C	9.2	6.0	7.8	4.9
34	M38-1	血期	b1	C	C	9.4	6.1	7.7	5.6
35	M38-1	18前、明治	d	D	D	10.3	6.7	8.1	5.0
36	M38-4	18世紀前半	f1	D	D	9.5	6.9	7.4	5.2
37	M38-4	18世紀前半	e	C	C	9.6	7.2	7.9	5.6
38	Z35-5	V期	f1	D	D	9.6	6.9	7.6	5.4
39	遺構外	---	b2	A	A	9.5	6.1	8.0	5.6
40	遺構外	---	a2	C	C	9.6	6.4	8.0	5.2
41	遺構外	---	a1	C	C	9.5	6.2	7.9	5.5
42	遺構外	---	b5	C	C	9.1	6.3	7.6	5.0
43	遺構外	---	b5	C	C	9.2	6.1	7.7	5.3
44	遺構外	---	a3	C	C	9.2	6.2	7.8	5.5
45	遺構外	---	b3	C	C	9.6	6.5	7.8	5.4
46	遺構外	---	b3	A	A	9.5	6.0	7.7	5.5
47	遺構外	---	b4	C	C	9.5	6.6	8.7	5.2
48	遺構外	---	?	D	D	9.7	6.3	7.9	5.3
49	遺構外	---	?	D	D	9.7	6.3	7.9	5.3
50	遺構外	---	b1	A	A	9.4	5.9	7.7	5.3
	最大径					10.5	7.2	8.4	5.7
	底径					8.1	5.8	7.1	4.6
	口径					6.1	6.4	7.8	5.2
	標準偏差					0.32	0.33	0.25	0.27
	標準偏差					0.12	0.15	0.22	0.14

V-5-1表 「泉州麻生」銘の焼塩壺

## 第V章 考察

同様の値を求めると、標準偏差は器高、底径、口径、最大径の順に小さくなり、この両者の比較からやはり F34-11出土例においては器高と口径の規格性が高いことが言えそうである。しかし全体のなかでこの遺構出土の一群が特定の集団であることを言うにはこうした相対的な比較だけでは不十分であると思われる。そこで、全体に対して F34-11出土例の計測値が特定の偏りを示しているといえるのかどうかについて検証するために、平均値の t-検定を行なった。

この結果から、F34-11出土例は全体に対して区別することのできるものであり、その特徴は器高と口径に表れることが確認された。先に述べたようにこの特定の集団であることの原因が時期的に同じであることに求められることから、今度は逆に全体に対してこの集団がどのような特徴を持っているかを見ることによって時期的特徴が知られることになる。ここではその一例として、刻印の字体と内面の詳細な検討を行なった。字体の欄に3-1a とあるのは3類1 a, すなわち長方形二重枠の刻印であり、これ以外は3類1 b, 内側二段角の刻印の下位分類である(V-4図)。a-fの文字は刻印字体の大きさや、州の字の点の打ち方など一見して見分けられる特徴にしたがった分類であり、その次の数字は払いの長さなど、より詳細な観察によって見分けられる差異を示したものである。また内面の欄はAが縫い目を、Bが刺し子のある布目を、Cが弱いねじれの見られる布目を、Dが強いねじれの見られる布目を表している。

この観察の結果を、F34-11についてみると次のような際立った特徴が存在する。すなわち、刻印の字体には a と b のみが見られ、内面では C のみが見られる。これはこの表に掲げられない F34-11出土の小片についてもほぼ同様である。したがって刻印の字体や内面が時期的にまとまるであろうことも推定されるのである。ここで器高と口径の関係について直交座標上にプロットし、さらにこれを刻印の字体別に表現すると、V-5-1表のグラフのようになる。この結果から気づくことは、字体 b のが字体 a と重なりあいながらも器高、口径ともにやや小さいほうに分布しており、その小さいほうの末端に長方形二重枠の刻印を持つ 9 が位置すること、字体 c, d, e, f は 10 を例外として、一群となって大きめの方に分布することである。

一方先に内面に縫い目の見られるものが布目の見られるものに先行すると考えられることを示したが、ここでこの結果からさらに進んで、内面と刻印の字体とを見比べると、表に掲げた 5例の内面縫い目の製品に見られる刻印の字体はいずれも b である。F34-11では a と b とが共伴するものの b の方が古くから現われるといえるようである。また刺し子が見られる内面 B の字体を見ると 3例のいずれもが a であり、そこでこれを組合せとして表すと基本的に古いほうから A-b → (C-b, C-a) → B-a と表現することができる。ただし内面 C には字体 c, e のものも存在し、さらに内面 D との組合せも考えるとこれらを直線的に変化するように捉えることはできないようである。字体の下位分類も含め、さらに検討する余地が残されているようである。

種々の変異があるものの、これまでにみた「泉州麻生」銘の焼塩壺についてその刻印と内面の調整をまとめると次のようになる。

1) 長方形二重枠・内面縫い目 (F31-1), 2) 内側二段角・字体 b ・内面縫い目 (F36-2), 3) 内側二段角・字体 a・b ・内面布目 C (F34-11), 4) 内側二段角・字体 a ・内面布目 B の順に出現する。1) の開始の時期は「ミナと 藤左衛門」との共伴関係が確認されていないことから1654年以降、1679

第五節 刻印からみた焼塩壺の系統性について

年以前になる<sup>4)</sup>。1)から2)への変化は1679年から1682年の間で、量的な観点を入れれば1681年もしくは1682年に起きた可能性が強い。2)から3)への変化は1683年から1703年の間に起きたことになる。2)および3)の出土状況から考えると、2)の例は極少ないので2)から3)への転換は1680年代に起きている可能性が強い。3)から4)の転換は1703年から F33-3 が火災で放棄されたであろう1730年の間であろうが、後述するようにこの間に介在するかと推定される資料もあり(V-3図)、現状では明確ではない。

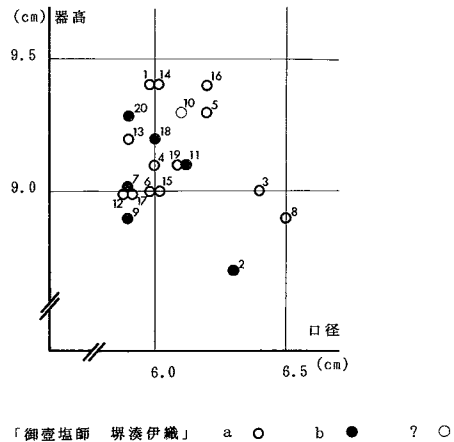
今後種々の観点から補正していく必要があるが、これまで絶対年代という点では定点のなかった「泉州麻生」銘の焼塩壺に絶対年代の基準を与えることができた。また刻印の詳細な観察や内面の観察も年代のキメ手として有効であることが示唆されたといえよう。他方「泉州麻生」銘の製品そのものの終期は未結の課題である。

4 「御壺塩師 堺湊伊織」銘の焼塩壺

前項で見たように F34-11出土の「泉州麻生」銘の焼塩壺は、比較的短い時間のまとまりを示していることが知られた。そこでこれをもとに、この遺構出土の湊系の製品である「御壺塩師 堺湊伊織」についても検討を試みることにする。ただし、IV章でも述べたように、この刻印を持つものは遺構外を含めても F34-11出土以外の例が少なく、「泉州麻生」銘の製品で試みたような検討は行なえないが、ひとまず本地点出土の全例の中から器高、口径、最大径、底径の計測しうるものをまとめ、器高と口径の関係についてグラフに表した(V-5-2表)。グラフでは3点を除き比較的よくまとまっていることが看取され、高い規格性が窺われる。刻印の字体は a, b の二種類が見られたがグラフにも見られるように特定の偏りを示しておらずまた F34-11では両者が混在し、この二者の差異は少なくとも時期差には求められないと思われる。

これらの製品はいずれも底部の粘土塊の周囲に粘土紐が巻き付けられるように入り、内面は平滑であり、外面は多くが明るい橙色を呈し、その成形技法や呈色から見ても、また逆に他の刻印を持

遺構名	時 期	范型	器高	口径	最大径	底径	
1	F34-11	Ⅲ期	a	9.4	6.0	8.2	6.2
2	F34-11	Ⅲ期	b	8.7	6.3	8.0	5.9
3	F34-11	Ⅲ期	a	9.0	6.4	8.1	5.7
4	F34-11	Ⅲ期	a	9.1	6.0	8.0	6.0
5	F34-11	Ⅲ期	a	9.3	6.2	8.1	6.1
6	F34-11	Ⅲ期	a	9.0	6.0	8.0	6.0
7	F34-11	Ⅲ期	b	9.0	5.9	8.0	5.9
8	F34-11	Ⅲ期	a	8.9	6.5	8.4	5.9
9	F34-11	Ⅲ期	b	8.9	5.9	7.9	6.0
10	F34-11	Ⅲ期	—	9.3	6.1	8.0	6.2
11	F34-11	Ⅲ期	b	9.1	6.1	8.2	5.7
12	F34-11	Ⅲ期	a	9.0	5.9	7.8	5.6
13	F34-11	Ⅲ期	a	9.2	5.9	7.8	5.7
14	F34-11	Ⅲ期	a	9.4	6.0	7.8	6.0
15	K30-1	Ⅳ期	a	9.0	6.0	8.2	5.9
16	遺構外	---	a	9.4	6.2	8.0	5.9
17	遺構外	---	a	9.0	5.9	7.8	5.7
18	遺構外	---	b	9.2	6.0	8.2	6.0
19	遺構外	---	a	9.1	6.1	7.8	5.8
20	遺構外	---	b	9.3	5.9	8.0	6.0
	最大値			9.4	6.5	8.4	6.2
	最小値			8.7	5.9	7.8	5.6
	平均			9.1	6.1	8.0	5.9
	標準偏差			0.19	0.17	0.17	0.16
	標準偏差 (1~14)			0.20	0.19	0.17	0.18



V-5-2表 「御壺塩師 堺湊伊織」銘の焼塩壺

## 第V章 考察

つ例が見られない点から見ても強い規格性が認められる。これはむしろ時期的にきわめて限定された一群であることを表しているとも考えられる。

そこで他遺跡の例として、麻布台一丁目遺跡(麻布台一丁目遺跡調査会 1986)の「御壺塩師 堺湊伊織」銘の製品を見ると、本地点の全例に見られるような、底部の粘土紐、内面平滑といった特徴が見られず、口唇部の形態や全体のプロポーシオンも異なるなど、器形、刻印に大きな違いが存在することが知られる(V-3図)。これらの点はむしろ「泉湊伊織」銘を持つ製品に類似している。この両者がともに同一の系統、湊系に属すると考えられ、「御壺塩師 堺湊伊織」が「泉湊伊織」に先行する刻印であることが代官所の支配地の変更から説明しうること(渡辺 1985a)から考えると、刻印が「御壺塩師 堺湊伊織」から「泉湊伊織」に変遷する前に「御壺塩師 堺湊伊織」銘の製品が本地点では「泉湊伊織」に見られるような器形を採用していたと考えることができる。また「泉湊伊織」およびこれに類する一群の胎土にはいずれも雲母が含まれているが、麻布台一丁目遺跡はじめこの種の「御壺塩師 堺湊伊織」銘の製品にも、本地点のものと同様雲母は含まれていないようである。こうした関係を模式的に示すなら以下のようになろう。

遺跡	：	本地点	麻布台一丁目遺跡	本地点	
刻印	：	「御壺塩師 堺湊伊織」		「泉湊伊織」	
雲母	：	なし	なし		あり
粘土紐	：	あり		なし	なし
内面	：	平滑		布目	布目

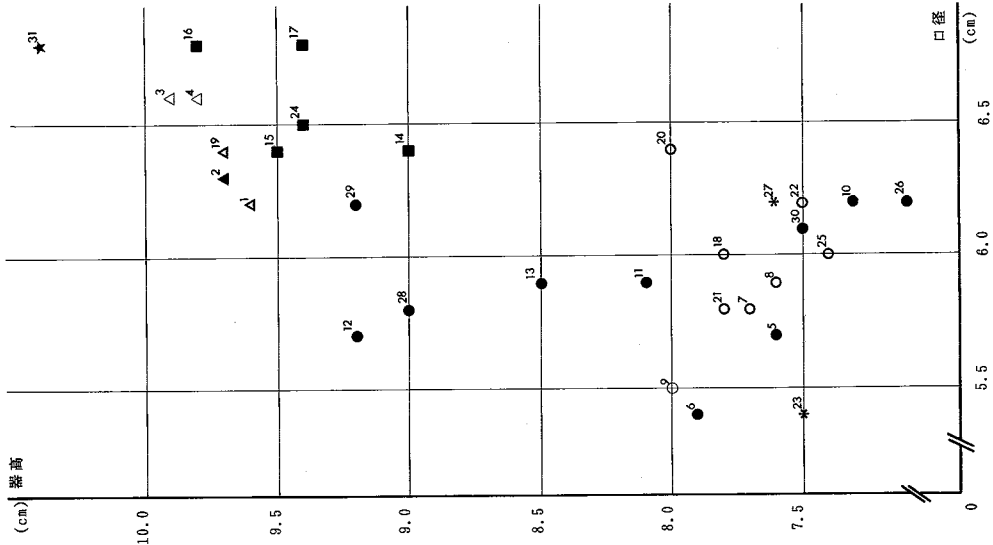
このことから、麻布台一丁目遺跡例は本地点の「御壺塩師 堺湊伊織」と「泉湊伊織」の両者の中間に位置するタイプであることが想定される。麻布台一丁目遺跡でこの「御壺塩師 堺湊伊織」銘の製品に伴う「泉州麻生」銘の製品に見られる刻印の字体がcに分類されるものであることもこれを裏付けるものである(V-3図)。また「御壺塩師 堺湊伊織」の刻印の字体も、上で触れた本地点のa、bとは異なるものであり、こうした字体の違いと器形の違いとが平行しているのは、このほか御殿下記念館地点、法学部4号館・文学部3号館地点、真砂遺跡(真砂遺跡調査会 1987)などの出土資料においても認められるところである(V-4図)。

一方本地点では陶磁器による年代にして、「御壺塩師 堺湊伊織」はIII期およびIV期の遺構に見られ、「泉湊伊織」は1点だけII期の遺構に見られるが、後はIV期からV期の後半にかけての範囲に収まっている(V-5-2, 3表)。先に述べたようにII期に属する焼塩壺はI類の「天下一堺ミなど 藤左衛門」「天下一御壺塩師 堺見など伊織」であり、したがってこの例外的なII期の遺構出土の「泉湊伊織」は混入であろうと思われる。

### 5 「泉湊伊織」銘の焼塩壺

上で見たように本地点における「泉湊伊織」は「御壺塩師 堺湊伊織」に比べ数多くの遺構からそして陶磁器から知られる年代から見ても長期にわたって出土している。またその法量も、特に器高において一見して認められるほど変化に富んでいる。さらに「泉州麻生」銘の製品の模倣の検討において触れたように、「泉湊伊織」と胎土、成形技法、器形が共通でありながら、刻印の異なるも

第五節 刻印からみた焼塩壺の系統性について



遺物名	時期	刻印	器型	器高	口径	最大径	底径
1 C23-1-2	血期	泉州麻玉	---	9.6	6.2	7.4	5.6
2 C23-4-5	血期	御堂塩師 難波津区	---	9.7	6.3	7.4	5.3
3 C23-4-5	血期	泉州麻生	---	9.8	6.6	7.9	5.1
4 C23-4-5	血期	泉州麻生	---	9.8	6.6	7.7	5.6
5 D33-1	V期後半	泉濑伊織	b	7.6	5.7	7.5	5.4
6 D33-1	V期後半	泉濑伊織	a	7.7	5.5	7.2	5.3
7 D33-1	V期後半	泉濑伊織	b	7.7	5.8	7.4	5.6
8 D33-1	V期後半	泉濑伊織	a	7.6	5.9	7.6	5.6
9 D33-1	V期後半	泉濑伊織	?	8.0	5.6	7.0	5.2
10 E22-1	V期	泉濑伊織	b	7.3	6.2	7.7	5.4
11 E34-2	V期後半	泉濑伊織	b	8.1	5.9	7.6	5.3
12 F33-3	V期前半	泉濑伊織	b	9.2	5.7	7.6	5.7
13 F33-3	V期前半	泉濑伊織	b	8.5	5.9	7.8	5.3
14 G20-2	V期	泉川麻玉	---	9.0	6.4	8.0	6.4
15 G20-2	V期	泉川麻玉	---	9.5	6.4	8.3	6.2
16 G20-2	V期	泉川麻玉	---	9.8	6.8	8.7	6.0
17 G20-2	V期	泉川麻玉	---	8.4	6.8	8.3	6.2
18 G32-1	II期	泉濑伊織	a	7.8	6.0	7.6	5.5
19 I20-3	V期	泉州麻玉	---	9.7	6.4	7.5	5.6
20 I34-1	V期後半	泉濑伊織	a	8.0	6.4	7.6	4.8
21 I34-1	V期後半	泉濑伊織	a	7.8	5.8	7.4	5.7
22 1号組石	V期	泉濑伊織	a	7.5	6.2	7.9	5.7
23 2号組石	V期	泉濑伊織	---	7.5	5.4	7.1	4.9
24 2号組石	V期	泉濑伊織	---	9.4	6.5	7.7	5.3
25 K34-2	18後~19初	泉川麻玉	a	7.4	6.0	7.5	5.3
26 AD35-2	V期	泉濑伊織	b	7.1	6.2	7.7	5.3
27 A137-3	---	---	---	7.6	6.2	7.0	5.1
28 遺構外	---	泉濑伊織	b	9.0	5.8	7.7	6.1
29 遺構外	---	泉濑伊織	b	9.2	6.2	7.9	5.8
30 遺構外	---	泉濑伊織	b	7.5	6.1	7.4	5.4
31 (埋学部)	18前~中	摂津大坂	---	10.4	6.8	7.6	5.7
終大塚				10.4	6.8	8.7	6.4
終小塚				7.1	5.4	7.0	4.8
A34				8.5	6.2	7.7	5.6
標高調査				0.97	0.36	0.37	0.41
標準偏差 (泉濑伊織)				0.61	0.26	0.22	0.28

- 「泉濑伊織」 a ○ b ● ? ○
- 「御堂塩師 難波津区」 ▲
- 「泉州麻生」 △
- 「泉州麻玉」 ▲
- 「泉川麻玉」 ■
- 刻印なし \*
- 「摂津大坂」 ★

V-5-3表 「泉濑伊織」銘に類する一群の焼塩壺

## 第V章 考察

の一群となって存在するなど、「泉湊伊織」銘の製品に関してその有り様はきわめて多様である。

これらを整理するためにまず、「泉湊伊織」と胎土や器形などが共通する一群のものを、これまでの二者と同様の表とグラフとにまとめた(V-5-3表)。なお本地点では見られなかったが、この一群に含まれると思われる理学部7号館地点の4号井戸より出土した「摂州大坂」銘の製品をも加えてある(東京大学理学部遺跡調査室 1989)。

まず出土遺構の陶磁器から推定されるその初現の年代を見ると、前項で指摘したII期の「泉湊伊織」を除けば、最も古い時期に属するのはIII期の遺構に見られる「泉州麻生」(偽)「泉州麻玉」「御壺塩師 難波浄因」であり、これよりやや下の18世紀前葉から中葉、ほぼIV期にあたる時期に「摂州大坂」が見られ、またこのIV期から「泉湊伊織」が見られるようになる。そしてやや遅れてV期から「泉川麻玉」が見られる。さらにVIII期になると刻印を持たないものが現われてくる。

次にこれらの法量をグラフ上で見ると、まず基本的にはその刻印ごとに集中していることが知られる。またその初現を同じ時期にもつ「泉州麻生」(偽)「泉州麻玉」「御壺塩師 難波浄因」の刻印を持つ三者が集中し、これに近いところに「摂州大坂」の刻印を持つものが位置していることも指摘できよう。ただし「泉湊伊織」の刻印を持つものに関してはやや事情が異なり、比較的広い範囲に散らばっている。これに関して刻印の字体を見ると、aは比較的集中を示しているのに対し、bの方がバラツキを示していることがわかる。したがって「御壺塩師 界湊伊織」の場合とは異なり、この字体の違いに積極的な意味が見いだせそうである。このことはL34-1からはaのみが2点見られること、F33-3からはbのみがやはり2点見られる所からも推定される。一方陶磁器から推定される遺構の年代は、前者がV期後半、後者がV期前半であり、bがaに先行するものであることが窺われる。同様の形で知られるそれぞれの字体の刻印を持つ製品の出土する年代はこれと矛盾しない。またVIII期に現われる刻印を持たない製品の法量がaの集中する部分に近いことから、bからaへ、そして無刻印へという変遷とこれに伴う小型化の傾向を見て取ることができそうである。また前項の「御壺塩師 界湊伊織」の集中が見られたのは、このグラフでは28と29に挟まれた部分付近にあたり、これを見ても前述したようにその間に麻布台一丁目遺跡例の内面に布目のある製品の時期が存在するとはいえ、この小型化の傾向は「御壺塩師 界湊伊織」の時期から無理なく連続しそうである。

このようにこれらが湊系の製品として連続的に位置付けられるのに対し、残りのものはどのように考えられようか。「御壺塩師 難波浄因」の刻印を持つものが難波系の製品であることが知られていることは概観の項で記した。これと、残余の「泉川麻玉」を除く「泉州麻生」(偽)「泉州麻玉」「摂州大坂」の刻印を持つものは法量的に近接しているだけでなく、内面の布目や褐色を帯びた橙色であること、同一もしくは近接する同時期の遺構から見られることなどの共通点を持つ一群である。

したがって、量的に少なく他の遺構との対比がほとんどできないため、あて推量の域を出ないがこれらはいずれも難波系の製品で「摂州大坂」以外の製品は同時期に作られ、これからやや下の時期に「摂州大坂」が作られたものと思われる。「摂州大坂」がこの系統に属するものであることは印文の内容からも推定されるが、このほか少なくとも「泉州麻生」(偽)「泉州麻玉」の製品と同一の系統に属すると考えられる根拠の一つとしては、これら三者の「州」字の字体が共通しているという

## 第五節 刻印からみた焼塩壺の系統性について

点があげられる。

このように考えると湊系の支店が難波に出された当初、すなわち難波系の系統としての始期は印文から見て湊系の「御壺塩師 堺湊伊織」の時期であり、難波系は「御壺塩師 難波浄因」の刻印を持っていたであろうことは容易に想像されるところではあるが、ほぼ同時に「泉州麻生」(偽)「泉州麻玉」の刻印を持った泉州麻生系「泉州麻生」の模倣品も作っていたと思われるのである。

あるいは全く同一の印文の模倣品を作ったために泉州麻生系の壺塩屋の抗議を受けるなどして、その製品の生産は中止され、代りに「摂州大坂」銘の製品が産み出されたと考えるのは穿ちすぎであろうか。

それでは残りの「泉川麻玉」の刻印を持つ製品についてはどのように考えられるであろうか。これが出土する遺構は2号組石を除くとG20-2の1遺構のみであり、ここから4点がまとまって出土している。明らかに混入と考えられる「天下一御壺塩師 堺見なと伊織」銘の小片を除くと他には「泉州麻生」のやはり小片が3点見られるのみであり、この4点がいずれも完形であることを考えると、ある意味で特異な出土状況ではある。陶磁器から知られる年代はV期に位置付けられる。グラフ上の位置から見るとやや口径が大きめであるが、「御壺塩師 難波浄因」銘の製品より小さく、「御壺塩師 堺湊伊織」銘の製品の集中域より大きい範囲に位置している。湊系の「御壺塩師 堺湊伊織」銘の製品以降に見られた小型化の傾向から勘案して、これはやはり難波系の、「摂州大坂」銘の製品より後の製品と思われる。

またその枠線が、隅切長方形とでも言うべきものであり、これが「泉湊伊織」と共通であることは注意すべきであろう。今この「泉川麻玉」銘の製品が湊系もしくは難波系のいずれかであると想定した場合、この枠線の類似は、「泉川麻玉」銘が湊系のものであることを裏付けるものといえようか。むしろこの時期の「泉湊伊織」とあまりにも異なった法量をもつところから、これは否定されたと考えている。

むしろ、本地点の「御壺塩師 堺湊伊織」が先の麻布台一丁目遺跡例の「御壺塩師 堺湊伊織」を経て「泉湊伊織」に到ったとする考えとは別の可能性も指摘できる材料になりはしまいかと考えている。なぜなら、両「御壺塩師 堺湊伊織」が胎土に雲母を含まず、一方難波系の製品はその当初から雲母を胎土に含んでいることが指摘できた以上、雲母を含む「泉湊伊織」が難波系によって作られていたと考えることも強ち不可能ではないからである。法量も「泉川麻玉」が「泉湊伊織」よりやや大きいところに位置しているところからも、難波系が「御壺塩師 難波浄因」+「泉州麻生」(偽)+「泉州麻玉」から「摂州大坂」を経て「泉川麻玉」、「泉湊伊織」とその刻印を変えていったと考えられなくはないからである。このように考えると、「御壺塩師 堺湊伊織」から「泉湊伊織」への表記の変更、すなわち二行書きが一行書きになったという変更は、「泉州麻生」に倣ったためというよりも、その模倣に起源を持ったものであったとも考えられる。

ただし、先に記したように「難波浄因」という刻印の製品が「御壺塩師 難波浄因」銘の製品の後作られていたといわれるものの、これを筆者は未見である。これがどのようなものであるかについてのより具体的な検討を行なった上で、「泉川麻玉」銘の製品が全く異なった系統に由来する製品であった可能性も含め、その位置付けについて改めて論ずることにしたい。



6 おわりに

焼塩壺に関してはここで触れ得なかった多くの問題がある。その一つはここで主に論じてきたコップ形の製品の他に、焼塩壺の一種とされている鉢形の製品と、その蓋の刻印にも見られる「花焼塩」, および文献による対比から考えられるこれらの系統, 特に泉州麻生系との関係, またこの他の蓋に見られる刻印や, 身に見られるという「大上々」, 蓋に見られるという「鷺坂」といった製品の品質の差を示すとも考えられる印文の問題, 身と蓋の対応関係などである。多くの系統の業者の存在やそれらの間で見られる刻印をはじめとした模倣関係, ある意味で豊富な文献史料など焼塩壺は近世の考古学にとって豊かな情報源としての役割の期待される遺物である。今後もこれら数多く残された問題を検討していきたい。

註

1) 桑田忠親氏によれば天下一の禁令の条文は以下のごときものであったという (桑田 1956)。

『 覚

一、町中にて諸事に天下一之書付・彫付・鑄付候儀, 自今以後御法度に候間, 向後何によらず天下一之字付申間敷候。勿論, 只今まで有来候鑑判・鑄形・板木・書付等まで早々削り取可申候。若違背仕もの有之においては, 急度曲事可申付者也。』

2) 戸田茂睡『御当代記』天和二年(1682)八月の条(桑田 1956)。

『金銀のはくを以てこしらへたるかんばん御法度, ならびに天下一の書付無用なり。金銀の屏風, もっともはりつけも無用に可仕よし被仰出候に付, 俄かんばんをこしらへ, 金銀のはく, けつこうなるかなものうちたるかんばんをこはして火に焼, 黒塗り・木地のかんばんには, 天下一と云文字を消し, あるひは紙にてはりかくす。諸人のいはく, 天下一消, いまいましといふ。』

3) 弓削氏の記録(前田 1934)

『壺印磨生なるものは正徳三辰年より堺九間町當時在住奥田利兵衛なるもの(堺海船鳥屋長兵衛子)伊織方下女つまと馴合 奥田利兵衛の女房となり伊織が秘法を盗み盛に妨害せり云々。』

4) この1)長方形二重枠の「泉州麻生」の刻印をもつものは, 麻布台一丁目および御殿下記念館出土例と F31-1出土例とで若干の相違が認められる。すなわち前二者が直線的に立ち上がる体部, 目のつまった内面の縫目をもつのに対し, 後者はややふくらんだ胴部, 目のあらい内面の縫目をもち湊系製品との共伴関係などを勘案すると, 時期的に二分されそうである(V-3図)。今後さらに検討すべき点の一つである。なお, 先に引用した弓削氏の記録には, 同様に麻生銘の製品が延宝年間(1673-1680)から享保年間(1716-1735)にかけて伊織の製法を盗んで創始されたとある。

追記: 脱稿後, 高槻城三ノ丸跡よりI類3の器形の壺に2類4「御壺塩師 堺湊伊織」の刻印の捺された例が報じられている(森田 1987:14)ことを知り, 橋本久和・森田克行両氏の御厚意により実見する機会を得た。刻印は不明瞭ながら明らかに「御壺塩師 堺湊伊織」であり, 本稿の記述も(896)も補訂されるべき資料として注目される。

## 第六節 江戸時代の儀礼的な宴会の食器について

—「池」出土の木製品を中心にして—

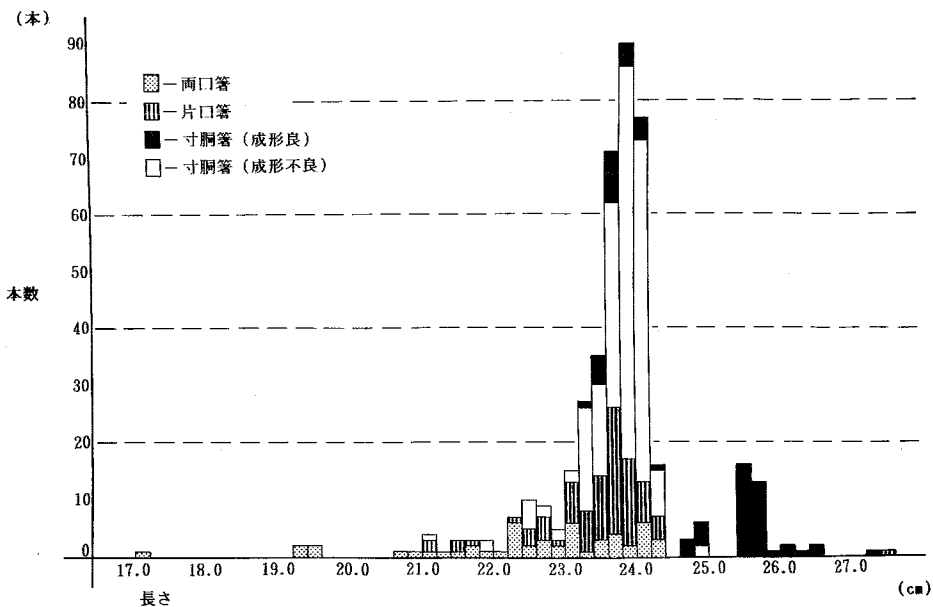
萩尾昌枝

中央診療棟建設地点の池からは大量の木製品が発見され、それらについては一部報告し、また若干の考察をしたことがある（藤本・宮崎・萩尾 1987, 萩尾 1988, 萩尾 印刷中）。ここではこれらを基にして、主として白木の箸と折敷について若干考えてみたい。すでに触れているが、池から出土した木製品のほとんどは白木の箸と折敷であり、その他の遺物も食事に関係するものが多く、その出土状態からみて、一時あるいはきわめて短期間の間に廃棄された可能性が高い。ここでは箸と折敷の大きさや形態による分類を試み、他の木製品を含む池から出土した遺物の性格を考えてみることにする。

### 1 箸

箸は総数約3000本出土し、そのうち完形のもの433本、長さが14cmを越える破片だけでも1480本を数えた。それらを第IV章第八節で述べたように、形態から寸胴箸、片口箸、両口箸の三つに分けた。さらに寸胴箸を整形の良不良の点に着目し、二つに細分した。

\*寸胴箸—整形良 全体にほとんど同じ太さだが、両端がやや細めで切断面を残している。とても丁寧に作られており、断面の形はきれいな円である。長さは八寸より長いものが多く、完形のも



V-6-1表 箸の長さや形態

## 第V章 考 察

のは67本(433本のうち15.5%)数えられた。作りが丁寧であるため他のものと分別しやすく、破片でも細分が可能であり、全部で338本(1480本のうち23%)あった。

\*寸胴箸—整形不良 全体にはほぼ同じ太さに削られていて、両端に切断面を残す。整形はそれほど丁寧ではない。長さは七寸半から八寸前後に集中し、数量的にもっとも多いタイプである。完形のもの 218本(完形品の50.3%)を数えた。

\*片口箸 片方の端を尖らせてあるもので、現在一般的に使用されている箸の形に近い。長さは七寸半から八寸前後のものが多く、完形で92本(完形品の21.2%)数えられた。

\*両口箸 中央部が太く両端を細く削ってあるもので、比較的丁寧に整形されている。長さは八寸より短いものが多く、完形で56本(完形品の12.9%)が確認できた。

箸の形態と長さをグラフに表したものがV-6-1表である。全体的には24cm前後に長さが集中していて、23.1-24.4cmのものが318本と総数の73.4%を占める。形態からみれば、22.5cmより短いものでは両口箸が56%を占め、22.5-24.4cmの間では寸胴箸が64%、さらに24.5cm以上の長い箸では寸胴箸の整形の良いタイプが93%を占める。

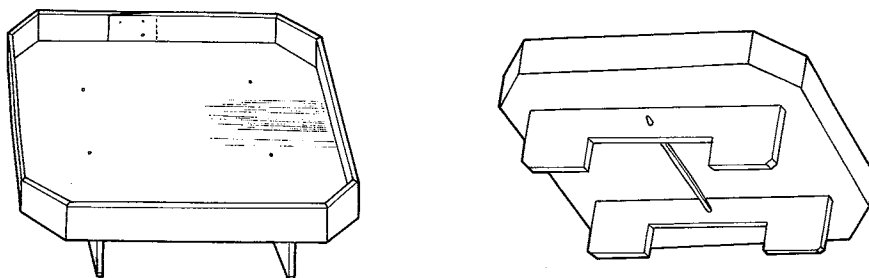
こうした箸の形態と規格の間にみられる傾向は何を意味しているのであろうか。本田総一郎氏によれば(1978, 1983), 儀式や祭礼など非日常的なハレの席では、長さが八寸以上の中太両細の箸を用い、日常的なケの食事には、男性七寸半、女性七寸の片太片細の箸を用いたという。中太両細の箸とはこの分類の場合、寸胴箸の整形の良いタイプにあたり、ハレの食事の席における箸であったことが推定される。

## 2 折敷

折敷も前章でみたとおり大きさと形態によって、三通りに分類した。比較的こわれずに残っていた側板や脚板の数量から、大型の折敷が113膳、中型の折敷で底板に木釘跡のあるものが27膳、木釘跡のないものが13膳、小型の折敷で底板の一边の長さが四寸半のもの5膳、三寸半のもの17膳とそれぞれ最小の膳数が推定される。V-5図に折敷の推定復原図を掲げる。

『茶湯献立指南』(元禄九年刊、『翻刻江戸時代料理本集成』1979 臨川書店刊 所収:12-13)に次のような記載がある。

一 御成之時は木具なるべし 其モ ぬり木具にすることもあり首尾次第也



V-5図 折敷推定復原図(左:斜め上から、右:側方下から)

## 第六節 江戸時代の儀礼的な宴会の食器について

(略)

### 足打折敷

- 一 表巻尺壹寸四方縁の高サ壹寸五歩足の高サ四寸五歩本膳也
- 一 表巻尺五歩四方縁の高サ壹寸貳歩足の高サ四寸二の膳也
- 一 表巻尺四方縁の高サ九歩足の高サ三寸六歩三の膳也

何も足にくりかた有べし

江戸時代初期の料理本であるが、この部分では御成という格式の高い饗応の場で將軍に差し上げる膳について述べている。このあと家来に出される膳のことについても述べているが、位が下がるにつれて膳の一边の長さが短く、脚の高さが低くなることが読み取れる。出土した折敷の大きさをみるかぎりでは、身分の高い人に出された膳であることが推定される。なお、小型の折敷については、大型の折敷に載せて使用された可能性もあることを指摘しておく。

## 3 考察

時代は下がるが『貞丈雑記』卷之七(伊勢貞丈著 天保十四年刊, 1985 平凡社 東洋文庫 446『貞丈雑記』2所収:172, 173, 180)には、

- 一 [木具の事] 木具と云うは、すべて桧の木の白木にて作りたるなり。台も皆木具なり。三方・四方・供饗も木具なり。しかるに今は「足付」の事ばかりを木具と云う。
- 一 [足付] 足付を「足打」とも云う。折敷に足を打付けたる故なり。足付の折敷と云うことを略して、足付・足打などと云うなり。
- 一 [折敷] 折敷と云うは、足なきを云うなり。足付の事を折敷と云う事もあり。足付の折敷なる故、折敷とも云うなり。

(略)

- 一 [角] 角の折敷とも、又角とばかりも云うは、四すみの角を切りたる折敷の事なり。
- 一 [小角] 小角と云うは、右の角の折敷を三寸四方にしたるなり。「中角」は五寸四方にしたるなり。「大角」と云うは八寸四方なり。これを「八寸」とも云う。

(略)

- 一 [側折敷] そば折敷と云うは、角切らずにて、足にはくりかたなきを云う。

(略)

- 一 [白木膳の事] 規式の膳部には白木を用い、何をも土器に盛る事は、これ一度切に用いて、用い終りて後打ちこわし捨て、それを二度用ゆまじき故なり。これは神国の風俗にて、清浄を貴ぶ故なり。

という記述がある。

儀礼的な食事の後では、一度使った膳やカワラケをこわして捨てるということである。出土した箸や折敷はすべて白木で簡単な作りをしており、継続的な使用を目的として作られたものではないことが推定される。木製品も大量のカワラケも焼塩壺も、一度に廃棄された様子がうかがえる。

また火鑽白(写真15)であるが当時の発火法はすでに火打石、火打金を用いるのが一般的になっ

## 第V章 考察

ており、火を鑽するという行程は格式の高い宴会、茶会、また特別な意味をもつ火を起こすときのみ行われたものと考えられる（高嶋 1983, 1984, 1985, 1987）。それは現在も伊勢神宮などで神事の際に火鑽が行われている事実が示している。火鑽に関するものが近世の遺跡から出土する例は非常に少ないが、仙台城三ノ丸跡の発掘調査では、伊達政宗の時代に作られた茶室および台所と推定される建物に隣接していたゴミ穴から1点出土している（仙台市教育委員会編 1985）。この火鑽臼には二か所の火鑽跡があり、一緒に元和(1615-1623) 銘のある木簡が出土し、またゴミ穴の埋め立てられた時期はおおよそ寛永十四年(1637)であることが文献史料からわかっている。茶会などで火を起こすのに用いられたのではないかと考えられる。時代的にも本遺跡出土の火鑽臼と類似している。

さらに推測をすれば、出土した木簡に紀年銘があった寛永六年(1629)には四月二六日に将軍家光が、続いて同二九日には前将軍秀忠があいついで加賀藩下屋敷(本郷邸)を訪れている(御成)。『三壺記』によれば、加賀藩ではこれに先立ち御成書院(御成の際の儀式などに使う御殿)の新築を初めとしてこの御成の準備のために、全国から大量の食料・物資などを買い集めたという。そして元禄十五年(1702)の五代将軍綱吉の御成の際の記録(近藤磐雄著『加賀松雲公』上巻 1909 羽野知顯刊 :486, 487)にはその時の献立が記されており、本膳、二(ノ膳)、小角、木具足打、たい、あゆ、かまほこなどの文字が読み取れる。当時の他の宴会の献立などをみても、大きな違いは見られない。文献史料などからもわかるが、献立の形式が江戸時代初期には確立されているのである。

箸、折敷、火鑽臼、木簡などの遺物と以上のことを結びつけてしまうことは、いささか強引な感もあるが、木簡にあった寛永六年の時点では「池」の付近は加賀藩の下屋敷のなかでも辺鄙な地点である。ここに御成に関係する宴会の食事に使用した食器類などをを一挙に捨てたことは十分に可能性のあることであろう。出土した遺物の量から、宴会の規模を推し測ることは困難であるが、最高級の儀礼的な宴会であったものと推測することは出来よう。ともに出土した動物遺存体には、ガン・カモなどの鳥類があり、木簡の内容と一致し、魚ではタイ類が主体となって出土しているなど、文献史料から類推される宴会の食事内容と符合している。確度の高い類推であろう。今後種々の分野から詰めていく必要のある問題である。

## 第七節 医学部附属病院地点出土の動物遺存体

新美 倫子

本地点の動物遺存体はミカンのダンボール箱で約15箱分であり、量的にはその8割程度が貝類であった。これらの資料は、大部分が土坑内に「ゴミ」として捨てられたものと考えられるが、発掘時に任意に採集されたものであることを断わっておく。出土した動物種名をV-7-1表に、動物種の出土量をV-7-2表～V-7-5表に示した。代表的なものを写真18・19に掲げる。

なお、魚類と鳥類の同定に関しては早稲田大学の金子浩昌先生と国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生に御教示をいただいた。深く感謝の意を表する次第である。

### 1 貝類

貝類は30種が認められた。ハマグリは殻長7cm以上を大型、殻長7-5cmを中型、殻長5cm以下を小型の個体とする。左殻では大型77、中型708、小型905、右殻では大型104、中型716、小型889と大型の個体が少なく、小型の個体が多い。マガキは右と左の殻頂部の形態が異なり、左の殻頂部は平らで剥離しやすく個体数の算定が困難なため、右の殻頂部の数を個体数とした。殻長7-8cm程度の小型の個体が多く見られた。ヤマトシジミも殻長1.5cm程度の中～小型の個体が多かった。サザエは破損しているものが多いが、殻高が判明するものでは殻高10-13cm程度の大型の個体が多い。このような大型の個体は現代では千葉なら富津以南で捕獲される。またサザエは夏でも湿った紙に包めば三日は生存しているので、日本海産のものが持ち込まれた可能性もある。ほとんどの個体が棘がよく発達し、外洋性のものである。アカガイは殻長10cm前後の大型の個体が多い。アカニシは殻高12-17cmの個体が多く、突起の高いものが多い。これら大型の個体は外房で捕獲されたものであろう。アワビ類にはマダカアワビ・クロアワビ・メガイアワビの三種が認められ、マダカアワビが最も多く出土した。三種とも破損しているものが多いが、殻長の判るものでは15-18cm程度の大型の個体が多く、マダカアワビでは殻長20.5cmの個体も見られた。この地点では大型のアワビが多いことが特徴である。ミルクイガイも殻長13-15cm程度の大型の個体が多い。エッチュウバイは1点のみ出土している。この種は日本海側にのみ生息し、太平洋側には生息しないので、日本海産のものが持ち込まれたのであろう。タイラギは破片が1点検出されただけである。

### 2 魚類

魚類は20種が認められた。マダイが最も多く出土しており、全ての部位において体長44cmの現生標本と同程度またはそれよりも大型の資料が大部分であった。大型のマダイが多数出土しているのがこの地点の特徴である。タイ類の椎骨も大部分はマダイのものと思われる。マダラは体長64cmの現生標本と同程度の大きさの個体が多い。この種は寒流系の魚種であり、北日本でとれたものが干物などに加工されて持ち込まれたのであろう。G36-2出土のマダラの資料は、鋤骨1点を除き、その大きさから見て同一個体のものであると思われる。スズキは体長47cmの現生標本より大型の資料がほとんどであった。遺構外出土のスズキ右側関節骨はその長さが体長47cmの現生標本の関節骨の1.5倍ほどであった。F26-1出土のマグロ類左側鰓蓋骨・X37-4出土のマグロ類椎骨・各地区遺構

## 第V章 考察

外出土のマグロ類右側歯骨・左側鰓蓋骨は大きさから見て体長50cm程度の小型の個体のものであると思われる。L34-1 出土のマグロ類左側歯骨はもっと小さい個体のものであると思われる。F33-3 出土のブリ左側歯骨はブリのものと思われるが、F31-1出土の椎骨・F34-5 出土の左側鰓蓋骨はブリの小型でハマチ程度のものであると思われる。フグ類は体長50cm以内の小・中型種であると思われるが、種は不明である。カサゴ類はメヌケやキチジに類似したタイプの資料が多く、日本海産のものが持ち込まれたのかも知れない。

### 3 爬虫類

E21-1 からスッポンの背甲片が一片検出されただけである。

### 4 鳥類

ガン・カモ類が多く出土し、それ以外の種の出土は少量であった。ガン・カモ類はヒシクイ程度のガンの大型種とマガン程度のガンの小型種・カルガモ程度のカモの中型種とコガモと見られるカモの小型種の4 グループに分類した。ガンの小型種には、おそらくツクシガモなどのカモの大型種も含まれていると思われる。ガン・カモ類には金属器による切傷をもつものも見られた。ニワトリについては、D33-1出土右側上腕骨近位部片は現生標本（白色レグホン♀）より少し大きく、E34-2 出土左右鳥口骨は現生標本よりやや短く、かなり太い。G36-2出土右側中手骨は現生標本より少し小さい。それ以外の資料は F26-1 出土の♂の右側中足骨を除いてほぼ現生標本と同程度の大きさであった。

### 5 哺乳類

哺乳類は8種が認められたが、イヌ・ネコが多くその他の種は少なかった。イヌについてはE32-7・F34-11・遺構外出土の同一個体資料を中心に見てみたい。E32-7出土のV-7-5表中に①で示したイヌは、下顎第一後臼歯の長さが17.0mmの小型犬であり、下顎第一後臼歯がかなり摩滅した老齢個体であった。寛骨は現生キタキツネと同程度の大きさであった。武家屋敷内で愛玩犬として老齢になるまで大切に飼われていたのであろうか。F34-11からは3体のイヌが出土している。V-7-5表中に①で示した個体は上顎第四前臼歯の長さが14.6mm、上腕骨の長さ128.7mm、大腿骨の長さ140.9mm、脛骨の長さ138.4mmの小型犬の成獣である。頭骨の形態から見て♀と思われる。遺構外出土のV-7-5表中に①で示したイヌは、上腕骨の長さ156.0mm、大腿骨の長さ173.0mm、脛骨の長さ169.7mmで現代の秋田犬程度の大きさの大型犬である。ほかにもAJ34-2出土のイヌ上腕骨は長さ155.3mm、AJ35-1出土のイヌ右側下顎骨は第一後臼歯の長さが21.3mmと大型犬のものであると考えられ、本地点出土のイヌには少なくとも大型と小型の二つのタイプが存在すると言える。またE32-7やF34-11から出土したイヌは比較的まとまっていたとのことであるがその詳細な出土状況は判らない。けれども、おそらくそれぞれ1個体分、3個体分の骨が揃っていた可能性が高い。ネコは全ての資料が現代の日本で普通に見られるネコとほとんど同じ大きさであった。ほかにはシカの角が数点見られた。C26-2出土の角片は表面を削って平らに加工されており、これらは加工品の材料として持ち込まれたのであろう。またAL37-1出土のウマの右側橈骨および尺骨も鋸で切断されており加工品の材料として利用されていたのかも知れない。池からはヒトの左側上腕骨の中間部破片と脛骨が木製品に混じって検出されている。きわめて断片的な出土であり、近くには東隣りの

第七節 医学部附属病院地点出土の動物遺存体

講安寺をはじめとしてかなりの数の寺もあり、それらの寺には墓地もあったことが推定されるので、そのあたりから動物などが運んできたものとするのが、最も蓋然性の高い推定であろうと思われる。この地点における埋葬をはじめとする人為的な行為に関係するものとは考えにくい。

まとめ

本地点出土の動物遺存体の特徴は、大型の貝類やマダイなど日常の食料としてよりはむしろ儀礼的な用途に用いられた可能性のある資料が出土していることである。貝類ではサザエ・アカガイ・アカニシ・アワビ類などは大型の個体が多く見られた。H21-1からはサザエが蓋と組合ったまま検出されたことから見て、これらの貝類は必ずしも食用にされたわけではないのかも知れない。

この地点出土の動物遺存体のもう一つの特徴は、この近辺で捕獲された動物だけではなく他の地域産の動物が数多く持ち込まれていることである。大型のサザエ・アカガイ・アカニシ・アワビ類などは、東京湾内で捕獲されたのではなく、外房地域や日本海などの他の地域で捕獲されたものが運ばれたと考えられる。魚類もマダラのような北日本でとれたものが入ってきている。鳥類については、池から「雁」の文字が見られる木札が出土していることから、ガン類も他の地域から搬入されたのかも知れない。

以上、日常食料ではなく儀礼的な用途に用いられたと考えられる資料が出土していることと他の地域産の動物が多数持ち込まれていることの二点が、江戸時代の武家屋敷である本地点の動物遺存体の特徴とすることができる。

I 貝類	I4 エッチュウバイ	28 バカガイ	11 クロダイ	2 アビ類
1 マダカアワビ	15 バイ	29 シオフキガイ	12 タイ類	3 ガン・
2 メガイアワビ	16 ヒレエゾボラ	30 ミルクイガイ	13 フグ類	カモ類
3 クロアワビ	17 テングニシ	II 魚類	14 カサゴ類	4 ワシ類
4 サザエ	18 アカガイ	1 イワシ類	15 コチ	5 ニワトリ
5 スガイ	19 サルボウガイ	2 コイ	16 ホウボウ	V 哺乳類
6 オオタニシ	20 タイラギ	3 マグロ類	17 ヒラメ	1 ドブネズミ
7 ウミニナ	21 イタヤガイ	4 カツオ	18 カレイ類	2 イタチ
8 ホソウミニナ?	22 マガキ	5 サバ類	19 マダラ	3 ニホンジカ
9 イボウミニナ	23 ヤマトシジミ	6 カジキ類	20 キアンコウ	4 イルカ類
10 カワアイガイ	24 ハマグリ	7 プリ	III 爬虫類	5 イヌ
11 ツメタガイ	25 カガミガイ	8 スズキ	1 スッポン	6 ネコ
12 ヤツシロガイ	26 オキシジミガイ	9 ハタ類	IV 鳥類	7 ウマ
13 アカニシ	27 アサリ	10 マダイ	1 キジ類	

V-7-1表 医学部附属病院地点出土動物種名



第V巻 巻 録

種名	ハマグリ		マガキ	ヤマトシジミ		サザエ	アサリ		サルボウイ		アカガイ	アシ	シオフキ	アワビ	その他
連構名	L	R		L	R	L	L	R	L	R	L	R	L	R	
B28-1	1	1				1									
C26-2						7									
C27-2						2									
C27-5						12									
C28-1・2			39	1	36	9	20	17	7	10	2	2	5	6	カ
D33-1	163	171	3	28	36	9	1	1	2	3	3	2	1		カ
D34-2	8	14				9	1		1		5	1			カ
E22-1						2									カ
E23-1						2									カ
E26-2・3						2									カ
E30-1			12			9	1	4							カ
E34-1	36	37	676	275	310	16	128	106	69	76	2	1	1	31	カ
E34-2	775	774				3			3	1	2	2	2		カ
E34-3	4	2			1	2			1		3	1			カ
E34-4	5	6				2			1	1	1				カ
E35-4						1	4	3							カ
E36-2	2	2		9	9	3	4	3	1						カ
F30-10						3	1	1	1		26	29	6		カ
F31-1	11	8				1			1						カ
F31-23						8	3	5							カ
F33-3	14	15		4	4	20	3	4			4	9	1		カ
F34-1		1				4	4	3			1				カ
F34-3	3	3				2	4	3							カ
F34-5		1				26	7				8	3	17		カ
F34-11						3	3	1			2				カ
G26-1						7									カ
G28-1・2・3						3									カ
G32-1						3	1								カ
G33-7			5	63	54	2	2	8	10	6			3	1	カ
G34-2	477	487	3	118	126	1	9	2			1				カ
G36-2	13	7				1	1	1							カ
H20-1		1				1									カ
H20-7・9						1	1	1							カ
H21-1	14	16		57	42	1	4	1							カ
H21-2				2	2	4	1								カ
H21-3						1									カ
H21-8						1									カ
H29-1						1									カ

V-7-2表 医学部附属病院地点員類出土量 (1)

第七節 医学部附属病院地点出土の動物遺存体

種名	ハマグリ	マガキ	ヤマトシジミ	サザエ	アサリ	サルボウイ	アカガイ	アカシ	シオフキイ	アワビ	その他の
遺構名	L R		L R		L R	L R	L R		L R		
I20-1		1						1			
K23-1				1 1 3 4 4 5 1 1							
K30-1	1	1	1				1	1			
K34-1	1	1					1	1			
L34-1		1					2	1			
池			74	79			1	1			
2号組石	61	62									
10号組石	1										
V区1・2号溝											
W36-3											
X36-1											
X36-5		2	1								
Y34-4	1		4	1							
Y35-4											
Y36-1											
Y37-4			1	1							
Z35-5	2	1			1						
Z37-1		1									
AD34-2	6	1				1	4	1			
AD35-1								1			
AD37-1											
AE35-1											
AE35-3	1		6	2							
AE39-1											
AF36-1											
AJ38-1											
AJ38-1	3	4	7	2	6	2	1				
AJ35-1			3	4	4	4					
AJ37-3	1										
V32-1	85	87	23	32	17	13	31	25			
各地区遺構外		287		52							
計	L:1690 R:1709	1008	L:679 R:708	242 壘104	L:203 R:175	L:123 R:123	L:68 R:65	50 壘1	L:45 R:40	▽29,ク 27,×23	

注：L：左、R：右、マ：マダカアワビ、ク：クロアワビ、メ：メガイアワビ  
 壘は竪柱の数を、二枚貝は左右の殻頂部の数を数えた。

V-7-2表 医学部附属病院地点貝類出土量(2)

第V巻 表 3

遺構名	部位	p-max	max	dent	art	qu	p-op	op	ve	その他
C26-1										マダ信頭骨2
C26-2										マダ信頭骨+後頭骨1
C28-1・2	マダ/L1、R2								タイ類3	マダ信頭骨1、前頭骨fr1
D33-1	カドダ/L1	マダ/L1		マダ/L1		マダ/R1	マダ/L1 マダ/L1	マダ/R1 マカドL1 コ/L1	マカドL2 マダフ1、イノシ類1 サノ類1	マダ信頭骨1、タイ類カドE56 コカド頭蓋L1
E22-1										赤カサウ下骨R1
E34-1										タイ類カドG7
E34-2	カドダ/L1	マダ/R1		キアノコ/L1				ススギR1	マカドL3	
E35-4										
F26-1										マダ信頭骨fr2
F31-1	マダ/L1			マダ/L1				ススギR1 マカドL1 ススギL1	タイ類1、ヒラメ1 フリ1	マカドL1、L2、RT1 赤カサウ頭骨fr1
F33-3							マダ/R1	コ/L1	タイ類4 マカドL1	マダ信頭骨+頭蓋L1、前頭骨3、前頭骨fr1、 頭蓋骨fr1
F34-5								フリL1	タイ類1 マカドL8 キアノコ/L1	タイ類カド49
G34-3									ヒラメ1、マカドL6 カサノ1	マダ信頭骨2
G36-2	マダ/R1 マダ/R1	カサノR1		マダ/R1 ヒラメL1 マダ/R1	マダ/L1 マダ/R1 カサノL1	マダ/R1	マダ/L1		タイ類12 マカドL4、ヒラメ3 カサノL1、カサノ1 マダフ1	マダ信頭骨1、マダノ頭骨2 カサノ類第一直管頭蓋1

V-7-3表 医学部附属病院地点魚類出土量(1)

第七節 医学部附属病院地点出土の動物遺存体

遺構名	部位	p-max	max	dent	art	qu	p-op	op	ve	その他
H21-1			マダ/R1	マダ/L2				マ/L1	タイ標1、マダ標1	マダ前頭骨1
H21-2	マダ/R2	マダ/L1、R1		マダ/R1 マダ/L1				マダ標L1 マダ/L1	マダ標6	
H21-3	マダ/L1			マダ/L1				マダ/L1	マダ/L1	マダ前頭骨1、前頭骨fr.1、前頭骨1
L34-1	キマノ/R1			マダ/L1 キマノ/L1、R1			マダ/L2、R1	マダ/L1 マダ/R1	マダ標3、ヒラミ	知イ標第一層骨標2
池									タイ標3、ヒラミ	マダ前頭骨4
10号組石									マダ/L1	マダ前頭骨fr.1
X36-5									マダ/L1	マダ前頭骨fr.1、マダ標L1
X37-4				マダ/L1					タイ標1 マダ標3	マダ前頭骨1、マダ標L1
X37-6						マダ標R1				
Y34-4									マダ標L1	マダ前頭骨1
Z37-1									マダ標L1	マダ前頭骨1
AJ34-2									マダ標L1	マダ前頭骨1
AJ35-1									マダ標L1	マダ前頭骨1
AJ37-3									マダ標L1	マダ前頭骨1
各地区遺構外	マダ/L1、R4 マダ標L2、R1	マダ/L3、R1 マダ標L1、R1	マダ/L1 マダ標R1 マダ標L2、R1	マダ/R1 マダ標L1、R2 マダ/R1	マダ/R2 マダ標L2	マダ/L1、R2 マダ標R1	マダ/L1、R1 マダ標L1	マダ標7 マダ標3 ヒラミ、マダ標1 マダ/L1 マダ/L1	マダ前頭骨2、前頭骨fr.2 マダ前頭骨fr.1	

注： p-max：前上顎骨、 max：上顎骨、 dent：歯骨、 art：関節骨、 qu：方骨、 p-op：前鋸蓋骨、 op：鋸蓋骨、 ve：椎骨  
fr：破片、 L：左、 R：右。

V-7-3表 医学部附属病院地点魚類出土量(2)

第V章 考察

遺構名	部位	Hum	Rad	U1	Mc	Fem	Tib	Mt	その他
E28-1 C26-1	ナシ	ナシ			カ(S)L1				カ(S)第1指骨L1 種不明トリ四趾骨fr1
C28-1-2 D33-1	カ(M)LT1, RT1 ニツトR1L1	カ(S)L1 カ(M)R2, RL1	カ(M)R1 カ(S)LL, RT1 カ(M)R3 カ(S)RL, RT1	カ(M)LL, R5 カ(S)R1	カ(M)R1		カ(M)R1		種不明トリ四趾骨fr1
D33-2 D34-2 E22-1	カ(M)RT1 カ(G)L#1			カ(M)LT1					種不明トリ四趾骨fr1
E34-1 E34-2 F26-1 F31-1 F33-3	カ(M)REL1 カ(M)REL1 カ(G)REL1 カ(M)REL1 カ(S)LE1 カ(S)L1		カ(M)R1	カ(M)R3 カ(S)RT1	カ(M)LL1, R2	ニツトリ RT1	ニツトリ RL1 ニツトリ RL1	ニツトリ合R1	ニツトリ第1指骨L1, R1 カ(G)下腿脛骨R1 種不明トリ fr1 カ(M)Sk1
F34-5 F34-11	カ(M)REL1 カ(M)LL1		カ(M)LL1	カ(M)LL1 種不明トリ#1	カ(M)L2		カ(M)LL1		
G36-2 H21-1 H21-3	カ(S)L1 カ(M)LL1 カ(G)R#1	カ(S)LL1 カ(M)LL1, LF1		カ(S)LL1 カ(M)LL1, LF1	ニツトリR1 カ(M)L2, R1				アヒ標Sk1 種不明トリVe2 カ(S)第1指骨L1 ナシScapR1
I20-1 I30-1 J31-1 K30-1 L34-1	カ(M)LF2, R1 ツ集(G)R#1 カ(S)L#1	カ(S)REL1 カ(M)REL1	カ(M)R1 カ(M)LL1	カ(M)R1 カ(M)LL1 ナシL1	カ(M)LL, R1 カ(M)LL, R1	カ(M)LL, R1	ニツトリR1	カ(M)R1 カ(M)R1	カ(G)第1指骨R1 種不明トリ四趾骨fr1

V-7-4表 医学部附属病院地点鳥類出土量(1)

第七節 医学部附属病院地点出土の動物遺存体

部位 遺構名	Hum	Rad	Ul	Mc	Fem	Tib	Mt	その他
池	骨(S)LF2, L#1, R1, R#1, RF1	骨(G)RL1 骨(S)LL3, LF2 L#1, RL5	骨(G)RL1 骨(S)L2, LL1, LF1, L#2, R1, RL4, RF1	骨(M)RL1	骨(M)LF1, RF1	骨(S)LL1, LF1 RL1, R#1		骨不明/四肢骨fr2
10号組石	骨(G)RE1 骨不明/LL#1		骨(M)LF1	骨(M)RL 骨不明/RL1				
X36-5								
X37-4								
X37-6								
X38-1		骨(M)RL1						
Y34-4	骨不明/LL#1		骨(M)LL, R2	骨(M)RL				
Y37-3	骨(S)LL1			骨(M)RF1		二つRL1		
Y37-4								
AD35-2	二つL#1							
AE35-3	骨(S)LF1							
AE35-5								
AE37-1	骨(M)LL1					骨(M)RL1 骨不明/RL#1		骨不明/四肢骨fr1
AJ37-3		骨(M)LL	骨(M)LL	骨(M)LL				
各地区遺構外	骨(M)LL1, LF1, L#1, RL, RL1, RF1 骨不明/LL#1	骨(S)RL1	骨(M)L2, R1	骨(M)RL 骨不明/RL#1		骨不明/LL1, R1	骨(M)RL1	骨不明/rlr2

注：Sk：頭蓋骨、Scap：肩甲骨、Hum：上腕骨、Rad：橈骨、Ul：尺骨、Mc：中手骨、Fem：大腿骨、Tib：脛骨、Mt：中足骨、fr：破片、(G)：大型種、(M)：中型種、(S)：小型種、L：左、R：右、上：近位部片、下：遠位部片、中：中間部片、上・下・中のないものはほぼ完存のもの。  
 ガン(G)はヒシクイ程度の大きさ、ガン(S)はマガン程度の大きさ、カモ(M)はカルガモ程度の大きさ、カモ(S)はコガモ程度の大きさの種を示すこととした。ガン(S)には、カモの大型種も含まれているかもしれない。

V-7-4表 医学部附属病院地点鳥類出土量(2)

第V章 考 察

部位 遺構名	S k	M a x	M a n d	Scap	Hum	Rad	Ul	PeI	Fem	Tib	ve	そ の 他	備 考
C26-2 C28-1・2 D32-1 D33-1 D34-2 E22-1 E24-1 E32-7	イヅr2⑩	イヅL(I123CP1234M12)⑩ イヅR(I123CP1234M12)⑩	イヅR(×P34M1) イヅL(I123CP1234M123)⑩ イヅR(I123CF1234M123)⑩					イヅL1 イヅR1⑩	イヅL1 イヅR1⑩	イヅR1 イヅL1⑩	イヅ6 イヅ6⑩	イヅAnt2 イヅMt2 イヅrib fr1  イヅAnt膝部分 (膝前)fr1 イヅAt1⑩、イヅAx1⑩	⑩・老
E34-1 E34-2 F22-6・7 F26-1 F31-1 F33-3	イヅr1⑩	イヅrLR1⑩	イヅrLR1⑩		イヅL1⑩	イヅL中1 イヅL1		イヅrLR1		イヅL1⑩		イヅ or イヅDe fr3	⑩・ad
F34-11	イヅ(膝前)⑩ イヅL⑩ イヅ膝前R1⑩ イヅ膝前R1⑩ イヅr1⑩	イヅL(×××××××)⑩ イヅR(P1234M12)⑩ イヅR(P34M12)⑩	イヅL(×××P34M12)⑩ イヅR(×P34M12)⑩ イヅL(×M23)⑩ イヅR(××M23)⑩	イヅL1、R1⑩ イヅR1⑩	イヅL1、R1⑩ イヅL1、R1⑩	イヅR中1⑩ イヅL1	イヅL1、R1⑩ イヅR1⑩	イヅL1、R1⑩ イヅL1、R1⑩ イヅR1(膝)⑩	イヅL1、R1⑩ イヅL1、R1⑩ イヅR1⑩	イヅL1、R1⑩ イヅL1、R1⑩ イヅR1⑩	イヅ1⑩ イヅMc or Mt6⑩ イヅFib1⑩、R1⑩ イヅAx1⑩ イヅCa111、R1⑩ イヅAstR1⑩ イヅMc or Mt7⑩ イヅrib5⑩	イヅAt1⑩、イヅAx1⑩ イヅMc or Mt6⑩ イヅFib1⑩、R1⑩ イヅAx1⑩ イヅCa111、R1⑩ イヅAstR1⑩ イヅMc or Mt7⑩ イヅrib5⑩ イヅrib fr36、膝3 イヅMc or Mt1 イヅrib1⑩	⑩・若 ⑩・若
H21-1 H21-8 I31-1	イヅr1⑩	イヅrLR1⑩	イヅrLR1⑩		イヅL1		イヅr1⑩	イヅL1(膝)⑩ イヅL1(膝)	イヅL1、R1⑩ イヅL1、R1⑩	イヅL1⑩ イヅL1	イヅ34		⑩・ad

V-7-5表 医学部附属病院地点哺乳類出土量 (1)

第七節 医学部附属病院地点出土の動物遺存体

部位 遺構名	S k	M a x	M a n d	Scap	Hum	Rad	U l	Pel	Fem	Tib	ve	そ の 他	備 考
L34-1 2号組石 4号組石			イ3Lfr1				ネ3R1		イ3R#1	ネ3L下、R1		イ3Mc or Mt1 イ3肩胛骨+AntR1	
X36-1			イ3L(XXXCP <sub>234</sub> M <sub>2</sub> )	イ3LL					ネ3R#1		ネ32		
X36-5					ネ3LL		ネ3LL	イ3LL(骨) ネ3LL(骨)	ネ3R#1	ネ3LL			
Y34-4	イ3#1		ネ3L(CXXM <sub>1</sub> )		ネ3L下								骨不詳の動物遺構fr1
Z35-5													
AD35-1													
AD35-2													
AE35-5													
AE36-4													
AJ33-1	ネ3L①		ネ3LL, R1① イ3R1		ネ3LL, R1① イ3LL, R1①				イ3L上骨1	イ3L#1	イ31	イ3rib1	0:若 0:ad 0:ad
AJ34-1			ネ3L(P <sub>34</sub> M <sub>1</sub> )										
AJ34-2		イ3fr1	イ3R(XL <sub>2</sub> CP <sub>1,234</sub> M <sub>1,2</sub> )老				イ3R1①						
AJ35-1			イ3L(XXP <sub>4</sub> M <sub>1,2</sub> X)										
AL37-1													
V32-1													
各地区遺構外	イ3蹄骨L+ イ3蹄骨R+ イ3蹄骨L				イ3LL①			イ3LL, R1① イ3L老	イ3L下、 R1① ネ3LL, R11	イ3L① ネ3R1, RT1 イ3R11	イ31	イ3Ca1R1① イ3Mc or Mt1① イ3肩胛骨、イ3 Call1, 34Ant1 イ3orの3rib fr1 イ3orの3rib fr1, 骨不詳fr4	0:ad

注：Sk：頭蓋骨、Max：上顎骨、Mand：下顎骨、De：歯牙、At：第一頸椎、Ax：第二頸椎、Scap：肩甲骨、Hum：上腕骨、Rad：橈骨、U1：尺骨、Pel：寛骨、Fem：大腿骨、Tib：脛骨、Cal：踵骨、Ast：距骨、ve：椎骨、Rc：中手骨、Mt：中足骨、Fib：腓骨、rib：肋骨、Ant：角片、fr：破片、Pelの項の(腸)は腸骨部分を示す。L：左、R：右、幼：幼獣、若：若獣、老：老獣、幼・若・老のないものも成獣。上：近位部分、中：中間部分、下：遠位部分、上・中・下のないものはほぼ完存のもの。上・下顎骨の( )は骨体があることを示す。( )内およびその他の項のLは切歯、Cは大歯、Pは前臼歯、Mは後臼歯を示す。小文字は乳歯を示す。それらに付された数字は歯の順序を示す。( )内の×は脱臼を示す。同一遺構内の①、②、③はそれぞれ同一個体を示す。

V-7-5表 医学部附属病院地点哺乳類出土量(2)



## 第八節 土坑内出土漆関係資料

永嶋 正春\*

ここでは、武家屋敷内の土坑から出土した貝殻類の分類作業に伴って検出された標記の資料について報告する。なお、これらの資料については光学顕微鏡観察、X線分析（蛍光X線分析、X線回折）を実施した。

**漆塗膜片** 写真20-1-1(D33-1出土) 層厚0.6-0.8mm 前後の漆膜、両面とも平滑で淡褐赤色を呈する。層の中央部に木質と思われる組織が僅かに残存することより、木胎漆器の断片とみてよい。全て細かい破片のため、元の形態は不明。木質の上に白褐色の地塗層が認められるが、石英が多く検出されていることから土様の鉱物質粒子を漆に混ぜて下地としているのであろう。なお、表面の赤色は僅かに混入されている朱(HgS)によるものと思われる。

**漆紙** 写真20-1-2(F33-3出土) 写真20-1-3(F34区出土) 2点とも、一見して漆紙の性状を呈する(写真20-2・3)。赤外線テレビによっても文字は確認されない。写真20-1-2の漆紙は、内側に淡褐色の漆を包み込むようにして折り返されており、その厚さは厚いところで2cmを越える。写真20-1-3の漆紙は、乳白褐色を呈しており、漆の色としては見慣れぬものである。X線回折では顕著なピークはないが、蛍光X線分析では圧倒的に多くのカルシウムが検出されており、何等かのカルシウム化合物が混入されているための色調と判断できる。

**貝殻の内面に付着するもの** 写真20-1-4~7 写真20-1-4(AJ37-3 出土)は、貝殻の内面に淡褐赤色の漆を貯えたもので、その上を漆紙が覆う(写真20-4)。X線回折によれば、この赤色はべんがら( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )であるが、蛍光X線分析では鉛も検出されている。漆の乾燥剤として鉛化合物を使用したのであろうか。写真20-1-5(AK34・35区出土)は、貝殻の内面にまず赤色漆があり、その上に乳淡黄褐色の漆が重なる。漆が乾固する前に、その面から何かを引き剥したかの様なおおぶりのしわが目立つ。なおこの漆の上に、やや捻られた状態の紙の固まりが付着している(写真20-5)。漆を漉した時の紙であろう。写真20-1-6・7は、内面にべんがら漆が付着する。べんがらの発色は良好であるが漆の状態は悪い。写真20-1-7の方は、あるいは顔料だけの付着かも知れない。

以上に述べてきた漆関係資料の大半は、いわゆる漆製品ではなく漆の作業に伴う工程上の遺物である。これらの遺物を出土した土坑の性格を十分に把握することはなかなか困難であろうが、少なくとも武家屋敷内に於て何等かの漆作業が行われていたことは確かである。遺物の内容から考えて小工芸品的な利用にとどまっていたものとはみられるが、今後、他の同様な遺跡に於ても、漆製品以外に、漆の作業工程に伴う遺物が出土する可能性を示唆するものとして重要である。

なお参考までに、新宿区の三栄町遺跡(報告書自然遺物編は平成2年度刊行予定)からは、貝殻(ハマグリ)内に朱漆を溜め、その上面を漆紙で丁寧に覆った状態の資料が検出されている。

\* 国立歴史民俗博物館 情報資料研究部

## 第九節 化学的研究

山崎一雄<sup>a)</sup>・大橋康二<sup>b)</sup>・望月明彦<sup>c)</sup>  
杉崎隆一<sup>d)</sup>・内田哲男<sup>e)</sup>・小山睦夫<sup>f)</sup>  
高田實弥<sup>f)</sup>・藁科哲男<sup>f)</sup>・東村武信<sup>f)</sup>

### 1 研究方法と研究試料

#### 1.1 まえがき

本節では江戸時代の遺物の中の陶片について行った化学的研究の結果を記載する。この研究の目的は陶片胎土の化学成分を明らかにし、考古学的知見と相まって、これら陶片の生産地を知る手がかりを得ることである。

**研究試料** 東京大学医学部附属病院中央診療棟建設地点出土の陶片は東京大学文学部藤本強教授から提供されたものであり、その詳細は本報告書第IV章に記載されている。これらの陶片と比較するために分析したのは石川県山中町九谷古窯跡出土の陶片と九州陶磁文化館大橋康二が選択した肥前古窯跡出土の陶片である。

研究方法と分担者は次の通りである。

陶片胎土の主成分, 放射光蛍光X線分析	望月明彦
同上, 蛍光X線分析と炎光分析	杉崎隆一・内田哲男
同上, 誘導結合プラズマ発光分析	望月明彦
陶片胎土の微量成分, 機器中性子放射化分析	小山睦夫・高田實弥
分析結果の多変量解析	藁科哲男・東村武信

この報告は各分担者の実験報告をもとに山崎がとりまとめたものである。

#### 1.2 研究方法

1.2.1 放射光蛍光X線分析 文部省高エネルギー物理学研究所の放射光実験施設の装置 BL4Aを使用した。電子蓄積リングから発する放射光をシリコン結晶により単色化し、真空中で胎土粉末を照射し(100-500秒)、発生する蛍光X線の強度をシリコン(リチウム)半導体検出器で測定した。今回の陶片ではアルミニウム、珪素、カリウム、カルシウム、チタン、マンガン、鉄、亜鉛、鉛、ルビジウム、ストロンチウム、ジルコニウムなどが検出された。この方法による定量分析は困難であったが、元素の存在比が陶片の判別には有効であった。

1.2.2 蛍光X線分析 珪酸塩岩石の主成分10元素(Si, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, KおよびP)の定量を波長分散型蛍光X線装置を用い、一連の操作により、湿式分析法と同じ精度で自動的に行う方法が開発された(杉崎・下村・安東 1977)から、これを陶片胎土の分析に応用した。操

---

a) : 名古屋大学名誉教授, b) : 九州陶磁文化館, c) : 沼津工業高等専門学校, d) : 名古屋大学理学部地球科学科, e) : 名古屋工業大学応用化学科, f) : 京都大学原子炉実験所

第V章 考察

作は胎土粉末0.6gと無水四ホウ酸リチウム3gとを1mgの誤差内で正確に秤量、混合し、高周波電気炉で融解して、ガラス状円盤をつくり、蛍光X線分析を行った。装置は日本電子製JSX-100Sで、標準試料としては地質調査所のJA-1、JF-2、JG-3などを使用した。相対誤差は含有量が10%以上の元素については1%以下、含有量が10%以下の元素については1-5%である。なお今回の実験では、NaとKとは別試料を酸で分解し蛍光分析法により定量した。酸による珪酸塩の分解法については内田等の報告(1984)を参照。

1.2.3 誘導結合プラズマ発光分析 前項の蛍光X線分析では0.6gの分析試料が必要であるが、陶片が小さく、それだけの胎土が採取できない場合には本方法を用いて主成分を分析した。胎土粉末約25mgをテフロン製酸分解容器にとり、塩酸0.5mlとフッ化水素酸0.25mlを加えて、室温で一

V-9-1表 東京大学医学部附属病院中央診療棟建設地点出土分析試料

分析試料番号	出土遺構	遺構の種類	遺構の推定年代	試料の名称	図番号	備考	
1	T 1	L32-1	地下式土坑	-1682	青手「古九谷」皿 <sup>1)</sup>	IV-107図 69	
2	T 2	L32-1	地下式土坑	-1682	青手「古九谷」兜鉢 <sup>1)</sup>	IV-107図 73	
3	T 3	L32-1	地下式土坑	-1682	青手「古九谷」皿小片 <sup>1)</sup>	—	
4	T 4	L32-1	地下式土坑	-1682	青手「古九谷」皿小片 <sup>1)</sup>	—	
5	T 5	L32-1	地下式土坑	-1682	青手「古九谷」口縁 <sup>1)</sup>	IV-107図 74	A <sup>2)</sup>
6	T 6	L32-1	地下式土坑	-1682	青手「古九谷」変形型皿 <sup>1)</sup>	IV-107図 72	C・D <sup>2)</sup>
7	T 7	L32-1	地下式土坑	-1682	青手「古九谷」皿 <sup>1)</sup>	IV-107図 70	E <sup>2)</sup>
8	T 8	L32-1	地下式土坑	-1682	青手「古九谷」口縁 <sup>1)</sup>	—	B <sup>2)</sup>
9	T 9	2号組石	石組の溝	1683-幕末	青手「古九谷」皿 <sup>1)</sup>	IV-116図 14	
10	T10	2号組石	石組の溝	1683-幕末	五彩手「古九谷」鉢底小片 <sup>1)</sup>	—	
11	T11	E22-1	土坑	18世紀後半	五彩手「古九谷」亀甲文鉢小片 <sup>1)</sup>	—	3)
12	T12	V区	表土の下	?	色絵小坏	—	4)
13	T13	7号組石	石組の溝	19世紀	色絵皿	IV-133図 8	5)
14	T14	F27-1	地下式土坑	1683-1703	色絵皿 <sup>1)</sup>	IV-034図 7	6)
15	T15	F34-11	地下式土坑	1683-1703	型皿	IV-050図 99	
16	T16	F34-11	地下式土坑	1683-1703	白磁碗	IV-046図 22	
17	T17	F33-3	地下式土坑	1704-1730	染付皿	IV-039図 23	
18	T18	L32-1	地下式土坑	-1682	肥前染付皿 <sup>1)</sup>	IV-104図 36	
19	T19	L32-1	地下式土坑	-1682	肥前染付型皿 <sup>1)</sup>	IV-106図 58	
20	T20	L32-1	地下式土坑	-1682	肥前染付皿 <sup>1)</sup>	IV-106図 63	
21	T21	L32-1	地下式土坑	-1682	肥前染付皿 <sup>1)</sup>	IV-104図 41	
22	T22	L32-1	地下式土坑	-1682	肥前染付型皿 <sup>1)</sup>	IV-104図 34	
23	T23	L32-1	地下式土坑	-1682	肥前白磁小坏 <sup>1)</sup>	IV-109図 98	
24	T24	L32-1	地下式土坑	-1682	肥前染付型皿 <sup>1)</sup>	IV-106図 65	
25	T25	L32-1	地下式土坑	-1682	肥前染付瓶 <sup>1)</sup>	IV-109図102	
26	T26	L32-1	地下式土坑	-1682	五彩手「古九谷」型皿 <sup>1)</sup>	IV-106図 68	
27	T27	L32-1	地下式土坑	-1682	肥前色絵小坏 <sup>1)</sup>	IV-108図 87	
28	T28	L32-1	地下式土坑	-1682	肥前色絵八角坏 <sup>1)</sup>	IV-109図 95	

1) 火災による二次的な焼成を受けている。天和二年(1682)の火災によるものと推定される。 2) 東京大学遺跡調査室病院班・山崎一雄 1987 分析試料。 3) 古い時期の遺物の周辺からの流れ込み? 4) 再興九谷? 5) G23-10と接合。 6) H29-1(-1682)と接合。

第九節 化学的研究

夜放置して分解する。翌朝4%ホウ酸溶液を加え、全量を50gとして、Jarell-Ash製マルチチャンネル誘導結合プラズマ発光分析装置で分析した(内田ほか1984)。

1.2.4 機器中性子放射化分析 分析に供した陶片から小型のダイヤモンドカッターで切り出した30-60mgの胎土を清浄なポリエチレン容器中に秤取した。分析試料3個と、マンガン10 $\mu$ g、ナトリウムとして500 $\mu$ gが含まれている塩化ナトリウム溶液をミリポアフィルターに着点した標準とを照射用ラビットにつめ、 $2.7 \times 10^{13} \text{n} \cdot \text{cm}^{-2} \cdot \text{sec}^{-1}$ の熱中性子、 $1.1 \times 10^{12} \text{n} \cdot \text{cm}^{-2} \cdot \text{sec}^{-1}$ の熱外中性子流束を持つ圧気輸送照射設備(京都大学原子炉実験所)で10秒間照射した(短寿命核種の場合)。長寿命核種の場合には、各試料30-100mgずつをポリエチレン容器に充填したもの8個と中性子の

V-9-2表 九谷古窯跡出土分析試料

分析試料番号	窯名	推定年代	試料の名称	遺構の記号	備考	
1	K 5	第1号窯	青磁皿	九1ロ-11		
2	K 6	第1号窯	白磁皿	九1ロ-11		
3	K 8	第1号窯	白磁皿	九1ロ-11		
4	K 9	第1号窯	白磁皿	九1排土	内面に鉄絵草花文	
5	K11	第1号窯	青磁皿	九1ハ-16		
6	K12	第1号窯	白磁鉢	K II 1 あ1819M		
7	K13	第1号窯	白磁皿	九1ハ-14A		
8	K15	第1号窯	白磁皿	九1ハ-13G		
9	K16	第1号窯	白磁鉢	九1ロ-15B		
10	K18	第1号窯	白磁碗	九1ハ-150		
11	K19	第1号窯	白磁皿(?)	九1ロ-11		
12	K23	第1号窯	青磁皿	九1ハ-15C		
13	K24	第1号窯	青磁鉢	K II 1 ロ-18S		
14	K25	第1号窯	白磁碗	九1イ-16P		
15	K29	第1号窯	白磁皿	K II 1 ハ-4K	陶質	
16	K30	第1号窯	褐色釉碗	K II 1 ホ-4R		
17	K31	第2号窯	無釉皿	K II 2 M	陶質	
18	K33	第2号窯	白磁皿	K II 2 M	陶質	
19	K34	第2号窯	白磁皿	K II 2 M		
20	K35	第2号窯	白磁碗	K II 2 M		
21	K37	第2号窯	白磁碗	K II 2 M		
22	K38	第2号窯	青磁碗	K II 2 S C		
23	K39	第2号窯	淡褐色釉碗	K II 2 M		
24	K44	吉田屋窯	1824-1825	白磁皿	K II Y H	釉は青灰色となる、口錆
25	K45	吉田屋窯		白磁皿	K II Y H	釉は青灰色となる、口錆
26	K47	吉田屋窯		白磁皿	K II Y H	釉は青灰色となる、口錆
27	K50	吉田屋窯		白磁皿	K II Y H	釉は青灰色となる、口錆
28	K51	若杉窯	1811-1875	青磁鉢		
29	K55	若杉窯		鉢(?),色絵		
30	K56	若杉窯		鉢(?),色絵(青手)		

九1は第一次調査(昭45)、K IIは第二次調査(昭46)、1は第1号窯、2は第2号窯、Yは吉田屋窯、Mは物原、Hは排土、S Cは道路で削られた断面を示す。第1号窯、第2号窯、吉田屋窯の陶片はK9を除き、すべて無文である。

第V章 考察

V-9-3表 肥前古窯跡出土分析試料(1)

分析試料番号	窯名	試料の名称	推定生産年代	試料の特徴
1	H 1	原明窯	染付碗	1610-1630年代 口縁部の破片であり、口縁部長さ3.6cm。釉には貫入があり、呉須は暗青黒色。外面には(半菊)唐草文を描いたものか。
2	H 2	原明窯	染付小皿	口縁部の破片であり、口縁部長さ1.7cm。砂目積みタイプである。釉は黄緑色を帯び、貫入が多い。呉須は暗青黒色。内面に圏線文を施す。
3	H 3	原明窯	染付小皿	口縁部の破片であり、口縁部長さ1.6cm。砂目積みタイプである。釉は黄緑色を帯び、貫入が多い。呉須は暗青黒色。内面に圏線文を施す。
4	H 4	原明窯	染付小皿	口縁部の破片であり、口縁部長さ1.8cm。砂目積みタイプである。2、3と同種だが貫入が少なく、黄味も少ない。内面に圏線文を施す。
5	H 5	小溝上窯	白磁(?)皿	CT1層。口縁部の破片であり、口縁部の長さ2.0cm。焼成不十分のため、釉は貫入が多く、淡褐色である。
6	H 6	小溝上窯	染付皿	CT1層。胴部の破片であり、外面に手跡がある。
7	H 7	小溝上窯	染付皿	CT1層。胴部の破片であり、長軸9.0cm。外面に釉むらがある。呉須は暗青黒色。内面に染付文様を施す。
8	H 8	小溝上窯	染付瓶	CT3層。胴部の破片であり、長軸5.3cm。呉須は明るい暗青色。外面に松竹文を染付。
9	H 9	百間窯	染付碗	1620-1650年代前半 口縁部の破片であり、口縁部長さ3.9cm。釉は貫入が多く、不透明である。呉須は暗青色。外面に染付文様を施す。
10	H10	百間窯	染付碗	口縁部の破片であり、口縁部長さ2.0cm。釉は貫入がある。呉須は暗青色。外面には竹文を描いたものか。
11	H11	百間窯	染付鉢	1630-1640年代 胴部の破片であり、長軸6.0cm。釉は貫入が多い。呉須は暗青色。内面に区画線文を施す。
12	H12	百間窯	染付皿	胴部の破片であり、長軸6.8cm。釉は貫入が多い。呉須は暗青色。内面に染付文様を施す。
13	H13	ダンバギリ窯	染付手塩皿	1640-1650年代 高台から口縁部にかけての破片で、推定口縁部長さ6.8cm。蛇ノ目高台である。呉須は明青色。内面に圏線文を施す。
14	H14	ダンバギリ窯	染付小皿	1650年代頃 底部の破片であり、長軸5.3cm。側面は型打成形である。釉は貫入が多い。呉須は青色。内面に染付文様、外面に圏線文を施す。畳付のみ無釉であり、砂が溶着。
15	H15	ダンバギリ窯	染付小皿	口縁部の破片であり、口縁部長さ4.0cm。側面は型打成形である。呉須は青色。内外に圏線文を施す。
16	H16	窯ノ辻窯	染付小皿	1630-1640年代 高台から口縁部にかけての破片で、口縁部長さ3.1cm。呉須は青色。内面に丸文を施す。畳付のみ無釉であり、砂が溶着。
17	H17	窯ノ辻窯	染付小皿	高台から口縁部にかけての破片で、口縁部長さ6.1cm。釉は貫入がある。呉須は青色。内面に丸文を施す。畳付のみ無釉であり、砂が溶着。
18	H18	窯ノ辻窯	染付小皿	高台から口縁部にかけての破片で、口縁部長さ9.1cm。釉に貫入が少しみられる。呉須は青色。内面に山水文を施す。
19	H19	窯ノ辻窯	染付小皿	高台から口縁部にかけての破片で、口縁部長さ9.6cm。呉須は青色。内面に流水文を施す。
20	H20	猿川窯	染付小皿	1620-1640年代 口縁部の破片であり、口縁部長さ4.9cm。呉須は青黒色。口縁部は波縁に作る。内側面の文様は菊花を描いたものか。外面に圏線文を施す。
21	H21	猿川窯	染付小皿	高台から口縁部にかけての破片で、口縁部長さ4.6cm。呉須は暗青色。内面に菊花文を施す。畳付のみ無釉であり、砂が溶着。
22	H22	猿川窯	染付大皿 (色絵素地)	1640-1650年代 口縁部の破片であり、口縁部長さ4.1cm。外面に釉むらがある。呉須は青色。内外に圏線文を施す。内面に降灰がみられる。
23	H23	猿川窯	染付大碗	1650-1660年代 口縁部の破片であり、口縁部長さ4.1cm。呉須は青色。外面に龍文、内面に花文を施す。
24	H24	長吉谷窯	白磁鉢	胴部の破片であり、長軸8.6cm。釉は貫入が多く、焼成はやや不十分であり、黄味を帯びる。外面にロクロ成形痕がみられる。

第九節 化学的研究

V-9-3表 肥前古窯跡出土分析試料(2)

分析試料番号	窯名	試料の名称	推定生産年代	試料の特徴
25	H25	長吉谷窯	白磁皿	1650-1660年代 底部の破片であり、長軸8.4cm。釉は貫入が多く、焼成はやや不十分であり、黄味を帯びる。畳付は3回釉削りをするが、若干残っており、砂が少し溶着。
26	H26	長吉谷窯	白磁皿	底部の破片であり、長軸7.6cm。釉は貫入が多い。畳付は3回釉削りを施し、砂が溶着。
27	H27	長吉谷窯	染付皿	底部の破片であり、長軸6.4cm。糸切細工による貼付高台。呉須は青色。内面に染付文様を施す。
28	H28	下白川窯	染付碗	1660-1680年代 BT3層。口縁部の破片であり、口縁部長さ4.8cm。呉須は淡青色。外面に雲龍文、内面に魚文を施す。
29	H29	下白川窯	染付小皿	BT4B層。底部の破片であり、長軸5.9cm。釉は気泡が多い。呉須は青色。底部に圏線文、高台内に銘を施す。
30	H30	下白川窯	染付小皿	BT2層。底部の破片であり、長軸5.5cm。釉は気泡が多い。呉須は青色。内側面に窓絵文、外面に圏線文を施す。畳付は砂が溶着。
31	H31	下白川窯	青磁皿	BT1層。胴部の破片であり、長軸5.3cm。釉は貫入があり、暗緑色を帯びる。素地は灰色。
32	H32	柿右衛門窯	白磁皿	底部の破片であり、長軸6.6cm。釉は乳白色。
33	H33	柿右衛門窯	白磁皿	底部の破片であり、長軸7.5cm。底部にハリ痕あり。
34	H34	柿右衛門窯	白磁皿	底部の破片であり、長軸5.1cm。焼成不十分。釉は灰色を帯び、貫入が多い。
35	H35	柿右衛門窯	青磁皿	口縁部の破片であり、口縁部長さ4.2cm。型打成形により、輪花形に作る。釉は気泡が多く、透明度が高い。
36	H36	樋口窯	染付碗	口縁部の破片であり、口縁部長さ6.1cm。呉須は青色。外面に龍文、内面に圏線文を施す。
37	H37	樋口窯	染付碗	胴部の破片であり、長軸6.7cm。呉須は青色。外面に龍文、内面に圏線と魚文を施す。
38	H38	樋口窯	染付碗	胴部の破片であり、長軸5.5cm。外面に雲龍文、見込に圏線文を施す。
39	H39	鍋島藩窯(古窯)	染付碗	1650-1670年代 IV地点7.8.9層倒壊土を含む。口縁部の破片であり、口縁部長さ3.2cm。釉は不透明であり、むらが多い。呉須は青黒色。外面に網目文を施す。
40	H40	鍋島藩窯(古窯)	染付碗	IV地点7.8.9層倒壊土を含む。胴部の破片であり、長軸5.0cm。釉は不透明であり、むらが多い。呉須は青黒色。外面に網目文を施す。
41	H41	鍋島藩窯(古窯)	染付碗	1650-1660年代 胴部の破片であり、長軸4.6cm。外面に染付文を施す。
42	H42	不動山皿屋谷2号窯	染付碗	1660-1680年代 赤焼土混入層。口縁部の破片であり、口縁部長さ4.2cm。釉は不透明である。呉須は暗青色。素地は灰色。白化粧土(表面を拭く程度)を施している。外面は鳳凰文、内面には圏線文を施す。
43	H43	不動山皿屋谷2号窯	染付皿	赤焼土混入層。高台から口縁部にかけての破片で、口縁部長さ6.7cm。釉は灰色を帯びる。呉須は暗青色。素地は灰色。外面に圏線文。
44	H44	不動山皿屋谷3号窯	染付皿	高台から口縁部にかけての破片であり、口縁部長さ5.3cm。釉は貫入が多い。呉須は青黒色。素地は灰色。内面文様はイチョウ文か。外面には圏線文を施す。畳付は3回釉削りを施す。
45	H45	不動山皿屋谷1号窯	青磁皿	赤焼土混入層。胴部の破片であり、長軸5.8cm。釉は暗緑色であり、貫入が多い。素地には黒色微粒を含み、内野山の土に近い。
46	H46	三股古窯	青磁大皿	1630-1640年代 高台を含む底部の破片であり、高台径6.5cm、長軸15.3cm。釉は気泡が多く、透明度は高い。高台は三足付である。内面にはへら彫りで竹文を表わしたものか。畳付には砂が溶着。
47	H47	永尾本登窯	染付碗	1660-1680年代 胴部の破片であり、長軸6.0cm。呉須は青色。外面に雲龍文、見込に荒磯文を施す。

## 第V章 考察

モニターとしてクロム、コバルト各25 $\mu$ g, アンチモン10 $\mu$ g などを含む溶液をミリポアフィルターに着点したものとを同時に照射用ラビットにつめ、前記照射設備で1時間照射した。これらのモニターは試料を実際に照射している熱中性子と熱外中性子の流束を決定するためのものである。原子炉で10秒間照射した試料は約15分間冷却した後、ゲルマニウム半導体検出器付き4Kチャンネル波高分析器で200秒ずつガンマ線を測定した。1時間照射の試料は7-10日間冷却後、30-60分間測定し、さらに1月後、1-2時間測定した。標準試料としては地質調査所の岩石試料JB-1を用いた。測定したデータはテープに記録し、計算機により解析した(小山 1984)。

### 1.3 研究試料

1.3.1 東京大学医学部附属病院中央診療棟建設地点出土陶片 化学的研究の対象としたのはV-9-1表の28点である。これらのうちT5, T6, T7とT8は本調査の予報(東京大学遺跡調査室病院班・山崎 1987)の分析記号A, C・D, E およびBと同じ陶片である。「古九谷」は古九谷様式を意味する。これらの詳細については第四章の遺物の項を参照。

1.3.2 九谷古窯跡発掘調査時出土の陶片 1.3.1の陶片と比較するため、昭和45年9月(第一次調査)と同46年7月(第二次調査)に行われた石川県山中町九谷の第1号窯, 第2号窯および吉田屋窯の発掘調査(檜崎 1983)により出土した陶片の一部と、同47年7月の石川県小松市若杉町の若杉古窯跡調査(小村 1983)により得られた陶片の一部を分析した。九谷調査の概要は昭和46年と47年に発表されているが、正式の報告は未刊である。これらの陶片については山崎が化学的研究を担当し、その概要は発表した(山崎 1986)、詳細は正式報告書のなかに含まれているため同様に未刊である。今回主成分および微量成分の分析を行った陶片はV-9-2表にある30片である。

1.3.3 肥前古窯跡出土陶片 比較試料として分析した肥前古窯跡出土の陶片は九州陶磁文化館の大橋康二が選択したV-9-3表の47点である。

これらの陶片の中、有田地区に属するものはH1-H38, 伊万里地区に属するものはH39-H41で、残りはそれ以外の嬉野地区等に属する。後者は有田泉山とは別の陶石を原料としているらしく、チタン含有量が有田地区に比べて大きい。

以上の東京大学医学部附属病院建設地点、九谷ならびに肥前出土の陶片から山崎が分析試料(胎土)を採り、分析担当者に送り、分析を依頼した。

## 2 研究結果

### 2.1 放射光蛍光X線分析による判別

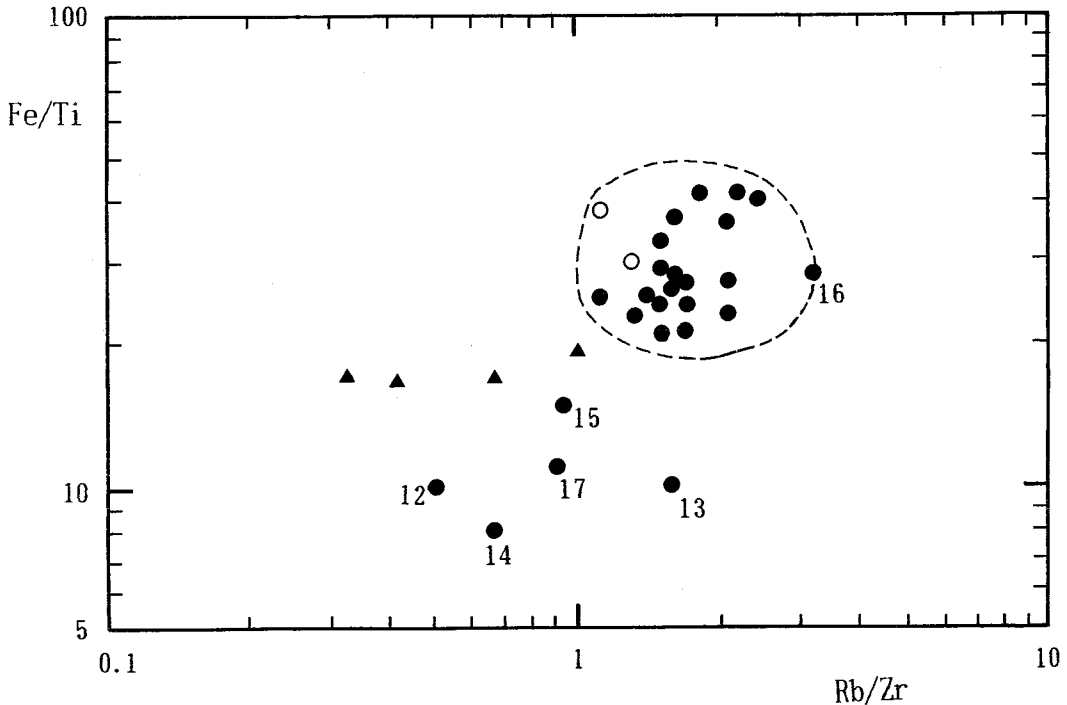
放射光蛍光X線分析を行うことができたのは、実験施設の割当時間などの関係で分析試料T1-T28(V-9-1表参照)および九谷出土の陶片4個, 有田出土の陶片2個のみであった。この実験は大橋から肥前出土の陶片を入手する以前の1987年12月に行われたため、有田の陶片は山辺田4号窯跡出土の染付皿の破片(記号A1)と天神森窯跡出土の染付皿破片(記号A5)である。

陶片に放射光蛍光X線を照射した時蛍光X線を発生する元素は1.2.1に記した通りである。これらの中、鉄/チタン(Fe/Ti)とルビジウム/ジルコニウム(Rb/Zr)の強度比をV-9-4表に示したが、T3, T9, T19はチタンの蛍光X線の強度が小さく測定できなかった。

第九節 化学的研究

V-9-4表 放射光蛍光X線分析によるFe/TiとRb/Zr (グラフは対数目盛)  
●は病院地点出土、○は有田、▲は九谷陶片 番号は表・グラフとも同じ

	東京大学医学部附属病院地点																				九谷				有田						
	T1	T2	T4	T5	T6	T7	T8	T10	T11	T12	T13	T14	T15	T16	T17	T18	T20	T21	T22	T23	T24	T25	T26	T27	T28	K18	K24	K34	K44	A1	A5
Fe/Ti	23	27	25	42	24	29	24	36	41	10	10	8	15	28	11	40	27	26	37	33	21	21	28	25	23	17	17	17	19	39	30
Rb/Zr	2.1	2.1	1.1	2.2	1.5	1.5	1.7	2.1	1.8	.55	1.6	.66	.93	3.2	.90	2.4	1.7	1.6	1.6	1.5	1.7	1.5	1.6	1.4	1.3	.33	.41	.66	1.0	1.1	1.3



東京大学医学部附属病院地点出土の分析試料の中 T18-T28は外観その他から肥前産と判定されている (V-9-1表) が、これらと A1, A5, T1-T11と T16とは同じ領域に入るようである (V-9-4表)。したがって T1-T11, T16, T18-T28は肥前産と一応判定される。これに対し T12, T13, T14, T15, T17 は肥前産とは考え難いが、九谷産の試料の測定値が少数のため九谷との関連は明らかではない。この結果は主成分および微量成分の分析値と併せて後で考察する。

2.2 胎土主成分の分析結果

V-9-1, V-9-2およびV-9-3表の分析試料の蛍光X線分析および誘導結合プラズマ発光分析(ICP分析)による主成分の分析結果をV-9-5表, V-9-6表およびV-9-7表に示した。

以下分析試料をそれぞれ東大病院出土, 九谷出土, 肥前出土の陶片と略称する。

九谷および肥前出土の陶片は一部の分析が終了していないため, 全部の結果が揃った後に改めて検討し, 考察を加えるが, 現在までのところ次のことが判っている。

(1) 東大病院出土の陶片の中 T01-T11 および T18-T28 のチタン含有量は何れも小さい。1987年予報で報告した A, C・D, E, B に対応する T5, T6, T7, T8 のチタン含有量は前回の値0.1<sub>1</sub>, 0.1<sub>2</sub>,



第V章 考察

0.1<sub>0</sub>, 0.1<sub>3</sub>, 0.1<sub>0</sub>%よりも小さい(東京大学遺跡調査室病院班・山崎一雄 1987)り。T12-T17のチタン量はT16を除き、やや大きい。

(2)肥前出土の陶片のうち、嬉野地区の不動山皿屋谷窯(H43, H44, H45)のチタン量は有田地区のものに比べて大きい、波佐見地区の永尾本登窯(H47)のチタン量は大差はない。このことは大橋(1989)ならびに長佐古(1989)の結果と一致する。これは使用された原料が有田泉山の陶石と異なるためと考えられ、原料の探究が分析例の増加とともに今後の課題である。

2.3 胎土微量成分の分析結果

陶片の放射化分析を行った京都大学原子炉実験所の原子炉が分析を開始した直後の1988年4月から1989年6月まで故障ならびに修理により停止していたため、放射化分析が著しく遅れ、その上担当者の小山睦夫教授が1989年7月急逝する不幸があり、分析結果が報告書の締切りに間に合わないおそれがあったが、幸い11月末に分析を終ることができた。分析結果をV-9-8表, V-9-9表, V-9-10表に示した。NaとFeは微量成分ではないが、併せて解析し考察する。

V-9-5表 東京大学医学部附属病院中央診療棟建設地点出土分析試料の主成分

試料 番号	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	TiO <sub>2</sub>	MnO	CaO	MgO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	%
1 T01	66.6	20.2	1.00	0.055	0.016	0.13	0.17	1.22	5.36	
2 T02	70.3	20.4	1.39	0.053	0.02	0.17	0.23	0.98	4.37	
3 *T03	65.4	20.6	1.49	0.10	0.05	0.37	0.35	1.33	6.18	
4 *T04	66.4	20.5	1.48	0.06	0.04	0.24	0.34	1.46	6.46	
5 T05	68.9	20.0	1.37	0.05	0.042	0.13	0.21	1.19	5.28	
6 T06	74.2	20.1	1.05	0.09	0.008	0.11	0.087	0.76	4.29	
7 T07	69.4	21.1	1.43	0.051	0.036	0.14	0.22	1.22	5.21	
8 T08	69.2	20.9	1.03	0.055	0.02	0.13	0.25	1.24	5.34	
9 T09	71.8	19.9	1.35	0.058	0.025	0.21	0.27	1.25	4.53	
10 T10	70.0	20.7	1.16	0.046	0.017	0.16	0.26	1.31	5.12	
11 T11	72.7	21.1	1.40	0.056	0.026	0.20	0.27	1.05	4.68	
12 T12	77.0	17.0	0.33	0.15	0.001	0.04	0.18	0.31	3.80	
13 *T13	64.6	19.6	0.54	0.13	0.00	0.16	0.61	0.25	7.93	
14 T14	67.1	28.0	0.83	0.31	0.003	0.12	0.19	0.58	3.64	
15 T15	61.2	32.8	1.27	0.42	0.00	0.36	0.28	1.49	2.89	
16 T16	71.1	21.9	1.16	0.098	0.084	0.13	0.25	0.94	2.78	
17 *T17	64.7	24.7	0.76	0.15	0.01	0.21	0.14	0.23	5.31	
18 T18	74.2	17.3	1.09	0.032	0.031	0.21	0.00	0.82	4.88	
19 T19	74.4	18.5	0.82	0.046	0.022	0.13	0.00	0.65	4.39	
20 T20	75.8	17.7	0.78	0.043	0.018	0.15	0.00	0.98	4.59	
21 T21	71.3	19.7	1.18	0.077	0.007	0.098	0.076	0.67	3.96	
22 T22	75.5	16.7	0.72	0.032	0.028	1.49	0.21	0.91	4.13	
23 *T23	67.9	19.1	1.08	0.09	0.02	0.35	0.35	0.69	4.03	
24 *T24	67.7	19.1	0.69	0.06	0.02	0.83	0.12	0.88	5.68	
25 T25	74.0	20.6	0.77	0.044	0.015	0.11	0.070	0.62	3.98	
26 T26	73.0	19.3	0.90	0.045	0.012	0.17	0.15	1.10	4.55	
27 *T27	67.7	18.3	0.89	0.09	0.01	0.20	0.12	1.19	5.28	
28 T28	73.4	18.7	0.72	0.052	0.012	0.52	0.07	1.16	4.31	

\*は ICP分析法、他は蛍光X線分析(ただしNaとKは炎光分析)による値。

第九節 化学的研究

測定された核種は Na-24, K-42, Sc-46, Mn-56, Fe-59, Co-60, Zn-65, Rb-86, Sb-122, Ba-131, Cs-134, La-140, Ce-141, Sm-153, Eu-152, Yb-169, Lu-177, Hf-181, Ta-182, Th-233, U-239の21種であるが、これらのうち試料により定量値の得られない元素、計測誤差が10%を超え

V-9-6表 九谷古窯跡出土分析試料の主成分

試料 番号	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	TiO <sub>2</sub>	MnO	CaO	MgO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	%
1 K05	67.3	26.7	0.81	0.23	0.00	0.095	0.068	0.56	4.20	
2 K06	66.1	26.0	0.68	0.14	0.002	0.083	0.095	0.45	3.87	
3 K12	66.5	22.2	0.99	0.30	0.026	1.76	0.78	3.10	2.80	
4 K13	65.0	26.1	0.77	0.27	0.021	1.00	0.25	0.69	3.60	
5 K16	67.0	25.4	0.72	0.50	0.00	0.29	0.18	0.61	4.10	
6 K18	66.7	20.9	1.02	0.21	0.04	1.87	0.61	2.12	4.72	
7 K24	64.4	27.6	3.31	0.96	0.023	0.19	0.61	0.45	2.80	
8 K30	64.9	22.2	4.36	0.82	0.045	0.50	0.81	0.38	3.76	
9 K31	65.3	25.1	2.74	0.92	0.024	0.14	0.54	0.28	3.42	
10 K33	61.4	30.6	1.76	0.64	0.012	0.09	0.28	0.33	3.50	
11 K34	68.6	25.5	0.62	0.18	0.002	0.052	0.00	0.57	3.90	
12 K35	66.3	25.9	0.69	0.23	0.00	0.059	0.12	0.37	4.10	
13 K38	65.3	28.4	1.65	0.55	0.01	0.18	0.15	0.40	3.83	
14 K44	65.9	23.9	2.52	0.50	0.068	0.32	0.36	0.46	4.80	
15 K45	67.6	23.4	2.19	0.41	0.046	0.32	0.30	0.58	5.20	
16 K47	70.8	19.8	1.54	0.22	0.021	0.14	0.12	0.52	5.36	
17 K50	64.5	24.6	2.23	0.45	0.065	0.14	0.26	0.42	5.23	
18 K51	72.4	19.2	1.56	0.20	0.001	0.09	0.42	0.51	4.85	
19 K56	66.1	19.5	0.49	0.11	0.00	0.62	0.61	0.21	8.68	

Na<sub>2</sub>OとK<sub>2</sub>O は炎光分析、他は蛍光X線分析による値。

V-9-7表 肥前古窯跡出土分析試料の主成分

試料 番号	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	TiO <sub>2</sub>	MnO	CaO	MgO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	%
1 H03	72.0	17.6	1.18	0.057	0.013	0.12	0.11	0.66	3.38	
2 H07	72.5	17.5	0.75	0.038	0.017	0.29	0.077	0.97	4.80	
3 H12	66.0	22.8	1.55	0.15	0.015	0.056	0.30	0.41	4.85	
4 H14	71.6	18.3	0.54	0.047	0.008	0.21	0.034	0.79	4.14	
5 H18	72.9	18.7	0.96	0.053	0.012	0.12	0.16	0.72	4.05	
6 H22	73.7	19.6	0.80	0.054	0.022	0.26	0.28	0.85	4.02	
7 H26	73.6	16.6	0.85	0.034	0.022	0.20	0.13	0.89	4.16	
8 H29	71.9	19.1	0.85	0.048	0.010	0.12	0.00	1.32	4.96	
9 H31	66.1	23.8	3.11	0.18	0.003	0.17	0.33	0.30	2.92	
10 H33	69.6	19.6	1.02	0.056	0.022	0.27	0.067	0.80	4.32	
11 H36	73.7	18.6	0.58	0.043	0.012	0.045	0.063	0.32	3.30	
12 H39	68.2	18.9	1.13	0.12	0.015	0.26	0.14	1.85	3.98	
13 H43	65.2	25.1	1.21	0.69	0.006	0.18	0.67	0.57	4.40	
14 H44	69.4	22.8	1.00	0.75	0.007	0.18	0.73	0.39	3.75	
15 H45	66.8	23.5	2.13	0.47	0.00	0.069	0.43	0.15	4.37	
16 H46	72.4	18.4	1.22	0.071	0.008	0.22	0.18	1.03	5.36	
17 H47	74.3	18.6	0.53	0.12	0.009	0.021	0.57	0.39	4.40	

Na<sub>2</sub>OとK<sub>2</sub>O は炎光分析、他は蛍光X線分析による値。

第V章 考察

る元素などを除き, Na, Fe, Rb, Cs, La, Ce, Sm, Lu, Th, Hf および Sc の11元素の値を使用して解析を行った。これらの元素の計測誤差は Fe(5%以下), Rb(6%以下), Cs(10%以下), Lu(8%以下)を除き, 何れも4 %以下である。

2.4 微量成分分析結果の解析

測定結果の解析にはマハラノビス距離による Hotteling の T<sup>2</sup>検定法 (東村 1976, 1980) とクラスタ分析法 (東村 1980)とを使用した。

(1) マハラノビス距離法

a. 九谷の1号窯および2号窯出土の分析試料 K05-K39 を母集団とし, 東大出土陶片のマハラノビス距離を求め, この母集団に属する確率を計算したところ

T01~T11	$2 \times 10^{-7} \sim 1 \times 10^{-6}\%$	T14	90%
T18~T28	$2 \times 10^{-6} \sim 9 \times 10^{-4}\%$	T15	$2 \times 10^{-16} \%$
T12	0.04%	T16	$8 \times 10^{-11} \%$
T13	$3 \times 10^{-4}\%$	T17	30%

V-9-8表 東京大学医学部附属病院中央診療棟建設地点出土分析試料の微量成分

試料番号	Na %	Fe %	Rb	Cs	La	Ce	Sm	Lu	Th	Hf	Sc ppm
1 T01	0.90	0.75	268	11	34	58	4.9	0.51	24	4.2	2.4
2 T02	0.77	0.96	214	13	32	58	4.7	0.56	23	4.3	2.5
3 T03	1.04	1.01	268	13	33	63	5.0	0.44	23	4.0	2.4
4 T04	1.11	0.97	250	13	34	54	5.0	0.54	23	3.9	2.3
5 T05	0.87	0.97	247	13	32	58	4.5	0.49	23	3.9	2.3
6 T06	0.59	0.73	211	11	34	58	4.7	0.49	22	4.3	2.7
7 T07	0.98	1.01	261	13	36	66	5.3	0.54	25	4.5	2.4
8 T08	0.86	0.73	261	11	32	56	4.5	0.51	24	4.1	2.4
9 T09	0.93	0.95	222	13	29	56	4.2	0.49	22	4.0	2.4
10 T10	1.00	0.80	249	11	32	58	4.6	0.43	24	4.1	2.3
11 T11	0.80	0.97	234	11	32	57	4.6	0.52	23	4.1	2.5
12 T12	0.22	0.24	124	2.2	29	48	3.2	0.51	11	5.1	4.0
13 T13	0.20	0.35	229	1.5	44	65	6.3	0.57	14	3.9	6.0
14 T14	0.37	0.54	156	7.0	41	66	5.7	0.38	14	5.5	5.2
15 T15	1.14	0.87	193	12	54	80	16	2.2	55	7.5	11
16 T16	0.82	0.77	316	32	13	27	4.6	0.46	10	3.5	4.0
17 T17	0.20	0.58	170	8.9	43	65	5.9	0.38	13	5.1	5.4
18 T18	0.70	0.68	200	7.1	28	44	3.9	0.39	19	3.1	1.7
19 T19	0.51	0.54	177	11	31	51	3.7	0.37	19	3.3	1.7
20 T20	0.77	0.52	202	11	29	55	4.0	0.42	20	3.9	1.9
21 T21	0.59	0.77	173	9.4	28	47	4.0	0.45	18	3.7	2.1
22 T22	0.74	0.52	187	6.5	26	45	3.9	0.45	18	3.2	1.7
23 T23	0.53	0.75	174	11	32	48	4.1	0.46	20	4.3	2.3
24 T24	0.75	0.49	207	10	31	55	4.1	0.42	20	3.9	1.8
25 T25	0.49	0.52	180	12	32	56	4.6	0.50	21	3.5	2.1
26 T26	0.91	0.62	200	9.4	31	52	4.2	0.44	22	4.0	2.0
27 T27	0.95	0.60	185	8.9	28	48	3.8	0.45	20	3.8	2.0
28 T28	0.95	0.51	199	8.5	30	49	4.0	0.53	19	3.8	1.9

NaとFeの値は%, 他はppm。

第九節 化学的研究

となった。

次に肥前出土陶片がこの母集団に属する確率は

H01~H41(有田地区など)	$1 \times 10^{-4} \sim 5 \times 10^{-8} \%$	H46(三股古窯)	$2 \times 10^{-4} \%$
H42~H45(不動山皿屋谷窯)	$1 \times 10^{-3} \sim 2 \times 10^{-6} \%$	H47(永尾本登窯)	$3 \times 10^{-4} \%$

となり、何れも小さいが、嬉野地区に属する H42-H45と波佐見地区の H46, H47は有田地区などの陶片との成分の相違を反映して、確率が少し異なる。

最後に九谷出土の陶片については、

K05~K30(1号窯)	64~97%	K44~K50(吉田屋窯)	$1 \times 10^{-5} \sim 4 \times 10^{-10} \%$
K31~K39(2号窯)	70~94%	K51~K56(若杉窯)	$1 \times 10^{-3} \sim 3 \times 10^{-3} \%$

となり、母集団自身の1, 2号窯出土の陶片の確率は当然大きい、吉田屋窯および若杉窯出土の陶片がこの母集団に属する確率は小さく、成分の相違を示している。

V-9-9表 九谷古窯跡出土分析試料の微量成分

試料 番号	Na %	Fe %	Rb	Cs	La	Ce	Sm	Lu	Th	Hf	Sc	ppm
1 K05	0.43	0.47	150	7.2	33	53	4.8	0.34	11	4.7	4.1	
2 K06	0.43	0.47	170	6.4	28	48	3.6	0.36	12	4.1	3.8	
3 K08	0.31	0.41	150	5.3	31	52	4.5	0.38	12	4.6	4.3	
4 K09	0.20	0.54	156	6.7	36	65	5.1	0.41	13	4.9	4.1	
5 K11	0.20	0.50	169	9.9	34	61	5.7	0.40	11	4.8	12	
6 K12	2.36	0.69	81	9.2	37	71	5.5	0.37	19	7.9	3.5	
7 K13	0.39	0.51	140	7.5	37	62	5.5	0.28	13	4.9	4.8	
8 K15	0.44	0.56	160	8.4	36	58	5.5	0.36	12	5.0	7.2	
9 K16	0.36	0.48	145	8.2	32	48	5.5	0.33	10	4.0	8.7	
10 K18	1.73	0.65	110	8.3	37	57	5.4	0.42	17	7.3	3.8	
11 K19	0.30	0.36	146	5.7	29	46	4.1	0.35	11	4.1	3.7	
12 K23	0.24	0.39	150	5.0	31	55	4.6	0.29	12	4.6	3.8	
13 K24	0.49	2.18	133	9.0	32	66	5.2	0.48	13	6.3	15	
14 K25	0.29	2.89	155	9.3	29	66	4.2	0.42	14	6.9	13	
15 K29	0.23	0.49	150	6.6	37	59	5.8	0.36	13	5.1	4.5	
16 K30	0.23	2.64	147	8.6	27	62	4.1	0.42	13	5.3	12	
17 K31	0.18	1.60	136	9.9	25	40	4.5	0.43	9	4.0	14	
18 K33	0.21	1.17	148	8.2	46	65	7.4	0.43	14	5.7	11	
19 K34	0.34	0.44	181	6.8	32	58	4.4	0.39	13	4.4	4.2	
20 K35	0.23	0.42	140	6.2	38	59	5.4	0.31	13	4.4	4.1	
21 K37	0.22	0.48	154	6.6	39	67	5.3	0.38	14	4.6	4.3	
22 K38	0.23	0.92	144	7.1	38	52	6.0	0.35	12	5.2	8.5	
23 K39	0.21	1.19	160	6.5	33	70	5.3	0.35	13	5.5	7.1	
24 K44	0.33	1.85	219	36	42	78	6.8	0.46	11	4.5	10	
25 K45	0.43	1.47	197	22	37	69	5.1	0.42	12	4.0	7.8	
26 K47	0.33	0.97	211	11	32	59	4.1	0.33	11	3.2	4.6	
27 K50	0.27	1.35	196	24	43	66	7.0	0.42	11	4.0	7.8	
28 K51	0.24	0.98	146	1.1	32	47	5.3	0.56	11	3.4	5.6	
29 K55	0.12	0.28	193	1.4	40	66	6.0	0.48	12	3.1	4.8	
30 K56	0.13	0.28	210	1.2	34	55	5.5	0.50	11	3.2	4.9	

NaとFeの値は%、他はppm。

第V章 考察

V-9-10 表 肥前古窯跡出土分析試料の微量成分

試料 番号	Na %	Fe %	Rb	Cs	La	Ce	Sm	Lu	Th	Hf	Sc ppm	
1	H01	0.43	0.80	166	13	32	49	4.1	0.43	20	3.8	2.2
2	H02	0.47	0.82	168	14	31	48	3.7	0.36	21	3.8	2.3
3	H03	0.53	0.81	166	13	31	50	3.6	0.37	21	4.0	2.3
4	H04	0.45	0.79	136	11	29	45	3.8	0.38	20	3.2	2.0
5	H05	0.49	0.55	180	6.3	26	44	3.7	0.33	19	3.3	1.7
6	H06	0.78	0.59	195	7.4	28	54	4.0	0.38	19	3.1	1.8
7	H07	0.70	0.56	203	7.1	29	51	4.2	0.41	19	3.2	1.8
8	H08	0.57	0.61	179	7.0	29	54	4.3	0.43	20	3.2	1.7
9	H09	0.30	0.84	193	7.6	31	55	4.3	0.41	21	3.7	2.3
10	H10	0.30	0.69	183	8.1	31	55	4.5	0.43	19	3.6	2.4
11	H11	0.40	1.21	201	13	31	64	3.9	0.36	22	4.8	3.0
12	H12	0.29	1.05	232	11	35	65	4.5	0.43	25	5.0	2.9
13	H13	0.73	0.76	171	8.4	24	45	3.1	0.37	19	3.8	1.9
14	H14	0.64	0.67	177	8.2	30	45	3.6	0.44	20	3.6	2.1
15	H15	0.61	0.60	197	8.5	30	48	4.0	0.40	20	3.9	2.2
16	H16	0.74	0.71	166	9.1	32	58	4.1	0.44	20	4.1	2.5
17	H17	0.73	0.82	176	9.3	35	63	4.4	0.48	21	4.1	2.7
18	H18	0.53	0.53	167	7.8	32	48	4.2	0.42	20	3.6	1.9
19	H19	0.63	0.88	172	8.2	27	43	3.6	0.44	18	3.3	2.3
20	H20	0.49	0.76	191	7.0	27	47	3.7	0.36	19	3.2	1.7
21	H21	0.74	0.63	198	9.3	27	46	4.1	0.48	19	3.1	1.8
22	H22	0.72	0.60	187	7.6	27	46	4.1	0.46	20	3.1	1.8
23	H23	0.84	0.62	165	12	32	54	4.3	0.42	18	3.5	2.1
24	H24	0.51	0.45	172	12	30	51	4.1	0.42	19	3.4	1.9
25	H25	0.54	0.35	157	9.1	32	57	4.1	0.39	20	3.8	1.8
26	H26	0.70	0.65	194	12	33	52	4.4	0.47	21	3.6	2.2
27	H27	0.78	0.62	212	12	34	56	4.4	0.44	22	3.7	2.0
28	H28	0.55	0.58	225	13	32	50	4.2	0.41	20	3.6	1.6
29	H29	1.01	0.44	221	11	34	57	4.4	0.49	21	3.8	1.8
30	H30	0.67	0.51	210	10	34	55	4.5	0.45	21	4.0	1.9
31	H31	0.23	0.21	167	15	28	58	3.7	0.21	20	5.3	3.7
32	H32	0.37	0.35	167	13	31	51	4.0	0.38	21	3.7	1.7
33	H33	0.62	0.76	209	12	31	53	4.4	0.49	22	4.2	2.2
34	H34	0.69	0.57	239	15	32	54	4.4	0.45	21	3.8	1.9
35	H35	0.58	0.42	195	11	36	57	4.4	0.41	21	3.5	1.7
36	H36	0.37	0.41	168	10	29	49	4.4	0.50	20	3.6	2.0
37	H37	0.54	0.43	167	8.4	28	50	4.2	0.48	19	3.9	1.9
38	H38	0.52	0.44	153	7.4	29	49	4.0	0.38	18	3.6	1.9
39	H39	1.45	0.81	182	8.5	36	56	5.3	0.60	22	4.6	2.9
40	H40	1.10	0.84	169	5.9	36	60	4.8	0.48	23	4.6	2.2
41	H41	0.99	0.91	156	7.1	37	51	4.6	0.69	24	4.3	2.6
42	H42	0.22	0.80	175	4.4	59	102	7.4	0.47	12	6.6	8.2
43	H43	0.45	0.84	172	5.2	52	87	6.4	0.40	13	6.8	8.8
44	H44	0.33	0.71	158	5.2	44	74	5.3	0.45	12	7.2	8.4
45	H45	0.009	1.42	175	3.9	59	107	9.9	0.84	16	12	12
46	H46	0.83	0.84	202	5.1	53	76	5.1	0.39	20	4.1	2.0
47	H47	0.33	0.41	155	2.2	55	85	5.1	0.37	22	4.7	2.1

NaとFeの値は%、他はppm。

第九節 化学的研究

b. 次に肥前出土の陶片 H01-H41(有田地区など) を母集団として東大出土の陶片がこれに属する確率を計算したところ

T01~T11	3~92%	T14	$2 \times 10^{-8}$ %
T18~T28	10~91%	T15	0
T12	$3 \times 10^{-9}$ %	T16	$1 \times 10^{-11}$ %
T13	$5 \times 10^{-13}$ %	T17	$4 \times 10^{-10}$ %

となり、T12-T17の確率は何れもきわめて小さい。

次に肥前出土の陶片は

H01~H41(有田地区など)	5~98%	H46(三股古窯)	$1 \times 10^{-6}$ %
H42~H45(不動山皿屋谷窯)	$1 \times 10^{-7} \sim 8 \times 10^{-20}$ %	H47(永尾本登窯)	$2 \times 10^{-7}$ %

となり、母集団自身の確率は当然大きい、不動山など嬉野・波佐見地区の陶片の確率が小さいことは、成分が異なるため、この母集団に属さないことを示している。

以上の結果をまとめると、東大病院出土の陶片の帰属の確率は次のようになる。

陶片	母集団九谷(K05~K39)	母集団肥前(H01~H41)	判定
T01~T11	$2 \times 10^{-7} \sim 1 \times 10^{-6}$ %	3~92 %	肥前(有田地区など)
T18~T28	$2 \times 10^{-6} \sim 9 \times 10^{-4}$ %	10~91 %	肥前(同上)
T12	0.04 %	$3 \times 10^{-9}$ %	九谷(1, 2号窯)(?)
T13	$3 \times 10^{-4}$ %	$5 \times 10^{-13}$ %	?
T14	90 %	$2 \times 10^{-8}$ %	九谷(1, 2号窯)
T15	$2 \times 10^{-16}$ %	0 %	?
T16	$8 \times 10^{-11}$ %	$1 \times 10^{-11}$ %	?
T17	30 %	$4 \times 10^{-10}$ %	九谷(1, 2号窯)

すなわち T01-T11および T18-T28は肥前産(有田地区など)と判定される。T14と T17 は九谷(1, 2号窯)に属するが、T15と T16 は九谷、肥前の何れでもない。T12は九谷(1, 2号窯)と見ることができるが、クラスター分析の結果をも考慮して判断する。

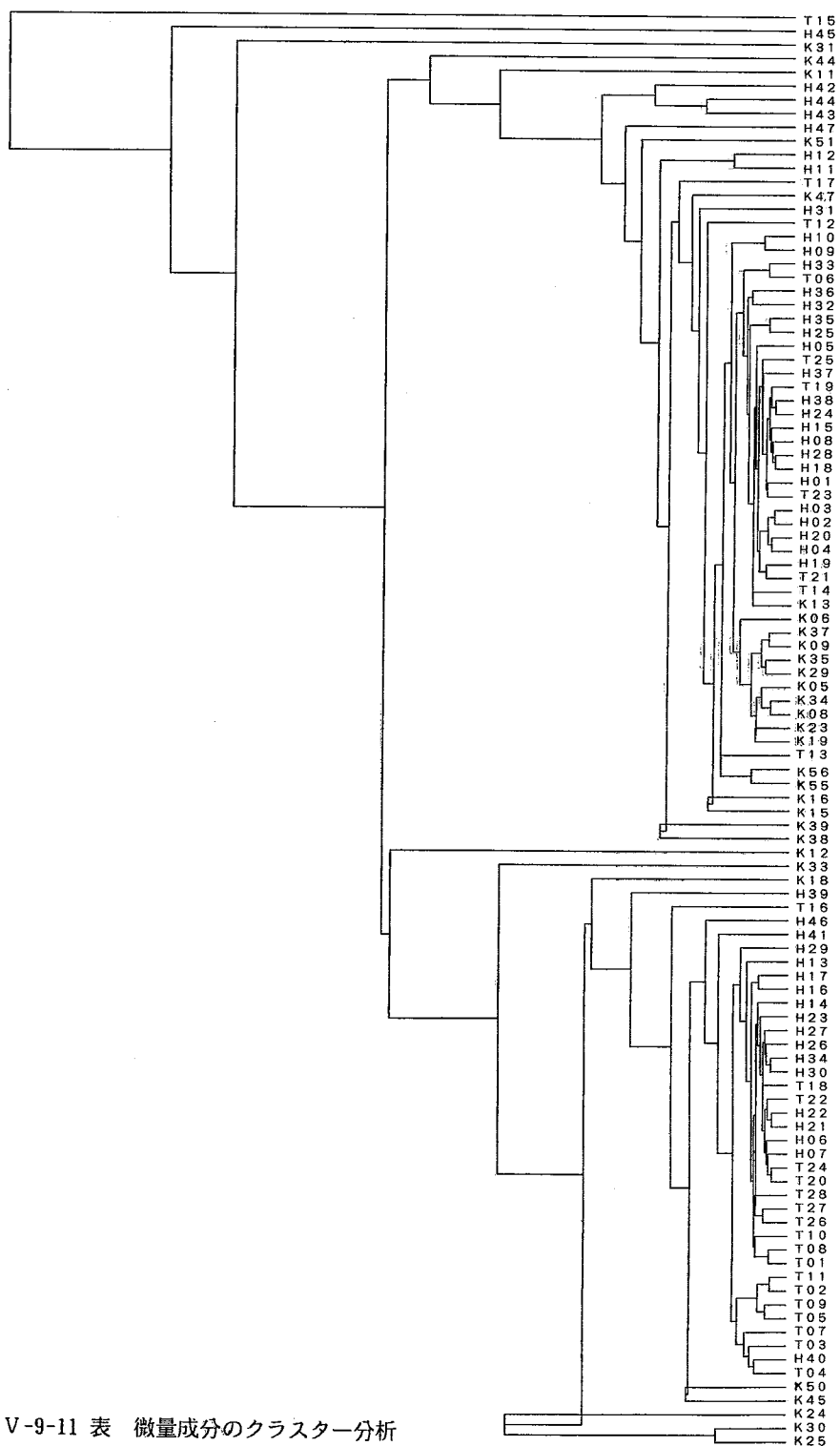
(2) クラスター分析

多変量クラスター分析は藁科、東村が開発したプログラムにより、Na, Fe, La, Ce, Sm, Lu, Th, Sc の8元素の数値を使用し、東大病院28個、肥前47個、九谷30個、合計105個の試料について行った。結果をV-9-11表に示した。

その結果によれば、東大病院出土の T01-T11および T18-T28は何れも肥前出土の陶片 H01-H41に隣接した位置にあり、肥前(有田地区など)と判定される。T12は他の試料とは離れている。T13は九谷1, 2号窯に属する確率は小さいが、クラスター分析では若杉窯跡出土の陶片と隣接し、それに属する可能性がある。この点は若杉窯跡出土の陶片の分析例を増加させて今後さらに研究する。現在のところ分析例が少なく、若杉窯跡出土の陶片を母集団とする確率の計算が困難である。

T14 は九谷 K13(1号窯)と隣接し、T17は他の試料と離れている。T15は他のすべての試料と全

第V章 考察



V-9-11 表 微量成分のクラスター分析

## 第九節 化学的研究

く別の位置にある。T16も離れてはいるが、T15ほどではなく、肥前および東大出土の陶片のうちの肥前産の一部のものとの併合距離がやや近いと見られる。

以上の両方法の解析の結果を総合すれば

T01-T11および T18-T28は肥前産（有田地区など）	T15は九谷，肥前以外
T12は九谷（1，2号窯）(?)	T16は九谷，肥前以外(?)
T13は九谷のうちの若杉窯(?)	T17は九谷（1，2号窯）
T14は九谷（1，2号窯）	

となり、T12、T13については他の元素の数値を用いてのクラスター分析をはじめ、なお検討を必要とする。T15、T16については他地域産などの可能性をも考慮して、なお研究を続け、全部の陶片の主成分の数値を報告する機会に改めて考察する。2.1「放射光蛍光X線分析」において、V-9-4表の結果では、T16が肥前産のT1-T11、T18-T28に近いことを報告した。しかし2.4の微量成分の数値の解析の結果では、T16は肥前、九谷以外(?)との判定になった。これはV-9-4表のFe/Ti、Rb/Zrの組み合わせではT16の数値が肥前出土陶片に近いことを示すに過ぎず、多数の元素を考慮したマハラノビス距離法およびクラスター分析法のほうが信頼性が高いと考えられる。

肥前出土の陶片は二宮・大沢(1989)の試料と一部同じ窯跡出土のものがあり、また九谷出土の陶片は河島・松野(1985)ならびに二宮・大沢(1989)に提供されたものもある。それらについては次項で考察する。

## 3 考察

### 3.1 九谷出土陶片の選定

すでに1.3.2で述べたように九谷関係の分析試料は昭和45年および昭和46年の九谷第1号、第2号および同吉田屋窯発掘調査で出土した陶片であり、若杉窯跡出土のものは昭和47年調査で得られた陶片である。吉田屋窯が九谷の現地で操業したのは文政7、8年(1824、1825)の2年間で、その時の原料は九谷付近で得られたものらしく、作品は厚手で胎土は灰色を呈する。これはV-9-9表が示すようにセシウム(Cs)含有量が大きく、第1、第2号窯の原料とは異なるようである。したがってV-9-1表のT12の注は再興九谷?になっているが、吉田屋窯以外の窯の製品である可能性がある。吉田屋窯が文政9年(1826)に山代越中谷に移ってからは原料が変わり、精巧薄手となった。これは分析されていない。九谷第1、第2号窯と九谷吉田屋窯以外の出土陶片で本報告で比較の対象としたのは考古学的に調査された、花坂陶石を用いた若杉窯(文化8年、1811年開窯)のみであって、他のいわゆる再興九谷の作品は分析されていない。これは今後の課題の一つである。

### 3.2 肥前出土陶片の選定

肥前古窯跡出土の陶片試料の選定に当たっては、東京大学医学部附属病院地点出土の分析試料が主に17世紀のものであり、特に九谷産か肥前産かが論議されてきた色絵「古九谷」様式の陶片を多く含んでいるために、17世紀の古窯跡採集品であり、かつ、色絵磁器を焼成した可能性のある窯場という点を考慮して行った。

V-6図は17世紀代の主要な肥前磁器窯跡の分布を示したものである。上述のような17世紀の古窯



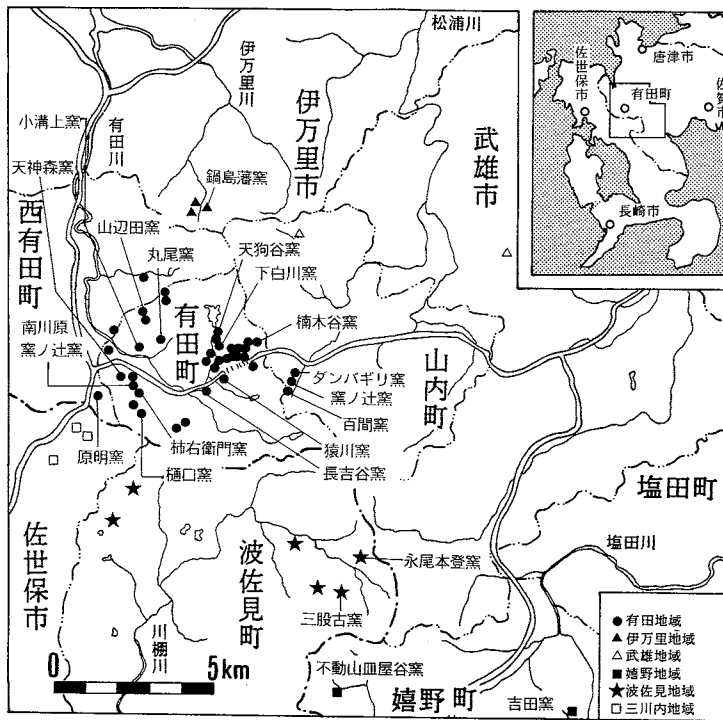
第V章 考 察

跡は肥前の中でも現在の有田町域に集中しているが、当時「有田皿屋」と呼ばれた地域は、有田町を中心として、山内町の百間窯、窯ノ辻窯、ダンバギリ窯も含み、また、西有田町の原明窯も歴史的には「有田皿屋」地域（本論ではこの地域を有田地区と呼ぶ）に含めてよい窯である。肥前の色絵磁器焼成はこの有田地区で始まったとみられ、17世紀後半には「赤絵町」を形成するほど色絵磁器の焼成が本格化する。

この有田地区以外で、17世紀に色絵を焼いたことが早くから知られていたのは、有田の北方で峻険な山を隔てて位置する鍋島藩窯跡（伊万里市大川内山）である。鍋島藩窯は大きな登り窯のうちの一部で藩窯製品を焼き、残りの焼成室では「お手伝い窯」と称する民窯の製品が焼かれた。藩窯製品の原料は有田の泉山陶石を運んで用いたと伝えられている。今回の分析試料は藩窯製品ではなく、民窯製品と推測されるもので、この地域の初期の磁器とみられるものである。この鍋島藩窯跡を中心とする地域を「伊万里地区」と称す。

この有田地区、伊万里地区以外で色絵磁器を焼いた窯場があることが近年明らかになってきた。それは「嬉野地区」であり、昭和63年の吉田2号窯の発掘調査で多数の色絵素地とともに色絵磁器が出土した（大橋 1989）。今回の分析試料の選択はこの調査以前に行われたため、吉田2号窯の出土陶片は試料のなかに入っていないが、同じ地域で色絵素地になりうる白磁皿が出土した不動山皿屋谷窯の陶片が含まれている。

また、長崎県側で17世紀代に色絵磁器を焼成した可能性のある窯場として、「波佐見地区」があり、このうちから2点の陶片を選んだ。



V-6図 肥前古窯跡分布図

## 第九節 化学的研究

### 3.3 東大病院出土陶片の同定

(1) 東大出土陶片 T1-T28のうち、T3, T4, T8, T10, T11およびT12については、L32-1などの遺物の出土品の項(IV章)に図が無いから、以下に簡単にそれらを記載し、外観の所見と化学分析結果との比較対照の一助とする。

- |      |                  |  |
|------|------------------|--|
| T 3  | 青手「古九谷」皿小片       | 内面の黄絵の具と外面の緑絵の具が火災のため赤変し文様不明。  |
| T 4  | 青手「古九谷」皿口縁部小片    | 内面の黄絵の具と外面の緑絵の具とはともに火災により一部黒変。文様不明。  |
| T 8  | 青手「古九谷」皿口縁部      | 内面の黄絵の具などや、外面の黄(?) 絵の具は火災により変色している。文様不明。口錆あり。  |
| T 10 | 五彩手「古九谷」鉢底部小片    | 内面の緑と青絵の具は火災で黒変し、外面に染付の線の一部が見られる。  |
| T 11 | 五彩手「古九谷」亀甲文鉢底部小片 | 内面の中心から口縁部に向い青色(?), 黄色, 緑(紫か)色, 青色の順に絵の具が残るが、火災を受けている。外面は高台の外側に染付の二重線が見られる。                                  |
| T 12 | 色絵小坏             | 高台を含む小坏の破片で、見込の中央に色絵の具で文様が描かれ、外側は、高台内部と高台の周囲を環状に囲んで黄絵の具を施している。高台の内部には福の銘があり、高台の周囲の黄絵の具の下に黒色で雲(?) の文様が描かれている。 |

(2) 東大出土陶片のうち T21と T26 とは楠木谷窯で類似品が出土しているから、V-9-8表の T21, T26 と二宮・大沢(1989)が分析した楠木谷出土の陶片(二宮・大沢の試料番号87181, 87182, 87183, 87184)の微量成分とを比較してみると、T21と T26 とは互いによく一致し、また二宮・大沢らの試料ともほぼ一致しており、楠木谷窯の製品と考えても矛盾はしない。

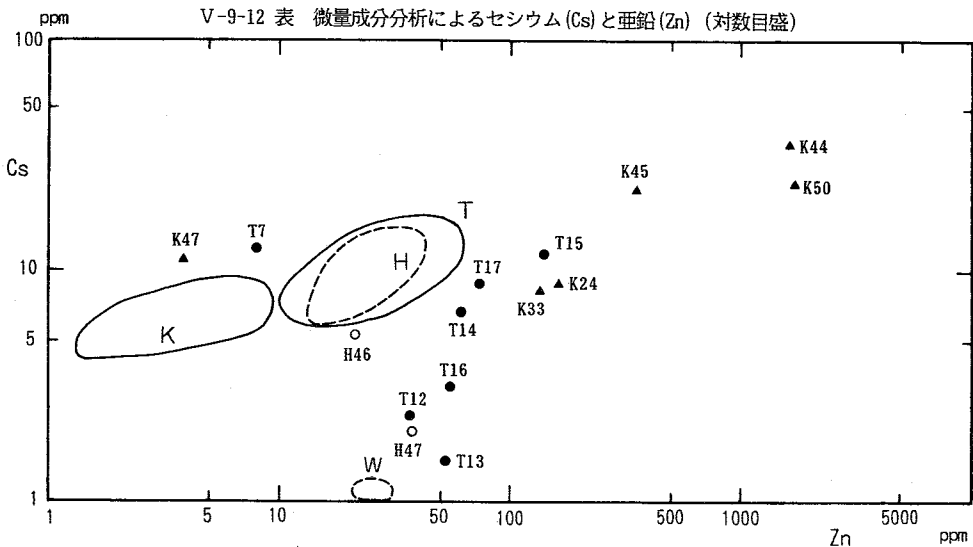
次に T23 はダンバギリ窯の表面採集品と類似することであるから、これを同窯出土の陶片 H13, H14, H15 (V-9-10 表参照)と比較すると、Cs, Lu, Hfを除いて、微量成分の値がほぼ一致するから、ダンバギリ窯の可能性がある。T24は不動山皿屋谷3号窯から器形が類似したものが出土しているが、同窯出土陶片 H44と比較するとLuを除く、Na, Fe, Rb, Cs, La, Ce, Sm, Th, HfおよびScの量がかなり異なるから、この結果では3号窯のみならず、不動山皿屋谷1, 2号窯の製品とも考えにくい。クラスター分析V-9-11表はこれを裏付け、T24とH42-H45とは離れている。

(3) 1977年九谷1, 2号窯ならびに吉田屋窯の発掘品の化学分析の報告(未刊)を執筆する時、山崎は小山陸夫に九谷および有田の陶片ならびに原料若干の放射化分析を依頼した。その結果は未発表であるが、そのうちの九谷出土陶片(K12とK18)の分析値を今回の分析値(V-9-9表)と比較してみると、一致している。また九谷出土陶片の一部13個は榑崎・山崎から河島・松野(1985)に提供されて、放射化分析されている。この時河島・松野は微量成分のうちのCsとZnとを両軸にとった図およびHf/TaとSc/Uとを両軸にとった図を用いて、九谷の諸窯間の区別および九谷と肥前との判別を行っている。そこで2.4の解析に加えて、これらの図を用いて判別を検討した。

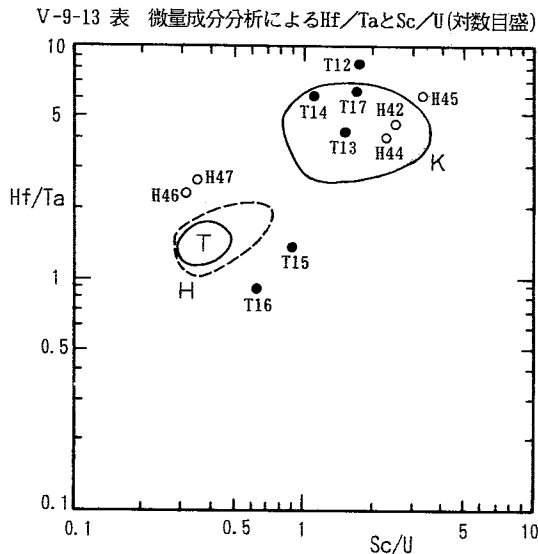
第V章 考察

V-9-12 表は Cs-Zn の値, V-9-13 表は Hf/Ta-Sc/U の値を示したものである。

V-9-12 表を見ると, 亜鉛 Zn は放射化分析の誤差が大きく (18%), また定量できない試料が多いが東大病院出土の陶片の大半は有田地区の陶片 (不動山皿屋谷窯の陶片の Zn は定量できない) と同じ領域に入る。ただし, T7, T12, T13, T14, T15, T16, T17 は別の値を示す。また波佐見地区の H46, H47 は別になる。九谷地区の陶片のうち 1, 2 号窯のものは K24 と K33 を除きまとまるが, 吉田屋窯と若杉窯は全く別になる。このことは吉田屋窯と若杉窯との原料が異なることを示す。



T (実線), K (実線), H (破線) はそれぞれ東大病院出土、九谷出土、肥前出土の陶片の分布範囲を示す。T7, T12-T17 は T とは別になる。K24 (1 号窯), K33 (2 号窯), K44, K45, K47, K50 (以上吉田屋窯) は K のなかに入らない。H46 (三股古窯) と H47 (永尾本登窯) も H の外になる。W (破線) は河島・松野 (1985) の若杉窯陶片の範囲であって、K51, K55, K56 (若杉窯) の Zn は定量できないため、位置が示されていない。



T (実線), K (実線), H (破線) はそれぞれ東大病院出土、九谷出土、肥前出土の陶片の分布範囲を示す。T12-T17 は T とは別の位置になり、特に T13, T14, T17 は K のなかに入り、T12 は K に近い。

## 第九節 化学的研究

Wの若杉窯の試料はまとまっており、T13はこれに近いが、この結果だけでは若杉窯に属するとは言いにくい。

またV-9-13表ではタンタル(Ta)とウラン(U)の計測誤差が大きく(Ta 17%, U 10%), Taの定量できない試料が二、三あるが、東大病院出土の試料はT12, T13, T14, T15, T16, T17を除き、全部が肥前出土の陶片と同じ狭い領域に入る。ただし嬉野地区・波佐見地区の試料H42, H44, H45, H46, H47はその領域に入らない(H43のTaは定量できない)。

次に九谷の陶片は吉田屋窯、若杉窯を含めて一つにまとまる。このことはすでに938頁で述べたように測定した少数の元素の組合わせによっては異なる結果を与える例である。

(4) 希土類元素のうち、特にユウロピウム(Eu)とテルビウム(Tb)の量の大小関係が陶片の産地によって異なることがすでに認められている(小山 1984;河島・松野 1985)。これを肥前および九谷の陶片について調べると、測定値の得られないものを除き

肥前有田地区	Eu < Tb (30点) (Eu > Tbは無い)		三股古窯	Eu < Tb	
不動山皿屋谷窯	Eu > Tb (2点)		永尾本登窯	Eu < Tb	
九谷 1, 2号窯	Eu > Tb (15点)	吉田屋窯	Eu > Tb (3点)	若杉窯	Eu > Tb (1点)
九谷 1, 2号窯	Eu < Tb (4点)	吉田屋窯	Eu < Tb (1点)	若杉窯	Eu < Tb (2点)

となり、不動山皿屋谷窯を除き有田、波佐見地区は全てTbが多い。これに対し九谷 1, 2号窯はTbが少ないものが多いが、逆のものもあり、吉田屋窯と若杉窯にも両者が存在するため、これだけでは判断の材料になりにくい。

東大病院出土陶片では

東大 T1-T11	Eu < Tb (11点) (Eu > Tb無し)		東大 T12, T13, T15, T16	Eu < Tb
東大 T18-T28	Eu < Tb (7点) (Eu > Tb無し)		東大 T14, T17	Eu > Tb

となり、T1-T11, T18-T28が多変量解析により肥前と判定された結果と一致する。T12-T17についてはT14とT17が九谷 1, 2号窯出土のものと同じになることは多変量解析の結果と一致するが、他のものは必ずしも一致しない。この結果は判定の一つの根拠にはなるが、これだけでは決定できないことを示す。

以上の考察においては個々の陶片の詳しいデータを示さなかったが、それらは肥前および九谷地区内の窯跡の細分の問題をも含めて、別に報告する予定である。

### 3.4 九谷および肥前出土陶片の微量成分の他の測定

すでに述べたように九谷地区の陶片の一部は河島・松野(1985)によっても放射化分析が行われ、また二宮・大沢(1989)にも数個が提供されて分析されていて、その結果と本報告の微量成分とはほぼ満足すべき一致を見ている。それらの詳細な考察および肥前と九谷との判別、細分の問題などは別の機会にゆずることとする。

### 3.5 東大病院出土陶片の釉の研究

東大病院出土の陶片T1, T2, T3, T5, T6, T7, T8, T12およびT28の釉は鉛を含んでいるから、それらの鉛の同位体比の測定を室蘭工業大学 室住正世教授に依頼した。その結果は日本産の鉛の領域に入ることは明らかとなったが、どの地域の鉱山かは判断できなかった。将来測定方法を

## 第V章 考察

精密化してさらに研究する計画である。

### 3.6 まとめ

以上の考察においては 2.4で述べたように九谷 1, 2号窯の試料 K05-K39 (九谷母集団とよぶ) と、肥前有田地区、伊万里地区の試料 H01-H41 (肥前母集団とよぶ) とを母集団とし、他の試料がそれぞれの母集団のものと似ているか否かをクラスター分析ならびにその母集団に属する確率を計算して検討した。したがって、これらの結果はその試料が、たとえば九谷 1, 2号窯でつくられたか否か (九谷母集団の試料と同じ原料粘土などを使ってつくられたか否か) を判定しているのである。今回分析した九谷 1, 2号窯の試料が九谷で製作に使われた原料のすべてを網羅しているとは断定できないので、たとえ結果が「否」であっても、その試料が絶対に九谷のものではないとは言いきれない。

現在までに得られた結果をまとめると、東大病院出土の陶片のうち青手「古九谷」および五彩手「古九谷」と記載された古九谷様式の陶片 T1-T11は化学分析の結果では肥前 (有田地区など) 製と見るのが適当である。外見上から肥前と判定された T18-T28 は化学分析によってもその判定が支持される。

T12-T17 については、T15と T16 とは肥前にも九谷にも属しないものと見られる。T14と T17 とは九谷 1, 2号窯と判定される。T12は九谷、T13は九谷のうちの若杉窯の可能性があるが、なお今後の研究を必要とする。3 考察のうち 3.2は大橋が執筆し、残りは主として山崎が担当した。

### 註

1) 文献10に掲げた東大病院出土の陶片 A, B, C, D, E のチタン量の分析はそれら陶片の詳細な考古学的調査の前に行われたため、形態を変更することなく、表面の釉の一部を削り取った後の胎土について蛍光X線分析を行った。今回の蛍光X線分析とは方法が異なり、前回の方法はやや誤差が大きかったと考えられる。

### 文献 (著者名 ABC 順)

- 1 東村武信 1976 産地推定における統計的手法 考古学と自然科学 9:77-90  
東村武信 1980 産地推定『考古学と物理化学』学生社 :77-114
- 2 河島達郎・松野外男 1985 放射化分析による古九谷の産地推定 考古学と自然科学 18:51-76
- 3 小村 茂 1983 再興九谷の古窯と出土品、若杉窯『世界陶磁全集 9 江戸 (四) 古九谷・江戸期諸窯』小学館 :168-170
- 4 小山睦夫 1984 放射化分析による土器の産地分析—指標元素とそれらの意義『古文化財の自然科学的研究』同朋社 :369-379
- 5 長佐古真也 1989 理学部 7号館地点出土古九谷様式磁器片の蛍光X線分析『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 1 東京大学本郷構内の遺跡 理学部 7号館地点』:434-441
- 6 橋崎彰一 1983 考古学的に見た古九谷『世界陶磁全集 9 江戸 (四) 古九谷・江戸期諸窯』小学館 :140-164
- 7 二宮修治・大沢真澄 1989 理学部 7号館地点出土古九谷様式磁器片の放射化分析『東京大学遺

## 第九節 化学的研究

- 跡調査室発掘調査報告書1 東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』:441-449
- 8 大橋康二 1989 『嬉野町吉田2号窯跡』肥前地区古窯跡調査報告書第6集 佐賀県立九州陶磁文化館
- 9 杉崎隆一・下村孝行・安東和人 1977 蛍光X線による珪酸塩岩石の主成分元素の自動分析 地質学雑誌 83(11):725-733
- 10 東京大学遺跡調査室病院班・山崎一雄 1987 大聖寺藩上屋敷と『古九谷』 考古学雑誌 73(1):79-97
- 11 内田哲男・飯田忠三・山崎一雄・金岡繁人・大森良久・舛田哲也 1984 マルチチャンネル誘導結合プラズマ発光分析法による微量ケイ酸塩の主成分元素の簡易定量 分析化学 33(5):242-247
- 12 山崎一雄 1986 九谷ならびに有田古窯跡出土陶磁器片の化学的判別 東洋陶磁 14:37-42

## 謝 辞

東大病院出土陶片の化学的研究を行うには多くの方から好意あふれる助言と援助を与えられた。順不同ながら芳名を記してあつく感謝の意を表する。

高エネルギー物理学研究所放射光実験施設	飯田 厚夫		
筑波大学化学系	中井 泉		
名古屋大学文学部考古学研究室（現在名古屋学院大学）	樫崎 彰一		
東京学芸大学化学教室	大沢 真澄		
同	二宮 修治		
名古屋工業大学応用化学科	飯田 忠三		
同	小島 功		
同	広瀬くに子		
分析試料提供機関：九州陶磁文化館	有田町教育委員会	伊万里市教育委員会	
同	嬉野町教育委員会	波佐見町教育委員会	西有田町教育委員会

## 附記

本研究において放射化分析を担当された京都大学原子炉実験所 小山陸夫教授は1989年7月12日研究のため出張中の鹿児島県下において急逝された。放射化分析の実験は協同研究者の高田實弥氏によって継続され、実験データは同実験所の東村武信教授と藁科哲男氏によって解析され、報告書を完成することができた。しかし放射化分析に深い学識と多くの経験を持っておられた小山教授を失ったことは我々一同の痛惜にたえないところである。ここに協同研究者一同とともに同教授の急逝を悼み、心から御冥福を祈る。

1989年12月

山崎 一雄

## 参考文献

- 青山礼志 1982 『新訂貨幣手帳—日本コインの歴史と収集ガイド』 株式会社ボナンザ
- 阿部祥人 1983 基本層序『多摩ニュータウン遺跡—昭和57年度—』第1分冊:18-20
- 有田町教育委員会編 1972 『有田天狗谷古窯—白川天狗谷古窯址発掘調査報告書—』
- 有田町教育委員会編 1975 『佐賀県有田町天神森古窯址群調査概報』
- 有田町教育委員会編 1977 『柿右衛門窯跡 第1次発掘調査概報』
- 有田町教育委員会編 1978 『柿右衛門窯跡 第2次発掘調査概報』
- 有田町教育委員会編 1979 『柿右衛門窯跡 第3次発掘調査概報』
- 有田町教育委員会編 1980 『佐賀県有田町山辺田古窯址群の調査』
- 有田町教育委員会編 1981 『長吉谷窯跡』
- 有田町教育委員会編 1986 『小樽2号窯跡』
- 有田町教育委員会編 1989 『町内古窯跡群詳細分布調査報告書 第2集 窯の谷窯・多々良の元窯・丸尾窯・樋口窯』
- 有田町史編纂委員会編 1985 『有田町史 陶業編』
- 有田町史編纂委員会編 1986 中世・近世『有田町史 通史編』:27-116
- 有田町史編纂委員会編 1988 『有田町史 古窯編』
- 石川県立美術館 佐賀県立九州陶磁文化館編 1987 『伊万里・古九谷名品展』
- 伊勢貞丈 1843 「貞丈雑記」—膳部の部—『東洋文庫』446 平凡社 1985:168-171
- 猪狩忠雄 1988 『屋敷前遺跡』いわき市教育委員会
- 猪股喜彦 1982 円筒形土器を出土した鬼高期の住居址—一宮町鞍掛遺跡発掘調査概報(1)— 丘陵 9:1-10
- 上田 真 1987 東京大学法4号館・文3号館建設予定地遺跡出土の上製の“かわらけ” 東京の遺跡 16:206
- 上野佳也・小川 望 1987 東京大学(本郷地区)構内遺跡の調査—医学部付属病院建設予定地点— 東京都遺跡調査・研究発表会 12:17-18
- 宇野隆夫 1982 井戸考 史林 65-5:623-661
- 内田裕治 1986 鎌倉時代以降『下宿内山遺跡』東京都清瀬市下宿内山遺跡発掘調査会:491-603
- 江原 恵 1986 『江戸料理史・考』河出書房新社
- 扇浦正義 1988 銭貨『三栄町遺跡』東京都新宿区教育委員会:188-197
- 大谷 猛 1985 調査の経過と方法、調査の概要『都心部の遺跡』東京都教育委員会:123-160
- 大塚達朗 1988 考古学的視点からの焼塩壺の検討 東京の遺跡 19:2
- 大手前女子大学史学研究所 1982 『大阪城三の丸跡I』大手前女子大学
- 大橋康二 1980 中世以降の土器生産に関する一考察 考古学の世界 2:36-45
- 大橋康二 1983-84a 鍋島藩窯跡出土の京焼風陶器, 上 中 下 セラミック九州 7:5-6, 8:4-6, 9:5-6
- 大橋康二 1984b 『肥前地区古窯跡調査報告書 窯ノ辻・ダンバギリ・長吉谷』佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 1984c 『北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 1985 『肥前地区古窯跡調査報告書 第2集 百間窯・樋口窯』佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 1986a 『肥前地区古窯跡調査報告書 第3集 南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯』佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 1986b 肥前古窯の変遷『九州陶磁文化館研究紀要』1 佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 1987a 『肥前地区古窯跡調査報告書 第4集 楠木谷窯・小溝上窯』佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 1987b 肥前陶磁器の変遷 貿易陶磁研究 7:71-76
- 大橋康二 1988a 『肥前地区古窯跡調査報告書 第5集 下白川窯・年木谷1号窯』佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 1988b 18世紀における肥前磁器の銘款について 青山考古 6:67-74
- 大橋康二 1988c 肥前磁器にみる皿の裏文様について—17世紀後半の窯跡出土品を中心として— 白水 12:44-52
- 大橋康二 1989a 『肥前地区古窯跡調査報告書 第6集 嬉野町吉田2号窯跡』佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 1989b 17世紀後半における肥前磁器の銘款について 東洋陶磁 17:25-37
- 大橋康二 1989c 『肥前陶磁』考古学ライブラリー 55 ニュー・サイエンス社
- 岡崎里美・岡本康嗣 1987 先土器時代『真砂遺跡』真砂遺跡調査会:20-67
- 小川貴司 1979 回転糸切り技法の展開 考古学研究 26-1:21-29

- 小川 望 1987 東京大学本郷構内遺跡の発掘—医学部付属病院地点— 考古学ジャーナル 282:36-40
- 小川 望 1988 焼塩壺—東京大学構内遺跡出土資料を中心に—『江戸の食文化（発表要旨）』:13-20
- 小川 望 1989a 東京都 東京大学本郷構内付属病院地点『日本考古学年報』40:396-402
- 小川 望 1989b 埼玉県深谷市に現存する“大沼焼” 江戸在地系土器研究会通信 11:2-9
- 小川 望 印刷中 焼塩壺とその刻印『江戸の食文化』吉川弘文館所収
- 小川 望・小俣 悟 1988 関東の瓦質・土師質火鉢類—中世鎌倉, 近世江戸を中心に— 考古学ジャーナル 299:26-35
- 小浜城跡発掘調査団編 1984 『若狭小浜城』県立若狭歴史民俗資料館
- 梶原勝・米川幸子 1989 東京西部・多摩地方の食器と食生活—近世・近代を中心として— 民具研究 80:1-10
- 加藤唐九郎編 1972 『原色陶器大辞典』淡交社
- 金丸義一 1985 遺構から見た江戸建築の一例『都心部の遺跡』:265-274
- 加納 梓 1989 裸人形について 江戸遺跡研究会会報 19:3-5
- 上条朝宏 1984 基本層序『多摩ニュータウン遺跡—昭和58年度—』第1分冊:9-13
- 神奈川県立博物館 1987 『特別展 鍋島—藩窯から現代まで』
- 喜田貞吉 1913a・b・c・d・e 京間・田舎間を論じて令尺と曲尺との関係に及ぶ 歴史地理21-6:545-557, 22-2:134-142, 22-4:342-349, 22-5:453-465, 22-6:540-550
- 北原糸子・谷川章雄 1989 胞衣納めをめぐる二, 三の問題『北山伏町遺跡』新宿区北山伏町遺跡調査会:93-100
- 木村重信 1971 『はじめにイメージありき』岩波新書
- 桑田忠親 1956 天下一の號 國学院雑誌 57-7:148-155
- 古泉 弘 1983 『江戸を掘る』柏書房
- 古泉 弘 1987 『江戸の考古学』考古学ライブラリー 48 ニューサイエンス社
- 五島美術館 1984 『江戸のやきもの シンポジウム』
- 小林 克 1986 地下室考 物質文化 47:40-59
- 小林謙一 1986 江戸における近世瓦質土師質火鉢について—麻布台一丁目遺跡出土資料を中心に— 『慶応大学考古学研究会20周年記念論集』:79-94
- 小林謙一 1988 江戸在地系土器研究の現状と課題 江戸在地系土器勉強会通信(仮称) 1:2-3
- 小林謙一 1989 江戸における近世灰産徳利の釘書について 物質文化 52:60-77
- 小林謙一・菅沼圭介・両角まり 1986 瓦質・土師質土器『郵政省飯倉分館構内遺跡』:258-279
- 早乙女雅博・渡辺貞幸 1979 遺跡の立地と考古学的環境『向ヶ岡貝塚』東京大学文学部:1-8
- 佐賀県教育委員会編 1970 『有田町猿川古窯跡第一部発掘調査概報』
- 佐賀県教育委員会編 1971 『有田町猿川古窯跡第二部発掘調査図録』
- 佐賀県嬉野町文化協会 1979 『嬉野町文化財調査報告書第1集 不動山窯跡』
- 佐々木達夫 1977a 十九世紀中葉の灯器 金沢大学法文学部論集 史学篇 25:95-117
- 佐々木達夫 1977b 幕末・明治初頭の塩壺とその系譜 考古学ジャーナル 134:8-14
- 芝公園一丁目遺跡調査団編 1988 『芝公園一丁目増上寺寺院群』港区教育委員会
- 澁川市教育委員会 1986 『中村遺跡—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書(KC-III)—』
- 島田貞彦 1930 山城幡枝の土器 考古学雑誌 21-3:23-38
- 鳴根豪全 1989 土製人形について『白金館址遺跡III—研究編—』:63-65
- 島根県教育委員会 1984 『富田川—飯梨川河川改修に伴う富田川河床遺跡発掘調査報告(4)—』
- 白川昌三編 1987 『『新寛永通宝』カタログ』新寛永クラブ
- 白戸佐知恵 1988 土器・瓦器・施釉土器『増上寺寺院群』東京都港区教育委員会:149-169
- 市立函館博物館編 1973 『函館志海苔古銭』
- 菅沼圭介 1986 塩壺類について『麻布台一丁目郵政省飯倉分館構内遺跡』:271-272
- 鈴木重治 1983 『公家屋敷二条家北辺地点の調査—同志社女子中・高黎明館増築に伴う発掘調査—』同志社大学校地学術調査委員会調査資料 15:21-22
- 鈴木重治 1985a 近世の陶磁器『中近世土器の基礎研究』:148-157
- 鈴木重治 1985b 堺の焼塩壺『日本民俗文化大系』13:626-627
- 鈴木裕子 1989 東京大学御殿下記念館地点出土の17世紀代のかわらけ 江戸在地系土器勉強会通信(仮称) 8:2-7
- 鈴木昌雄 1959 初期の江戸における町の変遷と寺院の移転 地方史研究協議会編『封建都市の諸問題』:95-112
- 鈴木泰浩 1987 硯『真砂遺跡』真砂遺跡調査会:325-329
- 関口広次 1988 隅田川沿岸の窯業 古文化談叢 第20集(上):119-144



- 仙台市教育委員会編 1985 『仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書』
- 大聖寺藩史編纂委員会編 1938 『大聖寺藩史』
- 高嶋幸男 1983・1984・1985・1987 火鑽習俗にみられる発火技術『北海道教育大学紀要』34-1:43-56, 34-2:45-60, 35-2:45-58, 37-2:49-62
- 高橋紳葉 1928 堺の焼壺堂 中央史壇 14-3:100-105
- 田中良宣 1985 遺跡の層序『館町遺跡 I』八王子市館町遺跡調査団:15-16
- 玉井哲雄 1986 『江戸 失われた都市空間を読む』 平凡社
- 玉井哲雄 1989 近世前期江戸町復原地図の作成過程およびその問題点について『国立歴史民俗博物館研究報告』23:1-12
- 千代田区教育委員会・四番町歴史民俗資料館編 1986 『平河町遺跡』
- 辻 真人 1989 民俗例にみる焙烙 江戸在地系土器勉強会通信(仮称) 6:3-6
- 寺島孝一 1987 東京 東京大学構内遺跡『日本考古学年報』38:400-403
- 東京大学遺跡調査室病院班・山崎一雄 1987 大聖寺藩上屋敷と『古九谷』—東京大学医学部付属病院中央診療棟第1期建設予定地点の調査より— 考古学雑誌 73-1:79-97
- 東京大学理学部遺跡調査室編 1989 『東京大学構内の遺跡 理学部7号館地点』
- 都立一橋高校内遺跡調査団 1985 『江戸—都立一橋高校地点発掘調査報告—』
- 内藤 昌 1966 『江戸と江戸城』 鹿島出版会
- 長崎県窯業試験場 1982 『波佐見古陶磁文様集』
- 長佐古真也 1988 近世『徳利』の諸様相—江戸に於ける液体加工品流通と徳利—『江戸の食文化(発表要旨)』:6-12
- 長瀬 衛 1975 かわらけ 宇田川洋編『青戸・葛西城址調査報告 III』:102-126
- 長瀬 衛 1985 土器・灯明具・かわらけ 『江戸』都立一橋高校内遺跡調査団:197-202
- 中西真也 1989 竈のミニチュアについて『白金館址遺跡—研究編—』:66-67
- 中村喜代重 1983 土層『一般国道 246号(大和・厚木バイパス)地域内遺跡発掘調査報告I』大和市教育委員会:5-12
- 中村享史 1985 摺鉢山古墳『都心部の遺跡』東京都教育委員会:162
- 仲野泰裕 1985 長野県出土近世陶磁—松本城二の丸御殿跡出土陶磁資料を中心として—『愛知県陶磁資料館研究紀要』4:49-64
- 仲野泰裕 1986 浅間山の大噴火(天明三年)に伴う泥流層下の瀬戸美濃陶器『愛知県陶磁資料館研究紀要』5:58-70
- 仲野泰裕 1987 江戸時代の瀬戸窯と京焼風陶器『愛知県陶磁資料館研究紀要』6:56-68
- 仲野泰裕 1989 文献・絵画史料にみる陶磁製品の動向—江戸時代中・後期を中心として—『美濃の古陶』美濃古窯研究会会報 3:78-88
- 成瀬晃司 印刷中 先土器時代『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館地点の調査と研究』所収
- 成瀬晃司・堀内秀樹 1987 東京大学医学部付属病院中央診療棟建設予定地点出土の古九谷様式の色絵磁器について 目の眼 133:56-64
- 成瀬晃司・堀内秀樹 1988 東京大学医学部付属病院新中央診療棟建設予定地点出土の「古九谷」考古学ジャーナル 297:30-36
- 西 和夫 1986 一間の長さの変遷とその地域分布 列島の文化史 3:115-148
- 萩尾昌枝 1988 「池」出土の木製品 『江戸の食文化(発表要旨)』:36-43
- 萩尾昌枝 印刷中 江戸時代初期の宴会の食器類 『江戸の食文化』吉川弘文館所収
- 羽生淳子 1989 かわらけ・灯明具類 『理学部7号館地点』:364-368
- 日置 謙編 1930 『加賀藩史料』
- 福井県教育委員会編 1979 『特別史蹟—乗谷 朝倉氏遺跡発掘調査報告—朝倉館跡の調査—』
- 福田健司 1986 南武蔵における平安後期の土器群 神奈川考古 21:57
- 藤澤良祐 1987 西茨第1・2号窯発掘調査報告 付編 本業焼の研究(1)『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』6:113-219
- 藤澤良祐 1988 本業焼の研究(2)—赤津村・上水野村を中心に—『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』7
- 藤澤良祐 1989 本業焼の研究(3)—下品野村・下半田川村を中心に—『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』8
- 藤原良章 1988 中世の食器・考 列島の文化史 5:59-94
- 藤本 強 1987 東京大学医学部付属病院中央診療棟建設予定地点(旧大聖寺藩上屋敷跡)の調査『伊万里・古九谷名品展』石川県立美術館・佐賀県立九州陶磁文化館:20-21
- 藤本 強・宮崎勝美・萩尾昌枝 1987 東京・東京大学構内遺跡(医学部付属病院中央診療棟建設予定地点)木簡研究 9:78-81
- 平凡社 1988 『古伊万里』別冊太陽63
- 本田総一郎 1983 箸の変遷 食の科学 75:33-40
- 本田総一郎 1978 『箸の本』 柴田書店
- 前田長三郎 1931 『堺焼壺堂考(未定稿)』
- 前田長三郎 1934 堺焼壺堂考 武蔵野 21-3:134-143
- 前山 博 1984-85 多久・大山新窯の廃窯事情について セラミック九州 9:2-5, 10:5-7, 11:3-4

- 真砂遺跡調査団編 1987 『真砂遺跡』真砂遺跡調査会
- 瑞浪陶磁資料館 1981 『幕末・明治の窯業』
- 港区麻布台一丁目遺跡調査団編 1986 『麻布台一丁目郵政省飯倉分館構内遺跡』港区麻布台一丁目遺跡調査会
- 南川孝司 1974 泉州湊麻生の壺焼塩考 撰河泉文化資料 創刊号:1-8
- 宮沢 聡・小林謙一 1988 現存する今戸焼職人に関する調査 江戸在地系土器勉強会通信(仮称) 3:2-14
- 村上伸之 1988 有田の窯業から見た古九谷 青山考古 6:52-66
- 森 伸一 1989 江戸城竹橋門内出土の土器 江戸在地系土器研究通信 10:2-9
- 森田克行 1987 『高槻城三ノ丸跡発掘調査概要報告書』高槻城跡遺跡調査会
- 森本伊知郎 1989a 遺物による遺構の年代(廃絶年代)推定について『白金館址遺跡 一研究編一』:29-48
- 森本伊知郎 1989b 陶磁器『白金館址遺跡 一研究編一』:49-62
- 米原正義 1971 天下一の意識と天下一の号『國学院大学紀要』9:53-76
- 吉岡泰英 1977 発掘建物遺構にみる柱間寸法 一乗谷朝倉氏遺跡 昭和52年度日本建築学会北陸支部研究報告集:73-76
- 吉田伸之 1988 近世の城下町・江戸から金沢へ『週刊朝日百科 日本の歴史別冊 歴史の読み方2』朝日新聞社:21-30
- 渡辺貞幸 1979 発掘調査の経過『向ヶ岡貝塚』東京大学文学部:9-13
- 渡辺志津子 1988 土器『三栄町遺跡』新宿区教育委員会:73-77
- 渡辺 誠 1982 松本城二の丸出土の焼塩壺 信濃 34-1:72-78
- 渡辺 誠 1983 焼塩壺『平安京土御門烏丸内裏跡』:75-90
- 渡辺 誠 1984 焼塩壺について『江戸のやきものシンポジウム発表要旨』
- 渡辺 誠 1985a 焼塩『講座・日本技術の社会史』2:312-329
- 渡辺 誠 1985b 物資の流れ-江戸の焼塩壺 季刊考古学 13:42-49
- 渡辺 誠 1988 焼塩壺『江戸の食文化(発表要旨)』:7-79

## あ と が き

—まとめにかえて—

1984年10月の調査開始、それ以来5年余の歳月が過ぎている。長期間の調査・整理になった。振り返ってみると種々のことがあった。学内で批判の対象になった時期もかなりあったようである。そうしたなかで常に暖かな支援をいただいた歴代の文学部長をはじめとする文学部の方々の励まし、どれだけ心の支えになったか計り知れないものがある。心から感謝している。

調査に参加したものの全員にとって、従来調査してきたいわば自然村落の遺跡とは、全く異なる都市遺跡の調査は驚きの連続であったというのが偽らざる感想である。大規模な土木工事、異様なまでの遺構の密集度、二桁あるいは三桁は違うのではないかと思われる遺物の量、これらは全て人口密度の高さと関わりをもっている。こうしたことは江戸時代だからというのではなく、当時の世界最大の都市、そのなかでも、特殊な小宇宙を形成していた大名屋敷だから生じた現象であろう。また、種々の意味で自己完結的な生活であったことが推定される自然村落と違い、出土するものは日本全国、さらには海外からのものも見られる。グローバルな視野が要求されることになる。

遺跡としてどのようにとらえるかという点でも、従来の自然村落的な遺跡とは全く違った視点が要求される。この報告で採りあげるのは7700m<sup>2</sup>であるので、決して小さな面積ではない。しかし、大聖寺藩邸の全面積の三分の一ほどしか調査していないことになる。大名屋敷はいわば一つの小宇宙を形成していたと考えられるものであり、それぞれの場によって使い方は全く異なっていたと考えられる。そうした観点に立つならば、屋敷全体で一遺跡というよりは、一遺構と考える必要も出てくる。個々の建物の形・規模が確実に押えられたとしても、それは一遺構の中のごく一部が明らかになったに過ぎない。礎石が一つ二つ確認できても、全体のなかのどのような部分であったのかは全く不明としかいいようがない。全体の構造の把握に、野外調査の後も努める必要がある。このようなことをより困難にしているのがあいつぐ改築と近代以降の破壊である。こうした困難な状況のなかでどのようにして全体の構造に迫るか、これは今後の課題であろう。遺構と遺物のあり方にしても、遺構内出土の意味が全く異なる。その遺構のなかで使用されていたものは全くない。何らかの理由で最終的に一緒に捨てられたとしか言えないのである。重要なのは、文献史学、民俗学などの関連諸学との間に共通の場をもつことであろう。他分野の学問と共有できる情報を考古学的な基礎資料のなかから抽出するかという点にかかっている。しかも他の学問分野の成果によりかかることなく共通の場を作り出すことが重要であろう。このような問題意識をもって発掘調査をし、分析することが肝要であろう。考古学の枠のなかだけに留まっていたのでは共有の場ももち得ないし、他の学問分野の成果を正当に利用することもできない。基礎資料である遺物・遺構のあり方、それぞれの絡み方について、都市遺跡では、多くの選択肢を考えなければならない。次元の異なる選択肢、しかも相互に複雑に絡み合った選択肢のなかから解答を探すことになる。その際、他分野の成果をどのように使用するかも重要な問題になろう。その前提として、問題点を共有することは必須のことである。このような観点に立って、都市遺跡の調査の方法論の構築を図っていく必要も

あろう。陶磁器の分析に消費地という概念をもちこんだのは、一つの方向である。

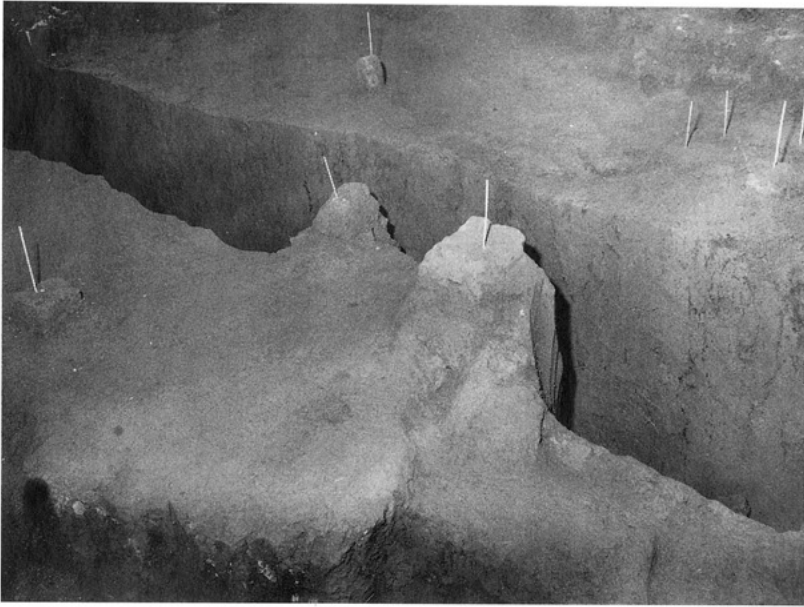
今回の調査における一つの成果にいわゆる「古九谷」を巡る問題があろう。調査地が「古九谷」を焼いた大聖寺藩の江戸屋敷であったことも重要な事実とされ、一部のマスコミにもかなり騒がれる結果となった。名古屋大学名誉教授であり、従来から古文化財科学を手がけられてきた山崎一雄先生に依頼してその分析をしていただいた。一部の分析がまだ終わっていないが、これまでにない総合的な化学分析とその結果の解析であり、問題の所在は明らかになったとあってよい。その結果は第V章第九節に詳論されているが、本地点出土の「古九谷」様式の磁器のほとんどは、「青手」のものも含め、肥前産の胎土成分であることが明らかになった。しかしながら、九谷古窯址で出土している磁器と胎土成分が同じものも少数ではあるが、存在していることも事実である。このうちの一つは天和二年(1682)の火災に際して廃棄された遺構から出土しており、天和二年以前に作られたものであることは確実である。巷間でもはやされている「古九谷」は九谷か、伊万里かという二者択一的な議論はもはや不毛であろう。もし、産地の問題を事細かに論じようとするならば、一つ一つの磁器を取り上げ、個々の磁器の持つ属性を徹底的に洗い直す必要が出てきた。そうしたことをせず、「古九谷」を一括して、感性で九谷か、伊万里かと議論していても始まらないことは、今回の分析結果が示している。このような化学的な分析結果とは別に考古学的・美術史的なモノの本性に即した、個々の磁器の詳細なしかも厳密な属性分析の上に立った議論が産地問題を解決するには必要である。化学的な分析は磁器の胎土の得られた場所は示すが、それが誰によってどこで作られたかは示しはしない。それを作った人間もしくは土地を明らかにしようとするならば、多方面からの、多くの視角からの、厳密な人文科学的な分析が必要である。

さらに、現実的ではないとお叱りを受けることを覚悟でいえば、本地点出土の多くの「古九谷」に使われている陶石の原産地が肥前であることが確認できたのであり、磁器の素地がどこで作られたのかまでは理屈の上では明らかではない。肥前産の陶石を九谷で移入したことも理屈の上では成り立つことになる。まして絵付けがどこでなされたかは「素地移入説」を含め、幅広い可能性が残されている。絵付けの釉薬の化学的分析をしてもこうした問題は残ろう。まして職人の移住の問題を考えたならば、さらに幅広い可能性が出てくる。

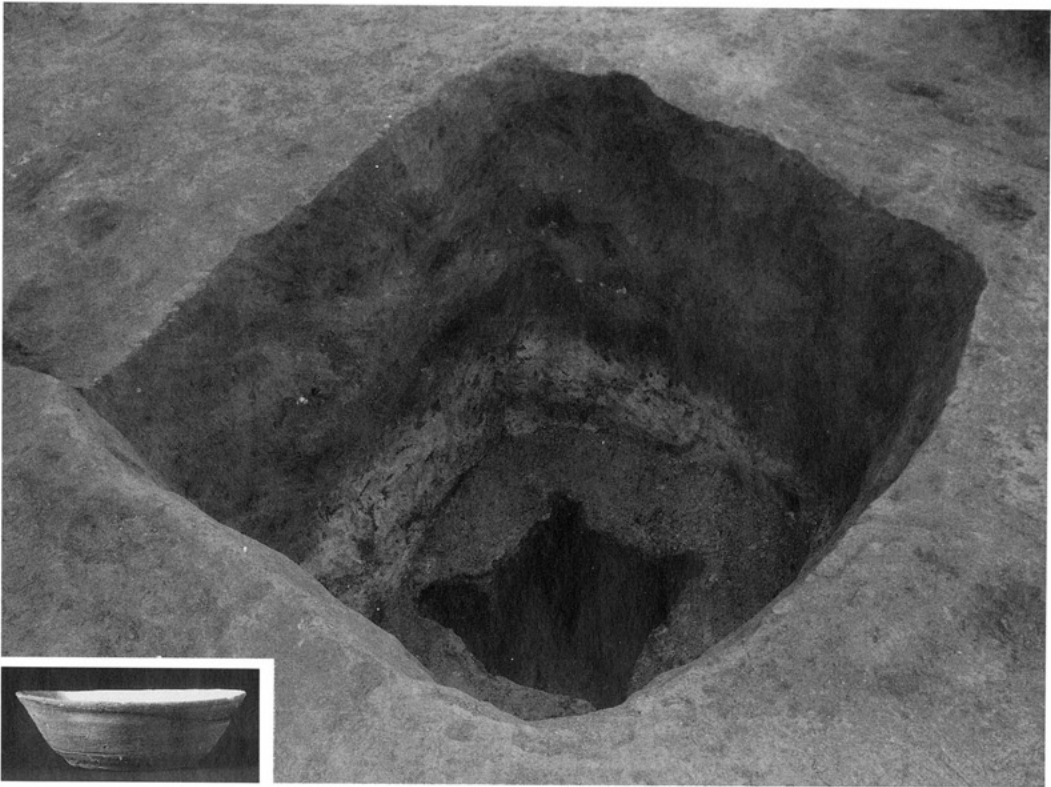
こうした問題とともに、旧大聖寺藩領内にはかなりの数の「古九谷」が種々のところに所蔵されていること、肥前の磁器の中では異質と思える「古九谷」の起源・由来・終末を明らかにすることも重要なことと思われる。現状を見ているかぎりにおいては、少なくとも「青手古九谷」は肥前の磁器の伝統のなかでは異質のように思われるし、その伝統はブツリと切れてしまうように考えられる。吉田屋窯・若杉窯などの再興九谷窯がこの地域に存在する意味を考えることも重要である。瀬戸・美濃でさえ19世紀初頭によく磁器素地の焼成を始める。このような状況下で再興九谷がこの地に出現する意味を考える必要がある。今回の分析で「古九谷」の素地の胎土成分には、肥前産のものと九谷産のものがあることが明らかになった。これを出発点として、より厳密な、より幅広い視点をもった、新たな「古九谷論争」がなされるようになることを期待したい。

最後に本報告書の刊行にあたり、この調査に直接的、間接的に関わりを持たれた多くの方々に、心から感謝の意を表したい。

(藤本 強)

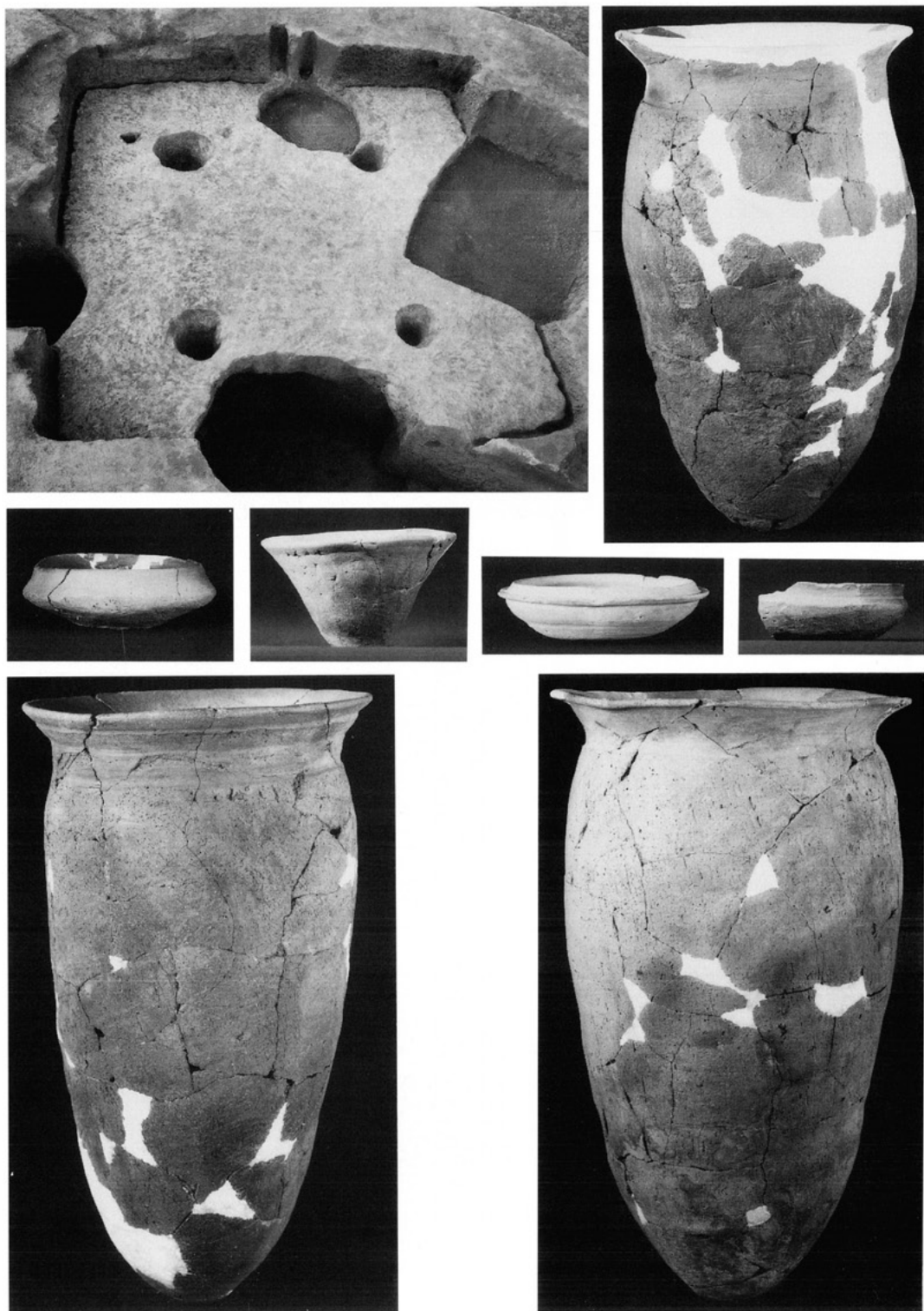


先土器時代の遺物出土状態と遺物(1/1)

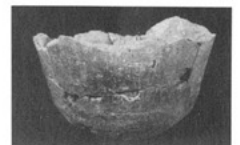
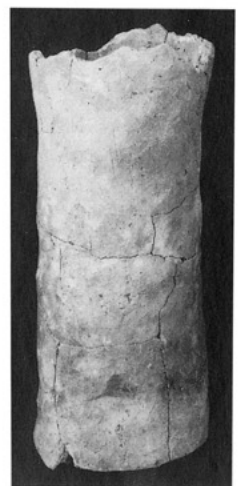
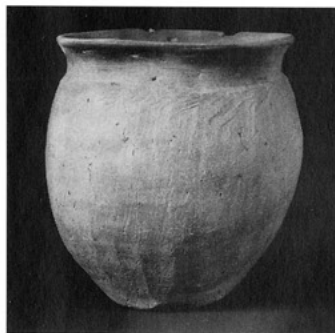
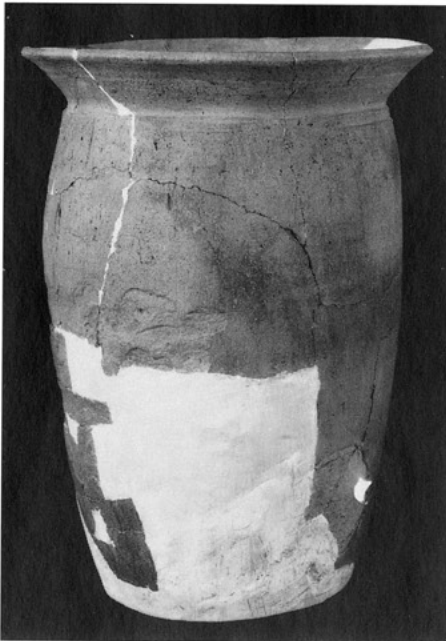
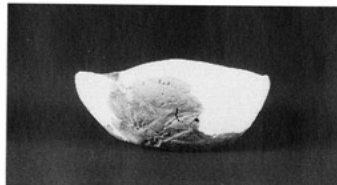
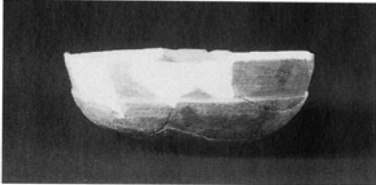


平安時代の井戸と出土遺物(1/4)

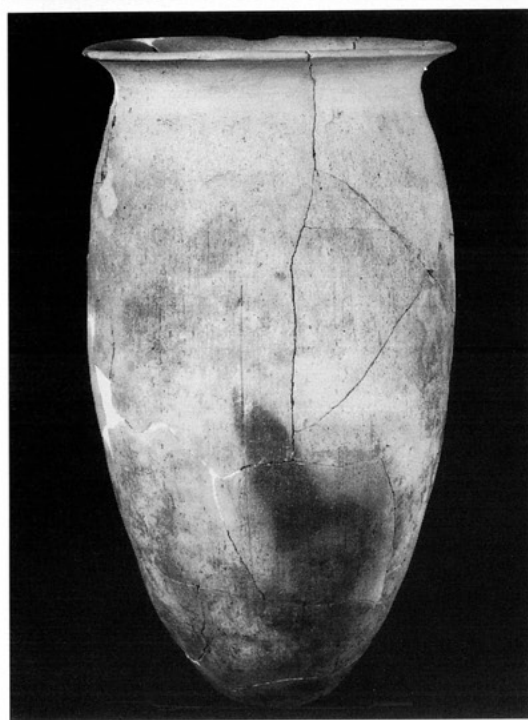
写真 2



1号住居址と出土遺物(1/4)

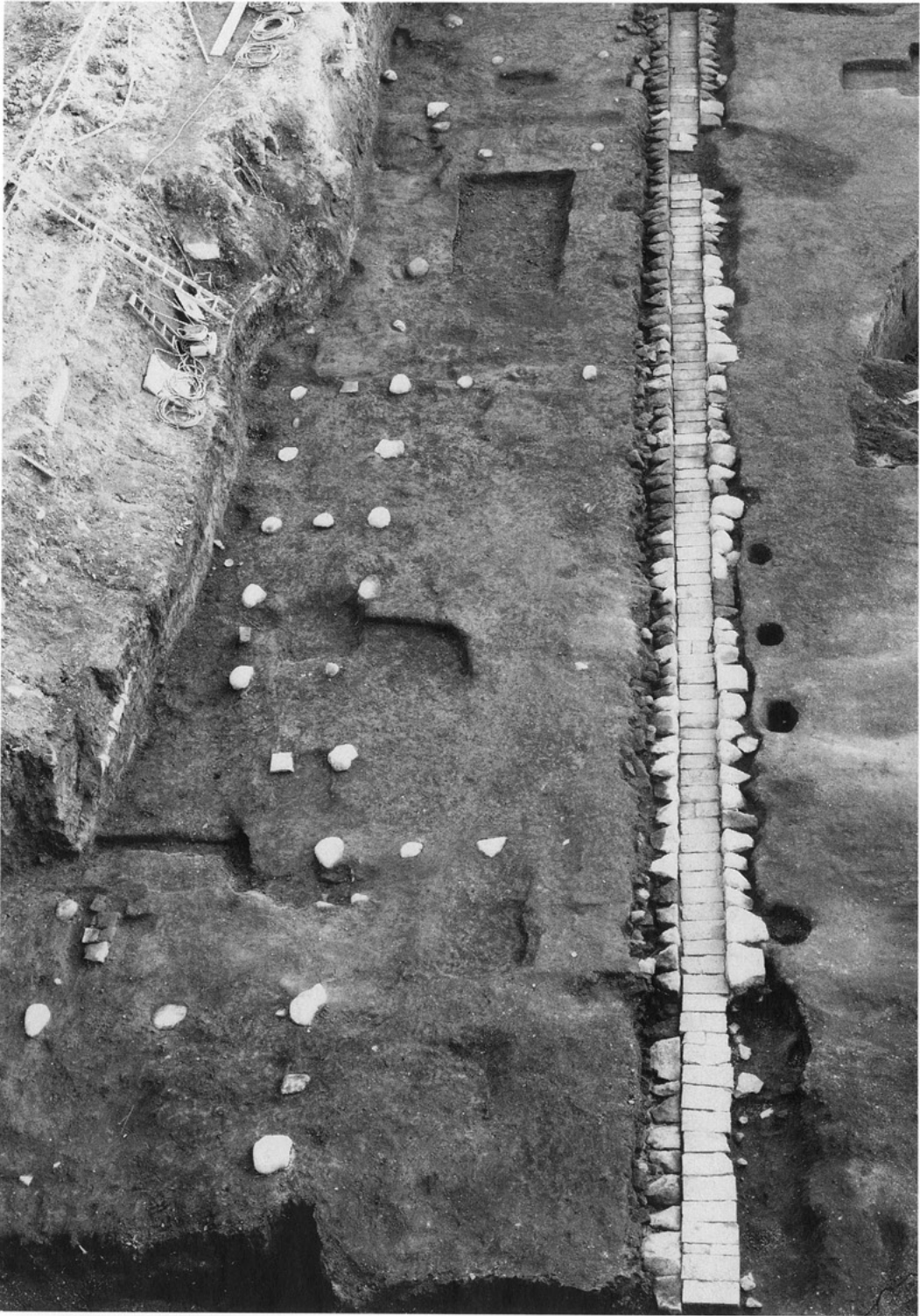


2号住居址と出土遺物(1/4)



2号住居址出土遺物(1/4)(左)と池遺物出土状況(右)





12号組石と1・2号石列（天和二年の火災で焼失）



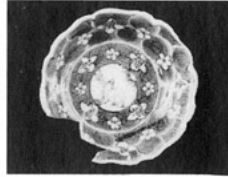
F27-1地下式土坑階段・  
地下室（上）  
10号・12号組石（下）



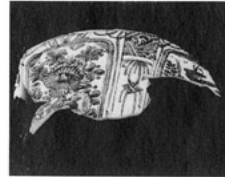
写真 7 陶磁器の分類 (1)



JA-1



JA-2



JA-5



JA-6



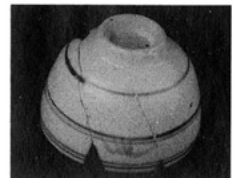
JA-27



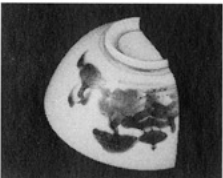
JA-36



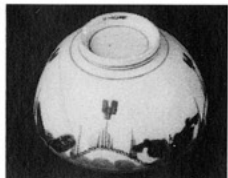
JB-1-a



JB-1-b



JB-1-c



JB-1-d



JB-1-e



JB-1-f



JB-1-g



JB-1-h



JB-1-i



JB-1-j



JB-1-l



JB-1-m



JB-1-n



JB-1-o



JB-1-p



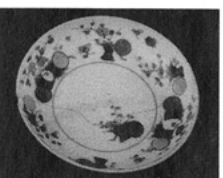
JB-1-q



JB-2-a



JB-2-c



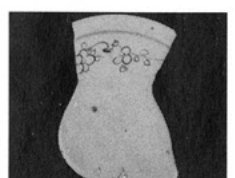
JB-2-d



JB-2-e

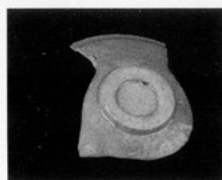


JB-2-g

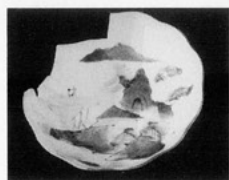


JB-2-h 表

写真 8 陶磁器の分類 (2)



JB-2-h 裏



JB-2-i 表



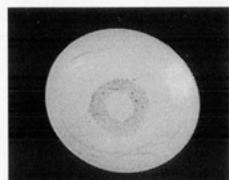
JB-2-i 裏



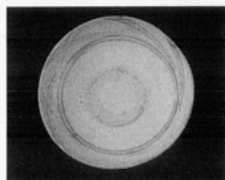
JB-2-j 表



JB-2-j 裏



JB-2-k



JB-2-l



JB-2-m



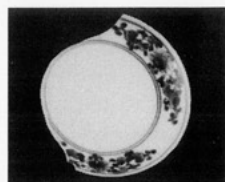
JB-2-n



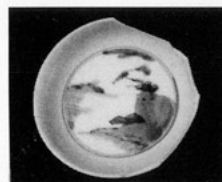
JB-3-a



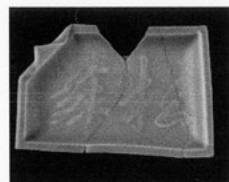
JB-3-b



JB-3-c



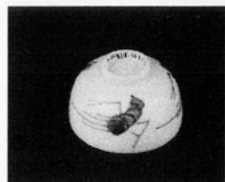
JB-3-d



JB-4-a



JB-5



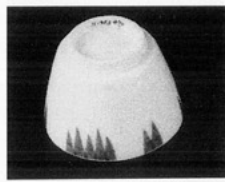
JB-6-a



JA-6-b



JB-6-c



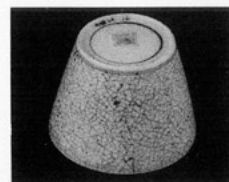
JB-6-d



JB-6-e



JB-7-a



JB-7-b



JB-8



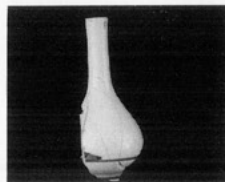
JB-9



JB-10-a



JB-10-b



JB-10-c



JB-10-d

写真 9 陶磁器の分類 (3)



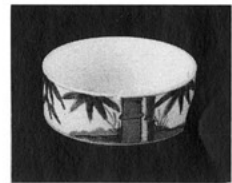
JB-11



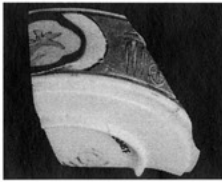
JB-12



JB-13-a



JB-13-b



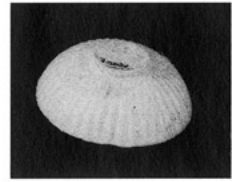
JB-13-c



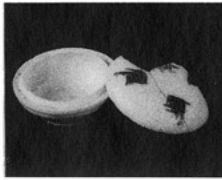
JB-13-d



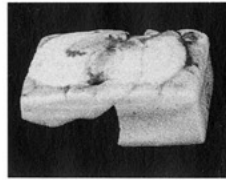
JB-15



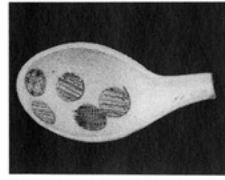
JB-17



JB-18



JB-19



JB-20



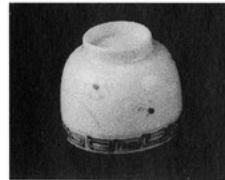
JC-1-a



JC-1-c



JC-1-d



JC-1-e



JC-1-f



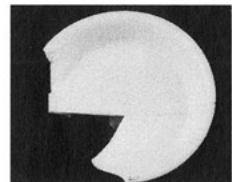
JC-2-a



JC-2-b



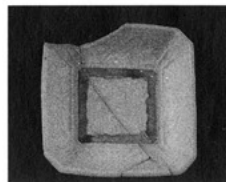
JC-2-c



JC-3-a



JC-3-b



JC-4



JC-6-a



JC-6-b



JC-6-c



JC-8



JC-9



JC-10-b

写真 10 陶磁器の分類 (4)



JC-10-c



JC-10-d



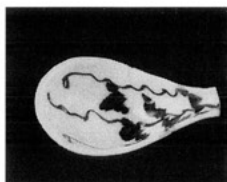
JC-12



JC-15



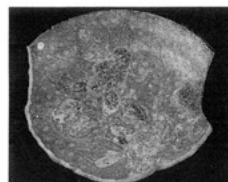
JC-16



JC-20



JC-21



JY-2



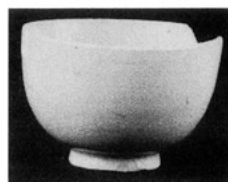
JY-4



TA-2



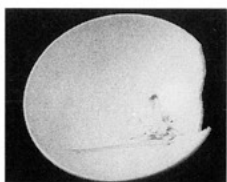
TA-5



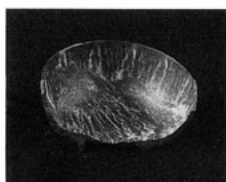
TB-1-a



TB-1-b



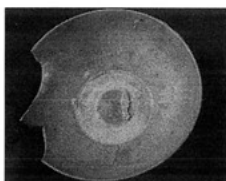
TB-1-c



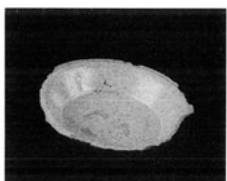
TB-1-d



TB-1-f



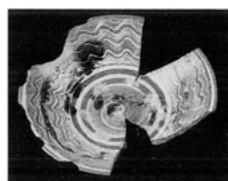
TB-2-a



TB-2-b



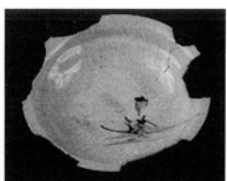
TB-2-c



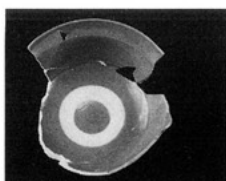
TB-5-a



TB-5-b



TB-5-c



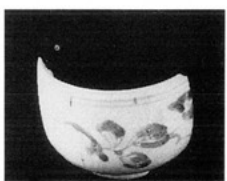
TB-5-d



TB-9-a



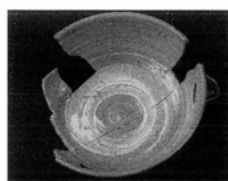
TB-9-b



TB-13-a



TB-13-b



TB-23

写真 11 陶磁器の分類 (5)



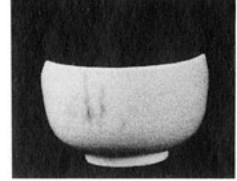
TC-1-a



TC-1-b



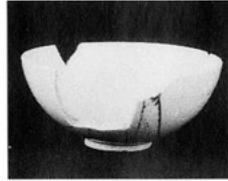
TC-1-c



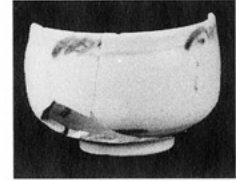
TC-1-d



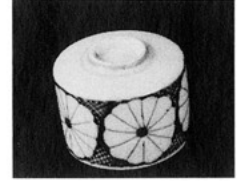
TC-1-f



TC-1-g



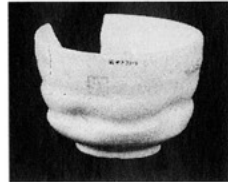
TC-1-h



TC-1-i



TC-1-j



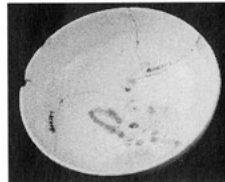
TC-1-k



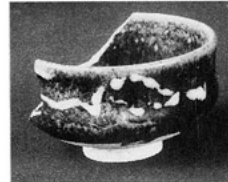
TC-1-l



TC-1-m



TC-1-n



TC-1-p



TC-1-q



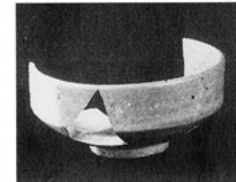
TC-1-r



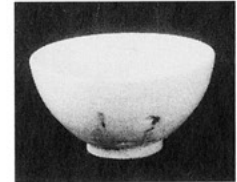
TC-1-s



TC-1-u



TC-1-v



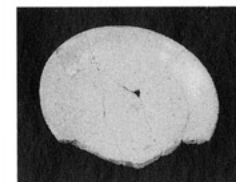
TC-1-w



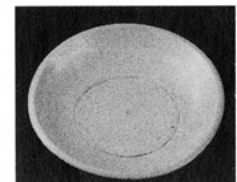
TC-1-x



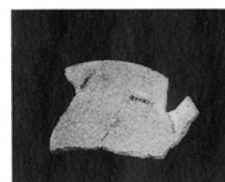
TC-1-y



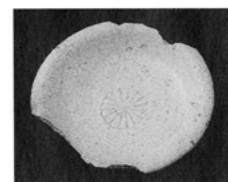
TC-2-a



TC-2-b



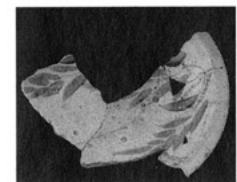
TC-2-c



TC-2-d

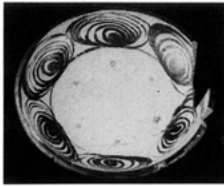


TC-2-e



TC-2-f

写真 12 陶磁器の分類 (6)



TC-2-g



TC-2-h



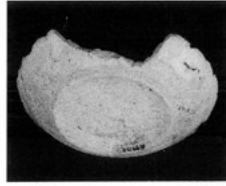
TC-2-i



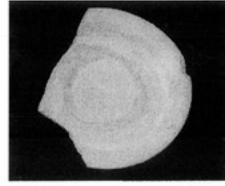
TC-2-j



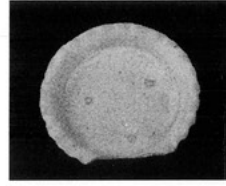
TC-2-k



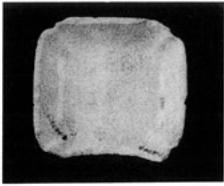
TC-2-l



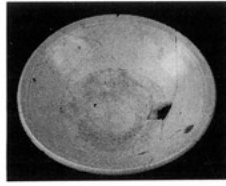
TC-2-m



TC-2-n



TC-4



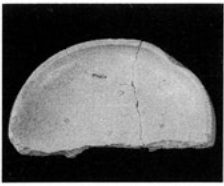
TC-5-c



TC-5-d



TC-5-e



TC-5-f



TC-5-g



TC-5-h



TC-8



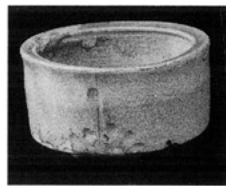
TC-9-a



TC-9-b



TC-9-c



TC-9-d



TC-9-e



TC-10



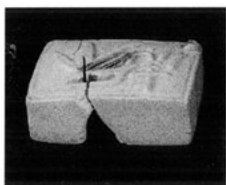
TC-11



TC-12



TC-15



TC-19



TC-21



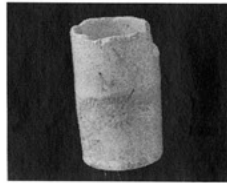
TC-23



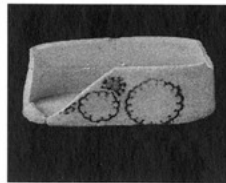
写真 13 陶磁器の分類 (7)



TC-24-a



TC-24-b



TC-25



TC-26-a



TC-26-b



TC-27-a



TC-27-b



TC-28



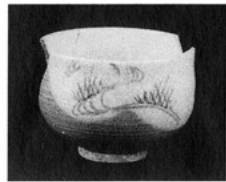
TC-29



TC-30



TC-31



TD-1-a



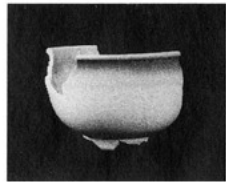
TD-1-b



TD-1-c



TD-1-d



TD-1-e



TD-1-f



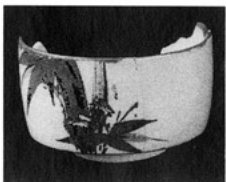
TD-1-g



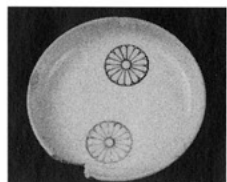
TD-1-h



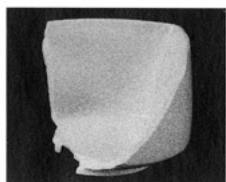
TD-1-i



TD-1-j



TD-2



TD-5



TD-6



TD-9-a



TD-9-b

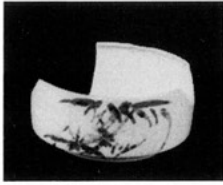


TD-10

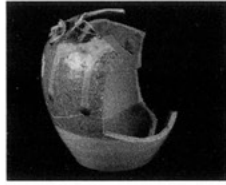


TD-11

写真 14 陶磁器の分類 (8)



TD-13-c



TD-15



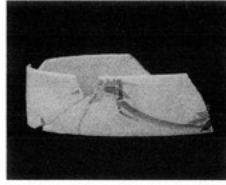
TD-18



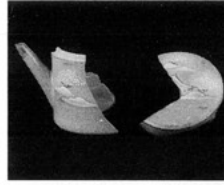
TD-22



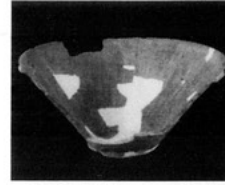
TD-24



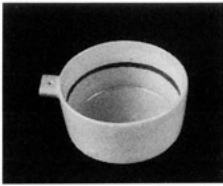
TD-25



TD-27



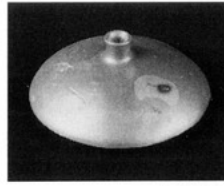
TD-29



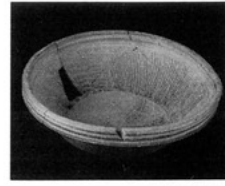
TD-32



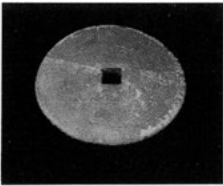
TD-34



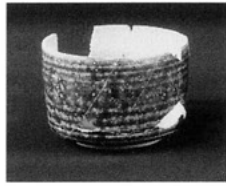
TE-12



TE-29



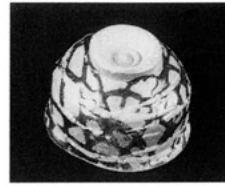
TE-37



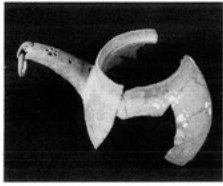
TF-9



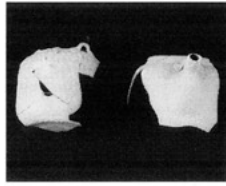
TF-15



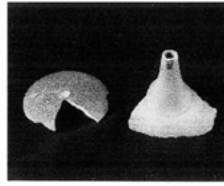
TH-1



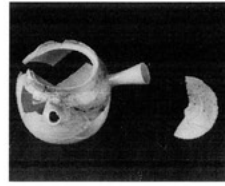
TI-16



TI-34



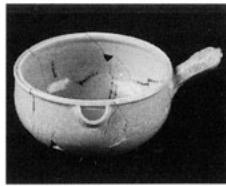
TJ-34



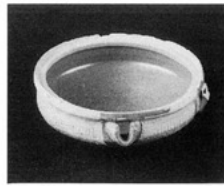
TZ-16



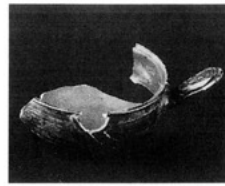
TZ-33-a



TZ-33-b



TZ-33-d



TZ-33-e



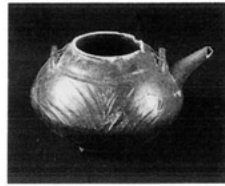
TZ-34-a



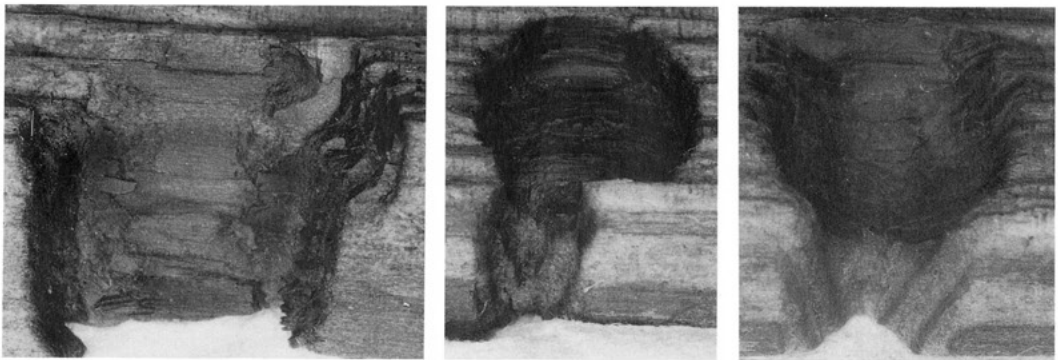
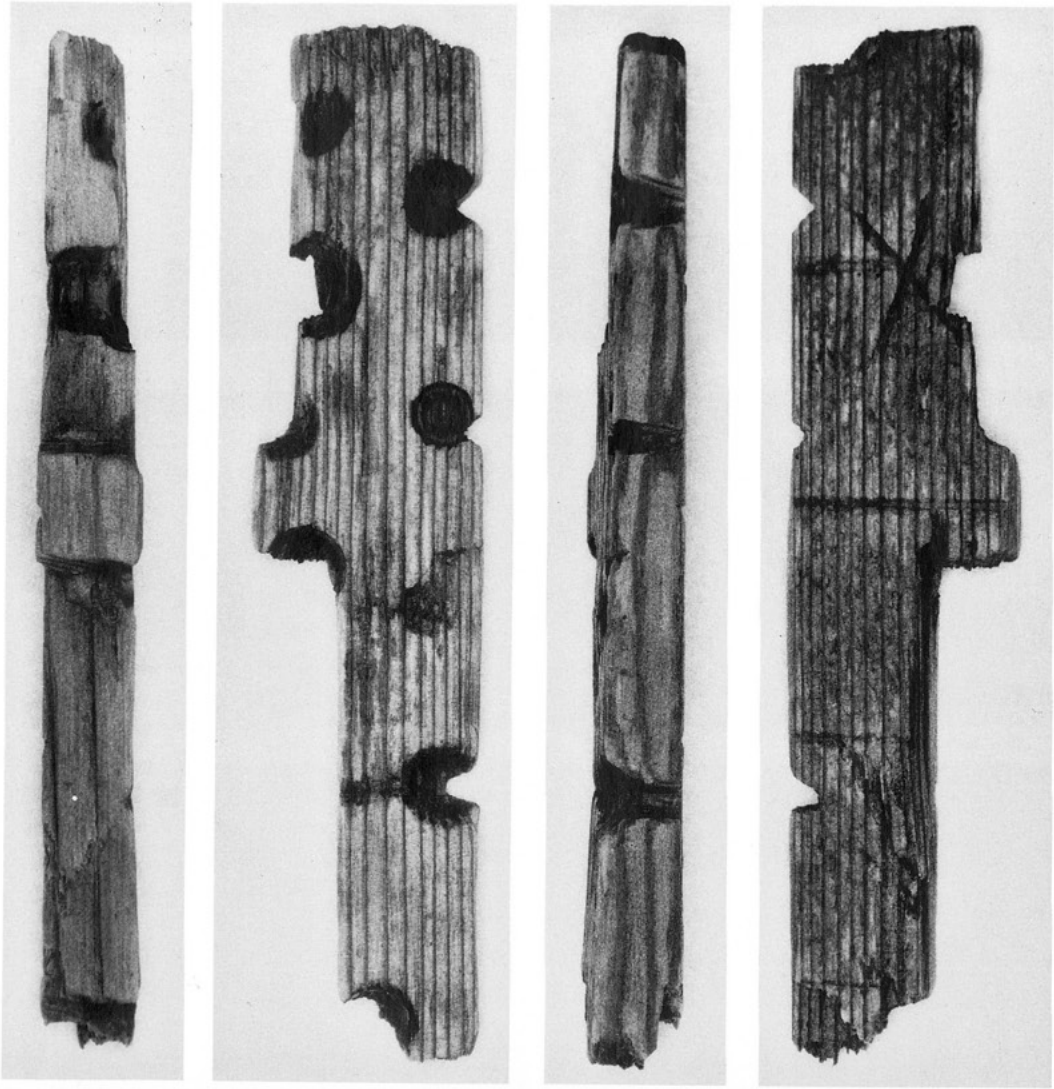
TZ-34-b



TZ-34-c



TZ-34-e



池出土の火鑽臼(1/1)、火鑽孔(4/1)。左は二度着火しており、中は中空の火鑽杵を使用したことが明らかでらかであり、右は点火に失敗している。

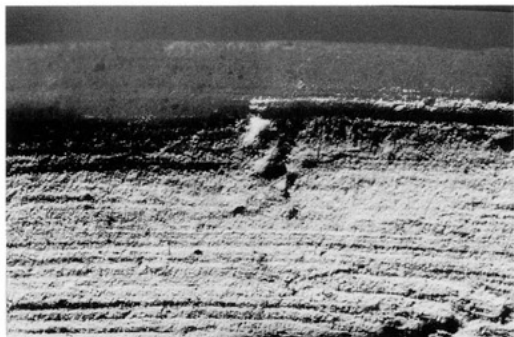
写真 16 池出土「かわらけ」



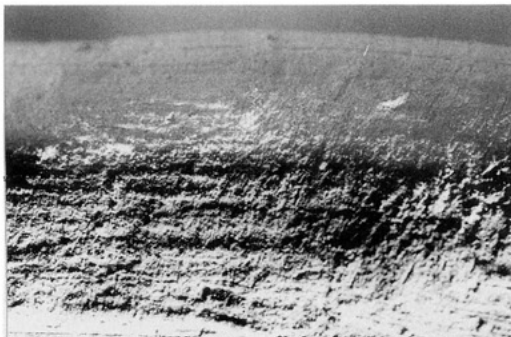
1. 口縁 ナデ(5/1)



2. 口縁 ナデと礫(5/1)



3. 口縁外面 ケズリ(5/1)



4. 口縁外面 ナデ(5/1)



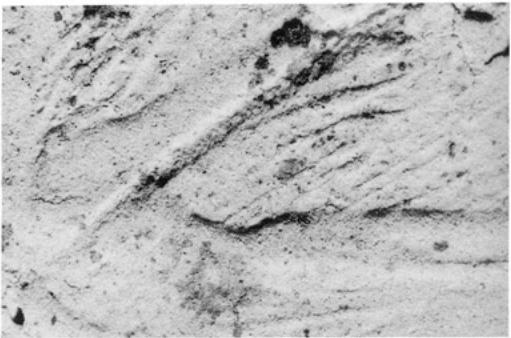
5. 底内面 ナデ(5/1)



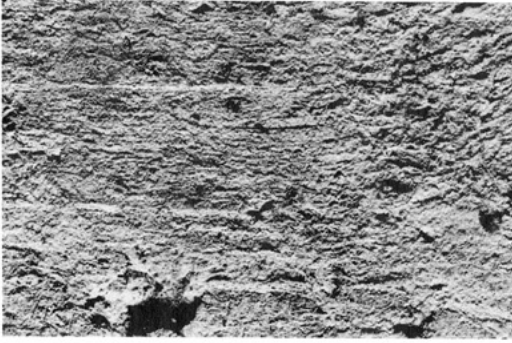
6. 底内面 平滑(5/1)



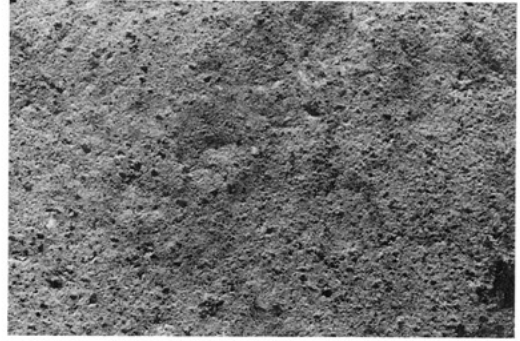
7. 胎土のなかの礫(5/1)



8. 底内面 湿った布?によるナデ(5/1)



9.底 繊維痕(5/1)



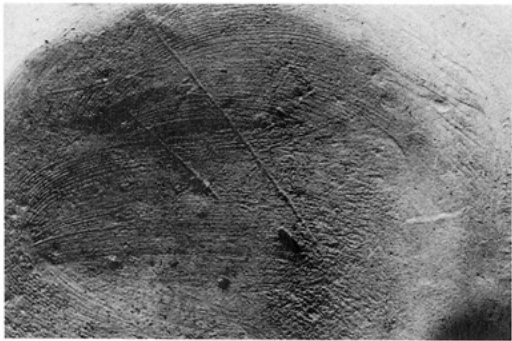
10.底 平滑(5/1)



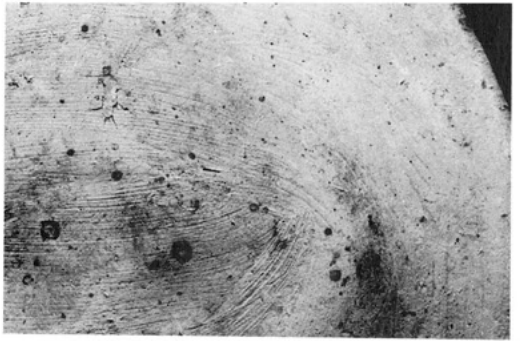
11.底 繊維痕(1/1)



12.底 繊維痕(1/1)



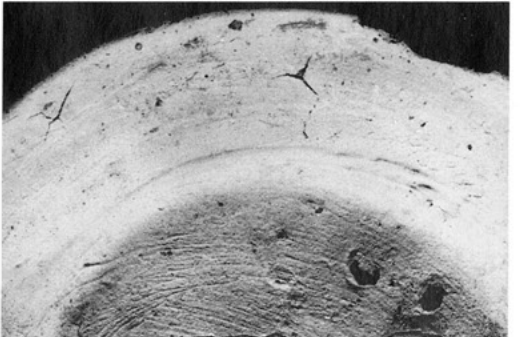
13.底内面(1/1)



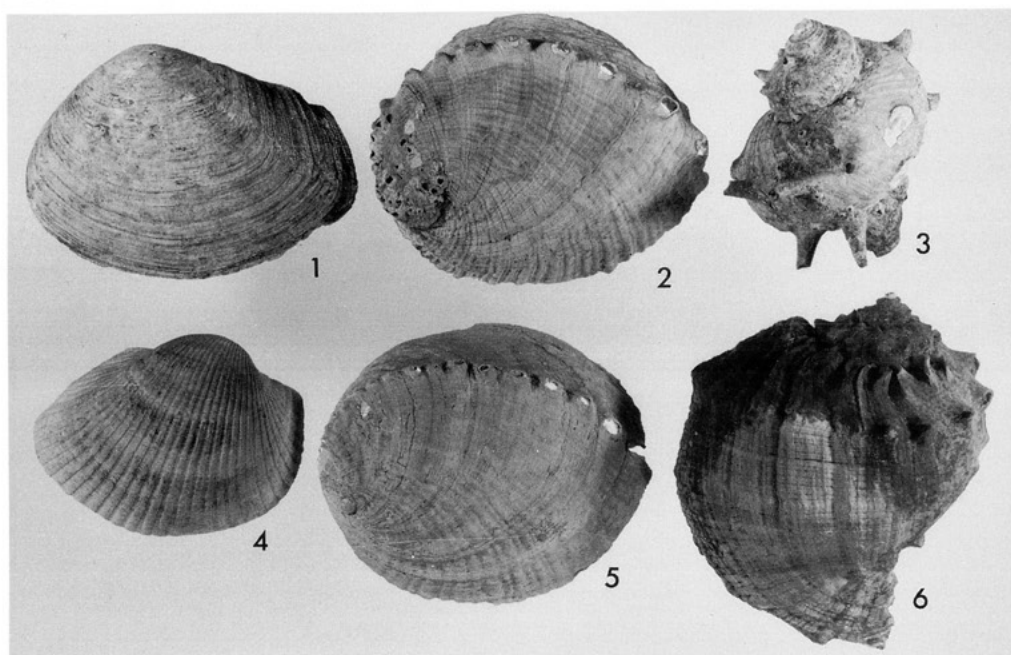
14.底内面(1/1)



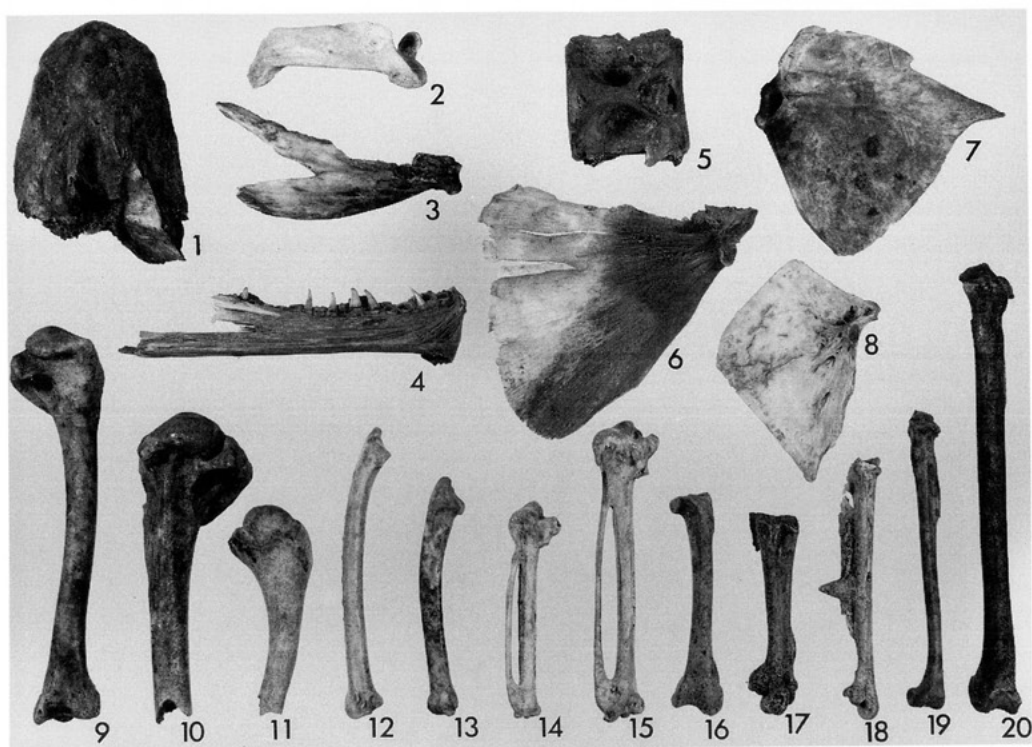
15.底内面(1/1)



16.底内面(1/1)



貝類(2/7) 1.ミルクイガイ 2.マダカアワビ 3.サザエ 4.アカガイ 5.メガイアワビ 6.アカニシ



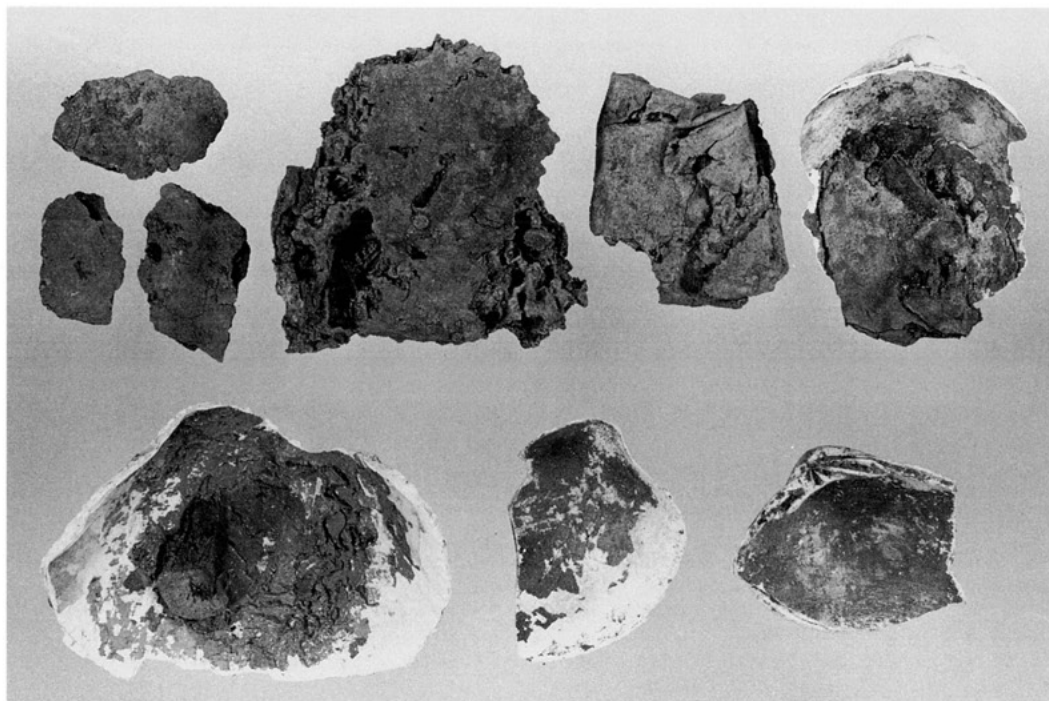
魚類・鳥類(1/2) 1.マダイ前頭骨 2.マダイ上顎骨 3.ハタ類歯骨 4.キアンコウ歯骨 5.マグル類椎骨 6.ブリ鰓蓋骨 7.スズキ鰓蓋骨 8.コイ鰓蓋骨 9.カモ(中)上腕骨 10.ガン(小)上腕骨 11.ニワトリ上腕骨 12.カモ(中)尺骨 13.キジ尺骨 14.カモ(中)中手骨 15.ガン(小)中手骨 16.カモ(中)大腿骨 17.カモ(中)中足骨 18.ニワトリ中足骨 19.カモ(中)脛骨 20.ニワトリ脛骨 6・8・10・13-16は左側、2・4・7・9・11・12・17-20は右側 (小):小型種、(中):中型種



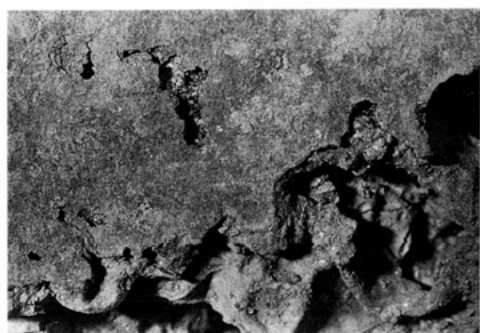
ネコ・イヌ(1/2) 1-7:ネコ(1.頭蓋骨 2.右下顎骨 3.左肩甲骨 4.左上腕骨 5.左尺骨 6.左大腿骨 7.右脛骨) 8-11:イヌ(8.第一頸椎 9.第二頸椎 10.右下顎骨 11.右下顎骨 8-10:小型、11:大型)



イヌ(1/2) 1.頭蓋骨 2.左上腕骨 3.右上腕骨 4.右大腿骨 5.右大腿骨 6.左脛骨 7.左脛骨 (1・3・5・7:小型、2・4・6:大型)



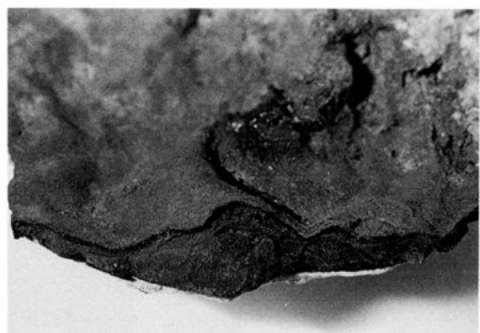
1. 漆関係資料 上段左より1 から4 下段左より5 から7



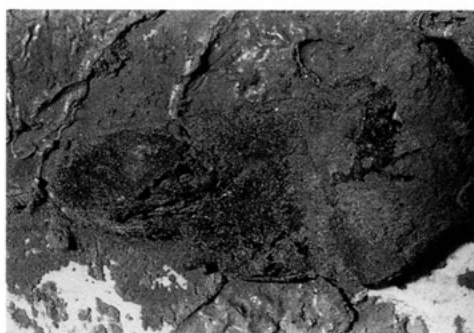
2. 漆紙(1-2) F33-3出土



3. 漆紙(1-3) F34区出土



4. 漆及び漆紙(1-4)



5. 漆漉し紙の付着(1-5)



東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 3  
東京大学本郷構内の遺跡  
医学部附属病院地点

---

1990年3月26日発行

編集 東京大学遺跡調査室  
東京都目黒区駒場 4-6-1

発行 東京大学医学部附属病院  
東京都文京区本郷 7-3-1

印刷 ヨシダ印刷両国工場  
東京都墨田区亀沢 3-20-14

---

